
キヨーハク少女

ヒロセ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

キヨーハク少女

【NNコード】

N8722X

【作者名】

ヒロセ

【あらすじ】

佐藤優大は普通の高校生。特に変わったところのない普通の、それでいて少しさみしい毎日を過ごしていた。そんな優大の楽しみは幼いころ遊んだ山へ行くこと。その日もただ単に暇だったので山へ遊びに行つただけだった。しかしそこで妙な人間に出会ってしまう。それがきっかけで優大の脅迫生活が始まってしまった。ある意味幸せ。

僕と秘密基地と変質者

突然だけど、僕は親友がいない。
友達呼べる人はいると思う。

親友の定義はよく知らないけど、心の底から信用できる友達はないし、暇だつたら一緒に遊ぶような仲のいい友達もない。そもそも友達と思っている人も厳密に言えば友達ではないかもしない。でもそう考えたら悲しくなるから厳密に言わない。

暇な時に一緒に遊ぶ友達がないと言つたけど、当然日曜日に遊ぶ友達もないので毎日が暇だつたりする。時々、極稀にお声がかかることもあるけれど、大抵の休日は一家でパソコンと向かい合つている。ニヤニヤ動画はいつみても暇しないなあ。でもニヤニヤ動画だけを見て休日が終わっているととても虚しい気持ちになる。でもしようがないよね。

お姉ちゃんと弟がいるが一人とも忙しそうに遊びに出ている。
僕だけ一人、家にいる。

だからそんな時、僕は山へ行く。

何故かと言えば、山は楽しいから。

山には、親友はないけど親友との思い出ならある。

子供のころに作った秘密基地。

何にも考えないで遊べていた小学生時代。

友達三人で山に秘密基地を作った。その友達も中学校に上がつたら突然疎遠になってしまった。同じ中学校なのに疎遠つて不思議。多分、僕が悪いのだと思う。

まあそんなこともういや。終わったことだしね。とにかくにもかくにも、そう言うわけで僕は山に行つた。

家からそう遠くない山。

誰もいない、思い出だけが生きる山。

僕は秘密基地へ向かって山を登つた。

少し歩いて山の中腹あたり。標高がそれほど高くない山なので山登りの時間は少し。だけど木が多く雑草も茂っているので足場が悪くて普通には登れない。でも楽しみが先に待っている僕としては全然苦ではない。

僕はすぐに秘密基地にたどり着いた。

基地って言つてもそんなに大層なものではない。ただ木の棒を地面に突き刺してそこにビニールシートをかけただけの簡素な秘密基地。秘密基地と言つより秘密テント。でもあのころの僕らにとつては自分の家よりも居心地のいいところだった。

思い出が詰まつた大切なところ。

僕はそれが風化しないように大切に守つてきた。

いつ行つても秘密基地は変わらずに僕を迎えてくれた。

目を瞑ればあのころの笑い声が聞こえてきそうな気がする。でも気のせいだつた。

あの日を留めたままの秘密基地。眺める度にとつてもノスタルジー。

……でも、今日は少し様子が違つた。

秘密基地は壊れていない。いつもの通り汚いまだ。いつもと違うのは、その周り。秘密基地の周辺の地面に妙なものを見つけてしまつた。

足跡が、あつた。

秘密基地を探るよつにぐるぐると足跡がついていた。

正直、怖い。

なんでこんなところに来ているのだろう。この付近に変わった物なんてないのに……。

僕は恐怖に駆られながらも、秘密基地を守るために足跡をたどつて行つた。

足跡は山の奥深くへ進んでいた。

出来るだけ音を立てずに足跡を追う。

でもすぐに見失った。土から草むらに地面が変わっていた。

見失いはしたが土の上の足跡はまっすぐ進んでいたので、僕は足跡の方向に真っ直ぐ森を進んだ。

そして僕は人を見つけた。

多分、女人の人だ。

草の生えていない土が見えているスペースに一人立っているその人は、山に似つかわしくない格好をしていた。

黒いミニスカートから伸びる白くて長い脚。足元はミュールを履いており、よくそれで山が登れたなあと感心してしまつ。上半身はノースリーブシャツにネクタイをつけたこれまた山登りには似合わない格好。露出が多くて虫に刺されちゃうよ。真っ白で綺麗な肌なんだから虫なんかに刺されたらダメだと思います。

周りを囲む大自然とその人の格好はとてもミスマッチだったが、それ以上にその人のモデル体型が山と不釣り合いだった。

しかし。

ミスマッチだろうが不釣り合いだろうが僕にとつてそんなことは些細なこと。さらにその人が何かをつぶやいているが今の僕には全く気にならない。

「……ぶつ……ぶつ」

……色んな意味で怖かった。

森の中で不似合いなおかしな格好、でもそれは別にいいと思う。どんな格好で山に登ろうがその人の勝手だからね。モデルのような体型も恐怖とは程遠いもの。

なら僕はいつたい何に恐怖しているのかと言つと。
主にその人の頭部。それとその人がとつている行動。

その人は顔に白馬のお面をつけた状態で、青いおもちゃのプラス

チックのバットを握り全力で素振りをしていた。

空を切る軽い音。振つては構え、振つては構える。

野球のことはよく知らないけれど、とても綺麗なフォームだと思った。

バットを振る度にスカートがギリギリまでめくれていて、大変目のやり場に困ってしまう。

馬のお面で視界が狭くなっているせいか、様子を見ている僕の姿に全く気付いていない。さつきから草むらを踏みしめる音を鳴らしているのだけれど、それにも気づいていない。お面の中で自分のつぶやきが反響して周りの音が聞こえづらくなっているのだろうか。被つたことがないのによく分からぬ。

女的人はひたすらプラスチックのバットを振つていた。終いには素振りをやめて地面にバットを叩きつけ体全体で怒りを表現するようになつていた。

地面をぼこぼこにする姿はスタイルの良さも帳消しになる位みつともなかつた。

モデルさん並みなのに……何か残念だ。いやあ、変な人だなあ。

地面を殴つたり地団太を踏んだり傍にある木を思いつきり叩いて手を痛がつたり。

しばらくぶつぶつ言いながらバットを振り回し続ける女の人。不安定な山の地面の上でミコールなんかを履いてあれだけ暴れまわるなんて運動神経がいいんだなどとどうでもいいことを考えてみる。

そんなことを考えながら僕がその光景に目を奪われていると、突然その人の動きが止まつた。

そして、ゆっくりとこちらを振り向き

「う、うああああああああああああああああ！」

僕は白馬と目が合つ前にその場から全力で逃げ出した。本当に怖

かつたんだもん。

全力、必死に、何度も転びそうになりながら秘密基地まで止まる
ことなく振り返ることなく逃げてきた。

深呼吸をして息を整える。僕はあまり運動が得意ではないからす
ぐに息が切れてしまう。膝に手をついて走ってきた草むらを振り返
る。

「うわー！ 追ってきてる————！」

白馬がバットを振りながら猛スピードでこちらに迫ってきていた。

「おわわわわわわ」

まだ息が上がっている、走れない！

逃げることができない僕は地面にへたり込むことしかできなかっ
た。

白馬が迫つてくる。ミコールなのに物凄く軽快なステップ。やつ
ぱり僕と違つて運動ができるみたい。

ってそんなことよりも……。

僕はどうなつてしまふのだろう。あのプラスチックのバットで殴
られるのだろうか。痛いのかな？ 痛いよね……。

無駄なことだとは分かっていても、僕は後ずさりをして少しでも
白馬から距離をとろうと試みた。

当然、無意味。

僕と一足歩行の馬との距離はあと五メートルも無い。ああ、おし
まいだ。痛い目にあつちやう。

諦めた僕。

でも神様は僕を見捨てていなかつたようだ。

「……」

馬のお面が枝に引っかかり頭からそれが取れた。

女人の頭が大きく後ろにのけぞり、すぐに前のめりになる。お面の下に隠れていて見えなかつた長く黒い髪が頭を越え顔の方に流れた。艶やかな黒髪一本一本が意志を持っているかのように木漏れ日の光を反射していた。

それに目を奪われていたが、すぐに女人人は恥ずかしそうに顔を隠し逃げるよう森の奥へと走り去つた。

「な、何だつたんだろ？……」

ユウ・ってことがあつたんだ

まりも・にわかには信じられない話だね

ユウ・でも本当なんだ！ 本当に変な人がいたんだよ！？

まりも・もちろん信じているさ。その馬の後を追つたのかい？

ユウ・まさか！ 追うわけないよ！ 殴られたら痛いでしょ！

まりも・それはそうだけど、気にならないのかい？ そんな変質者滅多にお目にかかれないと。私なら後を追つて正体を突き止めるね

ユウ・でも、怖いし……

まりも・まあそだうだうね。でも今度会つたら是非その姿を激写してほしいね

ユウ・もつ会わないよ！

まりも・まあ会わないならそれがいいだうけどねw それじゃあ、私はもう寝るよ

ユウ・うん

まりも・お疲れ様

僕はスカイペからログアウトしてパソコンを切った。

僕が唯一自信を持つて友達だと呼べる人は、ディスプレイの向こうの顔も知らない女の人。女人がどうかも分からぬけれど、自分でそう言つていたので僕は信じている。

その人と毎晩のようにスカイペで話をして、一日を終える。相手の声を聞いたことは無いけれど、きっと優しくって柔らかい人なのだと思う。

実際に会つて話してみたいけれど、今の関係で充分満足しているのも確か。

僕は踏み出せずに今日もスカイペでその日遭つた事の話をするだけにとどまっているのだった。

僕の学校生活

馬と出会った日曜日から四日が経ち今日は木曜日。僕の馬に対する恐怖心とは裏腹に平和な日々が流れていった。

馬が通学路で待ち伏せしているとか、人込みで知らない人に話しかけられるとかそういう妄想に囚われていたけれど、日常を逸脱するようなものは片鱗すら覗かせるることは無かつた。

このまま何事もなく馬のことを記憶から追いやることができるのはかなと思い始めていた今日この頃。朝学校に来た僕は、人の少ない教室に入り真っ直ぐに教室の一一番隅、最後方の自分の席へ向かつた。座つすぐに本を引つ張り出し文字の世界に没頭する。

本は良いよね。文字を読むだけで誰にも迷惑かからないから。

僕の好きなライトノベル。ライトだもんね。ファンタジーや学園モノをよく読んでいる。憧れちゃうよね、こういう世界。

僕の名前は佐藤優大さとうゆうだい。普通の高校一年生。友達のいない僕を普通と称していいものかどうか悩むところだけれども、普通だと自覚しているので普通って言つ。身長も低いし勉強もできない。顔もかっこよくないし性格だってよくない。特殊な能力がないどころか普通の能力すらも無い僕は漫画や小説の主人公にはなれない。

よし、自己紹介の練習もばっちりだ。これでいつ小説の世界に飛ばされても自己紹介に困らないね。……自分で主人公にはなれないとつて言つてるのにそれを知りながら主人公になることを望んでいる僕ってなんなんだろう……。

でも万が一に備えるのはいいことだよね。うん。

誰とも朝の挨拶を交わすことなく本を読み続ける。寂しい朝だけど、もう慣れた。別にいじめられているわけじゃないよ？ 挨拶を交わすほど仲のいい人がいないだけ。

どんどんクラスメイトが登校ってきて、教室に人が増えてくる。本に目を落とし騒がしい教室から視線をそらす、ふりをする。

実は僕の趣味は人間観察だつたりする。

誰も僕のことを気にしていなければ、僕はみんなのことを気にしている。

高校一年生の六月下旬。友達はいなければ日頃の人間観察のおかげで、大体の性格と人間関係が分かつた。

このクラスは、大きく分けて三つの派閥に分かれているらしい。一つ目はかつこよくて運動神経抜群な沼田君が率いる男子連盟（連盟名は適當）。沼田君は本当にかつこいいしユーモアのセンスもあるしクラスの男子の中で一番信頼されている人。僕も沼田君みたいになれたらなあつていつも思つていてる。

二つ目の派閥は女子の中心人物、有野さんが中心となつてているチーム有野（やつぱりチーム名は適當）。有野さんははきはきとした物言いで、好き嫌いをはつきりと言うタイプの人。このクラスの女子どころか一年生女子のリーダー格みたいだ。

そして、三つ目

僕はその三つ目の中心人物に目をやつた。

黒くて長い髪。雪のようにふわふわした白い肌。すらりと伸びる細くて長い脚と母性を感じさせる大きな胸。

このクラスの委員長、楠若菜さん。

驚くほど整つた顔立ちをしている楠さん。一番美人だと思う人を一人思い浮かべると言われたら、多分この学校にいる人はアイドルより誰より先に楠さんを思い浮かべると思う。きっと、これから的人生で楠さん以上の美少女には出会えないだろう。

運動神経がよくつて、当然のように勉強もできる。

美少女で、勉強ができる、運動神経ができる、おまけに性格までいいと来てる。僕が読んでいるライトノベルの主人公みたいでかっこいい。

三つ目の派閥はその楠さんを慕つて集まる楠ファンクラブ（ファンクラブ名はもちろん適當だ。ファンクラブなんて存在しない、仮のものだよ）。クラスの半分の女子を有田さんと取り合っている状

態（楠さんにはそんな気ないみたいだけど）。多分、僕の勘だけど近い将来楠さんが女子の中心になると思う。楠さんはとっても親切で、欠点が見つからない。それに比べて有野さんは少し我が強く、魅かれる人も多いけど敵も多いみたい。僕は惹かれる人間もいなし敵もないけど……。

沼田君と、有野さんと、楠さんの三人がこのクラスの中心人物。楠ファンクラブとチーム有野は覇権を争つて対立しているけれど、楠ファンクラブと男子連盟は男女連合を作るほどとても良好な関係を築けている。男女連合の総長は、当然楠さん。

つまり、実質的にこのクラスのトップは楠若菜さんなのだ。委員長だし、当然と言えば当然かも。

トップの人間が素晴らしい人物なので対立していようがクラスの雰囲気は穏やかだ。楠さんは凄いと思う。

……でも最近、その平穀が脅かされて、不穏な空気が流れだしている……。

有野さんは楠さんがトップなことが本当に面白くないみたいでよく楠さんに突っかかる。楠さんはと言えば全く気にしていない様子で、相手にしない分不穏な空気は広がらない。でも最近は別の要因も発生してそのせいでクラスの空気が不穏になってしまっているんだ。

別の要因が発生したのは楠さんが委員長なことが関係している。

委員長は一か月前に決めたのだけれども、副委員長は必要ないということで長らく空席だった。しかし夏休み明けにある文化祭に向けてやつぱり副委員長を決めようという男子の総意でこのたびその一つの席を巡って男子たちが争い始めたのだ。

当然、楠さんと一緒に仕事がしたいっていう下心全開な考えだ。男子たちは選ばれしものだけが就けるその役職を目指して日々楠さんにアピールしまくっているのだ。さすがに有野さん以外の女子もそれは面白くないみたいで、楠さん……と言つより男子たちに冷たい目線を送っているのだった。

当然、僕は蚊帳の外。

いじめられているわけじゃないよ？

ただ僕なんかがそれに混ざつたらもうと不穏な空気になっちゃうからね。僕は見ているだけでいいんだ。

そう、見ているだけで。

そう言つわけで僕はその様子、主に楠さんを眺めていたのだけれども、あ、しまった。

楠さんと視線が合つてしまつた。

怒られる。じろじろ見ていたことを咎められやが。

うわああああ。楠さんがにっこり笑つて近づいてきた！

慌てて本に目を落とす僕に、楠さんが黒くて長い髪を搔き上げながら話しかけてきた。

「佐藤君」

名前を呼ばれた。でも緊張して顔が上げられない。
寂しい朝に慣れてしまつたせいか、誰かに話しかけられる朝が来ると焦つてしまつ。

「おーい。佐藤優大君」

反応したいけれどひらつと視線を送ることしかできない。なんて言えばいいんだろう……。

困つていると、楠さんが質問してくれた。

「何読んでいるの？」

質問なら、答えを返せる。

「あ、えっと、これは、ライトノベル……」

「ライトノベル？」

上田遣いで楠さんを見てみると、とても素敵な笑顔で首をかしげ
僕の目を見ていた。

「ライトノベルって何？」

「…………え？」「ライトな、小説……」

なんと説明していいものか分からなかつたので曖昧な説明になつ
た。

「へえ！ そ、うなんだ！」

僕の適当な説明にも明るい笑顔を返してくれる楠さん。みんな副
委員長の座を狙うのもよく分かる。

「おもしろい？」

「う、うん」

でも、何故だらう。今までほとんど話したことが無かつたのに、
一昨日あたりから妙に話しかけてこられる。にこにこ眩しい笑顔を
見せてくれるけど、それと同時にクラスの男子全員から熱い怒りの
視線も受けることになるので少し居心地が悪い。僕悪くないのに…
…。

「どうしたの？」

僕の晴れない顔を見て、楠さんが心配そうに聞いてくれた。

「悩み事があるなら私に言つてね？」

「あ、うん。ありがと。でも何もないから大丈夫だよ」

「本当？ なにいんだけど」

「うん、大丈夫」

最後まで優しい空気を作りながら、楠さんが女子たちの輪に戻つて行つた。

あー、緊張した。何と言つてもこのクラスのトップだからね。緊張しちゃうよ。

……。楠さんが離れて行つたのに男子たちの目は依然鋭い。僕悪くないのに……。

僕は逃げるようになに本の世界に飛び込んだ。

今日も一日何事もなく終わつた。

残すはホームルームだけ。

変わらない日常。これがいいことかどうかは僕にはわからないけれど、僕は満足している。日常が変化してどうなるのか分からぬのなら、平和な今が続けばいいと思つ。

だから早く帰つてお姉ちゃんと弟の『飯作ろ』。

机の上で教科書をトントンしてカバンの中にしまつ。あとは席について先生を待つだけだ。

先生はすぐに来た。そういうえば小学校時代に「先生が来た！」って言つたら、「いらっしゃったでしょー！」って本氣で怒られたつけてここまで怒ることないのについて思つたけどあの「いろいろから言葉づかいを教えておけば将来困らないもんね。さすがは先生。」そういうわけで先生はすぐにいらっしゃった。

「席に着けー」

先生の声にみんなが従い席に座る。静かになつた教室を見渡しホームルームを始める。

「特に連絡事項はないからさつと終わるつか

面倒くさい話をしない先生だからいいね。

「あーそうだ」

あれ？ 珍しく話があるのかな？

「えーっと……」

誰かを探すように教室を見渡す先生。僕じゃないよね。僕に用事なんかあるわけないもん。しかし先生僕を見て、

「佐藤、放課後暇か？」

「ほほほ僕ですか？！」

「えっと、その、…… 一体なんでしょうか」

「ああ、ちゅうとこの後資料の整理があつてな。男手が必要なんだが、このクラスで部活をしていないのは佐藤だけだからな」

「なるほど……。何もできないからこの僕なんだ。

「あ、あの、でもっ」

「え？ 瞬間じゃないのか？」

「…………え、暇です……」

「やうか。じやあよみこへ頼む」

……今日の晩御飯は送れそつです、お姉ちゃん。

先生の言つたけどおり放課後残る。

「じやあ佐藤、ちゅうと来てくれるか？」

「あ、はい」

先生に連れてこられたのは三階にある資料室と書つた前のよく分からぬ教室。本棚の中には沢山の資料が詰め込まれている。これを整理するのかな？

「とつあえず」の本棚を空にしてくれ

「はー。……はー？」

「」の本棚つてこいつと、田の前にある本棚だよね？ 幅三メートル高さ一メートル。約。そこにはぎりしつと詰まつた謎の資料。これを空にするのかな？ 本棚から出すだけでいいのかな。

「これを焼却炉に持つて行つてくれ」

「え、ええ……」

せつかも言つたけど「」は三階。そして本棚はぎりしつ。これじやあいつ帰れるのか分からないよ。

「じゃあ、後は頼んだ」

「え？！ 先生は……？」

「俺は仕事があるからな。良いだらつ社会。どうせお前暇だらつ

「い、いえ、そんなに言ひ出さないで……」

「なんだ。用事があるのか？」

「は、はー。早く帰らないとお兄ちゃんが飯つて言つて泣かれるんです」

「あれ？ お前の弟はそんに幼かつたか？」

「あ、いえ、姉です」

「……じゃあ佐藤頼んだぞ」

「え、いや、本当の話で」

先生は僕の話を最後まで聞かずには資料室を出て行った。

「困ったなあ。本当にお姉ちゃんに怒られてしまう……。

「うん。悩んでいても仕方がない。早く終わらせる以外に帰れる方法がないんだから余計なことを考えずに資料を持って行こう。僕は本棚の方から資料を取り出した。……重い。とりあえず持つて行こう。

そして僕は一度の階段の上り下りで腕の筋力が無くなってしまった。本つて重たい。どうしよう、これ時間がかかるよ……。

困ったなあ、どうしよう……。

ああ、いや、そんなことやりながら考えればいいんだ。

僕は本を持った。

ひいひい言いながら階段を下りる。重たいよ。しかもいい方法が思いつかない。

「早く帰らなきゃいけないのに……。遅くなっちゃうよ」

つぶやいてみても何も解決しない。足を動かさなきゃ。愚痴りながら一階へ続く階段を下りた先に。

「佐藤君？」

まさかの楠さんがいた。

「楠さん。とよつな」

忙しこじりつかせまともに話せないから僕は軽く頭を下げて先へ進

んだ。けど、引き止められてしまった。

「ちょっと待って、佐藤君。それもしかして先生に頼まれた仕事？」

「あ、うん。そう」

「大変そうだね。時間かかりそうなの？」

「ううん。そんなことも無いよ」

「でも今遅くなっちゃうって言つてたよね？」

「え、聞いてたの？」

「あ、うん。たまたま、たまたまね？ 偶然耳にね？」

なんだろう？ 三日前から楠さんに僕のつぶやきをよく聞かれてしまう。僕の声が大きいのかな？

「私も手伝つよ」

「え」

「手伝ってくれるって！ さすがだなあ！」

「一人でできるからいいよ？」

でも僕はありがたい申し出を僕は断っていた。だって人に迷惑かけちゃいけないからね。

「でも早く帰りたいんでしょ？ 手伝つよっ」

作り物のような完璧な笑顔。みんなこの笑顔に癒されているのだろう。でも僕は困る。直視できないしなんて言えぱいいか分からなから。褒める」ともできないよ。恥ずかしいもん。

「で、でも……重いから……大丈夫だよ」

「重いからこそ手伝うんでしょ」

「でも、先生だってわざわざ男の僕に言つてきたし、その、楠さんに手伝わせるのは、あの」

「……え」

長いまつげをぱちぱちと動かしても驚いていた。なんでだろ？ まるで断られることが予想外だとでも言つよつた顔だ。

「……そんなに大変じゃないとか？」

「あ、うん。そう。そう」

「……へえ、そりなんだ。なら、他に手伝うことないかなっー。」

「、眩しそうな笑顔だ。目がくじらじやつよ。

「だ、大丈夫だよ。もうこれで終わりだし？」

全然終わりそうにもないけれど疑問形にしたから嘘にはならないよね。……ならないのかな？

僕の言葉を聞き楠さんがじばりく考え、

「……なら、頑張つてね」

何故だか不満そうに帰つて行った。
ずっと資料を持ちつぱなしだったから腕が痛いよ。とにかく早く
終わらせよ。

七時。結局三時間かけてやつと終わった。まさかこんなにかかる
とは思わなかつた。腕はもう使い物にならないね。

全部運び終わったころ、先生が様子を見に来た。

「ありがとう佐藤。もう帰つていいぞ」

「ううう……淡白だなあ。でもいいや。
やつと帰れる……。お姉ちゃんに怒られるよ。

夕日の沈む直前の空。赤い街の中疲れ切つた腕を揉みほぐしながら
帰路につく僕。途中で、あの馬に会つた山へ続く道を通りがかつ
たので少しを眺めてみる。あの馬が待ち伏せしているのではないか
とドキドキしながら見ていたら、山の方から人が降りてくるのが見
えた。あの時の馬だ！ と慌てて電信柱の陰に隠れた。

緊張する。

また襲われたら怖くていつの間にか向かつてくる人に背を向けていまう！

そう考えたら怖くていつの間にか向かつてくる人に背を向けていた。恐怖で見ることができなかつた。

足音が近づいてくる。このまま気づかずにどこかへ行ってください

い！

じきじきじきじき。

願い虚しく足音は僕のすぐ後ろで止まった。

「佐藤君？」

その人はとても優しい声で僕の名前を呼んだ。

「え？」

名前を知つてこるとこいつとは僕の知り合いこと言つことだ。安心して声の主を確認してみた。
違ひ意味でピンチだった。

「く、楠さん……」

ああ、今日はよくこの人の顔を見るなあ。
緊張してなにを話せばいいのか分からぬよ。

「佐藤君、もしかして今帰り？」

「あ、うん。そう」

「ひどに時間がかったの？ 仕事大変だったんじゃない！」

可愛い声と顔で怒られた。

「え、ま、まあ……」

「手伝つてあげるつて言つたのに！」

頬を膨らませ可愛く怒る。

「でも、終わつたからいいよね

「……まあ、いいけど。でもなんで助けを求めなかつたの？」

「え？ 申し訳ないから……」

一瞬とても楠さんに似合わない顔が見えたけどすぐにいつもの穏やかで明るくって親しみやすくって素敵でふわふわでとにかく地上の物とは思えない笑顔を作ってくれた。あれ？ 僕ヘンタイかな……。

「今度は私も手伝つからね

「あ、うん。ありがと！」

やつぱりいい人だなあ。夕日が山に隠れ始め、赤から黒に変わり始めた街の中、楠さんが笑顔で立つていて。僕なんかが正面に立つことは許されることではないのに、ましてや言葉を交わすなんてみんなに申し訳ない。つて、あれ？

「あの

「なにかな？」

首をかしげ、長く夜のように深い色の髪の毛を鳴らす。

「何か聞きたいことでもあるの？」

美人過ぎて自分の存在が情けなくなる。生きているのが申し訳ないよ。僕なんかが一緒に空気を吸つてもいいのかな。

「どうしたの？」

しまった。ついつい自己嫌悪に陥ってしまい楠さんに話しかけたことを忘れていた。話しかけておいて無視するとか失礼にもほどがある。僕は慌てて気になることを聞いてみた。

「こんな時間に山に何の用事かなって思つて……。もう暗くなるし、危ないんじゃないかなーって」

あれ？ こんなプライベートなこと聞いてもよかつたのかな！ もしかしたら僕はものすごく失礼なことをしているのではないでしょうか！

「ええ、まあ、色々と」

やはりプライベートなことだった。聞いたらいいみたいだ。「でもこの辺りは変な人が出るみたいだから……。気を付けた方がいいよ？」

僕の言葉を聞いて笑顔が冷たくなる。

「変な人と言つと、たとえばどんな人？」

「え、変つて……変な人だけど……」

「だから、どんな人かって聞いてんの」

う、怖い。

「あ、ごめんね」

すぐに暖かい笑みに作り直す。あーびっくりした。怒られるのかと思った。

「それで、変な人ってどんな人？」

何故だか妙に変な人にこだわる楠さん。なんでだか僕には全く分からないや。

「変な人は変な人だよ」

変な人だもんね。

「ヘエソウナンダ」

最終的に妙にぎこちない笑みを作つて山の方へ向かつていった。

「ぐ、楠さん？ もう暗くなるよ？」

「ハハハハハ」

笑いながら手を振つて木々の中に消えて行つた。

危なくないかなあ……。追つた方がいいのかなあ……。でも怖いし……。……ふ、プライベートなことだし、追わない方がいいよね。うん。なんで山に行くのが分からないし。

僕は後ろ髪を引かれる思いをしながら家路を急いだ。

家についた僕。

お姉ちゃんに泣かれたり弟にフォローしてもらつたり色々あつたけど無事に自室のパソコンをつけられた。これが毎日のお楽しみ。僕はすぐにスカイペにログインし、顔も知らない友人を待つ。しかしいくら待つても友人・まりもさんはログインすることは無かつた。仕方がないので一人ニヤニヤ動画を見てにこにこしておこづ。

ニヤニヤ動画かあ。僕も何か投稿してみたいなあ。でも僕面白くないしなあ。何か面白い動画撮れないとかなあ。

……。

あ、そうだ。そう言えば昨日まりもさん（スカイペの相手）に変質者がいた証拠を撮つてくれって言われてたっけ。どうせなら動画を撮ろう。あ、別に投稿しようつていうわけじゃないよ？あの変な人は写真なんかよりも動画の方がその凄さが伝わると思ったから動画を撮るつって思つただけだよ。

馬の中の人

いよいよ放課後。僕はあの日であつた馬の動画を撮りたいがために、先生に捕まらないうちに早めに教室を出で真っ直ぐに秘密基地へ向かつた。

やつぱり秘密基地はいつも通りの顔で僕を迎えてくれる。一応念のために、何の念のためにかは自分でも分からなければ、一応念のために秘密基地もとい秘密テントに首を突っ込んで中を確認してみた。

異常なし。

秘密テントから顔を引き抜き僕は森の奥に視線を向けた。

……。

……ここまで来て少し怖くなってきた。やつぱりやめようかな……。

……。

……うん。そうだよね。盗撮になるし、いけないことだよね。やめよ。

と、引き返そうとしたとき。

「…」

僕が登つてきた道から誰かが登つてきた！

逃げる必要はないのかも知れないけれど、馬に対する恐怖がすべての物に作用し僕は思わず森の奥へと逃げてしまつた。

逃げて逃げて何故かあの馬が暴れていたところまでやつてきてしまつた。辺りを見渡してもあの馬はいない。でも後ろを振り返つてみると登つてきた人がこっちにやつてきている。も、もしかしたら、あの時の馬本人なのかもしれない……。

恐ろしいので僕は少し戻つて木の陰に隠れてやり過ごすことにしてた。

……怖い。また馬を被つているのかな……。

その人をやり過ごし、その後ろ姿を覗き見る。

背の高い後姿。後頭部から垂れる黒く長い髪が規則正しく揺れていた。しかもその人は僕と同じ高校の制服を着ている。だ、誰なんだ！　顔を見なければ全然わからないよ！

何かを探すようにきょろきょろと視線を動かしている。もしかして僕の存在が見つかったのかもしれない。ど、どうしよう……。やっぱりあの青いバットで殴られるのかな……。で、でも今は何も持つてないし、そもそも馬の人かどうかも分からないし……。僕が恐怖に支配された精神でがくがくとその人の観察を続けていると、とうとうその人の顔を拝むチャンスがやってきた。ゆっくりと、その人が振り向く。い、一体……誰なんだ……！　全然想像もつかないよ！

「あれ？」

そこにいたのは馬であるはずのない人だった。

「ぐ、楠さん……？」

完璧少女の楠さん。まさかこんな娘を疑つてしまふなんて。僕はダメだなあ。

僕は安心して木の影から出た。

「……そこに隠れてたんだ」

ふらりと僕を見る。

「え、う、うん。僕がこの山にいるって知つてたの？」

「当たり前でしょ。追ってきたんだから」

え、誰？ 本当に楠さん？ その前に、追ってきたってなんで？

「どうしてここにいるの？」

と楠さん。

「あ、この前」で変な人に会ったから写真でも撮ろうかなって思つて……」

「ふーん。いい趣味してるね」

これは褒められていないと僕でも分かる。

「で、写真はもう撮つたの？」

「え、いや、変な人いないみたいだから……まだ撮つてない……」

「へえ……」

楠さんは思えない顔ですね。

「え、え、え？ も、もしかして僕悪い事した？」

「……分かつてるんでしょう？」

いつものような暖かい笑顔じゃない。っていうか、笑顔がないね。ものすごく怖い無表情。とりあえず怒っているみたいだから謝ろう。僕が悪いんだから。

「「めんなさー」

頭を下げる。

「やつぱり分かつてたんだ」

「アリでも見るかのような田。怖い。分かつてたって、こいつたい何のひとだらう……。でも怖いから聞けない。

「それで、気になる」とは無い?」

「え、えっと……」

「いいで話つなんぢまなんで怒つてこるのかを聞いてみたい。けど怖いから聞けない。

「聞く必要がないって? へえ、それはそれは」

何も言つてないけど。

あの優しい楠さんがここまで怒るなんて……。僕はそれだけのこととしたんだ……。ああ、償いたい。でも罪を自覚していないのでどう償えばいいのか分からぬ。聞けばいいのだろうけれど、怖いから聞けない。

「「めんなさー」……」

謝ることしかできない僕を誰が責められよつか。

「見ひやつて」「めんなさー? ムカつくね」

む、むかつく？！あの楠さんが今ムカつくって言つた？！やっぱり偽物？！怖いから怒つてゐる理由聞けないと思つたけど、聞かないで怒られている方が怖いことに今気づいたよ。」

「あの、その、な、なんで怒つてゐるのかわからせん！」

思わず敬語になるほどに怖い！

「ここ加減分からなこつコやめてよ。私だつてもう隠さないで本音で話してんだからね、君も本音で話さつよ」

「ほ、本音です……。本当に分からなによ……」

「嘘ばっかり。ずっと私の事監視してたじゅん。あの時顔見たんでしょ」

「あ、なるほど。ここ最近田が会つ機会が多くたから監視されてると想われちやつたんだ！でもあのときつてこいつのこと？！」

「「あんなさいー。その、あの、えつと」

「ここ訳のしようがなによ。」

「「あんなさいー。」

学校生活を諦めよつ……。楠さんに嫌われるのは一年生全員に嫌われるのと同義だから。

「謝りなくていいから。とりあえずあの時落とした私のお面返して

「お

怒った顔で手を差し出してきた。

「お面……？ つて、何？」

はあああああああと大きくなため息をつく楠さん。

「いいかげんにしてくれないかな」

一文字一文字間にスペースが入るほどにキレていらっしゃる！

「あの時の馬のこと決まってんでしょう。持つて帰ったの？ 捨てたの？」

……。

「え、なんで馬のこと知ってるの？ あれ？ 楠さんも見てたの？」

「ビートいたんだろ？ 木の陰に隠れてたのかな？」

「見てたって……そんなの知つてて当たり前じやん」

眉根を寄せて怒つていることを教えてくれる。

「ど、どうして？」

僕は首をかしげて聞いてみる。

「ああ、なるほどね。私の口から言わせたいわけ」

な、何のこじだり。

何かに納得したよつて頷いて楠さんが言つた。

「あの時の馬は私です。これで満足ですか？」

……。

……。

ええええええええ？！

それ初耳なんですけども！ 全然わからなかつたよー。うん！

「それで」

楠さんがこいつち近づいてきた。

「そ、それで……？」

僕の目の前で止まる。

「この事実を知った君はどうあるつも？」

「え、どうするもどうするも……」「

今初めて聞いたし、まだ何も考えられない……。

「まあ、どうせ君も他の男みたいに私をこやしこいで見てるんで
しょ。私は可愛いからね」

うん。自分で言つても許される可愛だと思つよ。

「そういう人間が何をするのかは大体想像がつくよ」

「何をするって……、黙つてゐるつもりだけど……。言ふらしたりしないよ?」

「どうせ君はこのネタを使って脅すつもりなんでしょう」

「ええええええ? !」

「そんなことしないよ! って言いたいけど楠さんの顔が近すぎで緊張して言葉が出ない。」

「あーいやらしいやらしい。人間なんてみんなそう。特に男はクズばかり。女みたいな顔してる君だつて例には漏れないでしょ?」

と言つて顔をぐいっと近づけてきた。

「うわー! 近い! 綺麗な顔が近いよ! 思わず口をそらしちゃうよ! 」

「でも私はそんなことさせないよ」

楠さんが片手で僕の頬を挟み込み、無理やり自分と向かい合わせる。僕の方が背が低いから少し見上げる形になつてしまつ。僕は直視することができずに固く目を瞑つた。

「君は私を脅せない」

「う、うひひ」

い、痛いです。痛いです楠さん。

「だつて、脅すのは私の方だから」

「え？」

どういう意味か分からず口を開ける僕。いや、もう開けない方がよかつたとすぐに後悔したよ……。

田の前に広かる桟さん、の綺麗な顔、眩しいよ。

僕は、

キスをされていた。

— 1 —

ぎやああああああああああああああああああああ！ 意味が分かりませ
んんんんんん！

僕は完全に思考が停止してしまい自分一人で動かすことができるなくなっていた！

時に楠さんが離れる。

「な、なななななにを？ ななんんで？！」

ぼ、僕の純潔が！ 何が起きているのでしょうか！ これ地球終
るんじゃないの？！ ぼ、僕のような下賤な人間が楠さんとせせせ
接吻を交わすなどと世間様にももも申し訳が立ちません！

「……」

楠さんは慌てる僕を無視して、満足そうな表情で携帯を眺めていた。

「…………楠さん？！　せせせ説明をお願いしてもいいですか？！」

とつあえず僕は無視される。

「ああ、なんて哀れな私……」

よよよと泣きまねを見せる楠さん。な、何が起きてこるのかわっぱり分かりません！

「い、いつたこ、どうこう」とじょつか……

少し落ち着いてきた。でもドキドキは一向に収まる気配を見せてくれません……。多分今日はもう無理です……。

「君は今私に無理やりキスをしたの。やつらつら

無理やりって何？！　意味が分かりません！

「あ、あの、詳しい話を教えてほしいんだけど……」

「そんなことよつやつと携帯出して置いて書つてるので。赤外線送信

「え、あ、はー」

同じこと言わせないでみたいなことを言われたけれど初めて聞いて聞いたよ。でも僕は言うとおりに携帯をだし、楠さんの携帯と向かい合わせる。そして言われるがままにプロフィールを送信した。

楠さんが送られてきた僕のアドレスにメールを送つてきた。僕はそれを開封。何やら添付されていて。開いてみた。

楠さんと僕のキスシーンだつた！ なんの羞恥拷問ですか！

——ななんなんですかこれは！」

「そんなの決まっているでしょう。私が、君に、無理やり、キスを、
されているシーン」

「そんなに単語分けしなくても分かりますー。」

でも結局なにを言つているのか分からないので慌てて写真を見てみる。恥ずかしい！恥ずかしすぎるわー！けど我慢してよく見てみる……。

自分のファーストキスを客観的に見てみる。異次元の美貌を持つ
クラスメイトと唇を合わせている僕。……。「ばばばばばばばばば。
……いや、もう現実に起こったことを認めて前へ進もう。僕は取り
返しのつかないことをしてしまったんだ。罪を背おつて生きなけれ
ば。

とにかく今は楠さんの言葉の意味を知りう。

何となく薄目でディスプレイを見る。

楠さんはなんて言つたつけ。

無理やり、僕が、ききき、キスをしているシーンって、言ってたつけ。

ディスプレイに映し出されていた楠さんの表情は苦しみに満ちたもので、確かに、どう見ても、僕が無理やりしているようしか見えなかつた。

「あーあ。私のファーストキスが君みたいなもやし野郎に奪われちゃつたのか。人生何が起きるか分からないね」

「…………も、もやし…………」

「口が悪い……。楠さんだとは思えない……。
つて、ファーストキスだつたんだ……。…………。
それつてこんなとこひで散らしていいものなのですか？！」

「どうあえず、君は無理やり私にキスをした。その事実はオッケー？」

「…………いやいやいやいやいやいやいやいやいやいやいやいやいやいやいや！ ちょっとほめつとしてたけどオッケーじゃないよ！
アウトです！」

「うるさいね。君は今私に口答えできる立場じゃないの」

もう言つて携帯を開いて僕に写真を見せてきた。

さつと視線を外す。自分で見るのより楠さん本人に見せつけられたほうがなんだか恥ずかしい。

「そ、そんな。く、楠さんが……じぶんで……」

「あーはいはいはい。別に君がどう想つてもいいよ。いつまでも証拠があるんだから

「証拠って……。それは楠さんが僕に無理やりキ、キスした証拠じゃあ……」

「何言つてるの？　この写真が全てを物語つていいんじゃない」

「確かに、この写真だけ見たら僕がその、無理やりしているように見えるかもしないけど……ちゃんとみんなに説明すれば……」

「私と君の言葉、みんなはどうちを信じるかな」

「う。当然楠さんの言葉を信じるね……。僕だってそうだもん。僕みたいな芋虫なんかより楠さんのような蝶の話を信じちゃうよ。」

「『理解いただけましたかね。君のこれからは私が握っているの。脅す立場から脅される立場になっちゃったの。オッケー？』

おっけーと言わざるを得ないよ……。

「つづいて……僕脅すとか考えたことなかつたのに……」

そもそも知らなかつたんだから。

「嘘ばっかり。人間はみんなクズ。どうやって上に立つ人間を蹴落とすかしか考えてないんだから。完璧美少女である私の欠点を見つけた君はそれをネタに私を脅してエッチな命令を下してそれを眺めながら下卑た笑みを浮かべるつもりだったんでじょう気持ち悪い」

酷い妄想だよ本当！」

「でも残念。君はこれから私の言つことを聞かねばならない立場になりました。とりあえず手始めに馬返して」

「……」

「さういふを差し出してくるナビ僕は何も渡せない。

「ほ、本当に知らなによ……」

「あの後すぐ帰つたもん。

楠さんが「」を見る田で僕を見た後、ため息をつき声つた。

「……まあいいや。じゃあひとまず今日は解散。明日君の家に行くからそのつもりで」

「え、僕の家に来るの？ あの超絶美少女が？」
「す」「ことだよこれ。でも全然嬉しくないや！ 不思議だね！」

「今は混乱しているだらうから、一晩よく考えていいよ。でも一晩だけしか時間あげないから」

「そう言ひながら僕とすれ違ひこの場を去る楠さん。
僕はがつくりとうなだれた。何が何だか分からぬ……」

「佐藤君」

後ろから聞こえてくる声が僕の耳をくすぐる。先ほどまでの声じやない。僕は思わず振り返つていた。

そこにいたのは、いつも、僕が知つていた、誰もが憧れる優しい楠さんだった。

「ばいばい佐藤君。これから、仲良くしようね」

その表情を見て、不覚にも僕はドキドキしてしまった。

可愛い同級生が起きてくれる朝って夢だよね。でもそれって都市伝説じゃよ。

楠さんとキ、キスをした次の日。

土曜日だよ。

ドキドキを収めてやつたことで眠りについた金曜日。眠るのが遅かったから、いつもより深い眠りについていたらしく。起きた時にはいつも起きている時間、朝八時を一時間も過ぎていた。

つまり今は九時。

寝坊したこともそれなりに驚いたのだけれども、今はそんなことはどうでもいいと思える状況だった。

「あわわわわ

どんどんと。

僕の部屋の窓が叩かれていた。

物凄く怒った顔をした美少女に。

「な、何してるの楠さん!」

僕の部屋は二階。楠さんが立っているのは屋根。もちろん斜めの屋根。

僕は慌ててカギを開け屋根の上にいた楠さんを部屋に迎え入れた。ベッドに降り立ち僕を睨み付ける楠さん。ジーンズにTシャツ。動きやすい格好だ。初めから屋根の上に登るつもりできたのだろうか。

「起きるのが遅いよ。私がどれだけ待ったと思つてるの

そう言って肩にかけていたカバンを僕に投げつけてきた。

「どれだけ待っていたかは、楠さんの髪がぼさぼさだから長時間風にさらされていたのだろうと想像できる。

僕はカバンを地面に置き聞いてみた。

「な、な、なんで屋根から？！ 危ないよ！」

「ぼさぼさの髪の毛を撫でつけながら楠さんが叫ぶ。

「何言つてるの。昨日君が無理やり部屋に連れ込んだんでしょう。だから君の家族は私がここにいることを知らない。私がここで助けてと叫んだら君は自宅でさえ居場所がなくなってしまう。叫んでいい？」

「や、そんな理不尽な……。僕は何もしてないの……」

「寝ぼけてるの？ 佐藤君、君は昨日私に無理やりキスをして無理やり部屋に連れ込んでいやらしいことをしたのでしょうか。覚えてないの？」

「そんなことしてないよ！ 特に後半身に覚えがないじゃんの謎、きじゃないよー！」

「なに？ 口答えするの？」

ジト目で僕を見下ろす。でも感情はこもっていない。

「いいで叫んでもいいの？」

「よ、よくないです……」

「なら認めて。君は、私を、無理やりここに連れ込んだ。はい、復讐」

「「ひ……。僕は、楠さんを、無理やり部屋に連れ込みました……」

「はい」苦労様

『そう言いながら何かを機械を取り出す。そしてそれを『ゼノバ』といじる』

『僕は、楠さんを、無理やり部屋に連れ込みました』

機械が僕の声を再生していた。

「つて、録音してたの?」

「そうだけど。それほど驚くことでもないでしょ? 初めて見た?

「ヒレーダー」

「ヒレーダー初めて見たけど、その前になんて録音なんかするの?」

「脅すネタを増やすためだけ。そんな当たり前の事聞かないでくれる?」

な、なんていう美少女なんだ……。僕達は今までとんでもない勢いで騙され続けていたみたいだ……。猫被つたとか、そんな言葉じゃあ足りないよ。でもいい表現が思いつかないから猫をかぶつたとしか言いようがないんだけど……。

まあいいや。

撫で続けられた楠さんの髪はセシットしたばかりのよつと整つていた。すごい潤いヘアだな。

ベッドにへたり込み楠さんの黒い髪に見とれないと、ずずっと顔を寄せられ至近距離で見つめられた。くいくりとした大きな瞳に僕の顔が映し出されている。映し出されたその顔は何とも情けない男らしさとは無縁の顔だった。つていうか、綺麗な肌が近すぎて僕の顔が真っ赤だよ！

「ねえ」

「な、なんですか……」

また怒られるのかな……。

「とつあえず、着替えようか」

「え、あ、うん……」

パジャマじやダメなのかな……。

僕はベッドから降りてタンスを開ける。服を取り出し気付いた。振り向き楠さんを見てみる。ベッドの上にアヒル座りをして、ぱつぱつじらを見ていた。

「……あ、その、楠さん……、その、見ない方が、いいんじゃないかな……」

「ああ、そう。恥ずかしいんだ。顔もそつだけど性格も女の子みたいだね」

そう言つて僕に背を向けてくれた。

そ、そんなの、可愛い子に見られてたら恥ずかしいに決まってる
よ……。僕も背を向けて着替えを始める。

せわつと下を着替えて、上を脱いだ。が、その時、
ぱしゃ。

と、聞きたくない音が聞こえてきた。

上を着ないまま振り向いてみる。そこには当然携帯のカメラを構
えた楠さんが……。

急いでシャツを着て猛然と抗議をする僕！ 当然だよ！ 今回ば
っかりはちょっと強めに言つちやつー

「そ、その、な、なんで、写真なんか……」

「部屋に連れ込んだ君が服を脱いで私を襲おうとしている証拠

「そ、そんな……！」

「君サイテー。か弱い女の子を部屋に連れ込んでこんなことをしよ
うとしているだなんて」

「してないよ！ する気も無いよ！』

「する気も無いって、それ失礼でしょう。ふざけてんの？」

「う……」

確かに失礼だった……。

「訂正して」

「え、
え？」

「ニヤリソニコソアヌ坂山あつせんしたる、出でし。わが、出で

גַּעֲמָנִים

た、確かに、今のは楠さんを傷つけてしまったかもしれない……。ここは素直に訂正しよう。

「……そ、その、僕はいやらしいことする気がありました……」

え？ あれ？ そんな気はもともと持つてなかつたから訂正する
必要なかつたよつな……。

「はい録音」

「え？！」

「当然でしょ。君頭悪いの？」

—הַיְהִי־בְּרָכָה־לְךָ יְהוָה־בְּרוּךְ־תִּהְיֶה־יְהוָה־לְךָ־בְּרוּךְ־תִּהְיֶה

諦めよう。僕はもう社会的に死ぬんだ。

「七九」

「怒らないんだね」

「うん。僕が悪いし……」

「……」

「僕が気を付けておけば防げた」とだから楠さんこ又句をいつのまにか間違つてこる……のかな?」

「知らないよ」

「だよね……。」

「うなだれる僕に楠さん。

「ねえ佐藤君」

「な、なに?」

「なんで君はそんなに遠慮してるの? 私はこんなに心を開いているのに君はずつと閉じたまま。なんかムカつくんだけど君の愚行をみんなにばらしていいの?」

「や、そんな……。そんなこと言われても……。僕なんかが楠さんになれなれしく話すなんて許されることじゃなし……」

「何それ。脅してくる奴相手にへりへだつて語りわけだけマジなの」

「ま、マジじゃないけど……。本当のことだし……」

「……私が心を開いているんだから佐藤君も心を開くべき」

「え、で、でも」

「でももしかしない。ばらすよ」

……本当に僕は脅されています……。

「わ、分かったよ。本音で、接します」

「約束だから。じゃあそいつのわけで、佐藤君朝ご飯まだでしょ」
食べてきてこいや

「え、楠さんは?」

「私は食べたよ。そもそも忍び込んだんだから」家族の方と一緒にご飯は食べられないでしょ。さつわと一階へ行つてご飯食べてきて。そのついでに何か飲み物を持つてきて。君と私の分二つね。できればお茶」

「うん。じゃあ、僕は、ご飯を食べてくるね」

「はいはい」

僕を脅してこむと言つても、せつぱん楠さんは優しいなあ。

朝の食卓は平和で幸せだった。家族みんなで食べる「はん。おい」といよね。

ご飯を食べ終え、お盆の上にお茶を一杯乗せて一階へ上がる。なんで一杯持つていくのかお姉ちゃんに怪しまれただけど僕の部屋にお

茶好きの幽霊がいるんだと言つたら納得してくれた。

自分の部屋だけれども、楠さんがいるのでノックをしてから入る。

「入るよ?」

ゆうくじと扉を開いて中を覗くと楠さんが堂々と部屋をあさつていた。

「あれ? 探し物?」

何も隠していないけれど。

「……その反応を見ると、別にエロ本とか隠していないみたいだね
……」

「え、エロッ……！ そんなのないよー そんなの探さないでよー
！」

「……本当に男なのかな……。情けない声出してみつともない」

ぶつぶつといながら楠さんが勉強机から椅子を引っ張ってきて座る。

「うう……。よく言われるよ……」

僕はお茶の乗ったお盆をテーブルの上に置いてそのまま床に正座をする。テーブルの上に空のタッパが置いてあるけどなんだらつ?

「佐藤君本好きなんだね」

「え？ あ、うん。好き」

「漫画本とかが多いね」

「うん」

「アニメも見るんだ」

「うん」

「オタク？」

「う、うーん、オタクの人から見たらオタクじゃないと思つけど……」

「じゃあオタクだ」

「……サブカルチャーに全然興味がない人から見たらオタクかも」

「オタクなんだ」

「あ、その、楠さんよつは……」

「オタクなんでしょう？ 言い切つてよ。ウザい」

「は、はい。僕はオタクです……」

ウザいつて言われちやつた……。あの楠さんにウザいつて言われ
ちやつた……。

「今度からほんとうに答えてよね。何度も聞か返すの面倒くさいから」

「あ、うう……」

怒り切らなかったよ。

「なにかおすすめとかある？」

「おすすめ？」

「面白アニメとか、漫画とか」

「あ、えーっと……。楠木ちゃんは、その、どんなのが、好み……なのかな」

「うーん。平和なの」

「平和なの、なら……。やつはある、とある女子高の軽音楽部つていつのが平和で面白いやつよ」

ふーん、と興味なさげに呟いて椅子をぐるぐる回す。興味ないのなら何で聞いたんだお？……。

椅子の回転をピタッと止めて僕を見る。

「それで、君は男の情事やうじをどうやってるのかな？」

「情事？ 情事ってそういうの？ とかな……？ まあ？！」

「な、なな何を突然言つてこるの？！ 何を言つてこるの？！」

「繰り返さなくても聞こえてこぬか。で、せひこむのへ。」

「しじし知らなによー。」

「……まあ、いつか。ただの興味本位だし」

「う、ううううう……」

なんか強いよ、この人……。

「ああ、やうだ」

「な、なに?」

声をかけられる度に怖いよ……。なんだか調教されている気分だ
……。

「色々と部屋を調べさせたかったんだけど、タダで探すのは申し訳ないとthoughtから調べた個所に代金としておはぎを置いといたか
ら」

「おはぎはーー。」

「ほひ、ベッドも調べさせてもらひたからわい」

楠さんが指さす方、僕のベッドの上を見るとおはぎがその肌を剥
き出しのまま銀紙の上に鎮座していた。

「や、やめてよー……。蟻が来ちゃうー……。」

「嬉しくないの？」

「嬉しくないよ……」

「あれそれは残念。合計九個おはぎを隠したのに喜んでもらえないなんて」

「九個!? 結構多いよそれ?！」

「まあいいや」

「僕はよくないよー」

「なら探しでおはぎたちを助け出せばいいと思います。その間私はここにある机のパソコンをいじらせてもらひつかり

「う、うう……」

どうやらおはぎの生息地は教えてくれそうにないね……。仕方がないので、僕は一人おはぎ探しをすることになった……。机の上のタッパはおはぎを持つてきた入れ物だったんだね……。

そして僕は無事に全九個のおはぎの救出に成功した。タンスの中、押し入れの中、引き出しの中、カバンの中……。色々なところにちりばめられたおはぎを探し終えたとき、僕はまるでドゴランボールをそろえたかのような気分になった。願い事が一つ叶うのかな?

そうだとしたら何を願おうかな！ 身長も伸びてほしにしあいしいものも食べたいし。でもやっぱり一番欲しいのはパソコンソフトの終音ミリコが欲しいかな。歌を作つてニヤニヤ動画に投稿したいな。

おはぎを見つけ終え楠さんの後ろで正座をする僕。

「ねえ佐藤君」

おはぎ事件に對して特に反応も見せずディスプレイを見つめたままの楠さんが聞いてくる。

「どうしたの？」

「Hロード……！ そ、そんなのないよー」

「君は聖人ですか。三大欲求の一角を担つている性欲が佐藤君には無いの？」

「そん、そんなの気にしないでよー！」

「……まあ、脅せば済むことだけど、別に処理の仕方が気になつているわけじゃないからいいや」

「なら聞かないでよ……。

「それで佐藤君」

「な、なに？」

「」のパソコンは何のために使ってるの？　Dドライブの中身が空っぽなんだけど、エロ画像もエロ動画も見ないなんてパソコンとしての役割が果たせていないでしょ。これじゃあただの暖房器具じゃない

「僕パソコンを駆使しているわけじゃないからパソコンの事全然詳しきないけど、パソコンってそんなえっちなものじゃないと思うよ……」

「パソコンを個人で所有している人の99パーセントはエロ目的でパソコンを買っているの。君が残りの1パーセントだとは思えないから君はエロス。うちの兄もエロス」

「お兄さんがいるんだね」

楠さんが大きな瞳で僕を睨み付けてきた。

「ちょっと。なんで私の個人情報を知ってるの。もしかして私のこと調べてたの？」

「え、い、今自分で……」

「録音するから調べてましたって言って」

「どうどうオープンに録音しだした！　これじゃあどんな言葉でも人質に取られちゃうよ…」

「そうだね。なら『楠さんに酷い』としました』って言って

「い、言わないよ…」

「……自棄になられても困るが、無理な注文はやめておいた方がいいのか？」

「そ、そうしてくれると嬉しこよ。……」

「感謝してね」

「う、うん」

感謝しなきゃね。

「それで、この暖房器具は他にどういう機能がついているの？　H
D画像を見る機能はつけていないみたいだけど」

暖房器具扱い……。

「僕の場合はニヤニヤ動画とか見たり、2・1ちゃんねるを見たり
しているよ。だから用途としては暇つぶしかな？」

「ふーん。暇つぶしね」

カリカリとホイールを回す楠さん。

「私さ、思つんだけど」

「うん」

「インターネットしてたらよく見る、（ただしイケメンに限る）
つてあるでしょ？」

「うん」

「あれや、逆バージョンの方が該当ケース多い気がするんだよね」

「逆バージョンってどういふこと?」

「（ただし美少女に限る）ってこと?」

「?」

やつぱつよく分からなかつた。

「もしかしたら私の勝手なイメージなのかもしれないけどさ、デブで暗い男と、デブで暗い女を比較した場合、デブで暗い男の方がポイント高い気がするの」

「…………」「メン。よく分からない…………」

「たとえばね、デブ男がカラオケに行きました。歌がうまい。デブ夫のくせにやるじゅんつてなるでしょ?」

「う、うん」

「でもね、デブ美がカラオケに行つて歌がうまくても、それはただ気持ち悪いだけなんだよ」

「え…………そ、そうかな…………すいこと思ひナビ…………」

「歌がうまい（ただしイケメンに限る）は無いけど、歌がうまい（ただし美少女に限る）はあると思うの。ブ男には適用されない

けど、ブ女には適用されるケースが多い。やつ思ひのは私だけかな

……多分、楠さんだけだと思つ。

「女性歌手の殆どはビジュアルがいいでしょ。でも男性歌手はやつ
でもないのもいるでしょ？」

「う、うーん……。なんて書つか、同意じがらみ……。

「その、あの……」

「言いたいことがあるならはつせつ言つてよもやし太郎」

も、もやし太郎……。キャベツ 郎みたい。

「心を開くつて言つたでしょ。もう約束破るの？ なんだ、君、無
理やりキスしたことみんなにばらしたいんだ」

「や、そんな」となじよー

「なら言つてよ」

怖いです……。怖いよ、怖こまかよ……。

「う、うん。あのね、人を見た目で判断するつてよくないと思ひ…

…

「へー。君は見た目で判断しないの？」

「し、しないよ」

「なら私を特別視してない？ クラスで一番可愛い私を少し高い位置においてない？」

「う。それは、ちょっとあつたかも……。

「で、でも、楠さんは本当に何でもできぬし親切だから尊敬するの
は当然だよ」

「デジタルが論外でも？」

「う、うん。それは、そつだよ。関係ないよ」

「……へえー。まあ、そう言えば君はその他大勢の男子と違つて私
にまとわりついてこないもんね。」

「う、うん」

「本当に男なのかな」

「一応……」

「男ならシャキッとしたしなよ。どうでもこゝナビ

「どうでもいいんだ……。まあ、そうだよね……。

「……あ、そつぱなれば……」

「聞きたいことがあつたんだった。」

「なに？ 何か気になる」とでもあるの？」

「あ、その、聞いてもいいかな」

「内容を言わないでそんなことを見かかれても」

「そ、そうだよね。あの、あの辺での出来事について聞きたいことがあるんだけど、聞いてもいいかな」

「齧すネタを増やしたりいろいろんだね。別にいいよ、かかってきなれー」

「そんなつもりじゃないの?」……。

「あの、あそこで何をやっていたの? 怒つてこるより見えたけど……」

「何言つてゐる。私の言葉を聞いていたでしょ。ああ、また私の口から言わせたいんだね。すぐ陰陥。ますます君のことが嫌いになつちやつた」

「う、うう……。もっと嫌われちゃつた……。でもしちゃがないよね……。僕が悪いんだから」

「私はいつもあそこでみんなの悪口を言つてゐる。人と話すだけでストレスたまるからや。あの日は一緒にデートした井上先輩のことについてイライラしてた」

「あ、井上先輩って言つたらかっこいいこと有名な先輩だよね。さすが楠さん。井上先輩にデート誘われるなんてすげーよ」

「何それ嫌味？ イライラしたつて言つてゐるじゃんか。あいつ触るなって言つたのに私の体べたべた触つときやがつて……！ 今思い出してもイライラしてくる！」

「ここに来て初めて感情を見せてくれた。けどそれが怒りなのが少しやかなり悲しい。

「ああああああああああ…………」 気持け悪こ…………

キーボードをガンガン叩く楠さん。

「あ、その、やめてほし……んだけど…………」

「何が？！ 何を！？」

「いや、えっと、キーボードを、壊すのを…………」

「…………なんなど置いておかなこでよ」

「でも、キーボードなんだからパソコンにこなごでおかないと

「…………」

「すぐそれ。触られたくないのなら人につかなことひいておけつてこつての」

「う、うう……。そんなの間違つてるよ……」

「う、うう……」

「端がないでよ気持ち悪い。もしかして私の後ろ姿で情事を済ませたの？ 気持ち悪いから学校やめて」

「そんなことしてなによー！」

「あつやつ。疑つていまふね。お遊びにエロ動画ダウソードしておいたから」

「ええ？！ いらなことつー？」

「こりなーの？ ふざけしの男たちがぶつかつて動画こりなーの？」

「ますますこらなーよー！」

「あれ。一応異性に興味があるんだ。男色かと黙つたのに違つんだね」

「違ひよー。勘違いも甚だしこよー！」

「甚だしこつてこう言葉を初めて使つたよ！」

「なら私は女の子が大好きですって言つてよ」

「HJレーダーを構えながら言わなーいでよ……」

「ばれたんだ。ばれないかと黙つた。佐藤君だから」

「僕田悪くないけど……」

「察しあは悪いでしょ」

「う、そうかも。

「あーあ。今日の収穫は少なかつたよ」

「しゅ、収穫って、何?」

「もちろん君を齎すための材料に決まってるでしょう。致命的なものがまだないからね。H口画像でも見て佐藤君の趣味を把握しておこうかと思ったんだけどどうやら君は聖人君子みたいだからつまくなかったよ」

そんな理由で僕の部屋に来たんだ……。

「まあいいや。とりあえず君のパソコンの中にガチムチ動画が入つてこるのを写真に収めさせてもらったから

「そんな… それ楠さんが自分でダウンロードした動画だよ!?
僕の趣味じゃないよ!」

「そんなの関係ない。現に君のパソコンの中に動画が入っているんだから。『』言い逃れはできないよ」

ひどすぎる……。

僕はぐつたりうなだれた。僕はどうせやりはじめるみたいです。

「あ、お茶貰うね」

椅子を回し手振り返り、お茶に手を伸ばした楠さん。

「……」

だけれども、お茶を握つて動きを止めた。

「どうしたの？ 楠さん」

「…………君、このお茶の中に何か薬入れただしょ

「そんなことしないよ……。そもそも薬なんか持っていないよ……」

とても心外だ。でも疑われる僕が悪いんだろう。

「なら、僕が先に飲めばいいよね？」

「そうだね」

すこしく警戒しているなあ。でもしあづがないよね。初めて訪れる部屋なんだから。

僕は傍にあったコップを手に取り、口へ近づけた。が、

「ちよつと待つて。そつちじやなくてこいつを飲んで」

「え？」

「そつちこは何も入つてないかもしないし」

「う、うん……」

すこしく警戒しているよ……。

楠さんと近い方の「ラップ」に持ち替えて僕は一口飲んだ。

「……問題ないみたいだね。じゃあありがたくいただくな」

お茶とおはぎを持った楠さん。

「うん。おこしー。佐藤君も食べていこよ」

「え? ありがと。じゃあ……」

「あ、旗が刺さっている奴を食べてね」

「うん」

残り八個のうち旗が刺さっているおはぎ一つ。僕はそれを手に取り一口食べた。驚くほどおこしかった。

「……」

何故だかその様子をじっと見つめている楠さん。なんだろう?
あ、そっか。

「おこしこおはぎだね」

「そんなことせざつでもここ…………

「やんな」とせざつでもここ

ペロリだよ。
…………どいつもここんだつて。でもおこしこのは本当だからすぐこ
元へ

「……くふ」

楠さんが笑つた。暖かくない笑みだった。

「ど、どうしたの？」

「それには下剤が入っています」

「……え？ー」

なんていひた！

「ひ、酷こよ！ なんでこんなことあるの……？」

「嘔ひ」とを聞かせる為に

ど、どひこひじだひつ……。

「う……早速お腹が痛くなってきた気がする……」

下剤の効きが早い気がするけど、多分これは僕のメンタルが弱い
ことにあなたの思い込みだと想ひ。

「うよ、ちよとトイレに行つてくるね」

立ち上がり、ドアへ向かうが、

「待つて。待たないと大声で泣くから」

「え……？ ま、待つから、待つからやめてね」

「アの近くに腰を下ろす。そんな僕を椅子に座った楠さんがこじてと眺める。

「さへ、佐藤君のお腹がエマージェンシーモードなわけですが、君がトイレに行けるかどうかは私にかかります」

「うそ……」

「トイレに行きたければ私の囁き」とを聞きなさい

「うそ」

自分の命の為だからしうがなことね。

「とつあえず馬を返して。」の部屋にあるんでしょ？」

「え、ないよ？ その、わざわざ部屋を探したとき……その、無かつたよね」

「無かつたけど。どこかに隠してあるんでしょ？」

「隠してないよ。僕本当に知らないんだ

「……本当かな……。怪しいね」

「ほ、本当だよ……」

「あとで嘘がばれたらひどいことになるからね。馬を隠すメリッヒト

はないよ

「う、うう。僕、馬持つて帰つてないよ」

「……………」

「あ、ありがとひー、じゅあ、ちゅうひ……」

「まだ用事は終わってなにからその上にた腰を下ろして」

「え、あ、ほい」

「とうあえず次は誓約書にサインをしてもらおうかな

「誓約書？」

カバンに手を突っ込み一枚紙を取り出した。

「これに手を通さずサインして」

「め、田は通させてもいいな……」

紙を受け取り、手書きの誓約書の内容を確認してみる。
えっと…

その一・あの田見たことを口外しない」と。

その二・私が楠若菜の言つたことに迷うわない」と。

その三・人前では自然に接する」と。

その四・つてゆーか転校して。

「四つ田は無理だよー。」

「え？ 漏らしたいの？ それとも家族からの信用を無くしたいの？」

「どうちも嫌だけど転校するのも嫌だよ……。あの、他の三つは絶対に守るから最後の一つは許してくれないかな……。お願いします……。」

「……そんな悲痛な表情で頭下げられたままで私が嫌なことしているみたいじゃない。やめてよ」

「うー、うめさんね」

「……」

何故だか分からぬいけれども楠さんの目に不快の色が映った。

「え、ど、どうしたの？」

「……なんでもない。分かった。じゃあ四つ田は勘弁してあげる。でも消すのが面倒くさいからとつあえずそのままサインしちゃって」

「うん」

「……………」
ペンをとつ紙に名前を書く。せとい、ゆうた……。

「はー」

「……………ありがとうございます」

受け取る時にも不快の色が見えた。僕、何か悪い事したのかな。
受け取った誓約書を眺め、一度溜息をつく楠さん。僕にはその溜
息の理由が分からなかつた。

「……………お腹の具合はどうぞ、佐藤君」

「うん……………あんまりよくない」

『うわ、うわ』と警報が鳴つてゐるよ。

「行つてきていいよ」

「あ、うん。じゃあちよつと行かせてもらひな」

やつとスッキリできるね！

僕はちよつと失礼してトイレに行かせてもらひた。

十分後か十五分後かはよく分からなければ、トイレにこもり用
を済ませ部屋に戻ってきたとき、楠さんは一枚の手紙を残して部屋
からいなくなつていた。

「えつと……」

残された手紙を読んでみる。

「『帰る。おはぎ食べていいから。下剤入りは旗が刺さった一つだけ。おじやましました。』」

……。

激動の朝だったね。

学校の屋上は聖地

激動の土曜日を終え日曜日は何事もなく過ぎてゆきいつも通りの月曜日がやってきた。

あ、いつも通りじやなかつた……。

僕が教室に入つたら、黒髪ロングの美少女が笑顔で挨拶をしてくられた。

「佐藤君！ おはよー！ 今日も一日頑張りうねー！」

男子数名と話していた楠さんが僕に向かつて手を擧げてくれた。

「あ、あ、おはよーいります」

「あははは。やだなあ、なんで敬語なの。クラスメイトなんだから親しくしようよ、ねえ？ さとうくん？」

「うん……」

いつも素敵だと思っていた笑顔が今は裏にある感情を想像してしまって素直に見惚れることができない。残念でなりません。

僕はぎこちない笑顔を作つて楠さんをやり過ごし自分の席へ向かつた。

席へついて一度辺りを見渡してみた。男子数名が「なんでお前なんかに若菜ちゃんが挨拶してるんだよ死ね」というような目で僕を見ていた。僕は気付かないふりをして文字の世界に飛び込んだ。

しばらくして教室に先生がやってきた。僕は本をカバンの中にしまって姿勢を正した。

「みんなおはよー」

先生の声が静かな教室に響く。

「あー、今日の放課後暇な奴いるか?」

先生が教室を見渡す。でも誰も反応しない。

「……じゃあ、佐藤」

「え、ぼ、僕ですか?」

「佐藤部活していないしな。佐藤しかいないんだ」

「この前もそんな理由だったよ……」

「草むしりの人間を一人出さなきゃいけないんだが、佐藤やつてくれないか」

「あ、は、はい……」

今日も晩御飯作れないのかな……。

うなだれる僕に関係なく朝のホームルームが続けられる。連絡事項を伝え終えた先生が教室を出て行つた。

草むしりか……。この前より早く帰れればいいな。

「佐藤」

「え? あ、有野さん。おはよー」

金髪セーラーロング、女子のリーダー有野もん。

「お前嫌なこと押し付けられすぎじゃね？ 嫌なら断ればいいじゃねえか」「…

「え、で、でも、僕にしかできないし……」「…

「んなもん適当に断つとけば若菜か誰かが買つて出してくれるだろ。佐藤何度も嫌な仕事押しつけられてんじやんか。あいつ絶対お前の事便利な奴だと思つてんだ。嫌だろ？」

「え、つづき？ その、僕がやればみんな困らないし、全然かまわないよ」

「あんた……優しすぎだろ」

有野さんが僕のほっぺたを軽く抓つて引っ張つてきた。

「い、ゴメンなさい」

「悪くねえのに謝んなよ」

怒った顔をして、うにうにと僕のほっぺたを引っ張たあと自分の席に戻つて行つた。よかったです。殴られるのかと思つた。

「佐藤君」

お弁当を食べようとカバンをあわててこよるといふ、いー匂いとともに黒い髪が視界に入ってきた。お弁当を持ってその人を見てみる。

「……楠さんだ……。

「佐藤君?」

「な、何?」

「あはは。そんなに怯えないでよ。クラスメイトですよ」

「うん……」

確かに何もされていないのに怯えるのは失礼だよね。気をつけな
きや。

「それで、何か用かな……」

「一緒に飯食べようかと思つて

「えつ

と僕が驚くのと同時に教室内がざわめきに包まれた。

当然だよ。僕のようななよなよした人間が楠さんのような凛々し
い人間と昼餉をともにするなどと恐れ多いにもほどがあるよ。

さらにそんなことよりも重要なことで、そんなことをしたら男子
全員から冷たい目で見られてしまつと思つんだ。

「えっと、その、あの、僕

「え? もしかして、私ども飯吃るのが嫌なのかな……」

とても悲しそうな声だった。でも顔は無表情に怒っていた。

楠さんは教室にいるみんなに背を向けているので、みんなは楠さんが怒っているとは思わない。僕が悲しませているように見えているはずだ。その証拠にクラスの大部分から熱い視線をもらっているよ。

「なにか嫌な理由でもあるのかな……」

顔と声が全然合ってません……。怖いですみ……。

「佐藤君が嫌ならいいんだけど……残念だな」

楠さんの後ろからとても重量感のある視線をびしびしもらつているわけだけどそれは僕には耐えられるようなものじゃないんだ。だから楠さんの言ひことに従うことにするよ。

「う、うん。」一緒にきます

「え、いいの? ありがとー。」

ちなみにまだ無表情です。怖いです。

敵意のこもった視線を体中に感じながら僕は楠さんについて教室を出て屋上へ向かった。

屋上へ着くなり僕の胸ぐらをつかんで顔を近づけてくる楠さん。

「……誰かに言つたでしょ

「い、言つてません」

「嘘つかないでよ。」んな楽しい」と誰にも話さないわけない。話す友達がいないなら別だけど」

「う……」

あれ……。今日、まだ男子の誰とも話してないや……。親友はないけど友達くらいいるよって思つてたけど、友達もいないのかな……。

「……もしかして佐藤君、君友達いないの。……ま、しょうがないか」

「……」

「よかつた君に友達がいなくて」

「うう……」

悲しいです。

「ねえ、孤独な人生を送っている佐藤君」

「そ、そんな呼び方やめてよ……」

「そう言えば今までずっと一人で飯食べていたね。よかつたね、

今日はこの私とお昼一緒にきて」

「うん。本当だね」

「……」

イラシとされた。

「「」めん」

「……別に怒つてないから謝らなくてもいい。それで、君、今日はいつも通り過ぐすことができた?」

「うん。大丈夫だよ。楠さんのこと誰にも言ひてないよ」

「当たり前でしょ? 恩着せがましい」と言わないでよ」

そんなつもり無かつたのに怒られてしまった。僕の配慮が足りないせいで。

「じゃあさつとお昼を食べて佐藤君と別れよ?」

早く僕と別れたいみたいだ。急いでご飯を食べよう。

屋上の端に座る楠さんを追つて、僕も屋上の端に座つた。楠木さんとの距離は人三人分。近すぎたら馴れ馴れしいと思われるし、離れすぎても失礼な気がする。だからこれくらい。

「佐藤君の「はんおいしそうだね」

「え? あ、ありがと?。楠さんのもおいしそうだね」

「おこしこよ。あげないから」

「う、うん……。あ、そうだ。おはようありがとう。おいしかったよ

「あたりまえでしょ。私が作ったんだから

「え、手作りだったんだ。すごいね！ あんなにおいしいおはぎを作れるなんて羨ましいよ！ どうやって作ったの？」

「興味もないのに作り方聞いたり無理して褒めたりしなくてもいいよ。おいしいのは分かってるし」

「あ、ごめん……。でも、全部本當だよ……」

「へえ。料理もしないくせに作り方が気になるって？」

「あ、ぼ、僕、その、時々、料理とか、するんだ。このお弁当も手作り」

「へえ……。それ結構すごいね。多分自分でご飯作っている男子はこの学校で佐藤君くらいだよ。それは誇りにことと思つ」

「あ、そんなこともないんじゃないかな……」

「あ、うう。そういうふうなうつなんだうね

「う、ちよつと不快に思われたみたいだ。ごめんな。

「もしかして佐藤君のお母さんがいないの？」

「え？ 「うん。両親とも健在だよ

「ならどうして」飯なんか作つてゐるの？ 作つてもいいんじゃないの？」

「両親とも、共働きだから。できる事は自分でやれりと思つて

「へえ。それは偉いね」

「そんなこともないんじゃないかな……」

「あつや」

しまつた。また怒らせてしまつた。どうやら楠さんは褒め言葉を素直に受け取らない僕にイライラしているみたいだ。気をつけよ。

「あ、セツニヤエバ。佐藤君が言つてた、とある女子高の軽音楽部、私の兄も持つてたから見てみたよ」

「え？ あ、うん。面白かつた？」

「面白こかじうかは別として、商売上手だと思つた」

「商売上手？」

「私がそれを見ていふときに兄が暑苦しく説明してきたんだけど、とある女子高の軽音楽部を制作している郷土アニメーション、だけ？ そこのでHンティングに踊るアニメを手掛けたりしね」

「うん。春畠スズヒの爽快だね」

「それぞれ。キャラクターソングとかもたくさん出して、アニメか

ら作られる副産物で結構稼いでいるみたいだね」

「へえー。そうなんだね」

「やっぱりしいね。それで、その時に副産物で稼げると分かつた郷土アニメーション。だから今度はその副産物自体を物語に組み込んだところわけだよ。たくさんCD出しているんでしょ？」

ר' עלי ר' עלי

「あーあ。つまり君はまんまと騙されているんだよ。郷土アニメーションが副産物を作るのに適した漫画を見つけて、それをアニメにして、歌を作つて、君が買つ。完璧にやられているね」

「そ、 そ う な の か な ． ． ． 」

「 そうなの。あれは企業の策略の元に作られたものなんだよ。どう
？ 面白いと思つていたアニメにこんな裏があると分かつた気分は。
残念？」

「え？ へ、ううえ……。別に、そんなことわく」

いきいきと話していた楠さんが、途端に不機嫌そうな顔を作った。

「……なんで」

「へ、だ、だつて、画田このは本当だし……。そもそも、画田こものじやなきや、誰もひとつか買わないんじやないかな」

「……まんまと騙されやがつて、つて思われていてもいいの？」

嫌じゃないの？」

「うん……。面白じから、買つたんだもん」

「……なにそれ。がっかり」

「え、え？」

「君をがっかりさせるためにわざわざ聞きたくもない話を兄から聞いたのに、何それ。佐藤君面白くない」

「え……。『めんね……』

「……」

「。謝つたらさらに楠さんの怒りゲージが溜まつたみたいだ。よく分からぬいけれどもう謝るのはやめよう。

「話は変わるけど

「あ、うん」

「ずっと疑問に思つてゐるんだけど、なんで電車の中で電話しちゃいけないのかな」

「え？ それは、他の人に迷惑がかかるからじゃないのかな……」

「迷惑つて、話すことが迷惑なら会話自体を禁止すべきでしょ」

「あ、僕聞いたことがあるよ。誰かが電話をしてゐるとき、他の人

はその電話の向こうの相手の声が聞こえないからそれを想像してしまって、そのせいでストレスを感じてしまうんだって」

「それは私も知ってる。偉そうに言わないでよ」

「あ、ごめん……」

「……。で、そのことなんだけど、そんなの禁止にする理由にならないと思うんだよね。その程度のことを迷惑と言うんだつたらさ、そんなものよりももっと迷惑なことだつてあるんだから、そつちを禁止にしてよ。でもそれらを一々禁止していつたら人間はまともな生活できなくなっちゃうんだけどね。例えば、お風呂に入らない人は臭いがきついので人のいるところに行かないでくださいとか、拳動不審な人は目障りなので人目につかないよう歩いてくださいとか。そんなルールがあつたら困るでしょ？だからと言ってそれを禁止に臭いのきつい人の方が迷惑でしょ？だからと言ってそれを禁止にはしないでしょ？ だったら、なんで携帯電話は禁止にするの」

「うん……」

「そうなのかな……？」

「なに？ 言いたいことがあるなら言つてよ。心を隠さないって約束でしょ？」

「あ、うん。その、大勢の他人と空間を共有する電車の中だから、えつと、逃げ場がないというか、自分ではどうすることもできないというか……。お風呂に入らない人がいるのなら近づかなければいいし、動きが気になる人を見かけて嫌だなと思ったのなら目をそらせばいいし……。でも電車の中で電話をされたら防ぎようがないと

「いやか……」

「じゃあ電車の中に臭い人がいたらどうするの」

「う。……移動する」

「なら電話も移動すればいい」

「……そうだね……」

「臭い人は電車に乗っちゃいけない？ ワキガのお客様は乗車ijo遠慮願いますとでもいうの？」

「……そんな」と、言えないね……」

「でしょ。それに比べて電話なんて軽いものだよ。だから、不快にならないように、聞こえないくらいの小声で話してくださいってことにはすればいいんじゃないの？」

「えつと……それは、どうなのかな……よく分からぬけど……」

「『車内での通話は他のお客様の迷惑になりますので電源を切るかマナー モードにしてください』って言つけど、小声で話すなら別にかまわないんじやないの？」

「えつと……、あ、そうだ。ペースメーカーとか、そういう大切な機械に影響が出ちゃうんじやないかな」

「ならその人は街を歩くだけで死ぬよ。電波で溢れているんだから」

「あ、そ、そうかも……」

「つまり、電車内で携帯を使つてはいけない理由はよく分からぬのにみんなマナーだマナーだ言つてるんでしょ。おかしくよそれ」

「アハ、なのかな……」

「そもそも会話の一方だけが聞こえてくることが不快だなんていうけど、盗み聞きするのもよくないと想つし、その会話を理解しようとするのも意味が分からぬ。聞き流せないの?」

「……ごめんなさい」

「謝らないでよムカつくから。で、他の国がどうだからっていうわけじゃないけれど、参考までに、禁止しているのは日本くらいなんだよ?」

「え、そつなの?」

「わうなの。変だね」

「うふ。それは、ちよつと変」

「流されやすい日本人が、なんでこんなとこひで独自のルールを作つちやつてるんだろ?うね」

「不思議だね」

「深く考えたことないや。すいこなあ、楠さんは。

「さて

楠さんが立ち上がった。

「『』飯も食べ終わつたし、私はもう行くから

「え、あ」

いつの間に。僕のお弁当箱の中にはまだたくさん『』飯が残つていた。話に夢中で箸が止まっていたみたいだ。

「じゅりゅり

さっそく屋上を出て行つた。

少しの間だけでも、楠さんと『』飯を一緒にできたのは嬉しいことだね。

青空の元、僕は一人笑顔でお弁当を食べた。

金髪なだけで怖い

放課後になった。帰りのホームルームが終われば草むしりだ。早く終わらせよう。

「席につけー」

いつも通りにホームルームが始まり、いつも通りに進む。

「えーっと、じゃあ、佐藤。この後草むしり忘れるなよ

「あ、はい」

「誰か暇な奴がいたら手伝つてもいいからな」

暇な人がいないから僕になつたんじゃないのかな……。

「はい。私が手伝います」

誰かの、綺麗で、嘘みたいに透き通つた、とても聞き取りやすく、すぐに耳になじむ声が教室を震わせた。

その人は、背筋をピンと伸ばした姿勢で椅子に座り、傷一つないどころか汚れ一つない真っ白な手を挙げていた。座つて手を挙げているだけで他の生徒とは違つ空気を醸し出せるその人は、当然、

「……いいのか？ 楠。服が汚れるから男子に頼もうと思つていたんだが」「

「はい。服が汚れる事なんて誰も気にしませんよ？ そんなことよ

りも、佐藤君一人に仕事をさせる方が気になります

「おお、さすが楠だな。お礼を言つておけよ、佐藤」

「は、はい」

「じゃあ、よろしく頼んだぞ」

帰りの挨拶後、僕はすぐに楠さんに駆け寄つた。

「楠さん……」

「ん？ なに？ 佐藤君」

「あの、ありがとうございます。手伝つてくれて」

「別にいいよー。一人でやるより一人でやつた方が早く終わるからねっ！」

「う、うん」

やつぱり、楠さんは一般人のレベルを軽く超越した可憐さだなあ
……。

見惚れていた僕だったけれど、誰かに突き飛ばされて正氣に戻つた。

「若菜ちゃん、俺も一緒にやるよー！」

僕を突き飛ばしたのはバスケ部の小嶋君だった。このクラスの男子リーダーの沼田君に続く、ナンバー2の人だと思つ。

「え、そんなわるいよ。小嶋君部活があるでしょ？」

「ちょっとくら一遅れたって大丈夫だつて！　すぐ終わるすぐ終わるー。」

「……なら、お願こしあやおつかな

「任せぬー。」

楠さんが立ち上がり、小嶋君と一人で楽しそうに笑いあいながら教室を出て行つた。僕はと言えば突き飛ばされたことに驚き少し呆けて動けなくなつてしまつっていた。

尻餅をついたまま、ぼうつとしている情けない僕を、誰かが後ろから引き起こしてくれた。

「何してんだよお前

黒髪美少女の楠さんと女子のトップを争つてゐる金髪美少女の有野さんだった。

有野さんが怒つたような顔で僕を見つける。手間をかけさせてしまつて、申し訳ないよ……。

「あ、ありがとつ。」めんね

「何も悪くねえだろ。小嶋の奴、最悪だな

「え？　どうして？

「はあ？　どうしてって、お前……。まあ、佐藤が気にしてな

いのならここ。…………して、あの畠山、つぜえな

「え? ど、どうして……?」

同じ言葉を繰り返しちゃった……。怒りやるかもしれない……。

「何が若菜にお礼いっておけよだ。別に佐藤が自分で作った仕事じゃねえんだから佐藤が若菜に礼を言つことじやねえだろ」「ひ

「でも、僕が頼まれた仕事だし、一人でやらなきゃいけない」とだし……、手伝ってくれるのならお礼を言わなくなりや……」「

「だからあらあ、礼を言つのは担任だろ。あいつが押し付けた仕事なんだからよ」

「や、そ、かな……。で、でも……」

「んな顔すんなよ。別にお前にキレてるわけじやねえから

そう言つて、優しい笑顔を見せてくれた。

「あ、ごめんね」

「怒つてねえから謝んなつての。じゃあ、頑張れよ」

ペチペチと、頬を二度叩かれ教室から送り出された。

有野さんも優しいなあ。女子が魅かれる理由がよく分かるよ。でも楠さんとはあまり仲が良くないんだよね……。悲しいことだね……。

僕ははつきりと好き嫌い言う所は好きなんだけどな。裏表のない

性格つていうのかな。凄いことだと思つ。

……でも、僕は嫌われているんだよね……。悲しいね。でも、しようがないね。

僕は少し暗い気持ちになりながら、草むしりをすべき場所へ向かつた。

二人に遅れて指定された場所、校舎裏についたとき、先に向かつていた二人は既に草むしりを始めていた。

「佐藤！　お前おせえよー　お前の仕事なんだからお前が一番働けやー！」

「あ、う」「メン……」

「まあまあ小嶋君。別に佐藤君は悪くないでしょ」

「ええー？　でも手伝つてやる俺たちが先に仕事を始めるつてなんかおかしくね？」

「はいはい。いいから手を動かして」

「うーーーっす。おー、佐藤。お前もせつと仕事しきよ。お前はあつかひつてこい」

「う、うん。「めんね」

「じゃあ、若菜ちゃん 」

小嶋君はもうすでに楠さんとの会話に集中していた。
あ、早く始めなきや また小嶋君に怒られちゃう。早く草むしりを
しよう。

先生の話によれば各クラスから草むしり要因が出されていて、そ
れぞれ草をむしる区域が違うみたい。僕たちの担当の校舎裏は結構
広いから一人が手伝ってくれて助かったよ。

地面の上に用意されていたゴミ袋を持つ。道具はこれだけかなと
思い、楠さんと小嶋君の方を見てみた。二人は軍手と熊手装備して
いた。どうやら道具は一人が使っているみたいだ。仕方がないから
素手でやろう。

僕は小嶋君に言われた場所、一人の姿が見えなくなるところで草
むしりを開始した。でもここ、指定された場所から少し離れている
気がするなあ……。でもいつか、綺麗になるんだから間違えていて
も問題ないよね。

.....。

.....。

.....。

三十分くらい草をむしつた。まあまあ綺麗になつたと思つ。あと
少しだ。

「おい、佐藤

「え？」

振り向いてみると、小嶋君が僕を見下ろしていた。

「どうしたの？」

「どうしたのじゃねえだろ。お前わあ、俺達は手伝つてやってんだからよ、気に利かせて飲み物の一つでも買ってこいや

「あ、う、うめんね」

「本當だ。せっかく手伝つてもうつているのに何の差し入れも持つて行かないなんてありえないね。

「なにか飲み物買つてくれるよ。何がいいかな」

「なんでもいいからとつとと買つて来いよ。」

「あ、う……。う、うめん」

怒らせちゃつた……。

怒られたくない僕は慌てて自動販売機へ飲み物を買いに行つた。あ、でもこんな汚い手じやあ飲み物持てないや。まずは手を洗おう。

自動販売機へ向かう途中にある手洗い場で泥を落とし、急いで自動販売機へ。ここから一番近い自動販売機は食堂かな？校舎に入つて食堂へ向かう。

食堂の入り口付近に備え付けられた自動販売機。ラインナップを眺めてみる。

「……うーん。何がいいんだろう……」

二人の好み分からいや。でも、こいつ言いつときつて何となくボリカスエットな気がするね。うん。そうしよう。
一百四十円入れてポリカを一本買う。それを持って急いで一人のところへ戻った。

「お、お待たせ……」

走つてたどり着いた校舎裏。

「……あれ？」

二人の姿は無かつた。

きょろきょろとあたりを見渡してみる。

軍手と熊手が二セットずつあつたけれど、それを使つていた人たちは見当たらない。何か用事でもできたのかな？

仕方がないので、とりあえず帰つてきたのがすぐわかるように、元ほどまで二人が担当していたところの草をむしりながら待つことにした。

十分後。

誰も来ない……。おかしいなあ。帰っちゃつたのかなあ。

不安になり、飲み物を両手に持つて立ち上がる。

でも、探しに行つて入れ違いになつても嫌なので結局身動きができないままきょろきょろと見渡すだけしかできない。
ど、どうしよう……。

不安がピークを迎えるとするところ、念願の土を踏みしめる音

が聞こえてきた。

「小嶋君？」

校舎の角から足音が聞こえてきたので音の方へと駆け寄った。しかし、角から出てきたのは小嶋君でも楠さんでもなかった。

「あ、せ、先生」

「どうだ？　進んでるか？」

「あ、はい」

僕は小嶋君に言われて草をむしっていた場所に先生を案内した。小嶋君と楠さんが草むしりをしていたところは僕の手柄じゃないからね。

「あと少しです」

「……」

先生は僕の成果を見て苦い顔をした。

「え、えっと……」

なんでだろう。

「おいおい。ここは指定した場所じゃないだろ。ここはしなくていいから道具が置いてあつたところを掃除してくれよ」

「え、あ、はい……。や、そりですよね」

「……はあ。まつたく。お前はまともに草むしりもできんのか。ほら、日が暮れる。早く終わらせろよ」

「はい……」

そう言つて、先生は足早に去つて行つた。うう……。そりゃそうだよね。掃除してほしいところがまだ汚いんだからいいわけないよね……。

一人が担当していたところに座つて草むしりを再開する。でも、このポリカどうしよう。ぬるくなっちゃうよ……。

辺りを見渡しながら素手でむしっていく。道具を使おうかとも思つたけれど、一人が帰つてきたときに僕が使つていたら嫌な気分になるかもしれないから素手で作業を進めた。

……。

……。

しばらくして、また足音が聞こえてきた。

「、今度こそ。

僕はポリカを持つて立ち上がつた。そして、足音を迎える。けれども、その足音はまたしても違う人の物だった。

「あれ。有野さん？」

綺麗に染め上げた金色の髪。薄汚い校舎裏では浮いて見えるけれど、どうしようもないくらい有野さんに似合つているのでそんな違和感帳消しだ。

大きな瞳で僕を睨み付ける。眼光が鋭いというのはこうこうことを言つのだろうか。でもそう言つ入つて何となく目がつり上がりしている気がするけど、有野さんの目は可愛く垂れ下がっている。ほにゃんとした目だ。

「どうなんだろ?」

有野さんのような可愛い眼の人でも眼光鋭いって使うのかな?
使わないのかな。よく分からないや。

まあ、とにかく、眼光鋭いという言葉がぴったりの目で僕を睨み付けていた。……女の子に向かつて眼光鋭いっていうのはいけないことなんじゃないかな……。で、でも、怖い……。

「ど、ど、どうしたの? 楠さんに何か用事?」

有野さんは僕の言葉には答えず一度辺りを見渡し大きな舌打ちをした。

「……佐藤一人かよ……」

「あ、ご、ごめん……。楠さんだよね?」

「……あこつらどこに行つたんだよ」

すんすんと近づいてくる有野さん。

「え、うん。多分、何か用事があるんだと思つよ。きっとすぐに帰つてくるよ。あ、探してこようか?」

僕の言葉を聞いてまた大きく舌を打つた。

「え、どうしたの……?」

怒っているようすで怖いけれど、恐る恐る聞いてみる。

「あいつらは帰つて来ねえよ

「え？ どうして？」

「小嶋は部活、若菜はさつき校門から出て行くのを見た。あいつら仕事放りだして帰つたんだよ」

「え……」

「じゃあ、この飲み物が渡せないよ……。どうしよう、渡しに行こうかな。」

「あいつら……！ 佐藤に仕事押しつけて帰りやがって……ふざけてんのか……？！」

憎々しげな表情で奥歯をぎりりと鳴らす有野さん。

「う。お、落ち着いて有野さん」

「……お前は、あいつらが勝手に帰つたことムカつかねえのかよ」

「え？ う、うん、別に……。もともと僕が一人でやる仕事だったし、少しでも手伝つてもうえたんだから感謝しなくちゃ」

少し表情を緩ませた有野さん。よかつた。

「……つたく、お前は……。昔から変わんねえな……」

「え？ う、うん？ そつかな……」

「……。……ん？ その飲み物は」

「あ、えっと、その、喉が渴いたから、飲もつと思つて……」

「一本もか？」

「うん。それくらい喉が渴いてたから……」

……一本、飲もう。

有野さんは僕の手に握られた一本の缶を見て一瞬悲しそうな顔を見せた。

「……そつかよ」

そう言つたのとほぼ同時に有野さんが僕の手からポリカスエットを奪い取つた。

「あ」

と思つたときにそのままブルタブを開け、「ぐぐくと飲まれていた。

「あー、うまい。ちょうど喉が渴いてたんだ」

よかつた。これで無駄にならずに済んだね。

「あん？ なんか文句あんのか？」

「あ、う、ううん。全然ないよ」

「そうかよ」

「そう言つて、また飲みだした。

「……ふう。佐藤も喉が渴いてるなら飲めばいいじゃねえか」

「え？ あ、うん」

……一人とも帰っちゃったのなら、飲んでもいいよね。
僕もポリカを飲むことにした。

うん。おいしいや。アクリエアスよりも甘いよね。

「って、何だこれ！ 缶が泥だらけじゃねえか！」

汗の搔いた缶は僕の手についていた泥で茶色く汚れていた。その泥が有野さんの可愛い手を汚してしまっていた。

「あっ、あ！ 『ごめん！ そいつはまだ草むしりして
たんだつた！ ごめんね！』

「お前なんで軍手使わねえんだよ！ そこに用意されてるじやねえ
か！」

「え、あ、うん。その、うつかりして……」

「うつかりって、お前よく見たら爪の間土だらけじゃねえかよ。ん
な状態ならすぐ気付く……、…………ちつ。そうか」

軍手を睨み付けてまた舌打ちをする有野さん。そして小声で何かをしゃべっていた。

「……………初めから私が手伝ひとけばよかつたぜ……」

「え？　「」、「」めん、聞き取れなかつたんだけビ……」

「あん？　何も言つてねえよ。やんなことよつ、ポリカの礼だ。私も手伝つてやる」

「え、そんな、お礼なんていいよ別に」

「ううせえな。それじゃあ私の気が治まらないんだよ。いこからさつことするぞ。今からちやんと軍手つけてやれよ。道具もちやんと使えよ」

「あ、うん。…………」めんね

「悪くねえんだから謝るなつて」

僕の顔に泥がついていたのか、何かを拭つよつなじべいで僕の顔を撫でてくれた。

「こじ、せじ、せい」

もう言つて、かつこっこ笑顔を僕なんかに向かってくれた。

「あつがとつ」

「羨ましい、優しいな。

有野さんに手伝つてもらつた草むしりはすべに終わつた。有野さんの豪快なむしろ芸は惚れ惚れするよつた技だつた。見習いたいね。

「ふー……

軍手を地面に放り投げて立ち上がり腰をトントンとたたく有野さん。

「あつがとつ。おかげで早く終わつたよ

「別に。飲み物の礼だし」

「あ、もつ一本買つてくる

あれだけじやあ足りないはず。早く買つてこなきや。

立ち上がつて駆け出そつとした。けれど、有野さんが止まつてあた。

「こりねえよ

「え、せつ。喉かわいてない?

「全然かわいてねえよ

と言いながら汗をぬぐった。やつぱり、何か飲んだ方がいいと思
うんだけどなあ……。

行こうかどうか迷つていると、有野さんが空を見上げ僕に話しか
けてきた。

「佐藤とこれだけ話したのも久しぶりだな

「うん」

何となく僕も向いつの空に田を向けた。
夏の手前の入道雲。

もつすぐ、あの頃のよひに暑くなる。

「……。あの、わ」

「うん?」

僕は有野さんに視線を戻した。有野さんはまだ空を見上げたま
だつた

「…………あー、なんでもねえわ。んで、草むしり終わつたけど、
どうする?」

急に怖い顔を作つて僕を睨み付ける有野さん。

「び、びつかるって、何のこと?」

怒られるのかな?

「あいつら一人。しめるなり手伝ひナビ」

とんでもない」とを言ひだした！

「そ、そんな」としないよ。誰も悪くないんだから」

「納得できんのか？ あいつらお前を馬鹿にしてんだぞ？」

「そんな。違うよ。一人とも草むしりより大切な用事があつたんだ
よきっと。なら、しょうがないよね」

「それでも一言声かけて行くのが礼儀つてもんだろ」つが

「う、うん……。でも、僕がちょっと姿を消していたから、言えなかつたんだよ。だから、その、しょうがないのかなあ、とか……思つたり」

「ど、どひしょひ。」こで有野さんを納得させなければ明日一人の命が危ない……。僕の手にかかるんだ……！
なんて気負つていたが、

「あーそんな顔すんなつて。分かつたから。誰も悪くねえな。うん

すぐに有野さんが笑いかけてくれた。

「あ、ありがと」

「ふう、よかつた。

「礼言われるよくな」としてねえよ

楽しそうに笑った。

僕も笑った。

何となく、昔を思い出した。

でもそれも先生の登場ですぐに終了する。

「終わったか」

「あ、はい。終わりました」

「ん？ 有野手伝つてやつたのか」

「やつだよ」

「珍しいことあるんだな」

それはちょっと失礼だと思つ。けど、僕にはそれを咎める度胸がなかつた。

情けない。

有野さんは優しいのに、手伝つてくれたのに。失礼な」と言つ

先生に、僕はそれを訂正させることができない。

情けない。

先生が辺りを見渡す。

「へえ、綺麗になつたな。よし、『ごくろつさん。あとまじのゴミを
焼却炉に持つて行つてくれ。そうしたら帰つていいからな』

「はい」

先生が来た道を引き返して行つた。

よかつた。やつと帰れるよ。何事もなく終わったなあ……。と、思つたのだけれども、有野さんとしては何事もなく終わらせたくなみたいだ。

「おー、お前さよっと待てよ」

「う？！ 先生相手にお前つて！
もしかして、手伝うのが珍しそうって言われたのが気に障つたのか
な……。」

「…………お前つて言つのは、俺の事か？ 先生相手にお前なんて言つたのか？」

「それ以外に何があんだよ

とても怒つた顔で振り返る先生。

「…………有野。もう一度聞く。お前、俺に向かつてお前つて言つたのか？」

「耳わりいのか？」

「う、うわああああああー危ないよー何か空気が危ないよー

「あ、有野さん……」

有野さんの制服を軽く引っ張つた。

「なんだよ」

怒り一色の顔で僕を振り返る有野さん。「う、怖い……。

「や、その、気に入らないことが会ったのかもしれないけれど、
便に、穩便に、いい?」

僕の情けない言葉に困った顔を見せる有野さん。

「……お前、それでいいのかよ

「え、え? な、どうこう」と……?

「……あーいや、いいわ」

本当に分からぬ。僕のせいだ怒ったのかな……。

「そんな悲しそうな顔すんなよ。別にお前には怒ってねえんだから
れ」

「え、あ、うん」

先ほどの表情からは考えられない素敵な笑顔。そんな笑顔見せら
れたらドキッとしてしまう。

……でも先生は立腹していらっしゃる。怒りしい表情で僕らを
睨み付けていた。

「おい、有野。お前、教師に向かってその口のきき方はなんだ

な、何とかしなきゃ怖いよ。」

「ち、違います先生! 今、有野さんは僕に向かって言つたんです

「…」

「お前には聞いてない。有野に聞いてるんだ」

「へ、」めぐなさこ……」

わつですね……。

「有野、お前、教師に対する言葉遣いじゃなによな」

「はあ？ 佐藤の事呼んだんだんだけど」

「……。それでも、お前の口調は教師に対する言葉遣いじゃないだろ?」

「あーはーはー。すみませんでした。どうぞお帰りください」

先生の、とても疑いのこもった視線。

「…………まあここ。早く帰れよ」

「は、はー……」

よかつた……。何事もなく済んだね……。

先生の背中を見送り、完全に視界から消えたところで有野さんが僕に困ったような顔を見せて言った。つづん、言つてくれた。

「お前が、ガツンと言わないからあいつに舐められるんだぜ? ブツ飛ばすつもりで何か言つてやれよ。やつしなきやまた嫌なこと押し付けられるぞ」

「え、そ、その……」

「見ただろ？　あいつの舐めきつた態度。『『くわいわせ』だけだぜ。舐めんなつて話だる。佐藤はあいつの奴隸じやねえんだ。もつと佐藤に感謝しろよな……！』

徐々に顔が修羅の者になつていった。怖いよ…………。
……女の子の怒った顔を見て怖いなんて思う僕はとても失礼な人間ではないだろうか…………。

「あいつ、絶対に佐藤の事見下してゐるぜ。ふざけてるよな」

「で、でも……」

「お前、今度からはあいつの頼み」と断れよ。別に佐藤じゃなきゃいけねえ理由はないんだ。メリットだってないんだし、言つこと聞く必要ねえだろ」

「でも」

「でもでもうるせえな。なんだ？　あいつの言つこと聞いてこいつあるのか？　ねえだろ？」

「うううううん。誰もできないから僕が指名されているわけだし、僕がやらなかつたら違う人が困るし……。その、だから、僕でいいと、いうか……」

「誰かが困る位なら自分が困るつて？」

「まあ、うん、そんな感じ、かな？」

大きな大きなため息をつく有野さん。

「お前は……。本当にどうしようもねえな」

「う、『めん』」

「褒めてんだよ」

え、分からなかつた。

有野さんがにっこりと笑つた。

「まあお前がいいならそれでいいや。でも困つたら私に言えよ。助けてやる」

「あ、うん。ありがとう」

「きこすんな。んじゃ、さっさとそれ焼却炉にぶち込んで帰らうぜ」

「あ、う、うん。ありがとう。本当にありがとう」

「そんな大げさなお礼いらぬえよ」

気持ちのいい笑いを見せてくれた。

今日の仕事は、いつもと違つてとっても楽しかった。

虫よけスプレーの信頼度

「佐藤君」

僕は、草むしりを終えたあと、教室へカバンを取りに行き、「今何時かな?」と携帯を開き、ついでに未読メールを見たと思つたら、いつの間にか秘密基地の前で正座をしていた。ここまで道のりを覚えていない……。

まだ日が沈むには時間があるけれど森の中は薄暗い。涼しい位ですよ。

でもそれどころじゃありません……。

「舐められたものだね。またか」「んな仕打ちを受けるなんて……」

「そ、その……」

メールの差出人は楠さんだった。『今すぐ君の秘密基地へ来る』と。『遅刻厳禁』という内容のメールが一時間ほど前に僕の携帯に入っていた。草むしり中携帯は教室のカバンの中だったので当然気付かなかつた。僕は慌てて秘密基地へ向かい、今に至る。

「しかも、これだけ待たせるなんて。一時間私はここで待ちました。一時間蚊に刺されるためにこの林の中で突つ立つっていました。これはあらだね。君の愚行をばらすしかないね」

「え? !」「」「めんなさい! そ、それだけは許してください!」

僕は潔く土下座をした。だって、楠さんが蚊に刺されたなんて重大事件じゃないか! 時代が時代なら僕は打ち首だよ!

「みつともないね」

楠さんの声と同時にカメラのシャッター音が聞こえた。でも、これは仕方がないよ……。

「顔を上げて。早く」

「はー……」

顔を上げ、楠さんを見上げてみる。依然として、無表情で怒っている。

「で? 言い訳は?」

遅れた言い訳かな……。

「あの、僕、」

「くだらない言い訳だつたら問答無用でばらすから。君がそう言つたふざけた態度を取るのなら、話しかけても何もしない。謝つても許さない。君のしたことをみんなにばらして、学校にいらっしゃなくしてやるから」

「ひ……。僕のしたことって、僕何もしてないよ……。

「さあ、納得のできる遅刻の言い訳を是非。よく考えてね。これで君の人生が終わるかもしれないんだから。面白かったら許さないことも無いよ」

「お、面白い、言い訳……」

「まあでも君面白い人間みたいだし、ギャグに逃げるのはやめておいた方がいいと思うよ。ちゃんと私が納得できる言い訳をするんだね」

「う、うん」

でも、言い訳つて……。

「その、草むしりに手間取つて……」

「はああああ？」

「どうやらこの言い訳は楠さん的に気に入らないみたいだ！大変だ大変だ！ 楠さんの顔が大変だ！ どう大変つて……表現したくないくらい歪んでいるよ！」

その、色々な意味で怖い顔をグイッと近づけ言つ。

「君、先に帰つたでしょ？」

……。

「え？」

「君、私たちに仕事押しつけて先に帰つたでしょ？」

「え、え、え？」

「えーえーうるさいね。それ以外に言う言葉がないの？ よし、ば

「ひかり

僕から顔を離し携帯電話を操作しだした楠さん。

「あ、ちゅ、ちゅつと待つて！」

僕は正座をしたまま両手を突き出して待つたをかけた。

「なに？ 遺言？ まあ聞いてあげないことも無いよ。友達に電話がつながるまでの数コールだけ時間をあげる」

短つ！

「その、僕飲み物を買いに行つてたの！ 多分それで校舎裏にいなかつたんだと思う！」

「……あ、丸山さん？ その、ね……少し、話があるんだ……」

電話が繋がつていらっしゃるー 死んじやうよー

「「あんなさいこめんなさいー！」

両手をバタバタ振つて何とか通話を辞めてもりおつとした、けど

……

「え？ ひつん？ 違う違う。ただの鶏じゃないのかな？ うん、

チキン野郎

楠さんが左手で僕の頬を挟み込みうるさいと睨み付けてくる。でも僕にとってもそれどころじゃないよー 腰を浮かせたままパタパ

タと手を振つて必死に校舎裏にいなかつた理由を言つ。

「ほ、本当に許してください！ 小嶋君に言われるまで氣付かなかつた、氣を利かせて早く飲み物を買ひに行かなかつた僕が悪いんですけど、タイミングが悪かつただけなんですー！ もう少し早く気づければこんなことにならなかつたんだよねー。ごめんねごめんね！ 今度からはまずお礼を買つてから仕事を始めます！ だから許してくださいー！」

一瞬沈黙した後、楠さんが手を離し僕を地面に落とす。そして僕をいぶかしげな表情で見つめてきた。

「……え？ あ、ごめんね。話つていののはおすすめの喫茶店とかないかなつてね。ほら、丸山さんの行くお店つてとってもセンスがいいでしょ？ だから、どこかいいところ教えてもらおうかなーって思つて！ うん、うん。あ、あそこかー！ うん、分かつた。うん、うん。ありがとう！ ジャア、また明日ー！」

よ、よかつた。助かつたみたいだ……。

通話を切り、楠さんがしゃがんで僕と視線を合わす。

「……小嶋君と話したの？」

「う、うん。その、小嶋君にマナーのことを指摘されて、なるほどと思って慌てて飲み物を買いに行つたんだけど、その、タイミングが悪かつたみたいで、その、帰つたと思わせちゃつたね……」

「……私は小嶋君から君が帰つたつて聞いたんだけど。小嶋君が様子を見に行つたときにはもう帰つた後だつたて」

「え、え？ 僕、帰つてないよ？ 今まで草むしりしてたよ？」

「…………。ちょっとタンク」

そう言って立ち上がり僕から少し離れた。いつたい何事だろ？
ぼけっと眺めていると、楠さんがカバンの中に手を突っ込みタオルを取り出し始めた。

汗でも拭くのかな？ と思つたけれど違うようだ。グローブのよう手にタオルを巻き、一本の木に近づいて行つた。

？

……！？ エ、エ？ エ？ な、何してるの？！
僕は驚きで全身の力が抜けてしまつていた！

「…………！」

何かをつぶやきながら、思いつきり木を殴りつけだした！ 手が痛いよ！ 僕の手は痛くないけど！ 楠さんの手が痛いよ！ せつかぐの綺麗な手に傷がついちゃうよ！
つぶやきが、少しだけ聞こえてくる。

「あいつ……！ 嘘ついて……！ これじゃあ、私が、さぼった、
みたいじゃない……！」

う、うつ……。一体何のことだかわからぬいけれど、とても怒つているみたいだよ……。あの木には、もしかしたら僕が重なつて見えているかもしね……。うつ、ひつ、『めんね……。何に怒つていののか分からぬいけれど……。

「……。ふう……」

拳を木にめり込ませたまま、大きく息を吐いた。すぐに全身から力を抜き、腕をだらんとたらす。もう一度息をはいたあと手からタオルを取って綺麗に置み、カバンにしまった。そして、無表情の顔を僕に向けてくる。

本当に失礼だと思うけれど、僕はびくつと畏縮してしまった。すんずん近づいてきて、へたり込んでいる僕に頭を下げる。

「……今日は、完璧に私が悪い。ごめんね佐藤君。疑っちゃった」

「え、え？」

何のことを謝っているのだろ？……。

「ズボンが汚れるから正座やめて」

「あ、うん」

立ち上がりズボンを払う僕。

「『めんね一人置いて帰っちゃって』

「う、うん……」

謝るようなことなのかな……？

「……」

「……」

「……」

「……」

「……？」

な、何だらう。なんで僕はじつと見つめられてるんだらう。何か僕の言葉を待つてこようが……。せ、僕は何を言えばいいだろう……。

「や、やの……」

分からぬにナビ、とつあえず。

「ノ、ノめんね……？」

謝つておひづ。

「……なんで謝るの。私が悪いって言つてるの？」

「へ、い、いや……その、何言えばいいのか分からなくつて……」

「叱責すればいいでしょ。気のすむまで言葉責めすればいいよ。好きだけ責めて興奮すればいいよ気持ち悪い。どんな言葉で罵るんだろうね。楽しみだよ。それも録音するけど」

「や、そんなことしないよー。なんで僕がそんなことするの?ー。」

「私が佐藤君を呼び出しつ土下座までさせてでもそれは私の勘違い

だつたんだから君が怒つても仕方がないでしょ」

「よく、分からないけど……。でも勘違には誰にでもあるし、そんなのを怒つていいたら過(け)して世の中にならやつる」

勘違には怒りやダメだと黙(つ)。

「……。何なの君? それで私に謝(あやま)つもつ? 気分悪(わる)いよ」

「そ、そんなつもつじやあ……」

「わ、怒りせてしまつた……。」

「ずっと氣(き)になつていたんだけど、佐藤君、悪くないの? うえず謝るよね。結構不快だよそれ。自分が謝つておけば済むだらうつて思つてるの? 私が悪いのになんて謝られなきゃいけないの? おかしくない?」

「お、おかしこです……」

「だから謝つて」

「えー!」

なんだかおかしくないかな?!

「とつあんず謝つてよ」

「「」、「めぐなせ」……?」

少し理不思議を感じながらも、一応謝つてみた。

「……まあこーや。今日せいめいさね。言い訳のしみがなによみ

「へ、ひづき。やの、いちじらしく、手伝つてくれてありがとひ

「……嫌味？」

「う、ひづき… んなつもつはないよー。」

「…………。じゃあ今日のことは本当に申し訳なかつたということ
で、お詫びに佐藤君が部屋で服を脱いで私を襲おうとしている写真
を消しておこなあげる」

「あ、ありがとひー。」

「じついたしまして。別にお礼を言われるよつことではないナビ

まあ、確かに僕はそんな」としていなーのだからね。

「じゃあ、私は帰るね。」
「へへへ

「あ、ばーばー」

楠ちゃんが山を下りて行つた。

放課後ごたごたしたけど、よかつたー。色々と解決したみたいだ
ね。これで何のわだかまりもなく明日を過ぐせるねー。
僕は意気揚々と家に帰つた。

悪いのは全部男

何事もなく過いでいるね！　なんて思っていた昨日の僕。それは間違いたみたいだよ。

僕が朝学校にたどり着いたときそこはすでに修羅場だった。

」
」
」

.....」

有野さんが楠さんを睨み付け、楠さんがショソとうなだれていた。教室内はその風景に飲まれて誰も言葉を発せなくなっていた。
な、何事ですか……？ この不穏な空気を作り出していらつしゃるお一人を見るにどうも昨日のことが関係しているような気がしないでもないよ……。

若菜お前なんで昨日佐藤を置いて帰ったんだよ

「うるめんなやこ……」

理由を聞いてんだよ。謝るのはそれからにしてね」

「大切な用事があつたのかなんか知らねえけど、なら初めから手伝

「うとかこつなよー。」

「「ひひ……」めんなれこ……」

あの楠さんをこんなにも落ち込ませることができるのは多分有野さんだけだと思います。って、そんなことよりー。

「あ、あ、有野さん……」

僕は一人に駆け寄った。といつか有野さんに駆け寄った。有野さんが僕に気づき、申し訳なさそうな顔で言った。

「……佐藤。お前は別に怒つてねえみたいだつたけど、やっぱり私は納得できねえみたいだわ」

「……」

楠さんが本当に悲しそうな顔で有野さんを見上げた。

「本当にじめんなさい……。全面的に私が悪いです……」

それを睨みで返す有野さん。

「私に謝るんじゃなくて佐藤に謝れよ

あ……。僕の為に怒ってくれているんだ……。優しい人だなあ。……で、でも……、僕、すでに謝罪してもらっているからね……。
説明しなきゃ。

「あ、有野さん、その、僕昨日謝つてもらったんだ

「…………はあああ？」

僕の発言が何やら有野さんの気に障ったようです。

「お前、なんで校外で若菜と会ってるんだよ」

「あ、その、用事があるからって呼び出されて……」

「ちげえよ。どうやって呼び出されたのかって聞いてんだよ」

「え、え？ その、携帯電話で……」

「…………」

な、ななんでそんな顔で睨んでくるんですか？！

「…………若菜のアドレス知つてんだ……」

「え？ うん」

「…………。」

「…………え？！」

「あー、僕楠さんのアドレス知つてるー、すいーーー！」

いつの間に！ あ、そう言えばメール送られてきてたっけ！ なんだかうれしいね！ 今まで気付かなかつたよー！ うわー。なんか感激だなあ。クラスの女の子のアドレス教えてもらつたの初めてだ

よ。しかもそれがあの楠さんだからね。すこしだまこれには。

「…………」

有野さんが不機嫌そうに教室を出て行った。

「え？ あれ？」

怒らせちやつたのかな……。僕が悪いことしちやつたんだ。でも、楠さんとの言い合いか止まつたね。僕が泥をかぶつて解決したのなら、まだいいよね。

と思つていた時期が僕にもありました。

「「めんね……佐藤君……うう……」「めんね……」

「え！」

今度は楠さんが田を拭いながら教室を出て行つた！ これはよくないね！

有野さん、楠さんが出て行つた後の教室。僕は一度教室を見渡してみた。とてもクラスメイトを見るための物ではない視線を僕に送つていた。

「…………ま、まつてー」

僕はとうあえず教室から逃げることとした。……だつて、ああ……。

有野さんも楠さんもどこに行つたか分からぬけれど、何となく、僕は屋上へ行つてみた。

運よく、楠さんが腕を組んで立つてくれた。

「ぐ、楠さん……、『じめんね』

「別に悪くない。責められて当然の事したんだから。有野さんから聞いたけど有野さんに手伝つてもひつたんでしょ。なら有野さんに責められても仕方がない」

「う……。なんだか僕は何も言えない……。楠さんの言葉を肯定すれば楠さんを責めてしまつし、否定すれば責めた有野さんを悪く言つてこるようになりちゃうかもしねない……。どうすればいいんだろ?」

「またそんな顔をして。素直に私を責めればいいのにひがやひがや考えて。ああ、本当に面倒くさい」

「『じめんなさ』

「ああ、せうせう」

「え?」

僕の言葉を遮る楠さん。

「クラスの男子で、と詫つか家族以外の男で私のアドレス知つてる君だけだからあんな大きな声で言わない方がいいよ。っていうか言わないでよ」

「え、そ、そうだったの?『じめん』」

「やうだつたのって、私がアドレスばらまいてるとしても思つてたの

? すゞく失礼。ちょっと転校して

「う、うん、わかった……って、転校なんてできるわけないよー。」

危なくノリで転校をせりあるとこひだつた！

「……女々しい人……」

「そ、そいつ問題かな……」

「そいつ問題なの。だから、転校が嫌だつたら私のアドレス知つているつて言いふらさないでよ」

「わ、わかった。転校は嫌だもんね……」

「ま、もう手遅れかもしれないけど」

「手遅れ?」

「あれだけ大勢にばれちゃつたらね。まあ、どうでもいいけど……

どうでもよくなさそつだつた……。

「と」「うで、佐藤君」

「はー」

「君、あの有野さんに気に入られているみたいだけど、何かしたの?」

「え？ 僕が有野さんに気に入られてる？」

「……やつ言つたんだけど、なんで聞き返すの？」

「う、う、うめんなや……。で、でも、それは違つよ」

「違つて、どの角度から見てもうとしか思えないんだけど。もしかして君は鈍い人種なの？ まあ、見た目は完全に鈍いというか要領の悪そうな見た目をしているけど」

要領の悪そうな見た目つて、初めて言われた……。でも実際そういうからやつ見て見た目をしているんだわ。悲しいけど……。

「落ち込もうがどうしようが君の勝手だけど、その前に有野ちゃんと関係を説明してよ」

「あ、う、うん。あのね、僕と有野さんは、小的時候からずっと同じ学校に通っているんだ」

「……なんでそんな面倒くさい言い回しするの？ それ幼馴染つてことじょ？ 幼馴染つて言えぱいこじやない」

「……」

僕と有野さんは幼馴染だ。正確には、僕と有野さんと有野さんのお兄さんは幼馴染だ。

でも、今の僕には幼馴染だって胸を張つて言えない。

僕は、有野さんを怒らせてているのだから。

「なんだ。幼馴染つて言わなかつたのは何か理由があつたからなん

だ。幼馴染つて言えないんだ

「う、うん……。その、僕、小学校の頃、有野さんを怒りさせちゃって、それからずっと疎遠だったんだ……。だから、幼馴染つて言つてもいいのかなって」

「ふーん。なんで怒らせたの？」

「その……それが分からなくて……」

分からぬいけれど、私を下の階前を呼ぶなつて怒られた。もちろん謝った。でも許してくれなかつた。当然だよ。理由も知らずに謝つて、許してくれるはずがないよ。

今も僕は分かっていない。だから、有野さんも許してくれていなあんだ。

今日も怒らせてしまつたみたいだし、いい機会だ。あの時のこと

も謝る。許してもらえないかもしけれないけれど、もう一度謝る。

「……教えてくれなきや、ばらすよ?」

「うー、楠さんは僕が理由を隠さないといつて思つてゐるんだー、違つよ?！」

「ほ、本当に分からぬんだ……」

「……本当かな……」

とても怪しそうだ視線。でも僕にはまだつづりもない……。本当に分からぬか。

「……まあ、いいや

納得してくれた。よかつた。

楠さんが僕に「先に教室に帰つて」と言つてきたので、僕は一人先に教室へ帰ることになった。教室に入ると、すぐにみんなから冷たい視線をもらつたので、僕はうつむき顔を隠しながら自分の席へ向かつた。教室の端っこにある自分の席がこんなにも遠いとは思わなかつた。一番角っこでいい席だなと喜んでいたけれど、まさかそれをうつとおしく思う日が来るとは思いもしなかつた。席へつき、急いで本を取り出す。僕は無事に幻想世界への逃避することができた。でも、没頭する前に、一度教室内の様子を見る。相変わらずみんな冷たい視線を僕にくれていた。……有野さんの姿は見えなかつた。

それからしばらくして、楠さんが教室に帰ってきた。みんなに囲まれ、事情を聞かれたり慰められたりしていただけれど、楠さんは気丈な笑顔で「大丈夫」と答えるだけで深く説明することはしなかつた。でもそれが余計に僕への視線を強めていたけれど、誰も責められないよ……。

一方有野さんは、朝のホームルームが始まつても教室に入つてこなかつた……。

僕のせいだ。

きょうはぐつ！

楠若菜さん。

黒髪ロングにスタイル抜群のモデル体型。パツチリお皿皿にまぶしく瑞々しいお肌。

世界中のだれが見ても褒める事しかできないほど完成された容姿。美人で、勉強がてきて、運動もできる。人望もあるしそれに応える力も持っている。いわゆる完璧な美少女。悪くとらえられたら困るけれど、八方美人と言う言葉がよく似合う。楠さんのことを軽んじてはいるわけではないし、僕は当然尊敬もしているけれども、裏にある感情を知ってしまった僕はついついそう言ひ田で見てしまつ……。

みんなに分け隔てなく優しさを振りまき、差別なく人と接する楠さん。

多分、誰も楠さんの真の姿を知らない。もしかしたら、僕に見せているのも真の姿ではないかもしない。

言うなれば、完璧な八方美人。

八方美人を演じきれる素質を持った人。

八方美人でありながら、誰にもそれを悟られない。

それは、とてもすごいことだと思う。ぼろりを出さない、と言うのは少しばかられる気もするけども、欠点の一つも見せないのはそれなりの才能がなければできないことだろう。

誰にもばれていない楠さんの裏の顔。

当然だけれども、裏の顔が誰にもばれていないのであれば、見えている表の顔、完璧な姿が、みんなにとつての楠さんなのだ。

完璧すぎる人。

皆の共通の認識。

でも。

それでも、全ての人間に好かれるということは難しいらしい。

楠さんのことが気に入らない人が何人かいるみたいで、衝突している姿を度々見る。

多分それは嫉妬で、楠さん本人に非があるわけではない。

欠点がない事が欠点、とでも言えばいいのかな……。

嫉妬することでやつと悪く言える。

でも結局それも、嫉妬する側が自分で自分の徳を下げる行為でしかなく、楠さんは何ら困らない。誰も楠さんを貶める「」とはできない。

唯一有野さんだけが楠さんに文句を言つたりしているが、その内容も嫉妬以外の何物でもないようと思つ。

有野さんと楠さんの仲がよくないのは、個人的にとても悲しい

……。

「あの、楠さん」

「なに?」

楠さんと一緒に屋上で食べるお弁当。
何故だかわからぬけれど、今日も一緒にお弁当を食べることになっていた。

「有野さんの事、どう思つてるの?」

「なんでそんなこと聞くの?」

「え。あ、いや、その……。仲良くなつたらしいになつて思つから……」

「ふーん。そなこと心配するなんて、一応幼馴染なんだね」

「お、幼馴染とか、そういうふんじやなくて、その、みんな仲良くで
きたらいいのになつて思つて……」

「残念でした。仲良くするとかしないとかは、人に言われて出来る
よつなものじやありません」

「あ、そつ、だよね」

「君がいくら心配しようが私と有野さんの関係がどうにかなるわけ
じゃないから余計なこと考えない方がいい」と思つよ」

「う、うん」

「そうだよね……。僕みたいなちつぽけな人間が他の人の関係に介
入できるわけないよ。僕はどうしようとしていたんだろ?……。自
分でもよく分からないや。」

「でも」

と、楠さん。

「別に私は有野さんのこと嫌つてないし、嫌な人だと、うるさ
い人間だとか、そんなマイナスなイメージ持つていねんだよね」

「え?」

「そつだつたんだ。」

「でも、有野さん、よく楠さんに言いがかりみたいなこと言つてる、
よね?」

「君は幼馴染なのに何にも分かつてないんだね」

「え？」

「君の知っている有野さんはそつこいつことを言ひよつた人間だったんだ？」

「えつと、うーん……。好き嫌いははつきり言ひけど、人の才能に嫉妬したり、人がちやほやされるのを見て嫌な気持ちになつたりするような人ではなかつたと思うけど、でも実際に楠さんにそつこうことを言ひているから、その、変わつたんだなあつて思つた」

「ま、しばらく関係が断たれていたみたいだし、そう思つても仕方がないかもね。でも可哀想。まさか佐藤君にそう思われているなんてね。ああ、表面でしか人を見れない佐藤君最低。人の心の奥底なんて見ようとしたんだろうね」

「う……。『、ごめんなさい……。……え？　えつと、つまり、それは、有野さんは何か理由があつて楠さんに突つかかっているの？』

「自分で有野さんに聞けば？」

「あ、そうだよね。『ごめんね』

「あーはいはい。どうでもいいよ」

「う……。どうやら僕が謝る度に不快になるみたいだ……。謝れないのかな、僕。」

「お姉時じにんな面白くない話したくな」

「あ、うん。そうだね」

「何か面白い話してよ」

「む、無茶ぶりだね……」

「無このなじこよ。佐藤君の犯した罪をみんなほりひいて楽しむとかねから」

「えー、ま、待つて！ 面白い話するかひー。」

「自分で面白い話をみんな話してから話しだすなんて、Mだね。ハーダル上がりまくり」

最初にハーダルを上げたのは楠さんだけだね……。

「えーっと、うーんと……」「

面白くない人間の僕には難しこよ……。
面白い話、おもしろい話……。……。

「……あー、そうだ！ まづ言えば」「

「ちょっと聞いてもいいかな」

僕が勇気を振り絞つて面白いこと悪い話を始めようと黙つていたけれど、その前に楠さんは何か聞きたいことがあるみたい。

「え？ うん」

なんだろう。

「例えばさ、本で『マイナスイオンは科学的根拠のない疑似科学だ』っていう知識を得たとします。それを次の日本人に話すとき、『昨日本で読んだんだけど』って前置きするでしょ」

「うん」

「じゃあ、一年後話すときも『いつの』のかな。『一年前に本で読んだんだけど』って前置きするべ？」

「う、うーん。多分、前置きしないこと思ひ」

「やっぱよね。きっとその知識をどこで得たのか忘れているよね。どこで得た知識かは知らないけれど、それを知っているから人に話す」

「うん」

「それで、ちょっと気になるんだけど、それはいつから自分の知識になつたのかな。どれくらい時間が経てば『本で読んだ知識』じゃなくて『自分の知識』になるのかな」

「え、う、うーん……」

「いつからだね？……」

「その、本で読んだつていづれどを忘れるまで、とか？」

「情報元を忘れたたら自分の知識になるの？ それおかしいでしょ。情報じゃなくて情報元に左右されるつていうのはどうなのかな」

「えっと……。あ、じゃあ、その情報が本当だつて、自分の中で確証が得られたらじやないかな。そうしたら自信を持つて自分の知識と言えるね」

「どうやって確認を得るの。マイナスイオンが科学的に証明されていないなんてどうやって自分で調べるの」

「え、えっと、どこかで教えてもらひとか、本とか読んで自分で深く調べるとか……」

「教えてもらいたのが本当かどうかはどうやって調べるの。読んだ本が本当かどうかなんてどうやって調べるの」

「う……」

「うだよね……。

「でも、どう掘り下げて行つたら何も信じられなくなつやうよ……」

「……」

「そうだね。テレビ、新聞、インターネット、本。もつと言えば、教科書、身近な人の体験談。何も信じられなくなつちゃうね」

「そうだね……」

「自分で体験したこと以外は真の知識とは言えないと」

「やつ、なるのかな？」

「やつなるでしょ。自分で体験したこと、自分で実際に実験して調べたこと以外は知識とは言えない。究極を言えば今まで実証された科学や、証明された数々の数学の公式なんかも、それが本当かどうかを自分で調べなければ真かどうかは分からぬってことなんだよ」

「う、うん」

「つまり、君の言つた知識と言つものせ、前提 자체を証明することから始めなきゃいけないんだね」

「や、やつ、なるの、かな？」

「そんなに大それたことを言つたつもりはないけれど……。でも、そういうことなのかな。

「私たちが教えてこられた歴史、情報、常識は嘘である可能性がある。これは洗脳されている可能性があるね……」

「う、うん」

「そう考えたら怖いよ……。」

「昨日楠さんが言つてた電車内でのマナーもそれに通じるものがあるね」

「そうだね。みんながダメダメ言つてゐるから何となくダメなんだつ

て思つてたけど、本当のところはまだ分からぬ。洗脳だよ

「洗脳」

「うん。怖いね」

「だから、これからは電車内で通話してもいいことなんだよ」

「うん」

「いや、そんなわけないでしょ」

「……え?」

まさかの裏切りだつた!

「郷に入つては郷に従え。訳が分からなくともルールなんだから従おうよそこは」

「う、うん。ごめんなさい……」

「しようがないから許してあげる」

「ありがとう」

……なんか、少し釈然としないや。騙されている気がするよ?

僕は謝る必要があつたのかな?

「ところで」

「うん?」

「君は想像ついていると思うけど、私の兄は君と回じよひアニメとか漫画が好きだわ」

オタクと言わなかつたところに何かしらの含みを感じるけれども
触れないようにしよう。

「私、部屋に入つてその兄のコレクション眺めたりするんだけどさ、なんでああいうのって四文字の題名が多いの？」

「う、うーん……。なんか、可愛いからかな……。話いややすいし……」

「でもさ、多すぎて混乱しちゃわない？」

「うん。する、かな?」

あまりしないけれど……。

「私は四文字にしない方がいいと思つんだよね」

「え？ どうして？ 可愛いからいこと思つたんだ。覚えやすいしメリットが多そうだと思つた」

「四文字が氾濫している中で、自分の四文字だけ拾つてもらえると思つ？」

「？」
「？」
「？」

「そりや流行ればいいと思つたゞさ、流行らなかつたら悲惨じやな

い？ 安易に四文字の波に乗った安っぽいが田ひやこやう

「あー……」

確かに、それはあるかも。無理やり省略して四文字にしているものや、よく分からぬ四文字の物もよく見る。『や つ』とか、『る る』とか。そう言つのは、ちょっと寂ひやかを感じちゃうね。

でも興味が湧くのも事実。ついつい買っちゃうもん。……でも手を出して失敗したことも多々……。「うひ……。絵は綺麗なのに……。内容スカスカ……。『すかすかっ！』だね。

「四文字がいいっていうけどさ、それは読む人が勝手に呼びやすい略称を考へくれるんじゃないの？ リモコンエアコンパソコン。コンばかりになっちゃった」

「そうだね……。大体、どの漫画にも略称つてあるよね。そう言えば、すごい略し方のゲームとか本があるよ。題名のひらがな部分だけを取つて略称とするゲームとか、小説とか。そう言つのつてよく考えたなあって感心しちゃう」

みんな頭がいいんだね。す」「こや。

「でもまあ、四文字は四文字で無難なのかもね。もはやそのレベルまで蔓延しちゃつてると懲りつよ」

「うん、そうだね。たくさんあるね」

「四文字ならどんなものでも題名っぽく聞こえるんじゃない？」

「そりなのかな？」

「『『ハーバーフィ』とか』

「それは……全然題名にふさわしくないよ……」

「『『カラカラニー』とか』

「えつと、タンパク質……だよね……？ 髪の毛とか、爪とかの……」

「全然面白くなさそりだよ……。」

「何、そりゃから否定的だね。私のセンスがないってことの？」

「そ、そりは言つてないけど……」

「なら私の本氣を見せてあげる」

「本氣ついて……。

「……。……。『ハーバーフィ』」

「『』『』めん、どういう内容かよく分からぬ、かも……」

「……、ある女の子が旅行で人生初スキーへ。そこで見たスノボをする女性。スキーすらまともにできない女の子が目を奪われたものは、太陽を背に、真っ白い雪の照り返しによって空に浮かび上がるスノボ女性の美しいエビぞりだった。それに感動した女の子のスノ

ボ人生が今始まる

「面白そりー。」

でも『Hビソリー』っていつ題名は無しかな……。怒られそうだ
から言わないけどー

「『ふんせりー』」

「えーっと……」

「メントに困る……。

「紛争萌え萌えマンガ」

「それは……面白くなるのかな?」

「『せんめりー。』」

「『怖こゆー。』」

「『レンズぶー。』」

「レンズ?」

「[写真部の日常を描くバトル漫画]」

「バトル!?」

シャッター一つ切るのほどんな戦いがつ!

「『ログイン』」

「ログイン?」

「死んだ彼女がいまだにログインしている……?! この世にいな
いはずの女の子を中心に進むサスペンス。最後にあなたは騙される
」

「面白そう!」

でも今話している『四文字の題目』つて言ひのとは少し違う気が
するよ!」

「『びーだま』」

「びーだま、って、あのビー玉だよね」

「ビー玉が宝石のように見えていたあの頃。ビー玉の本当の価値を
知った今、それはもうただのガラス球にしか見えない。

まるで、僕らみたいだ。毎日が輝いていた小学校、何をして
もそれは宝物の思い出になつた。

でも今は汚れてくすみ、輝きも透明感も失われたつまらない
日々を過ごしている。

宝物の日々を一緒に過ごしたみんなとも自然と離れ離れになり、
昨日も今日も明日も『同じ一日』で、生きることに辟易していた…
…。

…そんなんある日、部屋の掃除をしたときにある頃みんなで分け
合つたビー玉を見つけた。

そこから再び転がり出すガラス球の僕ら。毎日は

「宝物だ」

「面白ナリーハー。」

「エーエー、つであります」
「腰ひませたね！」

「お気遣いなさいましたかね」

「うそ。どちらも面白ナリーハーだね」

「ナリでしょ。でも全部主人公が死にます」

「ぬ無しだよー!？」

超展開だよー!

「とこうわけで、帰つたら兄コレクションの中で四文字の物を捨て
よつと思つんだけど」

「ええええええええー、どうこうわけか分からぬいし、それは少
し無情だと思つるよー。お兄さん悲しんじゃうよー。」

「なに? 私に意見する気? 生意気」

「うーー、そ、やついつつもつではないですけど……。その、捨て
られても、お兄さん、また買つちやうんじゃないかな? お金の無
駄だから、捨てない方が……」

「……あの兄ならばあり得る。捨てるのはやめておこなあげよ!」

「ふー。よかつた」

「なんで君が安堵するの」

「え？ よかった、から、だけど……」

「……まあ、いいや」

「いい事だから、安心していいんだよね？」

「でも、兄コレ、いい加減にしてもらわないと家の床が抜けちゃうんだよね。たすがに三部屋分がいっぱいになるのは許せない」

「うん、それは捨ててもいいかもー。」

「よし、佐藤君が捨ててもいいって言つたから捨てよつ

「あ、しまつた！ ロンクションが三部屋分もあるといひ想像して行きすぎ感を覚えてしまつてつっこつこ無責任なこと言つやつた！ 僕そこまで責任持てないやー。」

「まあ、とつあえず捨てる」とを確定しないでー。」

「とつあえず捨てる」とを確定しないでー。」

「ロングドア」

「え？ 「うん」

驚くほど急に話が変わったね。

「パスタを買つたときに、勝手にお箸を入れる店員ってなんなの？お前は所詮日本人なんだから箸でも使ってろとでも言いたいの？」

「そんなこと言いたいわけじゃないと思つけど……。でも、それは聞いた方がいいね……。お箸で食べたらトマトソースとか飛んじゃうもんね」

「そもそも、流れ作業でレジをするのが気に入らない」

「流れ作業？」

「笑顔も作らない。それどころか客の顔すら見ない。パスタに箸をつけるのもそのせいだよ。さつさと箸を捌きたいから聞かずに箸を放り込んで済ませようつていう考え。終いには買ったものを落とすように袋に入れるあのデブ！ ぐつ……、思い出したら腹が立つてきた……！ あいつ、コロッケのソース忘れやがって……！」

「お、落ち着いて。ミスは、誰にでもあるよ」

「仮の顔も二度までなの。四度目は死刑だよ死刑。最低でも終身刑だよ」

「そ、それは、厳しい裁定だね……」

「『最低』だけに『裁定』って？ ちよーおもしろーい」

「え、そ、そうかな……」

えへへ。褒められたよ。

「……………早く飯食べて

「」

「え？ あ、うん」

楠さんの話が興味深くてお箸が止まっていたみたいだ。
楠さんのお弁当箱を見てみる。

空っぽだった。もう食べ終わっているみたい。

「……………でも、昨日はすぐに帰ったのに、なんで今日は帰らないんだ
ううつ…………あ、うつん。そんなことを考えるより先にお箸を動かそ
う。僕を待ってくれているんだから、早く食べ終わらなくっちゃ。
箸を動かす僕と、動かすべき箸が無い楠さん。

楠さんが足を伸ばし退屈そうに空間を見上げた。

「あーあ。隕石振ってきてみんな死なないかなー」

「ちゅ、な、何を言ひてるの？ー 恐いよ？ー」

「どうせ死ぬなら派手に死にたいよね。隕石なんて素敵。しかもみ
んないっぺんに死ぬなんて、この上なく平等だね」

「理不尽な平等だよ……」

「ま、隕石が振ってきても君だけ生き残るんだけどね

「え、僕生き残つていいの？」

「いいよ。でもそれつて幸せなのかな」

「……。幸せじゃ、無いね……」

「一人じや寂しいから?」

「う、うう。僕なんかが生き残つても人類復興の役には立たないから。無力な自分が情けなくて、幸せにはなれないよ」

「ふーん。じゃあ君の好きな人と、君。一人が生き残つたら? ソれって幸せ?」

「それは……もう一人の人がかわいそうだよ。僕がその人を好きだとしてもその人は僕の事嫌いだもん」

「でもいやらしい」とし放題だよ。喜んでもよそうなのに

「い、い、いやらしい、こととか、そんな、それどころじゃないよ。他の生き残りを探したり、安全に住めるところを探したり、忙しいよ!」

「……ふーん。君らしきつちゃ君らしきね。で、生き残った相手は、誰を想像したの?」

「え?」

真っ先に思い浮かんだのは、スカイペ相手のまりもさんだつた。あ、そう言えば、最近スカイペしてないや。なんだか、怒涛の日々過ぎてパソコンつづくにすぐ寝ちゃつてたつ……。今日久しぶりに話したいな。

「まさか、私とか言うんじゃないでしょうね」

「そんな！ 僕がそんな想像するなんて恐れ多すぎるとよ。」

「なら有野さん？」

「有野さん、でも、ないけど……」

「なら何。ビニのマツチヨを思に浮かべたの」

「ほ、僕はガチムチ好きじゃないよ……」

「嘘。パソコンの中に動画保存してたじゃない」

「それは楠さんが勝手にダウンロードした奴だよ！？ 僕が好き好んで保存していたみたいに言つて止めください！」

「私を責める暇があつたらお箸を動かしなさい。いい加減教室に戻りたいんだよね。ここ暑い

「あ、すみません」

また箸が止まっていた。

楠さんと話していると話題が尽きないなあ。

それって、とってもすごいことだよね。

楠若菜さん。

黒髪ロングにスタイル抜群のモデル体型。パツチリお皿皿にまぶしく瑞々しいお肌。

世界中のだれが見ても褒める事しかできないほど完成された容姿。美人で、勉強がてきて、運動もできる。そして おしゃべり好きみたい。

あの不思議な感覚

僕がお弁当を食べ終えたら、楠ちゃんはすぐ裏上を去つて行つた。わざわざ僕を待つていてくれたなんて、優しいね。

裏上にこどまる理由も無いので、僕も弁当箱を片付けて校舎内に戻つた。

階段を下りて、下りて、下りて、教室へ向かおうと角を曲がつたところで、人にぶつかってしまった。

「あ、『めんなさい』……」

もつと注意して歩けばよかつた……。

「……」

誤つても相手から何の反応も無いので、ぶつかつてしまつた人の顔をよく見てみる。

「う、あ……。小嶋、くん……」

昨日草むしりを手伝つてくれた小嶋君が怖い顔で僕を見下ろしていた。

「『ごめんね』……」

「……」

「あつ」

グイッと胸ぐらをつかみ引き寄せられ間近で睨み付けられる。

「な、なに……するの……。」

「……お前最近調子のつぶさじゃねえか?」

「の、のつてしません……。く、くるこよ……。」

「若菜ちゃんに気に入られてるからつづいて調子のつぶさとぶん殴るからな?」

「そ、気に入られてなんか、いなによ……。」

むしろ嫌われているよー。

「どうやつてアドレス聞いたかしらねえけど、自分は特別だなんて思つたじやねえぞ?」

「思ひて、ません……。」

「ああ?」

怖いし、苦しいよ……。

誰か助けてくれないかなと思い、あたりの様子を見てみる。みんなご飯を食べているのか、驚くほど人がいなかつた。

「う、うめん……。」

とうえず謝る僕。

「……お前前からムカついてたんだよな。一回焼き入れとくか?」

「ひつ……。や、やめてください……。」

「なんだお前。なよなよしてマジ『気持ちわい』な。俺がその根性叩き直してやるよ」

「や、やめて……。やめて……。」

「うせえんだよ」

左の頬に軽いびんたをもらつ。

「うつひー。」

「なあおー。お前、殴られてもしうがねえよな?」

「そ、そんな!」

小嶋君の右手が拳を作り肩のあたりの空間に漂つ。

怖い。

怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖
い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖
い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖
い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖
い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖
い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖
い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖
い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖
い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖
い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖
い。

怖い。

い。

怖い。

夢のよつな、おかしな感覚。

怖い。

頭が現実として認めたくないんだ。

怖い。

僕は、固く目を瞑つた。殴られたら痛いんだろうな。どこを殴られるんだろう。……どこをつて、胸ぐらをつかまれた状態で顔以外のところが殴られる想像ができるないね……。だから、多分顔を殴られちゃうんだろう。頬かな。鼻かな。人中を殴られるのは嫌だな。と、諦め覚悟を決め歯を食いしばり、ドキドキしながら拳が飛んでくるのを待つ。

「お前、何ビビッてんの？」

小嶋君が笑いながら言った。

「マジ情けねえ。本当に男かお前？」

「へ、へへ……」

「だつせえなあ。なんか、お前みたいなクズにこんなことしてん俺がバカみたいじゃねえか」

「や、やめてください……」

「…………わあー」

これほどまで直接的な嫌悪は初めてだ。一切の情も含まれていな

「ひつー！」

思わず田を瞑つてしまつ。

「あははははー！ じこつマジだせえー！」

それを見て小嶋君が笑つ。

「ひつ……」

もつやめてほしい……。

「こんな奴にかまつても仕方ねえわ」

ふ、ふう……。どうやら飽きてくれたみたいだね……。よかつた、
痛い目に遭わなくて。

「まあ、むかつくから殴るんですけど」

「えー！」

そんな！

また拳を構える小嶋君。いやだよ……！

胸ぐらをつかまれる僕と拳を構える小嶋君。
一ヤニヤしながらべつと力を入れ、いよいよ僕が殴られるところ
といひで

「小嶋あ！ てめえ何してんだー！」

誰かの怒声が廊下に響いた。

後ろを振り向き西の方を見る小嶋君。

「げ、有野だ……」

「え、え？」

小嶋君の後ろの方から有野さんが早歩きで近づいていた。

「優大に何する気だてめえ！」

僕と小嶋君の間に割つて入ってくれて、僕の胸ぐらをつかんでい
る手を引き離してくれた。そして有野さんはそのまま小嶋君と対峙
するように睨み付けた。

それを見て、「別に何もする気ねえよ」と、とぼけた様子を見せ
る小嶋君。

「ふざけんじやねえぞ」「う…………。殴りつとしてたじやねえか！」

「ちげえよ！ ただ遊んでただけだし！ なあ、佐藤？」

田の前にいる有野さんを越して僕を見る小嶋君。僕は驚き、田を
そらし、

「え……、う、うん……」

頷いてしまった。

情けない。

本当に、情けない。

「ま、そういうわけ。有野がキレる意味が分かんねえ」

「ヤーヤと小嶋君が有野さんと言つた。

「ふざけやがつて……！　お前、優大に手を出してみる……。
ぶつ殺すからな……」

とてもドスの効いた声に、思わず小嶋君がひるんで一歩後ずさつていた。

「う……だ、だから何もしようとしてねえって！　ちよっと遊んでただけだつーの！」

「遊んでただあ？　んなもん関係ねえだろ……。優大が泣いてんじやねえか……！」

な、泣いてないよ？　ほんとだよー？　…………涙目では、あるかもしぬないけれど……。

「……ああ、もひづぜえな！」

有野さんの威圧に負けた小嶋君が踵を返し、教室へ帰つて行つた。よかつたなと安心して、夢の中のよつな頭でぼうつと小嶋君の背中を眺めていると、有野さんが振り向き僕に声をかけてくれた。

「優大」

「……え、……あ！　あ、ありがと、助けてくれて……」

情けないよ……。男なのに女の子に助けてもらつなんて……。

有野さんは困惑しているような、悲しんでいるような顔で僕を見

ていた。「いつを呪じて」「や割つた顔。

「お前、もしかして日頃から「こな」とやねんのか？」

「へ、へへ。やることないよ。今は、僕がぶつかっちゃったから怒らせたんだと思ひ」

「本当か？」

「うる

「本當に本當か？」

「うそ。僕、離りやんに嘘つかなこよ」

僕の言葉を聞き、有野さんの顔が引きつった。怒っているのも違つ、何と言えばいいのか、嫌なことを言われたのに怒れなこときの顔。

「…………おこ、お前、今…………」

「え？」

「私のことを……なんて呼んだ……」

「…………離りやんの」とを……ああー。」

し、し、し、し、し、し、し、まつた！ 離りやんいや有野さんと下の畠前で呼ばれる」とを嫌うんだつた！ 小学校の頃、そのことで怒られてそれがきっかけで疎遠になつていて、それを忘れてついつい呼んで

しまった！ 朝謝ろうとしていたことを繰り返してしまったなんて僕
はバカだ！ これは間違いなく怒られちゃう！ 小嶋君ではなく有
野さんに殴られちゃうよ！

「うん… あの、あの、ここ、畠を歩いてやがって、つ

言ふ話すり出さないよ！

「…………あーっと…………いや、何だ。私も優大って呼んじやつたし、その、まー、仕方ねえよ」

「……え？」

あれ?
許してくれるのかな。

「う、ごめんね。もひ、こいつはここにいるから。もひ名前で呼ばないから。気を付ける

あー、気を付けてくれ。

「ル」

でも、チャンスだから、色々謝ろう。でもその前にお礼だ。

「ありがとう、助けてくれて……」

いいつて。殴られなくてよかつたな」

「『氣にすんなよ。……その、幼馴染じやねえか』

僕の「こと」を、幼馴染と呼んでくれた。

あの日、有野さんを怒らせてしまった僕を、幼馴染と言つてくれ
る。

とももつれしかつた。

「あの、『めんね……』

「はあ？ 何が。今名前で呼んだことか？ いひつて

「あの、その、今のもそつなんだけど、ずっと前にも、同じ『こと』で
怒られて、その、まだ許してもらってなかつたから……。その『こと』
も、ちやんと謝りたいつて思つて……」

有野さんが呆れたよつな顔で僕から視線を外した。

「お前覚えてたのかよ……」

「え。う、うふ。ずっと『氣になつて』いたから……。でも、忘れろつ
て言つのなら忘れる」

「いや、別に忘れると『氣になつて』いたから……。そもそもあれは私が悪
いんだ」

「そんな。僕が悪いんだよ」

「悪くねえよ。だつてお前、私が怒つた理由分かんねえだろ？」

「う……。う、うん……。」めん……」

「いやいやいや。私が悪いって言つてんじゃねえか。謝るのは私の方だ。あの時怒つて悪かったな。自分勝手な理由なんだ。気にすんな」

「でも……」

「でもじやねーの。お前は悪くない。私が悪い。もつと言えば私の兄貴が悪い」

「え、え？　國人君が悪いの？」

有野國人。くにひと有野さんの三つ上の兄さんだ。僕の幼馴染だった人。

「まあな。でもそれも結局は罪をなすりつけているだけで私が悪いんだけどな」

「う、うん？」

よく分からぬいや……。

「だから、謝らなくていいから」

「う、うん……」

なんだが、もやもやが残るけど……。

でもこれ以上謝つても気分を悪くするだけだよね。だからこの件にはもう触れないようにしよう。

頭を切り替え、もう一つのことについて謝ることにした。

「あの、朝も、ごめんね……。その、なんだか怒らせちゃって……」

僕が怒らせてしまったから有野さんは教室を出て行つたんだ。でも、なんで怒つたのか、分かっていないんだ……。申し訳ないよ……。

「…………あー…………いや、別に、優大は悪くないんだろ? けづ!

「…」

「けづ?」

「…………まあーそのーなんだ。あれは私の心が狭いといつか、予想だにしない事実を突きつけられて動搖したつーか。だから謝るな」「

「えつ、う、うん」

謝れないなんて……。許してくれないつことかな……。

「そこ」でお前はなんでそんな悲しそうな顔をするんだよ

「謝れないんだなあつて思つて……」

「別に悪くないんだから謝るなつて意味だからな?」

「う、うん……」

悪い僕を気遣つて悪くないと言つてくれてる有野さん。なんて優しいんだろ? やっぱり有野さんは昔から変わってないや。優しい人だ。

……でも、なんで楠さんに食つて掛かるんだ？。やつぱつ、女子の頂点を狙つているのかな……。

「あん？ 何見てんだよ」

こいつの間にか僕は有野さんの顔をじつと覗いていたようだ。

「う、うめえ」

「こや、怒つてねえけど……。……やっぱつお前も私のこの髪の色怖いのか？」

自分の髪をつまみくつくつとひねる。

「え？ う、うめえ。そんなことも、無いこと、思ひ、かなー」

実は怖いです。

「……なら染めるか……」

「えー やめちやうのーー？」

「嫌なんだろ？ 」の色」

「や、そんなことないけど……。その、ヒトも似合つてゐから、もつたいないかなって」

近寄りがたい雰囲気を出してゐるけれど、僕はヒトも似合つてゐると感づ。

「あれ、お前金髪が好きだったの？」

「う、うひひ。そんなことも無こと悪いけど、有野さんには合つてゐない。あ、でも、僕が意見する」とじやないよね」

「……まあ、そうちもだけ……。まあいいや。んで、じつと私の顔見てたけど、何か聞きたいことでもあんの？」

「あ、そつだつた。その、聞いてもいいかな」

「別にいいぜ」

「あつがとう。えつと、その、有野さんつて、その、楠さんの事、嫌い、なのかなーって」

「はあ？ 別に嫌つてねえけど」

「え？ セウなの？」

「セウなのつて、意外なのかよ」

「あ、うひひ。そうじゃなくて、その、ならなんで楠さんと、その、えーっと、文句？を言つてゐのかなあって……」

「うひひ、この質問はよくない質問ひしー。有野さんの顔が怖くなつた。

「……なんでお前がそんなこと気にすんだよ。お前もやつぱり若菜のことが好きなのか？」

「え、いや、そんな」となにかび……」

「本当にかよ……。まあ？ お前が誰を好きにならうが？ 私には、じつじつと関係ねえけどなー！」

「へへ、じめん……」

「別に怒つてねえよー。なんで謝るんだよー。」

「お、怒つてるよ……。」

「怒つてねえつて言つてんだらうが！ ふざけんなー。」

「う……わ、分かりました」

「……ふん」

有野さんの機嫌を損ねてしまつた……。

「えーっと……」

「う……ううう……。」

「いあん……」

「なんで謝るんだよ」

「……色々とい、情けなくつて……」

きっと、僕が普通の人なら有野さんが怒つている理由がわかるは

すだ。でも僕はダメダメ人間だから……。有野さんが怒っている理由が分からぬ。生きていてすみません……。

「「めんね……」

「……別に、悪くないんだから謝んなよ」

「……うん……「めん」

有野さんが一度ため息をついて、すぐに笑ってくれた。とても優しい笑顔で笑ってくれた。

「優大は優しいな」

僕は優しくなんかないよ。優しいのは有野さんだよ。

「ほんと、悪かつたな」

突然、謝ってきた。意味が分からなかつた。

「え、え？ なんで有野さん謝るの？」

「今までのことだよ。中学あたりから、私がお前の事避けてるみたいで気分悪かつただる」

「え、いや、その……」

「あの時、私が理不尽に怒った理由、そろそろお前に教えなきゃいけねえよな。納得できねえよな」

「『氣』にはなるけど、言いたくないのなら、言わなくててもいいと、思つけど」

「言つよ。教える。下らねえ理由だよ。下らなすぎてお前怒るかも
しれねえな」

「怒りないよ」

「やつか。んじやまあ、教えるわ。…………あーでも、ダサすぎる
理由だからこりゃあ言つたくなえな…………」

有野さんが周りを見渡す。人に聞かれたらよくないのかな。
「あ、そうだ」と言つて、有野さんが僕の方を見る。

「お前さ、秘密基地覚えてるか？ 私と、優大と、兄貴の三人で作
つた秘密基地」

「うん。覚えてるよ」

今も時々行つてるからね。

「今日の放課後そこに来てくれよ。あそこなら誰にも話聞かれねえ
だろ」

「うん。分かつた」

「んじゃあ、放課後そこで待つてねよ。……まだ残つてるかなー、
秘密基地。残つてたらいいな」

「うん。そうだね」

残つてゐよ。秘密基地。

「ま、適当に作ったからもつくなつてゐるだらうナビだな

「うそ

ちやんと、守つておいたよ。

「思ひ出がのじつてりゃそれだけで十分だよな」

「うそ

思い出も、秘密基地も。

僕はあの日のまま、残してゐるよ。

「……なんだか、少し楽しみだな

「うそ

とつても、楽しみだね。

僕は少し、ほんの少しだけ、涙が出てきてしまつた。

僕が泣いてゐること、有野さんにばれてないかな。
すぐ泣いたら、きっと有野さんに怒られちゃうよ。

男らしくなつて。

でも、あそこであの頃の友達に会えるのは、僕ひとつ泣くほど
嬉しいことなんだよ。

だから、これくらい許してね……。

- 放課後が、待ち遠しい。

幼馴染の存在も都市伝説でしょ？　え？　違うの？

有野雛さん。

金髪セミロングで背は普通。楠さんのようにスタイルがいいわけではないけれど、それは楠さんが特別いいと言うだけで有野さんのスタイルが悪いと言いたいわけではない。細くってスレンダー。

楠さんのように身長が高いわけではないし、楠さんのように胸もあるわけではないけれど、楠さんに負けないくらい可愛い。

大きくてほにゃんとした目。潤んでいるような形のいい唇。

楠さんは近寄りがたい美しさで、有野さんは親しみやすい可愛い。女優とアイドル、と言えばいいのかな……？なんか違う気がする。しかも今とっても失礼なこと言っているのかも……。

とにかく、有野さんは可愛い。

僕が幼馴染だなんて申し訳ないです……、と思つほど可愛い。

美少女で、勉強ができる、運動もできる。みんなを引っ張る力を持つていて、有野さんを慕つて集まつてくる人も多い。女子の人気で言えば、有野さんの人気が高くて、男子の人気で言えば楠さんの人気が高い。

ただ、有野さんは好き嫌いをはつきりと言つタイプだからそれを良しとしない人は有野さんと距離をとつていろみたい。そう言つた点で、我が強い。

この前、きやひきやひしている女の子（語尾にとかついちゃいそうな人）にむかつて「うぜえから普通にしゃべれよ！」と言つていたのを見たことがある。あと「缶が開けられなーい」って言つていた驚くほど力の弱い女の子に「なら買うんじゃねえよ…」と怒つていた。ストレートだなあって思つたね。

でもそう言つた男前なところに憧れる女の子も多いみたい。

楠さんと有野さんがクラスの女子ナンバーワンとして、その一つ下の位置にいる前橋さんは有野さんを慕つてているみたいだし、有野

さんの人気は凄いね。金メダルと銅メダルと一緒に取つたみたいな感じだね。

有野さんは男勝りな性格なので、男子にも人気がある。でもちやほやされるのが嫌みたいでいつもうつとおしそうに追つ払っている。もちろん気に入らない男子には強く言葉をぶつけるので、有野さんを苦手とする男子もそれなりに多い。お昼に言い合っていた小嶋君も、有野さんのことをあまり好いてはいないようだ。

有野さん。

好き嫌いをはつきり言つ人。

そして。

好き嫌いがはつきり分かれる人。

好きな人は好きだし、苦手な人は苦手。

多分、そんな感じ。

……でも、楠さんと有野さんの関係ははよく分からいや。……。

楠さんは有野さんのことを嫌つていないし、有野さんも楠さんのことを嫌つていみたい。

でも有野さんは楠さんに意見することが多いし、今朝だつて楠さんが強めに怒られていた。

一見嫌いあつているように見えるのに、実はそうでもないみたい

。……。

よく分からぬいや。……。

「佐藤君」

「え？」

放課後、帰ろうと荷物をまとめているところに、楠さんが話しかけてきた。

「佐藤君、今から暇でしょ？」

思わず暇だと呟つてしまふやつになる笑顔。暇意外に答えが無いのではないかと思つ。

いやいや。

僕は頭を振つてその考えを散らす。

「あの、僕、」の後用事が……」

「え？ 用事があるの？」

「うそ……」

楠さんが僕だけに聞こえる小声で呟つ。

「……あの暇でじょうがない佐藤君に用事？ それ嘘でしょ？」

「う、嘘じやなこよ……」

「……ふーん」

ジト目で僕を見た後、やれやれといった感じでおもむろに携帯電話を開いた。

「な、なんで携帯電話を操作しているの？」

「え？ 私がケータイ操作したらダメかな

「ダメじゃないけど、その、なんでこのタイミングなのかなーって思つて」

「あはは。別にどんなタイミングでもいいでしょー。あーそれにしても今日は暑いね。思わず汗でケータイが滑り落ちそうだよ。そのせいでもうつかりデータフォルダの中の写真が見られちゃうかもしないね。でも暑いからしうがなによね。あつ、おつとつと、手からケータイが……」

と言いながらボウリングの球を投げる時のように携帯電話を構えた。

「「めんなさい僕暇でしたー!」

「あ、そつなんだ。ならちよつといいかな」

笑顔で携帯をしまっててくれた。ふ、ふう……。死ぬといひだつた。

なんて安心している場合じやない。有野さんに事情を説明しておかなければ。

教室を見渡し有野さんの姿を探す。

……。

い、いない……。

もしかして、もつひとつちやつたのかな……。

「さあ、佐藤君、行こう

「え、え、あの、その前に……」

「ああ……手が汗ばんで……」

「分かりましたー!」

「よひしこ」

僕は教室中から冷たいような熱いような視線を受けながら楠さんの後ろをついて教室を出た。

……有野さんとの約束、びりびりよつ……。僕、連絡先知らない……。

「あの、楠さん。僕、少し急いで……」

僕の前を歩く楠さん。背筋がピンと伸び、腰にまで届くという美しい黒髪が歩く度に左右に揺れる。後姿がすでに美人。追い越して顔を見た時にも美人だから街中では大変だろうね。でも今は素直に見とれることができないよ。

「なに君、まだ逃げようとしてるの？ 私に向う権利君にはないの。ばらされたいの？」

「そんなこと、無いけど……。でも、先にしていた約束だから……守らなきゃいけないし……」

「うるさいこね。ぜらそうか、びりよつうか。よしづらわつ

「えつ、こや、じめんなさこ……」

僕どうすればいいんだろう……。

「と黙つても、別にそんなに時間をとりせるわけじゃないから。ただ聞きたいことがあるだけ」

「あ、そりなんだ。でも、教室じゃあだめなの？」

「みんなに聞かれたくないし」

「聞かれたくない」と?」

「やひ」

な、何だらり……。怖い……。

「…………や」

通りかかった空き教室の扉を開けた楠さん。僕もそれについて教室に入った。

「あの、一体、何?」

「お皿に話したこと。兄コレを処分しそうと迷つて、どうかいい値段で買い取ってくれるところを教えてほしくてね。君なら何でも知つてるでしょ。オタクだから。オタクだからこそ」

「え、うん、その、まあ……」

オタクと言われることにやっぱり抵抗があるなあ。普通の人より少し本が好きっていうくらいなのに……。

「で、高く買い取つてくれるといひまじー? 何なら君が高値で買つてくれてもいいけど」

「ほ、僕そんなにお金持つてないから買い取れないよ……」

「甲斐性がないね。甲斐性がないならついでにその貧乏性も無くしてよね。さつさとお財布出して」

「か、カツアゲですか……」

「む、そんな暴力的なことするわけないでしょ、失礼なこと言わないで」

「い、ごめんなさい……」

「でも……、実際、財布出せって……。

「で、買い取り値って場所によつて違うの?」

「う、うーん……。僕売つたことないから……」

「へー。やうなんだ。役に立たないね。役に立たないのならせめて命断つてよね。さつさと屋上行つてきて」

「役に立たないからつて別に死なないよー!?」

「はいはいはい。我儘だねホント」

「我儘じゃないよ……。

「でも、なんでそれを聞くの、教室じゃあだめだったの?」

「兄がそんな人種だつてばれたくないでしょ!。あ、しまつた。また君に弱みを握られてしまつた」

「よ、弱みつて、別に楠さんが悪いわけじゃなし……。そもそも全然弱みにならないし……」

「何を言つてこらの。オタクが家族にいるなんて恥ずかしい事この上ないでしょ。オタクは、無いよねー」

「う……」

楠さんは、僕のこともオタクつてこいつから、何気に僕も否定されていこう」とになるね……。

「いいといひ知らないのなら、せめて古本屋の場所を何個か教えて」

「う、うん」

「れなら、すぐに秘密基地へ向かえるね。

知る限りの古本屋を紙に書き記し楠さんに渡す。

「へえ。結構あるんだね。さすが佐藤君。この中から兄コレを売る店を探せばいいんだね」

「う、うん……。でも、お兄さんのコレクション本当に捨てちゃつたの？」

「君が捨てりて言つたんでしょ」

「え、いや僕捨てなんて言つてないよー!?

「ほこほこ。じゃあ、とつあえず佐藤君の命令通り泣きながら兄コレを捨てに行ってきます」

「完全に僕のせいにしておこうとする。」

「不肖楠若菜。佐藤君の命によつて兄の宝物を捨てに行つてしまつます。では」

「え、あつ、ちよつと……」

行つちゃつた……。ほ、僕のせいかな……。僕のせいだよね……。「メンねお兄さん……。

「うう……。また僕のせいで不幸な人が……」

「めんなさい……。

「……はつ。落ち込んでいる場合ではない。早く秘密基地へ行かねば」

落ち込む時間はたくさんあるからね。

「よし、早く行こう」

少し急ぎで教室を出た。

急いでー。
と、思つたのだけれども。
う……。まずいよ……。

「おお、佐藤。ちょうどいいといふ。もつ帰つたかと思つてたが

廊下の角で、先生に会つてしまつた……。また仕事を頼まれちゃ

「うのかな……。

「！」の前片付けた資料室に資料が山積みされて置いてあるから、それを本棚にしまっていって欲しいんだ

「あの、その……、僕、用事があつて……」

「またお前は……。すぐそつやつて逃げようとするなあ！ わつさと終わらせればすぐに帰れるんだから、文句を言ひ前に早く仕事をはじめやー！」

「は、はー……」

「うへ……。早く終わらせよ！」

急ぎたいの！」。

情けないよ……。

体力つけなきやね……。

「あ、有野さんは……」

全力で歩いてやつとたどり着いた秘密基地。
そこには誰の姿も無かった。

ただ、いつもと変わらない秘密テントだけが寂しそうに僕を迎えてくれた。

「へ、ハ、ハ、ハめん……」

何もない。誰もいない。

木の間から漏れる陽のスポットライトが僕を寂しげに照らす。

「な、殴られる……。絶対殴られるよ……」

昔を思って出すよ……。よく殴られていたっけ。

「でも、そんなことより、早く謝りに行かなきゃ……。殴られちゃ

僕は踵を返し来た道を引き返さつと一歩踏み出した。ハビ、

「ひ

「まてまて」

秘密テントの中から声がした。

「帰つてねえよ」

テントから出でたのは当然有野さん。
口ひそやかに手を挙げてくれた。

「あ、有野さん！　「めんね！」

僕は駆け寄り頭を下げた。

「別に怒つてねえよ。時間決めてねえし、優大の放課後の予定聞いてなかつたし。それにたつた一時間じゃねえか。来なかつたらムカつくけど来てんだから文句はねえよ。でも、そんなことより、殴られるつてなんだよそれ。私がいつお前のこと殴つたよ」

「え、主に、小学生時代に……」

「……忘れとけよ」

体に刻み込まれていますので……。

「あの、待たせちゃつて「めんね」……」

「構わねえつての。どうせお前また誰かに捕まつてたんだろ」

「えつと……」

「あー、言わなくていい言わなくていい。別に聞きたいわけじゃねえし」

「う、うん」

よかつた。聞かれたら理由を言わなきゃいけないといひだつた。

「こしても、この秘密基地がまだ残つてゐるとなあ。風で吹き飛んでると思つたんだけどなあ……」

「うふ

「あの頃を思い出すな。昔はあんなに大きく見えた秘密基地も今見れば狭くて汚ねえぜ。それに造りが雑。ホント、よく残つてくれたな」

「うふ

「……毎日のみじかに来て遊んだな……。懐かしい」

「やうだね

「……でも、それも私が理不尽にキレたせいで、終わつてしまつた

「……」

「」で遊んでいたときによられた。

『今度から私の名前を呼ぶんじゃねえぞー』って。

その理由を、今日教えてくれるみたい。ずっと引っかかっていた胸のしこり。それが今日無くなるんだ。

「悪かつたな。キレイ

「うふ、うふ

「ああ、いや、やつだな。とつあえず、理由しりてえよな」

「あ、うん」

いよいよ聞ける。

「大した理由じゃねえんだけどさ、あのー、私の兄貴がさ、ああなつたじやん?」

「うん」

ああなつた。

有野さんのお兄さん、國人君くにひとは、中学校に上がったあたりから、突然非行に走りだした。髪の毛を金色に染め、平氣でタバコを吸い、毎日喧嘩に明け暮れた。もちろん、僕と遊ぶなんてことはもうなくなっていた。

この辺りでは有名だ。とても喧嘩が強くて、目が合つただけでぼこぼこに殴られる。とても恐れられていた。

みんなから怖がられていた。それは、当然僕も……。
でも、実は憧れてもいた。

強くて、かつこよくて、自分の腕だけで生きていいくような、そんな僕とは正反対のアウトローな生き方に憧れを抱いていた。
しかし憧れるだけ。

僕には、そんなことできるわけがなかつた……。

國人君が荒れだしてから、有野さんも徐々にその影響を受けだした。

國人君のように、非行の道を歩き出した。
それからしばらくしてだつた。

僕が有野さんに怒られたのは。

『名前を呼ぶな』と怒られ、それから疎遠になってしまった。

悲しかつた。幼馴染が、一人とも僕の元から離れて行つたのは。
そこから僕は一人になつた。

そこからずつと、僕は一人だつた。

そこから 色々と決まつたんだと思つ。

「だせえ」ことに、兄貴の影響で私も「んなんになつちまつてさ」

「……う、うん……」

「まあ、なんだ。あの当時、兄貴の真似をして、調子に乗つてた私はさ、その……」

「うん」

「……あの当時の話だからな？ 今は違うからな？」

「う、うん」

「……えーっと、言い辛いんだけどさ、あー……その、優大の事……
だせえと思つてたんだよ」

「うん」

それは今もそうだよ？

「当時だからな！ 今はそんなこと思つてねえからなー。」

「え、う、うん……？」

今もかつこ悪いけど……。

「んで！ でだ！ …… その、私の名前いつて、今の私には似合わ
ねえじやん？」

「え？ なんで？」

「なんでって、似合わねえだろ。『ヒナ』だぜ。雖。こんな女っぽ
い名前、可愛い奴にしか似合わねえだろ」

「え、そうかな……。有野さんにはとっても似合つると思ひなご
う」

「…………。似合つてゐない、それお前…………」

突然顔を赤くして僕をべしべし叩いてきた。

「いたい！ い、めん！」

「て、てめえ！ 」の野郎！」

「ノーメンなさい！」

僕が悪いです！

「はあー……はあー……」

い、息が荒いよ……。顔も赤いし、怒りせてしまつたみたいだね
。

「い、いめんなさい……」

「……べ、別に、怒つてねえけど……」

「え、怒つてないのに叩かれたの？ 僕……。」

「い、今はそんなのいい！ そんなことよりあの日のことだ！」

「あ、はい」

「私は、自分の名前が恥ずかしかったんだよ。こんな女っぽい名前嫌だつて思つてたんだ。そんで、更に、だせえと思ってた優大に『雛ちゃん』なんて呼ばれるのが我慢ならなかつたんだ」

「そりだつたんだ……」

「だから私はあの日、お前にキレたんだ。『今後名前を呼ぶな』って……。今思えば、なんて理不尽な奴なんだろうな、私。ホント悪かつた」

「そ、そんな。嫌な」としたのは僕なんだから謝るのは僕だよ……」

「私が理不尽だつたつて言つてんだろ。それは譲れねえよ。お前は謝るなよ」

「……でも……」

「でも、じゃねえの。私が悪かった。……許してくれ

「う、うん。許すもなにも、僕怒つてないし……」

「……そつか。わつはえまお前はわつこう奴だよな」

「うひう奴つて、うひこう奴だわ。……。よく分からなこや。

「でも、お前にキレてから、うひも離つてお前が嫌いになつちまつた。誰に呼ばれてもハイハイするよつになつてたんだよ」

「うふ……」

「可憐このこ……。

「まあ、今思えばしょうもねえことなんだけだ。なんでそんなこと氣にしてたんだろうひ、馬鹿みたいだぜ」

今思えば馬鹿みたい、と呼べりとせへ

「えつと、なら、今はもつが前で呼んでもいいの?」

「いやー、なんかもう恥ずかしいわ。ハイハイとはねえけど、恥ずかしさは残ってるんだよ。…………だって、似合つてねえもん」

「そんなことないよ。似合つしるよ」

「……そつか

「うつこつと笑ってくれた。

あの頃から何も変わってない、優しい顔だ。

と、思つて懐かしんでいたのだけれども、急に恥ずかしそうに僕から顔をそむけ、もうひと声言つた。

「まあ、まあ、何だ。お前が、呼びたいって血つななら、その、なあ。別に、呼んでも、いい、かなーとか……」

「…………えー、ここなの?ー!」

「あ、いや、無理にとは言わねえけど、どうじても、呼びてえなつて思つんなら、我慢してやらなことも、ない」

やつたね!

「嬉しいな! 僕、あの頃みたいに呼びたいよー。」

「え、その…………まあ…………お前がやつしたいのなら…………私も、悪かったし。迷惑かけてきたし」

「迷惑なんてかけられてないよ。でも、僕、離ちゃんつて呼びたい」

あの頃にはもう戻れないのなら。
呼び方だけでも、戻したいよ。

「呼んでも……いい、かな……?」

「ぐつ……ー」

完全に僕から田を背け、顔を隠した。やつぱつ、嫌なのかな。
顔を背けたまま、有野さんが言へ。

「…………じょづ…………なひ、じょづがねえな。好きに呼べばいいー」

「やつたー! あつがとつ、離ちゃん!」

やつぱり、少し嫌なのか、耳が真っ赤になっていた。お、怒つて
るのかな？

「…………へそ……そんな嬉しそう……ふざけやがって……」

「え、『』、『』めんなさい……」

嬉しそうに呼んだらダメなのかな……。

赤い顔を僕に向ける。

「ち、ちげえよー。ふざけてんのは私だ！ 今更こんなこと、なあ
！」

「え、よ、よく分からぬ、けど……」

今更名前で呼び合つたことがおかしいって言いたいのかな？ 僕は
全然おかしいとは思わないけど。

あたふたとしていた有野さん……、いや、雛ちゃんが我に返り、
「ホンと一度咳をつき仕切り直して僕の顔を見る。

「私も、お前の事優大つて呼ぶからな」

「うふ

僕らは笑顔を見せ合つた。

「あの頃に、戻つたみたいだな」

「うん。…………元に戻る、國人君がいれば、完璧だね」

「……兄貴がここにいれば……か」

離むやんの笑顔に影が落ちる。

「え、え？ 國人君に、何かあつたの……？」

「……あいつは、もうここへ来れねえよ……」

「それは、ここに来たくなからつてこと？」

「……やつじやねえ。やつじやねえんだよ。來たくても……來れねえと思つ」

「どう、して……？」

そう言えば、最近は全く噂を聞かない。あれだけ街で噂された國人君だったのに、ここ一年くらい何も聞いていない……な、なにがあつたのかな……。

「兄貴の話は今はいい。……でも、多分、近いづかに……事情を説明する……」

「う、うん……」

……なんだか、嫌なことが起きているみたいだ。でも、近いうちに教えてくれるといつのであれば、これ以上僕が踏み込むのはよくないよね。

「で、だ」

改めて雛ちゃんが僕の顔を見る。

「うん？」

「その、昔に戻った私達なんだけどさ」

「うん」

また雛ちゃんの顔が赤くなつた。
お、怒つたのかな？

「……もうちょっと、先へ進んでみるのも、面白いんじゃねえかな
って思つたり思わなかつたりしたりなんだり」

「え？ どうこいつ」と？

「いや、だから、幼馴染の、先……、と言えばいいのか、よく、わ
かんねえけど……。もうちょっと、踏み込んだ、関係……？ って
いうか、なんていうか……」

「……幼馴染の先つて…………あつー」

分かつた！

「そ、そつ言ひ、」と、何だよね……」

「え！ い、いや、その、なあ！ 面白いかもなあつて、思つただ
けだぜ！ そう、実験的に。実験的にな？ してみたら面白いかも
なつて！ 思いつき思いつき！ お前が嫌なら別に、このままでも

いいし？ 「冗談、つてことでも、いいし……。……つてゆーか、[冗談だし！」

「え？！ 「冗談なの？！ 僕とつても嬉しかったのに……」

「…………え？！ 嬉しい！？ 嬉しいって言ったのか？！ エ、え？！ マジで！？ いや、なら[冗談じやなくともいいし？！」

「えつと……僕は、[冗談じやない方がいいな……」

「[冗談じやねえよ！」

「ひつ……。じょ、[冗談じやない、よね……、「ごめんね……。僕調子のつてた……」

怒られた！ 「ごめんなさい！」

「は、はあ？！ む前何突然…………あつ！ いや、今の[冗談じやねえつて言つのは、ふざけんじやねえつて意味じやなくつて、その、今言つた提案が本気だつてことだ！ キレたんじやねえよ？！」

「あ、ああーなるほど。勘違いしちゃつた」

「そりだぜ！ 優大勘違いしちゃつてたな！ あははははー！」

「う、うん」

……。なんだか、おかしいなあ、雛ちゃん。

「えーつと、な、なり……。その、今から、そつまつ関係つて」と

で、いいのか？」

不安そうに聞いてくる雛ちゃん。何が不安なのか分からぬ。僕
が断るわけないのに！

「うん… もしかしたらよー。これからよめじへねー。」

一気に、雛ちゃんの笑顔が弾けた。とっても嬉しそうだ。嬉しいのは僕なのに。

「…………は、はは……。ははは…………い、いやあ、その…………なんか悪
いな…………。私みたいなので…………」

「そんな！ 雛ちゃんだから、僕は嬉しいんだよ。」

「そ、そんなこと言つなよお前つ！ 照れるじやねえかっ！」

お前ちゃんも喜んでくれている。とっても嬉しいよ！

「僕、雛ちゃんが初めてだよ」

「そ、そ、そ、そ、う、な、の、か！　あ、あ、あ、あ、は、は、は、は！　な、あ、！　お、い、ー、！」

「うん！ 初めての親友だよ！」

卷之三

「……いや、はつかり言わない私が悪いんだけど……。なんて言ひつか、お前らしくあるところが、べたすぎるところが」

「「」「めぐね！ 勘違いしちゃった！」

かくかくと笑う。無です。無の状態で笑うと、いつなるんだね。

「あははははははははは

「ひ、離ちゃんと。もしかして、僕、全然違ひと感じただ？」

さつきまで喜んでいた離ちゃんが、突然無の顔になつた。
こんなにも人の顔つて無を表現できるんだ。無過ぎて少し心配になつむやつよ。

……べ。

は？」

「『めん……』

無の顔をやめ、あきれたよつな顔で僕を見てきた。

「謝るなよ……。勘違いは、誰にでもある……」

落ち込みまくじの離ちゃん。「『めんね、『めんね、『めんね、一体どうこう意味だつたのだろう……』。

「その……、今のは、本当は、どうこう、意味だつたの？」

「ああ、しょうがねえよ。私がはつきり言わなかつたのが悪いんだもんな。ああ、私が悪い」

「や、そんなことないよ。僕が、馬鹿だから」

「お前はバカじやねえよ。バカは私だ。こうなりそつだつてことは予想ついてたんだ。はつきり言わない私が悪い」

「え、つと……」

「…………」

「え、あ、うん」

「…………」

離ちゃんが、気合を入れた。

覚悟を決めた、かつこいい顔で僕の顔をまっすぐに見てくる。

「…………私は、優大のことだが、す　」

と、『』でタイミング悪く誰かの携帯電話が鳴った。電話みたいだよ。

……。ああああああああああああああああああああ！　僕のポケットから聞こえてくるー。つていうか僕だ！

「う、あ、あ、あ、ゴメンなさい……。その、僕、マナーモードにしておれただ……。」「

「…………や、別にマナーにしてなこのは悪い事じゃねえだろ。いいから、わざわざと出ひ出すよ。話はそのあとだ」

「う、うさ、『めぐね、ちゅうと、失礼して……』

ポケットから携帯電話を取り出し『ティスプレイを見てみる。

「？」

知らないう髪だった。でもなつ続けるので出てみる。

「はーもしもし。あなたですか？」「…

『…………なんで私は君の番号を知っているのに君は私の番号を知らないの？』

『』の可愛こ顔ともつて口調せ……。

「え、あ、楠さん？」

「若菜だあ？..」

「えつと、僕、携帯番号は教えてもらひてないけど……」

メールしか受け取つてないよ。

『嘘。どうせ君、私の番号を調べて登録してあるんだしょ？』

「や、そんな。僕そんなことしなこよ……」

『どうだか……。井、いいや。私から電話をかけたことによつて君が調べていようが調べていまいが番号が知られてしまつたわけだし、変わらないね』

「や、そうだね。それで、その、いつたい僕なんかに何の用事が……」

…

『私じゃないんだけどね。兄が君に言つたことがあるつてひるといから』

「えー、井、まさか、本売つたの？..」

『売れつて言つたのは君でしょ』

「言つてないよ？..」

『「ひるをこね君。往生際が悪いよ。売れつて言つたのは君。認めて

「み、認められないよ……」

レイプ未遂

なんだかどんどん罪が重くなっているよ？！

でも私は謝らなければならぬの……』

「え、え？」

『未遂犯の君に命じられた兄のコレクションの処分、それも未遂に終わつてしまつたの』

「え、あ、よかつた……」

失敗したみたいだね……よかつた。

『出張買取してもらおうと思つたんだけど、査定中に兄が帰つてしまつてね。理不尽に怒られたよ。そしてその言い訳として君に命令されたと言つたら、君に電話しろと。兄に代わるね』

「え！？」

そんな突然代わられても！
僕が怒られちゃうの？！

『……もしもして?』

「あ、はい。その、僕……。」

『いやいや、そんなに恐縮しないで……。俺は、全部分かつてるか
『』

「え……」

怒鳴られると思つていただけれど、全然そんなことは無くむしろ優
しこと憐みのこもつた声だった。

『君、若菜の本性を知つてゐるみたいだし、せひと無理やつ言わさ
れただらう。』

「えつと……その……」

『今まで言わなくていいよ。大丈夫。俺は君の味方だから』

「は、はあ……」

『これからは部屋に鍵をかける』とするから。安心してここよ。
もう勝手に処分されることは無い』

「わ、そう、ですか……」

『じゃあ、若菜を恐れる者同士、仲良くなよ』

「は、はい。」

『じゃあね。いつか愚痴りあおつ』

「えつと、はい……」

お兄さん、優しい人だね……。

『…………もしもし?』

「あ、楠さん……」

楠さんに代わっていた。え、いや、お兄さんも楠さんだけビ…………とにかく、楠さんに代わっていた。

『ふざけた会話の内容だったね。何が私を恐れている者同士よ。それはこっちのセリフだよ。恐れているのは私の方だよ。被害者面しないでよね』

「は、はい、すみません」

『…………ふん。まあ、そういうわけで、君の作戦は失敗に終わりました。ここに『報告させていただきます』

「はい……」

『では失礼します。また明日』

「うん、ばいばい」

電話が切れた。

よかつた、お兄さんのコレクションが葬り去られないで……。
つて、そんなことよりも…

「あ、」「」「めん離ちゃん。話の途中で電話なんかに出ちゃって……。……これで、もう大丈夫。電源切ったよ。それで、何の話だっけ」

「…………。離ちゃん、怒っているのかとても怖い顔。…………電話に出てしゃつたから怒つてるのかな……。

「…………お前、若菜の電話番号も知つてんだな」

「え、あ、うん……」

「しかも、若菜から電話がかかつてくるんだな」

「う、うん。初めてだけ……」

「……」

ぎりりと睨み付けてくる離ちゃん。

「、怖い……。

「その……」

「…………話つてのはあれだよ。私達、しんゆうになつたんだから、とりあえずアドレス交換しようぜつて言おうとしてただけ

「え、あれ、親友にならうつていつのは僕の勘違いじゃなかつたの？」

「勘違いじゃねーよ。初めからそれ以外言うつもりなかつた。なんだ？ それ以外に何があるのか？ ねえよな。あるわけねえよな！」

ええ？ むいー。

「あ、せひでいざれこまか……」

怖いよ……。

「…………なんだよ…………くそ…………」

「え、え？」

とも悔しがっていた……。

「てめえ、いいから、せひもと教えてよ。早く帰りてえんだよ」

「あ、うん。」めん

「…………ふん」

突然機嫌の悪くなつた雛ちゃんと、アドレスの交換をしたあと、
雛ちゃんが一人さつさと山を下りて行つた。

一人取り残された僕は、雛ちゃんを怒らせてしまつたと困惑し立ち尽くしていたけれど、山を下りて行った雛ちゃんから送られてきたメールを見てほっと息を吐いた。

『また明日な』

なんてことは無いメールだつたけれども、今の僕にはこれだけで
とっても安心できた。

あの頃、別れる時に書つてくれていたこの言葉。
この言葉の次の日は、ちゃんと笑いあえていたから。

……また明日。

僕は、声には出していいけれど、思いを込めて、メールに乗せて送った。

なんだかとつても、ノスタルジー。

スカイペの音楽再生用

山から家に直帰して、お姉ちゃんと遊んで、「」飯を作つて、みんなと一緒に「」飯を食べて、お姉ちゃんを振り切つてお風呂に入つて、お風呂から上がって、お姉ちゃんを振り切つて部屋に入つて、パソコンの電源をつけた。

廊下でお姉ちゃんが叫んでくるが気にしないであります。ごめんねお姉ちゃん……。

すぐにスカイペをつけてネット上の親友まりもさんのログイン状態を見てみる。

「あれ……。いないや……」

「」の前ログインしたのは、土曜日かな？ 僕一日もログインしてなかつたんだね。

僕にとって一日はすぐくへ長い。それくらい、遊び相手がないから。

遊び相手はお姉ちゃんくらいだよ……。……廊下のお姉ちゃん、大人しくなったね。部屋に戻つたのかな？ と、ここで！

「あー！」

タイミングばっちり！

まりもさんがちょうどログインしてきた。
僕はさっそくメッセージを送つた。

「ウー！」

まりも・やあ。一日ぶりかな?

ユウ・うんそうだね

まりも・毎日のように話していたから死んでしまったのかと思つたよ。

ユウ・死んじゃないよ。ちょっと、バタバタして……

まりも・パソコンの前に座る時間が減るのはいいことだね。これから先スカイペにログインする時間が減っていくといいね

ユウ・そんな。僕まりもさんと話したいよ

まりも・嬉しいこと言つてくれるね。でも顔も名前も知らない相手をここまで信用するのはいかがなものかな

ユウ・でもまりもさん優しいから、信用してもいいよね

と、ここで突然どんどんと隣のお姉ちゃんの部屋から物凄い音が聞こえてきた。どうやらお姉ちゃんが僕の部屋の壁をどんどん叩いているみたいだ……。さつき相手にしなかったことを怒っているみたい……。あとで謝つておひづ。今はそれよりもスカイペだ。

まりも・私は別にかまわないけれど、こんなノリノリケーキショーンツールだけのつながりなんてすぐに切れてしまうよ。パソコンが壊れでもしたらもう連絡がつかなくなる。そんな薄いつながりに頼つて

はいけないよ。君はもっと友達を作るべきだ

ユウ・うん。それは分かつてるよ

ユウ・でも、実は今日親友ができたんだ！

まりも・へえ。それはいいことだね。でも親友なんてものは突然出来るものなのかい？

ユウ・親友ができたというか、昔の友達と仲直りできたんだ！

まりも・なるほどね。それは本当によかつたね。心から祝福をせてもらひますよ

ユウ・ありがとう！

まりも・実生活が充実してきて、私の事なんか忘れるくらい現実を楽しんでほしいものだね。私は所詮、君の想像上でしか生きられない存在だからね

……それは、僕嫌だよ。

まりもさんのことは絶対に忘れないよ。
だって、一番の親友なんだもん。

例え顔が分からなくっても、名前を知らなくとも。
そんなの関係ないくらい好きだもん。

ユウ・まりもさんも現実だから絶対に忘れないよ。僕まりもさんのこと好きだもん

まりも：

回線の不都合か、そのあとすぐにまりもさんのログイン状態が解かれ、返事がないまま、そのままのスカイペを終了した。

まりもさん。

それだけしか分からぬけれど、とっても優しい人。

地球上に隕石が落ちてきて、僕と誰かが生き残るのだとしたら、一番生き残つていてほしいなど僕が思ったのは、顔も名前も知らない、パソコン越しのつながりしかないまりもさんだつた。それくらい、まりもさんには支えられたから。誰よりも、まりもさんは優しい人だから。

ライトノベルの主人公

楠さんに脅されたり、雛ちゃんと仲直りをしたり、小嶋君に怒られたり、先生に仕事を頼まれたり。

なかなか濃い日々が続いているけれど、きっともうすぐこの非日常の波は治まるよね。今まで嵐すぎなほど嵐いでいた僕の人生の海がこれ以上荒れることは無いよね。今日からまた落ち着いた心地のいいビー・チに戻っていくはずだ。僕の海じゃあサーフィンなんかできないよ。波一つないからね。

僕はいつも通りの一日を迎える為に、いつも通りひつそりと教室に入つて、いつも通り誰とも挨拶を交わすことなく、いつも通りライトノベルの世界に逃げ込む。

うん。

これが僕の毎日だよ。

昨日までが嫌だったとか、そう言つことは一切ないけれど、むしろ面白かったけれど、僕は楠さんや雛ちゃんや小嶋君や先生といった人生の主役を張れるような人たちと深くかかわる人間じゃないんだ。

部屋の隅っこで一人本を読んでおくくらいがちょうどいいんだ。誰も怒らせることは無いし、誰も困らせることも無い。

脇役ですらなくていい。

背景の一部で充分だよ。

僕が今読んでいるライトノベルで言つならば、僕はページ数で充分だ。イラストでも、本文でもなく、ページを教えるだけの役割。無くともあまり困らない、小説の一部でありながらその枠から外れている存在。時々、気になつた人が目をやる位の存在でいい。僕には物語の一端を担うなんて荷が重すぎるからね。

……楠さんは主役かな？ 美人だし、なんでもできるし、みんなから信用されているし、簡単に主役になれるね。あ、でも雛ちゃん

も可愛いし、何でもできるし、男前だし、簡単に主役になれるや。あ、でも、大体主役は男の子だから、この二人はヒロインになるのかな？ だとしたら、主役は

「おーっす」

とても大きな挨拶が聞こえてきた。

僕は顔を上げてその声の主を見てみる。

「はよー」

手を軽く上げ近くにいるみんなに挨拶を振りまいていた。

背が高くてかっこいい沼田君だ。

このクラスの男子ナンバーワン。

ライトノベルの主役は、沼田君だね。むしろ沼田君しかいないね！
席に着く沼田君を目で追う。

沼田君が座った瞬間、そこに人だかりができる。

男子も女子も、みんな集まる。

沼田君はいつもいつでも人だかりの中心だ。すごいや。

……僕なんか、背も低いし、かっこ悪いし……。

僕はいつもいつも人だかりの外の外だ……。すごくないね……。

所詮は主役とページ数。憧れることもおこがましいことなんだよ。僕は、人生のページ数らしく、誰にも気づかれないように本の世界に没頭した。

茶髪で男子にしては長い髪。でも全くうつとおしくない、完璧にセツトされたような髪型。噂によれば、自然とそうなるらしい。

小嶋君と同じバスケ部で、一年生にもかかわらずレギュラーを任されるすごい人。

当然背も高く、運動神経は言わずもがな。しかも部活だけに打ち込んでいるわけではなく勉強だってお手の物。楠さんの男子バージョンと言つても過言ではないね。

凛々しい瞳に凛々しい眉。凛々しい鼻に凛々しい口元。毛先を見ても凛々しいよ。

しかも優しい性格で沼田君の悪口を聞いたことがない。完璧な女子楠さんに対する嫉妬はよく聞くけれど、完璧な男の子沼田君に対する嫉妬は全然聞かない。なんでだろうね？

かつこよくて、勉強ができる、運動もできる。しかも平等に接することのできる才能を持つていて、みんなとすつゞく仲がいい。（少し辺りを確認して楠さんがいないことを確認させていただきます……。うん。向こうの方で話しているね……）

沼田君は、楠さんのように『平等に親切』のお面をかぶっている訳ではなく、根っこから平等に親切。（……「い、ごめんね楠さん……」。少し悪口を言つてしましました……）

明るい性格で、一緒にいる人をいつも笑顔にしている。

当然モテる。モテまくりだよ。

一説によれば毎日一人のペースで告白に来るらしい……。多分、それは嘘だけだ。

これだけ凄いのに、一切調子に乗らない。調子に乗つてもよされうなのに、調子に乗らない。すごい。

みんなに優しくて、みんなに好かれ、みんなの笑顔を作れる沼田君。

……でも、僕はほとんど話したことがない……。

だ、だつて、こんなすごい人となんか話せないよ。僕なんかが話しかけたら、沼田君のイケメンオーラが散つてしまうよ。そんな罰

当たりなことできないって。

……ああ、憧れてしまう。

僕は離ちゃんのお兄さん、國人君にも憧れているけれど、沼田君にも憧れています。

一人が似ている訳ではないけれど、二人に憧れている。

二人とも、『男』っていう感じがするね。

僕も男らしくなりたいよ。

少し自己嫌悪中です……。

僕が自己嫌悪になつていようがいまいが、そんなのお構いなしにチャイムが鳴り先生がやつてくる。

「席につけー」

先生が教室に入ってきた。

あ、まだ朝だつたんだ。

先生が教壇に立ち、教室を見渡す。

「……全員来てるな」

僕も一応全体を眺めてみる。うん。全員いるね。

先生が全員いるのを確認した後、今日の連絡事項を伝えました。

「今日の四時間目はロングホームルームだ。そこで、今日はずっと決まらなかつた副委員長を決めようと思う。その時に話し合いを早く終わらせられるように、お前たちの間で大体決めておいてくれ。決められなかつた場合、俺が勝手に任命するからな。……まあ、決まらないだろ？ナビだな」

副委員長。文化祭へ向けて忙しくなる楠さんを傍でサポートする仕事。男子全員が狙つてゐるよ。あ、僕以外だよ。

「じゃあ、よく考えておけよ」

先生が教室を出て行つた。

副委員長か……。まあ、僕には関係ないんだね。

数学、英語、古文と終わり、いよいよ四時間目のロングホームルーム。LHRだね。

今日の話し合いは副委員長について。誰が楠さんをサポートするのかがとうとう決まる。これまで誰も一步も譲らなかつたから、多分、先生が決めることになるんだろう。チャイムとほぼ同時に担任の先生がやつてきた。

「席へつけー」

いつも同じセリフで教室に入つてくる先生。

楠さんの声で起立礼。

みんなが着席する。……決戦の火ぶたが切つて落とされた。

「えーっと。それで、誰が副委員長をするのか決めたか?」

みんな無言。

「えーっと、じゃあ、やりたい奴

先生の声に男子全員が手を挙げた。あ、僕以外だよ。……と、思つたけれど、沼田君も上げていなかつたから、僕と沼田君以外だね。

「あ一分かつた分かつた。手を下ろせ。やっぱり男子全員だな
え、僕と沼田君は上げてないよ。

「じゃんけんでもくじでもいいが、それじゃあいい文化祭は作れな

いからな。やつぱり、俺がふさわしいと思つ人間を指名したいと思う。それでいいよな」

教室内の空氣は「まあ仕方ないか」と、それを受け入れた。でも、大体誰が指名されるか分かるよね。

「じゃあ、そいつわけで――」

「ほんなの、当然。

「沼田」

沼田君に決まつてこるよ。

「え、俺つすか？」

「ああ、沼田にお願いしよつと思つ」

悔しがつてゐる生徒も大勢いるけれど、でもその人たちも「まあ、最初から分かつていたし……」とあきらめがついていよいよだ。クラスの雰囲気はもう沼田君が副委員長になるのを認めていた。

「沼田ならうつまくやるだろ？　じゃあ、沼田。頼んだぞ」

「すじいや！　楠さんと沼田君の完璧コンビだ！　一体どんな文化祭になるんだろ？　楽しみでしかたないや！」

沼田君が先生の指令を受けて、ぽつぽつと頭を搔きながら苦笑いで言つた。

「俺、あんまりやりたくないんですけど……」

「…………え？」

教室中が、あっけにとられた。当然僕も。

「…………いや、でも、お前以外に適役はいないぞ。どうして嫌なんだ？」

「え、だつて、部活ありますし。そもそも、俺やりたいって言つてませんし」

教室中がざわめく。自分にチャンスが回つてくるかもしれない……！　と、思うことよりもまず沼田君が断つたことがみんなに衝撃を与えた。

全員どこかで分かつていたから。
沼田君と楠さんなんだろうなーって。
でも、本人が、見事に拒否をした。

「ぬ、沼田？　でもな、お前以外には、みんなをまとめられる人間いないと思つんだがな？」

「いやー、楠さんだけで充分つすよ。それに、俺以上の適役がいると思つんすよね」

「沼田以上の適役？…………ああ……なるほど……。じゃあ、沼田が指名した奴が副委員長だからな。異存はないな」

教室全体が頷く。そしてみんなひらひらと小嶋君の方に視線を送っていた。

きっと、そうだね。男子ナンバーワンの小嶋君なら、男子をまと

めいだねと思ひし楠さんとも仲良くなれりと思つた。

小嶋君も分かつてゐるのか、とてもいい笑顔で胸を張つて沼田君の使命を待つていた。

「じゃあ沼田。指名してくれ

「はい。俺は佐藤がいいと思^{おも}います」

沼田君の指名を受けて小嶋君が立ち上がった。

「えー、しょうがねえなあ……沼田が言つなら俺が……つて、は?」

「よし、沼田が言うのならしゃうがない。小嶋が……って、は？」

教室中が、疑問に満ちた。当然僕も。いや、僕は誰よりも疑問に満ちているね。今この瞬間、僕は世界中の誰よりも疑問を抱いていると自信を持つて言えるよ。

「……………」

だから僕は、みんなからの視線に、一言だけ返した。それしかできなかつた。

みんなより早く我に返つた先生が沼田君に聞く。

「え？」
「いえ？」
佐藤が適任だと思いますけど」

「……こほん。えー、沼田？ 文化祭は、一年に一回、合計二回あるわけだが、高校一年の文化祭は、一回しかないんだぞ？ それを、佐藤なんかに任せていいいのか？」

「へ……。本当のことだけれど、なんだか悲しいよ……。

「任せられたと黙つから佐藤がいこって言つたんですけど」

「…………沼田君！ 沼田？！ 落ち着いて考えてみる！ 沼田がやつた方が、文化祭が楽しくなると思わないか？！ 佐藤もそう思つよな！」

「あ、は、はい」

本音。クラスのみんな、当然そう思つてるよ。

……沼田君以外は。

「先生、よく言つてゐるじゃないですか。部活をしていないのは佐藤だけだから佐藤頼むぞつて。時間が一番とれるのが佐藤なんだから佐藤が適任だと思つたんすけど、ダメっすかね？」

「…………えー、あーいや……。でも……佐藤、か？」

みんなから視線をもひつ。僕は慌てて机を凝視した。

「…………ほり、佐藤だつてやつたくなさうだし、無理にやらせなくても……」

「え？ 佐藤、嫌なの？」

「え？！」

突然沼田君に問いかけられた！ き、緊張しちゃうよー。そもそも話しかけてきたのが沼田君じゃなくてもこの状況なら緊張しちゃうよー。

「え、いや、僕、その……」

「佐藤！ 嫌だよな！」

先生が力強く言つてくる。

「は、は、はい……」

同意をせられてしまつた……。でも、嫌だし、これはありがたいね。僕やりたくないし、まとめられるはずないもん。

僕は、顔を伏せ拒否の体勢をとつた。これで、大丈夫だね。それを見てかどうかは、顔が見えないからわからないけれど、沼田君が残念そうに言つ。

「そつか……佐藤したくないのかー。佐藤が適任だと思つんだけどなあ。なら」「

ふうー……。無事に、回避、できたかな？
安心していた僕だつたけれど。

最後まで、何が起こるか分からぬのが、LHRらしさよ……。
誰かの声が僕の安心を壊す。

「ちゅっと待てよ」

誰だらう？と、伏せていた顔を上げてみる。

小嶋君が呆然と立ち渴くしたままだけど、今の声は違うね。じゃあ、誰だらうかと教室を見渡してみると、教室の後ろの方にもう一人立っている人物を見つけて了。

雑ちゃんだつた。

「おに担任。お前、いつも無理やり優大に仕事やらせてるじゃねえか。副委員長も無理やりやらせろよ」

雑ちゃんが、格好良く、立つている。

「……それとこれとは話が違うだらう？」

「違わねえよ。なんで雑務は嫌がる優大にさせるの？」「ううオイシイ役を優大にやらせねえんだよ」

ひひひひ雑ちゃん？！ 雜ちゃんは、僕の、味方なの？！ 敵なの？！ どっちなの？！ 僕やりたくないんだよ！？

「あのなあ、こんな大切な役、佐藤に勤まるわけないだらう？」

「てめえ優大を馬鹿にしてんじゃねえよ！」

「な、なんでお前がキレるんだ！」

「あつたりまえだらう！ 友達なんだから！ ……ともだち……ですか……」

急に落ち込んだ！ どうしてだらう！

「友達なのは分かつたけどな、この仕事はクラス全員に関わる仕事なんだぞ？ 佐藤には荷が重すぎるだろ」

「んなのやつてみねえと分かんねえだろー。」

「分かるだろ。無理無理」

「て、てめえ……！」

「大変だ！ 離ちやんが爆発寸前だ！ ビックリ！」

「俺は佐藤なりやつ遂げらわると黙つたびなあー！」

一触即発の教室に、沼田君の声。

爆発寸前だつた離ちやんも、絶対否定派だった先生も沼田君を見る。沼田君は続ける。

「だつて先生から任せられた仕事けやんとしてるし、文句の一つも言わないし。こんな责任感のあるやつ、佐藤以外にいないと黙つけど」

離ちやんの顔が一気に明るくなつた。

「沼田……。お前分かつてんじやねえか！ そりだよなあー。」

先生の顔が一層暗くなつた。

「沼田……。お前何もわかつてないな。そりじやないんだ」

「てめえ担任ー。エリートだよー。」

「あんな、佐藤に仕事を頼むと、いつも『暇じゃないんで』って言つて断りつとするんだ。それを俺がやらせてこらやるだけで、责任感とは無縁の人間なんだぞ佐藤は」

……。僕、死んでもいいかな。

「てんめえ……！ 勝手に優大に仕事を押し付けておいてその言いぐさはなんだよ……！」

「本当のひどだから仕方がないだろ？ なんだっけか？ 『ご飯を作らなきゃいけないからとか、そんな言い訳をしていたな。そんなことあるわけないだろ？ なんで佐藤が家族のご飯を作らなきゃいけないんだ。すぐウソついて逃げようとするんだ』

「嘘じゃないのに！ ちょっと、本気で涙が出てきちゃった……。

「先生」

沼田君でも離ちやんどもな一聲が聞こえてきた。今度は誰だらうかと、涙田で見てみる。

「先生。佐藤君は自分で弁当作つてきてこるみたいですよ」

楠なんだつた。

「両親が共働きしきつて、できる事は自分でやつてこるようつです。なら晩御飯作つても不思議ではないはずですよ」

「……それが本当かどうか分からぬだら？」

「独り言で早く帰らなきゃいけないって言つてしまつたから、暇じゃないといつのは多分嘘ではないかと」

「……そ、そうか。でも、な

「それに私も佐藤君が適任だと思います。佐藤君なら、私の命令を……じゃなくて、私の指示をよく聞いてくれますし、一番効率がいいです」

「…………」

先生が黙つた。

う、う……。僕、とっても嬉しいよ……。クラスのトップスリーがみんな僕の味方だなんて……。

でも僕、副委員長したくないんです――。

うーん、と、唸つていた先生が顔を上げ、汗を飛ばしながら提案した。

「……じゃ、じゃあ、こうしよう。佐藤に決めてもらおう。うん。そうだ。みんなが信頼している佐藤に決められ貰えればいいだろう？自分でやるものいいし、誰かを指名するのもいい。うん、いい考えだな」

「はあ？　てめえ何言つて　」

「佐藤！　それでいいよなー」

「え、え？」

「自分でぜひやりたいの言つのない、自分でやつてもいいし、誰か他の奴が適任だと思ったら、そいつを指名すればいい。な？ それでいいよな？」

「……はあ」

楠さんが呆れていた。

「んなの自分がやりたいなんて言つわけねえだろ。」

離ちやんはキレていた。

「まあ、俺はそれでいいと思つナビ」

沼田君は納得していた。

「よし、佐藤！ 指名してくれー！」

え、あれ？ いつの間にか僕が指名することになってるー。僕了解してないのにー！ つていうか、僕、ここまでまともな発言してないよーなのに問題の中心になっちゃってるよー。なんだこれ！

「さあ。佐藤。早く指名してくれ

僕がやるんじやなくて、指名することは、決定なんだ。やりたくないから、いいんだけど……。

僕は誰がベストなのか教室を見渡してみる。みんな僕に注目していたけれど、一番目についたのはずっと立ちっぱなしだった小嶋君だった。小嶋君が、僕を睨み付けていた。

眼力で訴えてくる。「俺を指名しや……」。つい……怖い……。

「ほり、佐藤。早くしてくれ。早く誰かを指名してくれ

急かす先生。い、い、ひ……ひくじ考えさせてよ……。

「うふ。考えるまでも無いよ。この状況で、誰を指名しなきゃいけないかは決まつてゐる。僕の命がかかっているんだからね。

「あ、あの……僕は……」

きっと、みんな納得してくれる。この選択以外無かつたって。

「僕は……」

怒られるのは、怖いからね。

そして僕は、みんなの視線を一身に受けてしまつ。

「僕は、有野さんがいいと思こます」

「…………はっ」「…………」「…………」「…………」「

全員が、僕を馬鹿にするような目で見てきた。や、やめてよ……。そんな目で見ないでよ……。

「……あー、佐藤？ 男子で、だぞ？」

「え？ で、でも、副委員長は男子つて決まつている訳じゃないですし、その、有野さんがやれば、多分、みんなまとまる」と、思つん

です、けど……。楠さんと有野さんの一人なら、です

僕が離ちゃんを選んだ理由を聞き、クラス中から「ああ～」と納得の声が聞こえてきた。よ、よかつた。これでみんなに怒られなくて済むね。

でも、一人だけ激怒していた。

「…………てめえ優大コラ。仕返しかよ……！　自分が副委員長に推薦されたことがそんなに気にくわなかつたのか？」

「…………ても怒つていた！　優しい離ちゃんの顔じやない！　普通に怒つてるよー」

「ち、ちち違うよ？！　仕返しどかじやなくて、ほ、ほんと、离ちゃんがやつた方がいいと思つたからー！」

「てめえみんなの前で離ちゃんとか呼ぶな！？」

「離ちゃんの顔が真っ赤になつた。な、なんだか、僕も恥ずかしいけど、幼馴染なんだから、いいよね。

「あー。じゃあみんなも納得したみたいだし、副委員長は有野で

「はああああ？！　なんで私がしなくちゃいけねえんだよー。男どもやりたがつてたじやねえか！　私はしたくねえよー。」

熱い離ちゃんの心に対しても先生はとっても冷めきつた心。もう先生の中では決まっているみたい。

「こやあ、でも、かなりいい落とし Bieberだと想つたけどな。俺の推

薦した沼田が拒否して、沼田が推薦した佐藤が嫌がって、佐藤が推薦した有野がやる。しかも、クラス全員それで納得しているし、かなりいい選択だと思うな

「私の意志が一切入つてねえよ！ 沼田と優大の拒否が認められて私の拒否が認められないのはなんでだよつ！」

「いやあ、みんなも有野がいいと思うよな」

みんなが無言で頷いていた。

男子達は自分以外の男子がするくらいなら女子がした方がいいだろつと思つてゐるし、女子達は色々と思つとこりがあるだろうけれども最終的には離ちゃんがするのが一番いいと思つてゐるのだろう。多分このまま嫌がる離ちゃんに決まつてしまつだろつ。これで決まらなければきっと一生決まることは無いと思うよ。

でも、このまま決まつたら僕、絶対に離ちゃんに怒られるね。ものすごく睨まれてゐるし、僕の命はもうないのかもしれないよ。

「……。ああ、分かつた。分かつたぜ担任。やつてやるひじやねえか！」

「おお、やつてくれるか。助かるよ。いい文化祭になるな」

離ちゃんにはまだ何か言いたいことがあるらしく、机に手を突き先生を睨み付けていた。

「どうした？ 何があるのか？」

「どうした？ 何があるのか？」

「……やってやる、面倒くせえけども受けたやる……！」ナビ、

その代わり・・・

思いつき机をたたいた後、僕を指さしてきた。

「優大も道連れだ！　あいつも副委員長だ！」

「……。えつ？！　ええつ、ななんなんで？！」

「もとはと言えば優大のせいじゃねえか！　お前も苦い思いをしろ！」

「え、ええー？　で、でも、先生も、僕が副委員長するの嫌ですよ
ね？　そもそも、副委員長は、一人ですよね？」

「え？　いや？　一人ですればいい」

「何それ！　さつきまであんなに嫌がっていたのに！」

「ぐ、楠さんは？！　副委員長が一人もいたんじゃあ邪魔なんじゃ
ないかな？！」

「私は全然いいよ。むしろ、便利がいいかな」

……。

まあ、そうだよね。有野さんがいるんだから、ほかに副委員長が
増えたところで、問題が起きるわけないよね。多ければ多いほど、
便利だよね。

だから、誰も、拒否、しそうこ、無いですね。

「じゃあ、そいつはわけで

そう言つわけで、僕は、いろいろな人からの恨みの視線を貰いながら、副委員長になりました……。

ロングホームルームは、最後まで何が起こるか分からぬみたいですね……。

平凡な人生の終わり

「まさか君が副委員長にならうとはね」

ロングホームルームが終わって、すばるに楠さんに連れてこられた屋上。

教室を出るとさすに受けた男子全員の視線が非常に痛かったです。おまけに離ちやんもめちやくちや睨んでました。怖かったです。

「僕もこんなことになるとは思にもしなかった……」

昨日のよひ、一人屋上の端に腰掛け弁当を食べる。

「他の男子があるより、佐藤君は『ントロール効く分よかつたけど。それにしても、有野さんね……』

「え、やつぱり嫌なの？」

「やつぱり何。嫌だなんて言つてないでしょ」

「あー、『メン』……」

「君は今までそう思つてたんだね。私が有野さんのことを嫌つているつて。嫌つていなつて言つた私の言葉信じていなかつたんだね」

「やつぱりわけじゃないよ！ なんだか意味深な言い方だったから気になつて……」

「ふーん。まあ、いいでしょう。信用してもらおうだなんて思つてないし。私と君の間に信頼関係は必要ないもんね。大切なのは主従関係」

「う……。僕召使なんだ……」

「なんで人なの。おこがましいよ」

「え！ 犬ですか！？」

「……」

「……？ あれ？」

「ほ、僕、犬扱いなの？」

「……」

「あれ……。無視されるよ……。

「そ、その……」

「……」

「聞こえてないのかな……。……そんなことあり無いよね……。

「……あ、の……」

「……今話しかけたらダメなのかな……。

ものすごく寂しい不安に襲われ始めたところで、やつと楠さんが

声を出した。彼女は

「知ってる?」

「え、な、何が?」

「犬の無駄吠えはね、無視するに限るの」

「えつ、今僕しつけられたの?...」

「...」

「...」

「そんなことより、有野さんが副委員長になつたことだよ」

「あ、そうだったね」

「君はどういった目的で有野さんを推薦したの?」

「え、僕は一番いい人を選んだだけだけ...」

「ふーん? 他意はないと?」

「他意はない、です...」

そもそも、他にどんな他意が想像できるんだ? う。僕の頭の中が読まれたのか、楠さんが教えてくれる。

「たとえば、君は私と有野さんが仲が悪いと思つてこらねりうだし、

それを何とかしようつと一人を近づけた、とか

「あ、なるほど……」

「……別に誰でもよかつたんだけどね……。でもまさか有野さんと君になるとは思わなかつたよ。特に有野さん。絶対副委員長は男子になると思つてたんだけどね」

僕もやつ思つてました。

「女子と女子もどきが副委員長になる未来は見えてなかつたなー。
残念」

女子もどきて、僕、だよね……。うう……男子にカウンントされていないつて、すいぐ悲しい。

「佐藤君ー」

落ち込む僕を見て、楠さんがみんなの前で使つ可愛くて聞きやすい声で声をかけてくれた。

「佐藤君、この程度のことでの落ち込みないでー まけりゃダメー!」

「く、楠さん……」

なんて優しいんだろつと、感涙にむせびなこと思つたら。

「田障りだから

喜ぶ僕を見て、楠さんが僕の前で使つ可愛いけれど感情のこもつ

ていないうで突き放してくれた。
ありがとうございます。

「それで、話の続きなんだけど」

「え、うん」

「少し前ね、兄とファミリーレストランに行つたの」

……わつきの話と全然関係ない話だけど……違うよって注意しながらも……いいんだよね？

「タミフルみたいな名前のお店」

「うん分かった」

「そこで面白いことがあってね」

……今自分でハードルを上げたね。

「私と兄が入店して、席に案内されたんだけど、私達にあてがわれたボックスの隣のボックス席に学生と思しき二人組が座っていたの」

「うん」

「私たちの席から遠い方のサイドに、私達が案内されている姿が見える奴が一人いたの」

「うん。一人は楠さんたちに顔を向けていて、残り一人は楠さんたちに背を向けているんだね」

「セリヒー」と。その私の顔を見た男をA、背を向けている一人のうち通路側の男をB、残りをCとするね

「う、うん……」

世間話でABCのキャラ分けが必要だなんて、いったいどんな話なんだね……。

「Aは私の顔を見て、すぐ気持ちのいい気持ちの悪い笑顔を作ったの」

……どっち？

「私は可愛いから、見ればそう言つ反応もしたくなるし仕方がないけれど。でも気持ち悪いから私はAの顔を見なくて済むようにそいつに背を向けるように、BCと背中合わせになる方に座ったのね」

「うん……」

「この時点 desnanda Aさんがかわいそつ……。

「席についたと同時に兄がウザい話をしだしてね。興味のかけらも湧かない私は暇だったから背中の方から聞こえてくる話を盗み聞きする」としたの

「え? ...」

「なに」

「え、いや、なんでもないです……」

「Jの前、楠さん、電車内の携帯通話についての話の時、「盗み聞かせるのもよくな」と思つて「って言つてこたけれど……。今、盗み聞かれる」と云つたつて……。

「言つたことがあるなら言つてよ。やつらの約束でしょ。ばりすよ」

「あ、えっと、その……なんでもないです……」

「……ぜりふをみたいみたいだね……」

「ほ、本当に、何もないの！ 気にしないでー。僕、楠さんの話の続きが聞きたいなあ！」

「…………まあ、いいや。それで、後ろの話に聞き耳を立てたんだけじね、そこで思いもよらない話を聞いたの」

「思つてもひかない話……」

「一体、どんな話なんだろう。」

「すごい話と云つより、話している人の感性に感心したつてこいつ」と

「どんな話だったの？」

「最初はね、くだらない話ばかりしていたの。下世話な話。あーはいはいつて思つてただけど、Bが何の脈絡もなく『俺さあこの前、

親指を結構広い範囲でやけどしちゃって』つていう話をしだしたの。どうせまた『こんな傷を負う俺すげえ』みたいな話なんでしょうね。で呆れていたんだけど、全然違ったの』

「どんな話だつたの？」

「Bはね、そのやけどの傷を『子供のみつだ』つて言つたの」

「I」「子供?」

よく分からぬいや！」

「Bがね、『このやけどができるた時、すぐ痛い思いをした。それからしばらく痛みが続いて、それが終わったら急に痛みが引いたんだ。でも、安心していたら突然やけどがものすごい痛みを発しだして、それを我慢してしばらくしたらまた痛みが治まって。それを繰り返して、今はもうほとんど痛くない状態。これってさ、子供を育てることと似ているんじゃないかなって。産むのに激痛を伴つて、手のかかる時期を何度も乗り越えて、やつと落ち着いて。もうすぐ俺のやけどは独り立ちだ。俺は快適な老後を過ごせるといつわけなんだ』。そんな内容の話をしたの」

「そ、それは、すじいね」

「まさか傷を子供に例えるなんてすごい感性を持つているでしょ。確かに言われてみればそのかもつて、珍しく相手が男なのに感心させられてや。しかもそのあとBが『俺、このやけどに名前つけたんだ』つて言つたときには思わず吹き出しそうになつたよ。さらにつてその名前が、空から降る『雪』に茉莉の『莉』で『雪莉』だつて、『ユキリ』。なんでその名前なのかなつて、少し考えて、『湯きり』

だつて氣づいたときにはもうおかしく仕方がなかつたよ

「それは楽しいね。すうじこ人に出会つたね」

面白い人がいるなあ。

面白くつて、すうじくつて、僕は笑つた。

「いや、まだ笑いどころがじやない」

「えつ? !」

あれ? ! 面白かつたのに? !

「Bがその話をしている間、私の顔を見て一皿ぼれしてしまつたAが、明らかに私を意識した面白シッコミをしようと元気に空回りしているところが滑稽で面白かつたつていづ話」

「……」

やつぱり、最終的にAさんがかわいそうとこうの感想で終つた。

「なんなの? Aが面白いシッコミをしたところで私はAなんかに興味を示さないよ? それでも頑張る男の子つてなんなの? 興味があるならそつちから話しかければいいじゃない。なんで、面白ければ私のほうから話しかけるはず、とか思えるの? そんなのあり得ないでしょ」

「う、うふ……」

僕はよく分からぬけれど……。

「興味のない男に話しかけたりなんかするわけないじゃない」

「そ、 そうだよね」

「怒ってるよ……。どうやってなだめればいいんだろう……。

「あ、 そういうへば、 料理するんだつけ?」

「え? うん」

あれ、 また話が変わった……。もう怒ってないのかな。よかったです。

「オーブントースター本体にさ、 温める皿安つて書いてあるでしょ?
?」

「うんあるね。トーストとか、グラタンとか、おもちとか」

「私の家にあるトースターはね、トースト一分、クッキー三分、焼
きもち四分、冷凍ピザ四分、グラタン八分、冷凍フライドポテト十
分つて書いてあるの」

「す」いね。全部覚えてるんだね

「あんなのパツと見ただけで勝手に頭に入ってくるでしょ

……。僕には無理です。

「おかしくない?」

「え、え？ パツと覚えられない僕が？」

「そんなのはどうでもいい」

「……」「めでなさ」

「私が言つてこるのはその表記の統一性のなさ」

「え？ ……何か、おかしいかな……」

「おかしいでしょ。トーストは完成形でしょ？ 完成前は食パンね。焼きもちも完成形。でも、冷凍ピザと冷凍フライドポテトは温める前の完成前。完成形と完成前のものが混同してこるつていつのはどうなの？」

△さんの話から変わったけど、結局最後に怒る」とは変わりないんだね……。

……オープンの表記に統一性がない、かあ。でも……。

「う、うん……」

少しもやもやするとこぶを残しながら、とつあえず領いてみたけれども、

「何？ 言こたいことがあるなら言つて言つて言つて言つて言つて言つて言つて言つて！」

「お、怒られた！ 怒鳴られた！」

「あ、あ、あ、あの、僕は、その、購入者の為を想つて、分かりやすさを優先した結果だと思います！」

「分かりやすやん？」

「は、はい……」

「……」

楠さんが空を見上げて考えている。

その間に僕はドキドキを抑え込もう。あー、怖かった。
すぐに僕の方に顔を戻す楠さん。もうちょっと考えてくれてもよ
かつたけれど。

「……確かに、混ぜた方が分かりやすいかもね。パンより、トース
トの方がわかりやすいし、ピザより、冷凍ピザの方がわかりやすい
もんね」

「そ、そう、だよね」

「なるほど。別に統一する必要もないし、それなら分かりやすい表
記の方がいいよね」

「うん、うん」

「あれは私達の為を想つたメーカーの粋な計らいだったわけだね。
ああ、疑っていた私が恥ずかしい」

「ふー。よかつた。もう怒つてないね。」

「そう言つ優しい見方ができる君ならば、もしかしたら、私の抱え
てこる悩み、解決できるかもね……」

楠さんの悲しげな視線が屋上の地面を滑る。

「え、悩み……？」

楠さんが抱える悩み？……もしかしたら、みんなの前でいい人を演じている理由なのかもしれない。きっと、何か深い理由があるんだ。でも、僕なんかに解決できるのかな……。む、難しいよね……。

地面をさまよっていた視線を僕に固定する。

「……あのね」

「う、うん！」

解決できようができないが、僕にできる事は何でもしようつー

「佐藤君、四元徳って知ってる？」

「……四元徳？ ちよつと、分からぬい、です」

「人間が備えるべき四つの徳だつていうことなんだけど、その四つが、正義、知恵、勇気、節制なの。聞いたことない？」

「……ありません」

「だらうね

も、もしかして、一般常識なのかな……。

「その四元徳は、『國家』に当てはめたりするらしいんだ。いわゆる哲人政治。理性のある人間が国を治めるこ^トによつて、軍人は勇氣をもつて國を守り、市民階級まあ、私達でいいや私たちは節制をするようになるらし^いの。正義の独裁政治と言え^ばいいのかな」

「へえ……。そ^うなんだね」

初めて聞いたよ。

「いやいや、ちょっと待つてよつて、思わない?」

「え?」

「なんで私たちが節制しなくちゃいけないの?」

「え、え?」

「これじゃあまるで私達だけが節制しなきゃいけないみたいじゃない。まずは理性のある哲人様が節制してよ。そ^うしたら見習つから

「そ、う、なのかな……?」

「君はそ^う思わない? いくらい^い政治をしてくれても、上^うがやらな^いことを下^しに求めてもらつてもって

「う、うん……」

「私の解釈が間違つているのかもしだれないけれどね。哲人はどう思つ?

?」

「えっと、その」

「……正直に言えば、何とも思いません……。だって、よく知らないんだもん……。

「……はあ、君でも私の悩みにいたえる」とはできなかつたか……

「『』、『』めん」

「……。全く、佐藤君は役に立たないね」

「『』みんなさー……」

「……。……。ふうー……」

疲れたのか、膝の上の弁当箱を両手で包み大きく息を吐いた楠さん。

「……早く食べ終わつてよ」

「え、あ」

「まだ！ また楠さんの話に夢中でお箸を動かしていなかつた！ でも楠木さんのお弁当箱は空っぽだ。いつの間に……。

「あの、別に、僕を待たなくとも、帰りたかつたら帰つてもいいと思つよっ！」

「なに？ 邪魔だつて言いたいの？ 急かすなつて？」

「や、そんなこと言わないよ。もちろん、隣にいてくれるのは嬉しいけど、待たせるのは悪いから……」

「もう思つない早く食べて

「あ、そうだね」

僕は箸を動かした。

……。何で待ってくれるのかな。

「……」

僕はまじまじと楠ちゃんを見つめる。

「なに？ 箸を咥えながら私を眺めても私は食べられないよ？」

「え、あ、ち、違つよ」

じつと見つめるなんて、失礼だよね。

「えっと、その、聞いてもいいかな」

「この前も言つたけど、内容も何も聞かされないでそんなこと言わ
れてもうなづけるわけないでしょ。何を聞きたいのかを最初に言つ
てよ。佐藤君のそれ、絶対にいい事じやないよ」

「あ、ごめんね……。あの、僕を待つてくれる理由を聞いてもいい
かな……」

「……で、それを聞く……」

「い、嫌なら、別に言わなくとも……」

「……」
「言いたくない」とだつたのだろうか。

「言つよ。大した理由じゃないけど」

「ありがとう」

「佐藤君が草むしりをしてる時に、私先に帰つちやつたでしょ。あれ、すぐ申し訳なく思つてたからさ、どうやって償おうか考えていたの。そこで、一人寂しそうに飯を食べている佐藤君に気づいて、一緒に飯を食べてあげようつて。別にこれはただの自己満足だし、償いのつもりだから感謝とかしないでよ」

「僕なんかの為に、ここまでしてくれるんだ……。優しいね、楠さんは。」

「ううん。僕、嬉しいからお礼言つよ。自己満足とか、償いとか、関係ないよ。ありがとうって言いたいから、ありがとうっていう。本当にありがとうございます。おかげでお弁当がおいしく食べられたよ。やっぱり一人で食べるより誰かと食べた方がおいしいね」

「…………。やつ」

僕の答えが気に入らなかつたのか、楠さんが口をとがらせ空のお弁当箱に困惑のまなざしを注いでいた。

「あ、あの、楠さん?」

気になり、声をかけてみたけれど、楠さんからそれに対する反応をもらひつことはできなかつた。

「……」

仕方がないので、僕は急いで「飯を食べることにする。それが一番だからね。

「ねえ、佐藤君」

「え？」

ワインナーを口に入れようとしたタイミングで話しかけられた。僕はワインナーをつまんまだま楠さんを見る。

「佐藤君、その性格を少しだけ変えたら人生楽しくなるとゆづりつづり

「え？　え？」

空の弁当箱を弁当袋にしまった楠さんが立ち上がつた。

「その、どうつづりと……？」

僕を見下す楠さん。その眼はいつもより暖かい、気がした。

「田障りだから卑屈な性格を矯正してつて言つてるの

全然暖かくなかった！

「う、うん……。『めんね……』

「……。じゃあ、私戻るから。」「で、飯食べる理由がばれちゃつたら、もう『じやあ食べられないね。明日からはまた一人で食べてね』

「う、うん……」

「じゃあじゆつくつ

屋上から去っていく綺麗な黒髪を眺めながら、僕は心に生まれた半透明な疑問の正体を懸命に探つた。

楠さんが屋上を出て行き、一人取り残された僕もお弁当を食べ終え教室に戻つた。
そこから僕の人生は激変していく

銀色

結局心の奥底に感じた混濁した疑問の実態をつかみきれないまま、僕は教室に戻った。

教室の扉を開け自分の席に向かっている途中、僕の歩く通路に誰かが立ち塞がり進行が妨害された。

「？」

誰だらうかと顔を上げてみてみる。

腰に手を当て僕を睨み付けるように立っていたのはメガネをかけ、髪を銀色に染めた女子。

楠さん、離ちゃんと続く第三位の位置にいる前橋さんだ。

長い銀色を一度振り、また僕を睨み付ける。

「……あの……。何か、用？」

僕と同じくらいの背だけれど、僕を見下すように顔を上げ睨み付けていてるので妙に上から睨まれている気分だ。

「用事があるから君の前に立つていてるんです。ちょっとこてきてください」

そう言って、颯爽と教室を出て行った。

僕は訳も分からず後を追いかけた。

前橋さんはどこか落ち着いたところで話したかったようで、僕を最寄りの空き教室に迎え入れるとすぐに鍵をかけて入口を封鎖した。
……出口を封鎖したのかもしれないけれど。

鍵をかけすぐに僕の方を振り向き、苛立たしげに顔にかかつたメ

ガネをかけ直した。

「君は有野さんの何なんですか？」

「え、え？」

何を言つてこるのかよく分からぬ。

「どう聞へとでしょつか……」

「君と有野さんの関係を聞いているんです！ わたしと教えてくれ
れこの野郎つて言こますよっ！」

それは、もつ聞つてこると変わらないんじやないかな……。

「殴りかかる振りをしてもいいんですか！？」

振りなら、別に構わない氣もするナビ。

「えつと、僕は、離ちやんと」

「それです！」

前橋さんがグイッと距離を詰め僕の鼻先に指を突きつけってきた。

「え、え？！」

「どれ？！ まだ何も言つていなければ！」

「なんで有野さんを離ちやんなんかと呼んでいるんですか！ 私も

呼びたいのに…」

「それは、僕が幼馴染だから……」

「羨ましい！」

メガネの下の目が威圧的な光を放つた。

「えっと……」

「私だって名前で呼びたいんですねよ…」

そう言いながら僕のほっぺたを両手で抓つてきた。

「い、痛いです……！」

「うわやつて暴力を振るつてしまひほど憎たらしい人ですね…」

暴力と言えるほどつらに仕打ちでもないけれど……。

「こいつたこどうやつて幼馴染になつたんですか？…」

「う、生まれた時から……」

「才能だって言いたいんですか？！ 生意氣ですねー！」

「ち違つよー 運が良かつたなあつて…」

「私だって有野さんの事を『雛ちゃんつ』とか『雛さま』とか呼びたいのに、有野さんがやめろって叫つかから我慢していろんです！」

それなのに頬は…」

頬の肉をつまんだまま両腕を思いきり広げる。

「痛い！……、痛いよ、前橋さん……」

「うへ……。有野さんのバカ……」

痛がる僕に何の関心も示さず、メガネをはずしてハンカチで目を拭っていた。

「あの、その……」「めんなれー……」

僕の謝罪を聞き、ものすごい勢いでメガネをかけて僕を睨み付けてきた。

「仲が良くて」「めんなれー」「あみろって言いましたね！？」

「言ひてませんけども！？」

「ぐ、ぐぐぐぐ……！　まさかあなたのような男にバカにされるとは思つてもみませんでした！」

「バカにしていません！」

「……許しませんからね？　私から有野さんを奪つたら酷い目に遭わせる気になりますよ？」

酷い目に遭わせる気になるつづりの字は、酷い目に会わせるつづりの字じゃないんだよね？

「ほ、僕は、前橋さんから離ちやんを奪おうだなんて、考えてないよ?」

友達が取られたくないってことかな。でも、友達はひとかどらないとか、そう言つものではないと想つよ。

「……勝者の余裕ですか? ……私が寛大な心を持っていると勘違いしているようですね」

「えっと、その……」

何を言つても、僕の声は謎のフィルターを一度通つてから前橋さんの耳に入つていくようだね。

「私から有野さんを奪つたら」「

言ひや否や、左手で僕の胸ぐらをつかみ逃がさないように固定し、右手に持つた何かを僕の頸の少し奥辺りに突き付けた。

何を突きつけられているかは見えないので分からぬが、少しうがつた金属のような感触だつた。

「切り裂きますから」

「う、ごめんなさい」

何を突きつけられているのか分からぬし、何故こんなにも怒っているのか分からなかつたけれど、とにかく謝ることしかできない状況だつた。

「注意してくださいね。有野さんが少しでも嫌な思いをしたらい

頸の奥に添えられた何かを軽く突き立てる前橋さん。そこに鋭い痛みが走り僕は顔をしかめた。

「容赦しませんからね？」

メガネを光らせ、口元に冷たい笑みを浮かべた後、前橋さんが僕を突き飛ばした。

よろめき尻餅をついた僕。目線は自然と前橋さんの右手に吸い込まれていた。

「」

前橋さんが握っていたのは銀色の柄のハサミだった。

前橋さんの髪の毛と同じ色のハサミ。

僕は、それを突きつけられていた。

ハサミがゆっくりと開き、勢いよく閉じる。

「刺しますから」

今まで暖昧な言い方をしていた前橋さんだつたけれど、これは、言い切った。

そして、前橋さんが空き教室を出て行つた。

僕は昼休みが終わるまで自分の教室に帰れなかつた。

前橋未穂さん。

銀髪ロングで身長は普通。

入学した当初は黒髪だったけれど、ある日突然銀色に染めて学校にやってきた。

それまで優等生として振舞っていた前橋さんのその行動は色々な人に衝撃を与えたが、そこまで話題になることは無かつた。優等生の突飛な行動に驚きはしたもの、僕らの学校は大変自由な校風なため、髪を染めてはいけないという校則がそもそも存在しないので問題があるわけでもない。

この前の高校初めての一学期中間テストでも普通に一番をとつていたので成績に影響が出ている訳でもないみたいだし。

ただみんな驚いただけ。

優等生にしか見えない顔つき、優等生にしか見えない佇まい、優等生にしか見えない振る舞い。でも髪の毛がすごい色。

それが衝撃だった。

でももうみんな慣れたようで今更髪の毛に触れる生徒はない。当然僕も見慣れたよ。

前橋さんは離ちゃんと仲がいい。だからよく金色と銀色でセット扱いされることもあるみたい。

メガネの下には怒っているような目。離ちゃんとは百八十度違う目。

強気な顔にまじめな性格。一見したら委員長に見える。多分これまで何度も委員長を務めてきたのだろうと思つ。委員長っぽいのは見た目だけではなく、行動も委員長っぽい。楠さんがいなければ、多分前橋さんが委員長になつていただろう。

その面倒見の良さから女子達に慕われている。行動力もあり、責任感もあり、何事もそつなくこなす能力を持っている。だてにこの

凄い人たちが集まるクラスの女子三位につけている訳ではないということだね。

……ただ、男子に滅法きつい。

男子と女子とで全く扱いが違う。そのせいで、男子からの評判はあまりよくないみたい……。

もつと仲良くすればいいのになと思つ。

……。僕は、うん……。嫌われているといつが、憎まれていたね……。

今は放課後。

僕は昼休みに起きたショッキングな出来事からまだ立ち直れないでいた。

優等生の前橋さんが……あんなことをするなんて……。

「おい」

僕、何か悪い事したのかな。だから怒つてるのかな。

「おいー！」

僕の机が叩かれた。

「え、なにこじと?ー」

驚き、机を叩いたその人を認めた。

「ー」、小嶋君……

「無視すんじゃねえよ」

気が立つてゐる様子の小嶋君が高い位置から僕を睨み付けていた。

「『めん……』

「……ちよつと來い」

「え？」

着席したままの僕を置いて小嶋君が教室を出て行った。着いて行かなきや怒られちゃうね。急いで小嶋君を追つた。

その十分後。僕は校舎裏の地面に呆然と腰を下ろしていた。

「……いたい」

小嶋君にお腹を殴られてしまった。そのあと倒れ込んだといふ、右腕を蹴り飛ばされてしまった。痛い……。

むかつくつて言つていたけれど、多分僕が副委員長に小嶋君を選ばなかつたことで怒りを買つてしまつたのだろう。

だから、殴られて、蹴られたんだ。

しようがないよ。

しようがない。

この前胸ぐらをつかまれた時以上に頭がフワフワしている。お腹も腕も痛いけれど、あまり気にならない。

夢の中にいるような。

何を考えていいいのか分からぬ。

ぱーっと座つていた。

「ごめえ！」にいやがつたか！」

突然聞こえてきた声に飛び上がり、僕はあたりを見渡した。

「優大てめえよくも私を巻き込んでくれたなー？」

「離ちやんだ。離ちやんがものす」に勢いで僕に近寄ってきた。

「なんで私を副委員長なんかにいやがつたんだよー。」

離ちやんが、座り込む僕を睨み下ろしている。

「優大のせいでなんか大変なことになっちゃったじゃねえか、……ー。」

「あ、ごめんな」

怒りられているのだからされど、よく分からない。

「なんなんだよ本当にお前は！」

「うそ」

今返事をしたのかどうかも、僕の中では定かでない。

「……？」

「……」

「……お前、やがつた？」

「え？ なに？」

「……なんかあったのか？」

離ちゃんが腰を落とし座り込んだままの僕と田線を合図せる。

「え？ 何にもないよ？」

「何もないわけねえだろ。どうした？」

「な、何もな……」

「お前嘘つかないって言ったじやねえか。嘘つくなよ

「……」

睨み付けられていくよだよだ、その眼まとももまつぶくべで僕は見ていられなかつた。

「そ、その、心配するようなことは、何もな……

「……本当か？」

「うそ

「……分かつた

離ちゃんが立ち上がつた。

「私が心配するようなことは何もないんだな」

「うん」

離ちゃんを見上げる。

その時ふと、突然お昼休みの前橋さんとの一件を思い出してしまつた。

「國語」

「どうした?」

難ちやんが僕を心配してくれているこの状況を田撃されたら前橋さんに切り裂かれてしまうのではないでしょうか？！

「ほほほ僕はまだだ大丈夫だからああああああ」

がくがく震える膝を抑え込みながら立ち上がる。

「お前全然大丈夫じやねえよ！ やつぱり何かあつただろう！」

「ちが、違うのー。これは、違うのー。その、鶴屋やんが心配する
よつな」とは一切ないからー。」

両手を突出し否定の仕草。

「顔真っ青だぞ？！ 何に怯えてるんだよ！」

「法えてないですよ?」

「おひるまくつじやねえか!」

ま、まじ。不自然過ぎた!
僕は急いで話をそらす。

「その、離^{はな}ぢやんつて、前橋さんと仲良いよねー?」

「……話をそらすなよ

うぐ。

「……まあ私に聞こたくなこいつでいつもなら、別にいいけど……」

「うへ……。悲しませてしまつた……。」めんね……。

「んじゃま、その話に乗つてやるか。未穂と仲がいいつて? そつか?」

「え? あれ? いつも一緒にいるよな

「あー、まあ未穂がつっこべくるかわな」

「別に仲良じじゃなの?」

「仲良しひ見えるならわづなのかもしねねえなあ

「えつと……」

前橋さんとの温度差に困惑^{くわん}を感じさせないよ。

「未穂の事よく知らねえしな」

「えつ、あんなにも長い時間を過へる事あるの?」

本郷「あつと一緒にいたような気がするけれど……。

「入学してからこれまで優大の事しか見てなかつたからなー」

「え?」

それは、あの時の理由を説明するタイミングをうかがつていたつてことかな。そうだよね。

「他の奴らの」とはあまつ氣にしてなかつたわ。なに? 私未穂に気に入られてんの?」

「そ、そつみたいだよ?」

強烈にね。

「ふーん。あー、もしかしたらそれで髪を銀色にしてんのかな?」

「あ、そうかも」

雛ちゃんが髪を染めているから前橋さんも髪を染めたんだね。でも、それだったら同じ金色にすればいいのに。

「なんか悪い事したなあ。悪影響」「えへんじやん、私」

「そんなことないと思つよ」

「そんなことあるんだよ」

自分の前髪をつまみそれを見る離ちゃん。

「……やっぱり髪染めた方がいいのかなあ？」

ぱしづかと僕に視線を送つてくる。

「でも、似合つてゐるよ？」

「ひくへ～。そうかあ？」

「うん。でも、離ちゃんなり向でも似合つよね。絶対

「ひくへへへ～！ んだよ照れるじゃねえか！」

ぱしづかと小嶋君に蹴られた右腕を叩かれた。いたい、痛いよ。

「優大の好きな色とかあんの？ あればそれにしてもみるけど」

「僕の好きな色？」

「うーん。空の青い色が好きだけど、そんな感じの色は髪には合わないよね。

「えーっと、あ、楠さんみたいな綺麗な黒髪も素敵だよね」

突然不機嫌な顔になつた離ちゃん。

「……」

小嶋君に殴られたお腹にパンチをもらつた。小嶋君のよつ、痛かつたです。思わず足から崩れ落ちてしまつ僕。

「な、なこ、するの……？」

「別に。蚊が止まつてたんだよ。蚊が」

「蚊なう、そんなに、強めに殴る必要なかつたよつな……」

「蚊との対決はスピード勝負だろ！？ 逃げられてそいつにさされてもマラリアにでもなつたら大変だらうが！ なんだよ、文句あんのか」

「な、無いです。危険を未然に防いでいただきありがとうございます」

「ならううだうだいうんじやねえよ。で？ お前は若菜の黒髪が好きなんだつて？」

「え、いや、その、楠さんの髪は綺麗だなあ……とか……」

「楠さんの髪」は『綺麗ねえ……。まあ？ 染めて痛んだ私の髪なんて綺麗じやねえんだうつけどなー。』

「そ、そんな」と言つてなこよ。舞ちゃんの髪も、綺麗だね

「後付でそんなこと言われて喜べるわけねえだなー。……やうこや
お前、ここ最近若菜と飯食つてゐみてえだな？」

「あ、うん」

「へー。ふーん。そうですかー。やつぱり男はみんな若菜みたいなやつが好きなんだな。私みたいな金髪似非ヤンキーは田にも留まらねえよなー」

「ち、違つよ。そんなことないよ。離りやんもモテるでしょ?」

「モテねえよ!」の野郎。嫌味か?」

「嫌味じゃないよー。ほ、本心だよー。」

といひで僕はなんでこんなにも怒られていくの?

「別にどーでもこーけどー」

へたり込んでいる僕を一睨みした後、背を向けて校舎裏から去つて行つた。

「うつ……。僕踏を怒らせてるよ……」

楠さん前橋さん小嶋君離ちゃん……。僕、すごい人たちを怒らせているね。みんなクラス序列の上位にいる人たちだよ。底辺の僕なんかがこれらの人たちから怒りを買つなんて愚かにもほどがあるね。

妙な感慨深さを感じながら、僕も校舎裏を後にした。

夜の自室にてパソコンをいじる。もちろんスカイペだ。

ユウ・そんなこんなで僕副委員長になつたんだ。

まりも・それはすゞ。信頼されているね

ユウ・違うよ。僕が暇そうな人間だったからだよ。本当に信頼されている人たちがみんな断つたから一番暇な僕になつたんだ

まりも・そんなに謙遜する必要はないよ。君はいい人そだだからね

ユウ・それは勘違いだよ

まりも・そうは思わないけどね

パソコンを通じてのコミュニケーションは気が楽だよね。面と向かわないので話せるからかな？ あと電話みたいに声じゃなくて文字で会話するから気が楽だつていうのもあるんだね。

僕は電話が苦手だ。

すぐに何かを言わなきやいけないし、それなのに相手の表情が見えないから何を言つていいいのか分からぬ。面と向かつて話すのも苦手だけど、顔つき合わせて会話するのならば表情から何かしら情報が読み取れるし、メールやチャットなら考える時間があるから失礼なことを言つことも少なくなる。顔見えないし考える暇がない電

話は何よりも「ソーシャル・ケーション取りづら」よね。……僕だけかもしれないけど。

スカイペって素敵。

ユウ・副委員長つて何すればいいんだろう。僕みんなをまとめられないよ

まりも・まとめるのは委員長に任せておけばいい。君は君なりに頑張るだけでいいんだよ

ユウ・僕何もがんばれないよ。何もできない

まりも・君なりにさ。何もできないなんてことないだらつ

ユウ・何もできないよ。僕不器用だもん

まりも・関係ないさ。頑張る気持ちさえあればね

頑張る気持ちか……。それすらも無いかも……。やりたくないなかつたから……。

でも、頑張らなきゃいけないんだよね……。憂鬱……。

スカイペをしていたのに、最終的にそれは嫌な気持ちをもたらしてしてきた。残念賞だよ……。

狂った木曜日

朝。学校に来た僕は真っ直ぐに小嶋君の元へ向かった。

「あ、あの、小嶋君」

「……」

「おはよう……」

「……」

「その、昨日「めさんね……」。その、小嶋君を選ばなくって……」

「……」

「……あの」

がたつと、小嶋君が椅子を鳴らして勢いよく立ち上がった。

「……」

無言で僕の胸ぐらをつかんで、教室の外に連れて行かれた。
そのままトイレまで連れて行かれてお腹を殴られた。トイレの床
汚いよ……。

「つざえ」

それだけ言って僕を置いて行った。

「うへ……。とても怒りせてこんなふうに……。

「また謝りなきや」

……。

休み時間毎に殴られました。
朝から直到まで、計五回。トイレで。

「痛いよ……」

お腹をさすりながらトイレから教室に戻る。お腹をさすつてトイ
レから出てくるって、僕がまるでお腹を壊しているみたいだね。誰
にも疑われないからいいね。普通に教室に帰れるや。そもそも
僕なんかを気にする人いなか……。

「でも、これじゃあ謝れないよ……」

許してくれないみたいだよ。どうすればいいのかな……。

まず話を聞きたいたのに、殴つたりすぐに行こいかへ行つてしまふん
だもん……。

お腹を押さえながら教室へ行く。どうしよう。小嶋君がいたら入
りづらい。

扉の前で躊躇う僕。

そんな僕に誰かが話しかけてきた。

「優大。何してんだお前」

「え？」

振り返つてみると、そこに立っていたのは綺麗な金色の髪を持つ人と綺麗な銀色の髪を持つ人。雛ちゃんと……前橋さん。

「あ、その、お腹、痛くて、保健室に、行こうかなー、とか……」

「大丈夫か？ 連れて行つてやるよ」

雛ちゃんが僕の腕を自分の肩に回してくれる。が、それを見て前橋さんの顔が鬼神に変わる。

背筋が凍る。

僕は慌てて雛ちゃんから離れた。雛ちゃんが驚いたように僕を見ている。前橋さんは相変わらず鬼神。

「だだだ大丈夫ですよ！？」雛ちゃんは前橋さんと仲良くしているよ？！」

両掌を突出し一生懸命振る。

「無理すんなよ。ほら、行くぞ」

突き出していた右手を掴んで僕を引っ張る雛ちゃん。

前橋さんの顔は、ちょっと、言葉では、言こあらわせない、物になっています……。激怒と悲しみを大量に混ぜ込んだものをベースに、愛情を少し振りかけた後憎悪で蓋をし、その上にトッピングで嫌悪と不快を乗せた後アクセントとして恐怖を少し垂らした顔。

……。

とにかくすゞしく怒つてた。

昨日のハサミが頭をよぎり、僕は乱暴に雛ちゃんの手を振りほどいた。

「なつ……

雛ちゃんが一瞬とても悲しそうな顔を見せて、すぐに怒った顔を作る。

「なんだよ。迷惑ってのか?」

「そ、そりゃなくて、その、お腹痛いのは、その、ただの下痢だから……。あの、保健室じゃなくて、トイレに行けば治るから……」

「……そつかよ。なうれつれと行けよ」

「へ、うん、こめんね……」

「別に」

怒った雛ちゃんが歩き出し、前橋さんもそれに続く。廊下の少し先で、雛ちゃんの後ろを歩く前橋さんが一度じりじりを振り向き、べーっと舌を出してから消えて行った。

……昨日に続いて、今日も怒らせちゃった……。謝りなきや……。

一度大きく息を吐いて僕は改めて教室を向く。
もういいこや。教室に入るのが気まずかうづがなんだうづがビリでもいいよ。入るつ……。

扉を開け、一步踏み出す。

突然だけれども僕はよく人とぶつかる。それはきっと、地面ばか

り見て歩いているせいで前方の確認がきちんとできていらないせいなのだろう。校舎内とか狭いところだとなおさらだ。よく人とぶつかってしまう。

そんなわけで今も人とぶつかってしまう僕だった。

「あ、ごめんなさい…」

慌てて頭を下げる。も、もしかして、小嶋君？ 小嶋君だったら、いやだなあ……。

「ううん。大丈夫だよ」

歌つているかのような声。顔を上げて確認するまでもなく、楠さんだ。

「す、すみません……」

一度お顔を拝見させていただき、もう一度頭を垂れる僕。

「いいついといつて。それより、佐藤君は怪我無い？」

「あ、うん。大丈夫。ごめんね、ぶつかってしまった……」

「大丈夫だよ」

ここにこと笑っている。でもその後ろで数名の女子が嫌悪感を露わにした表情で僕を睨み付けていた。な、なんでそんな目で見るの……。

「楠さん行こう。場所無くなっちゃう

どうやらみんなは、どこかにお弁当を食べに行くようで、一人の女子がお弁当箱片手に楠さんの手を引っ張った。

「うふ。それじゃあね、佐藤君」

楠さんは素敵な笑顔を僕に振りまきながら、他のみんなは弱敵を威嚇するように睨み付けながら、僕の目の前から消えた。
僕がぶつかつたのは楠さんなのに……。なんでみんなから睨まれるんだろう……。

……そんなことを気にしてもお腹がいっぱいになるわけじゃないし、『』飯を食べよう。

自分の席へ向かいながら一度教室内を見渡してみる。小嶋君はみんなと楽しそうに笑っていた。僕なんか気にしてもらえない。僕は自分の席で、一人でお弁当を食べた。

お弁当を食べた後、ライトノベルを読む。
相変わらず、とても面白い。でも何故だか集中できない。
僕は窓の外に視線をやった。

窓から見える空は、屋上で見る空よりも狭くて濁っていた。

放課後に、また校舎裏に連れて行かれてお腹を殴られた。
謝つたけれど、聞いてくれなかつた。代わりにうずくまる僕の左腕を蹴り飛ばした。

理由を聞いたけれど、無視された。代わりに尻餅をついた僕の胸に前蹴りをした。

小嶋君は無言で去つた。

「うう……」

尻餅をついたまま胸を押される。今日殴られたのは六回だ。六回殴られ、一回蹴られた。

さすがに理不尽なものを感じてくる。僕が悪いのだけれど、理由位教えてほしい。

でも、教えてくれないし聞いてくれない。

少しだけ、涙が出てきた。

でも、ここでじっとしていたらまた誰かに見つかってしまうかもしない。

僕は土のついたお尻と胸を払いながら立ち上がる。何度も瞬きをして涙を引っ込め、とりあえず校舎内に入ることにした。

その途中、

「佐藤君」

楠さんだ。ちゅうどく関から出て帰ろうとしていたところで出会つた。

「楠さん。あの、お便はいめんね……」

「お便? 何かされたっけ? ……まさか、君私のいないところで私の椅子であんなことや私の縦笛でこんなことを……」

「そ、そんな」としてないよ。そもそも縦笛なんて持っていないでしょ? !」

「ただけど、君が用意しているかもしないでしょ? 君が持ってきて、私のロッカーに入れる。それを取り出して君が舐める。擬

似り「一ダ一舐めを体験できるといつわけだよ。……」の変態

「やつてないよ……」

妄想の僕を貶すのはやめてほしよ……。

「どうだか。やつてない証拠が」

楠さんの後ろをクラスメイトの男子歩いている。その男子が楠さんに向かつて元気よく別れの挨拶。

「楠さんさよなら！」

楠さんが振り向き手を振った。

「うん！　ぱいぱい！」

僕に話しかけていた時とは全然違う暖かい声。

再び僕の方を見る。顔は無表情。声はやっぱり冷たい。

「縦笛事件。君がやつてない証拠が無いから、私と君の社会的信用の差で君は有罪。だから君は変態。家の兄も変態」

「お兄さん、いい人だったね」

電話越しでも分かる暖かい感じ。優しそうな人だった。

「ちょっと。なんでもうちの兄の性格を知っているの」

「え、この前、電話で……」

「さじては調べたんだ。私の家に盗聴器をつけて兄の行動を逐一チェックしていたんだ。兄に言つておひづ」

「そ、そんな！　会つたことも無い人に嫌われたくないよー。」

「なら早く転校してよ」

「い、嫌だよ」

「なら転送する。どこがいい？　雪山？　砂漠？　無人島？　ああ、残念ながら一次元の世界へは転送できませんので」

「わ、分かつてるよ……」

「残念だね一次に行けないで。でも君が一次元になる方法ならあるよ？」

「え？　どういひこと？？」

僕の絵を描くつてことかな。

「まずは、プレス機を用意して、」

「その一次元のなり方はとっても嫌です！　まずの時点でごめんなさいー！」

「わがままだねホント。それじゃあ友達出来ないよ」

「う、うん……『めん』

「……どうでもいいんだだけね。時間がもつたいたいね」

「え、あ、『めんね楠さん。引き止めてしまつて』

「私のじゃなくて君のだよ。君の時間がもつたいたい」

「え？ どうこう意味？」

「私はもう帰るっていう意味。じゃあね佐藤君。達者で」

「あ、うん。そよがなうら」

意味を教えてくれないまま、楠さんが帰つて行つた。

一体どういう意味だつたんだろうね。今の僕には分からぬや。分からぬことを考えても仕方がない。

早く帰つて晩御飯の買い物をしなきや。

駆け足で教室へ荷物を取りに行く。

教室へたどり着いた僕。

誰もいない教室。

どこからか楽しそうな笑い声が聞こえる。みんなとつても幸せそうだ。その事実だけで僕も幸せになれるよ。

にやけながら僕は真っ直ぐに自分の席へ向かう。

そして、僕は自分の机の上のよく分からぬものを見つめた。

「……」

机の上に置かれたものは細切れにされた紙切れだった。

「え？ なにこれ……」

何が何だかわからないけれど、とりあえず破片をつまみあげてみてみる。

文字の書かれた紙切れ。明朝体の文字が綺麗に並んでいた。

「……これ、ライトノベルだ」

多分僕の。

僕が読んでいた。

「……」

これはさすがに、悲しすぎた。

救いを求めるように僕は秘密基地へ向かう。
濡れる田を拭いながら山を登る。

涙が落ちることはもうないけれど、思い出したら涙がにじむ。
僕の味方は秘密基地だけだ。

生活や周りの状況なんて簡単に変わるけど、秘密基地は変わらず
にしてくれる。

先の見えない未来よりも先の見えている今の方が大切。
何よりも平穏だ。波風の立たない人生が一番いい。
でも今はそれが壊れかけている。僕の未来が見えなくなってきた。
最悪だよ。

だから僕は秘密基地へ向かう。

あの日から変わらない秘密基地は僕の心の支えだ。
変わらない世界の象徴。

それが秘密基地だ。

あの日を留めたままの風景。
あの日を僕は守りたいんだ。
そして、たどり着いた秘密基地。

「う……」

楠さんがいた。

玄関で別れたはずの楠さんが秘密基地の前で暴れまわっていた。

「くわい、この……！　あいつら、好き勝手言いやがって！」

振りまわしているものは以前持つていたプラスチックのバットではない。今度はバドミントンのラケットだ。パツと見は一生懸命素振りをしている様子。でも実際は体を動かしてもやもやを振り払おうとしているんだ。

「……佐藤君」

暴れていた楠さんが僕に気づいた。

「何しに来たの。まさか私を追つてきたの？」

「え、あ、違うよ。たまたま、僕もここに用事があつて……」

「用事つて何。訊つてみてよ」

「う、その……」

「ほり用事がない。やつぱり私を追つてきたんだ」

「……違つよ……」

「違わない。早くどこかへ行つてよ。こんな姿人に見せる物じゃないから」

犬を遠ざけるときのように手を払う。

「違つてば。僕はここに用事があつてきたんだ」

「だから用事つて何」

「よ、用事は、用事……」

「ふーん。なら後にして。今は私が使つてるから」

僕は少し自棄になつていた。

だから、ありえない行動をとつた。

「そ、そんなの……、楠さんが、林の奥へ行けばいいでしょ……！
ここは僕の秘密基地だよ！ 僕だけしか使っちゃダメなんだ！」

僕は思わず叫んでいた。

「え」

楠さんが目を丸くして僕を見ている。

僕は今自分の取つた行動にハツとして、すぐに謝つた。

「え、あ、『ジジメノ』……。その、僕が、山を下りるから

僕は、踵を返し来た道を駆け下りた。

まさか、脅してくる相手を怒鳴りつけてしまうなんて。僕は何を考えているのだろう。ばらされたら困るもの……。

とにかく僕は走った。

早く降りれば、今起きたことが無かったことになるような気がして。

そして追つてきた楠さんに捕まり秘密基地まで連れ戻されました。

「機嫌が悪いね。どうしたの」

隣に座る楠さんが興味深そうに僕に尋ねてくる。

「そんなこと、ないよ。『めんね、その、僕わがままで

「なにか嫌な」とでもあった?」

「全然ないよ。その、ただここでちょっと休憩したかっただけ

「休憩するために山登りをするなんて馬鹿でしょ。いいから、何があつたのか言こなさー。ばらされたいのなら言わなくていいけど」

「ほ、本当に何もないんだ。気にしないで」

「そんな無茶な。気になるに決まっているでしょ。自己主張の少ない佐藤君が突然キレて襲い掛かってきたのだからその理由が知りたくなるのは当然の事でしょう」

襲つてなんかいなのだけれど……。

「そ、そんなことより、楠さんは何をしていたの？　また嫌なことがあったの？」

「嫌なことは毎日起きているよ。楽しい日なんてない」

「え、そんな。楠さん、みんなに慕われているし、信頼されているし、嫌なことなんてされないでしょ？」

「違う。それは違う

「え？　どういふこと？　何が違うの……？」

嫌なことそれないうつていうのが、違うってことかな？

「私は、慕われているんじやなく、『慕わせている』の。信頼『』をせている』の。そこは重要なところだから

「う、うん？　えっと、慕われて居ると、慕わせて居るのは、違うの？」

「もちろん。慕わせるために色々と努力をしている。信頼させるため色々と仕事を引き受けた。だからストレスが溜まる。いつも言つ

」と。自然とみんなが慕つてくれるんじゃない。私がそいつをせぬよつに仕向けているの」

「どうしてそんなことをするの?」

「だって、私のこの性格じゃあ慕われないでしょう。信頼されないでしょう」

「や、そんな」とも、無いんじゃないかな」

「無理しなくていいよ。分かってるから。私の性格はいい方じゃない。好感持てる性格を演じなきゃ私はすっごく嫌われる。分かっていることだよ」

「そんなことないよ。楠さん、優しいもん」

「だから、それは私が優しい人間を演じているから。私はここ最近君に対して優しい行動をとつてる?」

「とつてゐ……、よつな……」

「はこはこ。とつてしませんよね。でもそれが私。それが本当の性格なの。こんな性格で人と付き合つてたら誰も近寄つてこないよ」

「で、でも、その、楠さん、綺麗、だし……」

「そつだね。綺麗だね。でも、『綺麗だから』なんだよ」

「え、え?」

「私は人より容姿が綺麗。謙遜する氣も起きないほどにね。でも性格が腐つてゐる。美少女で、性格が腐つてゐる。それは周りの人に調子のつてゐるつて映るらしいよ。『あいつは可愛くって何でもできるから調子に乗つてこな』。ふざけるなつて思つみたい」

「でも、楠さん優しいよ」

「君も私の魔性に騙された一人なんだね。これほどまでにひどく扱つてゐるのにそれを受け入れない。現実認めちやなよ」

「もうじやなくて、その、この一週間、本当の楠さんと接してきたけど、やつぱり、優しいなつて、思った」

「どうせどう見たらそつなるんだうつね。ドミ以外喜ばないよ」
な性格」

「でも、その、一緒にお弁当を食べててくれたり、草むしりしてくれたり」

「お弁当は自己満足。草むしりは手伝つ私偉いつてみんなに思わせたかったから」

「えつと、でも」

「でもじゃない。私は猫をかぶつている。間違いなくね」

それは、そうかもしれないけれど。

「で」

「何とか迷つてこの僕に楠わんが言つ。

「私は今正直に包み隠さず君に話したわけだけじ、君は何があつたのかを隠すんだ?」

「え」

今日はよく自分のことを話してくれるなあつて思つたナゾいつ
ついとだつたんだ……。

「何があつたのか聞かせてもらおうかな

「う、その……」

「言つたくなこよ。

「…………あの、ちよつと、聞えないこ……」

「不公平だよ。私がこんなにも情報を『えたのに君は何も教えない
なんて。酷い話だよ」

「でも……。迷惑かすると、いけないから」

「…………どちらも言つたくないんだ?」

「う、うそ……」

「よーし、誰ひどつかなー

「やめてくださいー。」

やつぱつやつわたらぬ。

「えーっと、じゃあヨロケん四つじぎさんいつかな」

携帯を取り出しそうにしている。

「あの、本当に、やめて……」

「あ、もしもし……。その、私もひとと相談がつて……」

ま、まよいー。電話が繋がっちゃった！ 僕は慌てて頭を下げる。

「…………」「めんなれこー！」

「うさ。うさ」

領事ながら楠さんが通話口に手を当てる。

「なら、何があつたか教えてくれる？」

「…………それは…………」

「あ、ヨロケん？ 「めんな、急いで来てほしことくがあるんだ。うん。学校近くのコンビニ」

「「」めんなれこ」「めんなれこ」」

楠さんが田で皿。 「教えるの？」

「…………僕、言いたくないです。でも許してください……」

僕は必死に土下座をした。

言えない。

だから頭を下げて許してもらいつしかない。

話し声が聞こえなくなつたので顔を上げて楠さんが見てみる。

僕を睨み付けていた。

うつ…………ごめんなさい…………。

しばらく僕を睨んだ後、携帯を閉じた。

「え、あれ？ 通話……」

「しない。ちょっと驚かせようと思つただけ。そんなに言いたくないんだね」

「う、うん……迷惑かけるし……」

「ふーん。じゃあ私帰る」

「あ、はい、めんね」

「はいはい許す許す。じゃね」

なんだか驚くほどあっけなく、楠さんが諦めてくれた。
やつぱり、優しいんだなと、改めて思った。

そういうえば。

楠さんと話しただけで少し気が紛れていた。

愚痴つたわけでも慰めてもらつたわけでもないのに。

少し言葉を交わしたせいで、なんだかここで落ち込タイムミングを失つたというか、なんというか。

これも楠さんの力かな、とか、思つてみたり。

優しさの意味

小嶋翔君。

髪の色は明るい茶色で、普段は長い前髪をヘアピンで留めている。バスケ部で、レギュラーではないけれどうまいみたい。

クラスの中では結構発言力が強く、結構やりたい放題。自分が望まない意見になりそうになつたら、無理やり自分の意見を通そうとして話がややこしくなつたりする場面もちょくちょく見かける。そういう時は沼田君が小嶋君をなだめたりしているのでやっぱり沼田君は凄い人なんだなと思う。

楠さんの方が大好きなようで、猛烈なアピールをして気を引こうとしている。多分、全男子の中でも一番アピールしているのは小嶋君だ。

雑ちゃんとはあまり仲が良くないうで、言い合いのよつたな場面を何度も見てきた。結局は小嶋君がどうでもよさそうに諦めるのだけれども、諦めるのなら最初から言い合いなんてしなければいいと思う。

男子一位の位置にいるけれど、粗暴な性格のため、かなり多くの人から恐れられている。僕も、できる事なら関わりたくない。

バスケをしているので運動は出来るみたいだけれど、勉強の方はよく分からぬ。この学校は上位三十人の結果が張り出されるが、前回のテストで小嶋君の名前が無かつたので多分普通位なのだと思う。

それくらいしか知らない。

最近ますます思うけれど、やつぱり関わりたい人間ではない……。痛い思いはしたくないもん。

でも、その願いは聞き入れられない。さつきもちよっかいを出された。

朝トイレで出会って、わざと肩をぶつけられた。

怖い。

小嶋君は怖い。

何より、なんで怒っているかを教えないで怖い。

どうしていいのか分からぬから。

僕に少しでも腕力があれば小嶋君を抑え込んで話を聞けるのに。僕はひ弱だ少しでもすばしこさがあれば避けて話を聞けるのに。僕はひ弱だしどんくさいからダメだ。

小説みたいに、何か特殊な力に目覚めればいいのに。

「……」

暇な朝。

僕は机の真ん中をじっと見て時間が過ぎるのを待つ。僕、話し相手つていなかつたみたい。友達と思っていた人も最近は話しかけてくれないし、僕はずつと孤独だつたんだ。

「おう、優大」

孤独の中で、唯一離ちゃんだけが話しかけてくれる。離ちゃんが僕の前の席に座つて笑顔を見せてくれた。

「あ、おはよう、離ちゃん。昨日は、『ごめんね……』

「昨日？……ああ、昼の。別に気にしてねえよ。そんなどより、お前今日は本読まねえんだな」

「う、うん。家に忘れてきちゃつて」

本当は忘れてなんかない。持つてくる本が無かつたんだ。

「ドジだなあ。でもま、その方がいいんじゃねえの」

「え? どうして?」

「本読んでたら話しかけづらいじゃん。暇そつこしてた方が話しかけやすいだろ」

「う、うん。でも、僕、話し相手いないから」

「私がいるじゃねえか。しんゆうだろ」

何故か親友と言つ言葉を強調されたけれど、僕はとっても嬉しかった。

「うん。ありがとう」

「まあ、私は本読んでようが関係なく話しかけるんだけどな

かつこよく笑つた。どんな笑顔でも似合つなか雛ちゃんは。と、いいで!

「?...」

「ののす」に悪寒に襲われた!

きよりきよりと辺りを見渡す。すぐに悪寒の正体を見つけた。

「ハモスター! ハモスター! ...」

前橋さんだ! ハムスターな勢いで爪を噛んでいる! 怖い!

「どうした？」

怯えてこむ僕の様子を訝しんでいる離ちゃん。

「な、にも、無いけど、その、離けちゃんは、前橋さんと、話した方が、楽しいんじゃ、ないかな？」

僕の言葉をどう取つたのか、離けちゃんがすぐ怒った顔を見せた。

「……なんだよ。お前は私にどうか言つて欲しこっつののか？」

「や、そんなわけないよー。僕だって離けちゃんと仲良くなかったよー。」

「うぐひ。やそんな」と、大声で叫つなよ！」

恥ずかしかったのか、真っ赤になる離ちゃん。それを見て僕も赤くなつた。少し恥ずかしいセリフだったね……。

「あ、ごめん……」

俯く僕に、離ちゃんが明るく話しかけてくれる。

「だつたらもうと話すつぜ。その方が私だって楽しいし」

「へ、うん……」

気のせいかもしれないけど、視界の隅に映つている前橋さんの髪が逆立ち口から紫色のモヤが出ているよ。きっと僕の恐怖が幻覚を見せているんだね。

「優大、なんか最近元気ないけど疲れてんのか?」

心配そうに聞かれた。

疲れているというより恐れていのだけれども、言えない。

「え、あ、うん。そう。疲れてる」

「それはよくないな。気分転換が必要なんじゃねえの?」

「そうだね。でも、僕趣味とかないし、どうやって気分転換すれば

……

「ヤーヤ動画じやあ気分転換にならないし、運動しようにも一人
じゃあ楽しくないよね。

「明日土曜だし、どこか出かければいいじゃん」

「そりだね。でも、どこへ行こう……。楽しい場所どこがあるのか
な。離ちゃんいいところ知ってる?」

「んー? そうだな……」

と、少し考え、ちらりと僕に視線を送る。

「…………あー……のぞ。もしよければ、明日、私と

「席につけー!」

ああ、楽しかった離ちゃんと会話が終わってしまった……。短
い間だった。

「 ちっ！」

雛ちゃんが忌々しげに先生を睨み付けていた。

「またあとで話すわ」

すぐに笑顔に作り替え僕にそれを見せてペチペチと僕の頬を叩き、自分の席へ戻って行つた。

なんだろう、なんて言ひたかったんだろう。……もしかして、僕と遊んでくれるのかな。もしそうだとしたら嬉しいな。とっても楽しい休日になるね。

またあとで、か。

一体何が聞けるのかな。

でも、結局、雛ちゃんが言ひた『またあとで話す』の内容を聞けないまま、僕はこの日を終えることになった。

この日の小嶋君は、昨日、一昨日よりも酷かつた。休み時間の度に教室から僕を連れだし、校舎裏でいつもより酷い暴力を振るつてきた。
だから雛ちゃんと話すチャンスが無かつた。
放課後まで、それは続いた。

「うーー！」

小嶋君に胸、匕首をつかまれ壁に押し付けられる。苦しい。

「……」

相宍わいす小嶋君は怒った顔をするだけで何も言わない。

「な、なんでこいつ、やめ……の……？」

「うわあ！」

「うわあー。」

ぐっ、と押し付ける力を強める。それもよつとも苦しこ……。

「……」

「や、やめて……やめてください……」

胸ぐらをつかんでこの手を離さうが、全然勝てない。
筋力に差があります。

「……んでもえなんだよ」

「苦しい……放して……ー」

「なんでもえなんだよ」

「な、何が……？」

「若菜ちゃんだけじゃなく、有野までお前の口に入ってるみたいじゃねえか。どうしてめえみたいなよなよした奴がちやほやされるんだよ。ああ？」

「そ、それは、勘違い、だよ？」

僕なんかがちやほやされるわけないのに。でも、小嶋君は何も聞いてくれない。

「うるせえんだよ。」

תַּלְמִיד

今まで顔は殴られてこなかつたけれど、今、初めて左頬を思いつ
きり殴られた。

そのおかげで おかげと 言ってもいしのか分からな いけれど ぐらをつかんでいた左手から解放された。

「……………」

「気持ちわりいんだよ！」

「あつ！」

近寄ってきて、僕を何度も踏みつける。僕は丸まって必死に耐え

た

「ムカつくんだよ……！ お前みたいな奴は…」

「「めんなたー、めんなたー。」

謝るけれど、何も聞いてくれない。

「すみませんすみません！」

聞いてくれないといつより、聞こえていない。耐えるしかないんだ。痛いけど、我慢しよう。そう思つた矢先、

「死ねよー。」

脇腹を思いつきり蹴り上げられた。

「……！」

息ができなくなつた。

「……ふざけんじゃねえよ

小嶋君が何か言つているが、聞こえない。呼吸をするだけで精一杯だ。

遠ざかる足音、あふれ出る涙、脇腹の痛み、全部気にならない。僕はただ生きようとした。

・・・

十数分後。もう呼吸はできる。恐怖は去つた。
けれど。

僕はどうしようもなくショックを受けていた。
怒らせていくとかではない。

僕は憎まれていた。

何かの拍子に殺されてしまつのではないかと怖ひ恐怖で憎まれていた。

波風を立てないよう意識して過いじてきた僕がこれまで恨みを買うことになるとは思わなかつた。

今までの生き方が間違つていて、これから先どうして生きて行けばいいのか、僕が何をしたのか。色々と田の前に現れた問題に僕はどう対処すればいいのか分からなかつた。

お腹はまだ痛い。顔もいたい。きっと青くなつてゐる。顔を殴られたのは初めてだ。こんなに痛いだなんて。お腹を蹴られて呼吸ができなくなつたのも初体験だ。本当に、死ぬかと思つた。

「……」

誰もいな校舎裏で、僕は涙を流した。

どうすればいいのか分からず、とにかく泣いた。声を殺して泣いた。

「ゆうたー？」

遠くから聞こえてくる声にハッと顔を上げる。

この声は離ちやんだ。僕を探している。

涙を拭つて立ち上がり、どうしようか辺りを見渡す。

でも結局逃げることもできず、涙田でそこに立ち渴べりしきことができなかつた。

「優大ー。あー、やつと見つけた。お前なんでこんな感じにならんの？」

「優大？」

「う、うん

顔を見られたくなかったので俯いた。でも、雛ちゃんのテンションが一気に下がったので、もしかしたらばれたのかもしれない。

「…………誰が犯人だ」

怖い声色で僕に問う。僕は質問の意味が理解できないふりをした。

「え、な、何が？」

僕の反応を見て雛ちゃんが怒る。

「誰だつて聞いてんだよ！ 誰にやられたんだ！」

「な、何も、されてない…………」

駆け寄ってきて、僕の両肩を掴む。

「ふざけんじやねえ！ どこのどいつだ！ 教えろー！」

「だ、大丈夫だから。少し転んだだけだから」

「ならこの服についてる足跡は何なんだよ！ てめえ教えろー！」

がくがくと僕の体を揺らす。僕はとにかく白を切った。

「何も、無いから

「…………てめえ…………小嶋、か？」

「ち、違つて……よ……」

しまつた。返答がおかしなことになつてしまつた。

「あいつ……！ 殺す……！」

荒々しく僕の肩を突き放し、ビニカへ向かおつとめる離ちゃん。

「ま、まつて……」

僕は慌てて離ちゃんの腕をつかんで引き止めた。

「大丈夫。僕は何ともないから」

出来る限り明るい声で言つた。

「何ともない訳ねえだろ！」

離ちゃんが振り向き僕の顔を見る。僕の顔を見るなり悲しそうに眉を寄せた。

「お前……、ひでえ顔じやねえか！ 顔も殴られたのかよ！ あの野郎！」

しまつた。顔を見せてしまつた。

「なんで殴られたんだ！」

悲しそうだつた顔から再び怒りの顔に戻す離ちゃん。

「そ、その、それが、よく分からなくて……」

「あの野郎……。」

体育館がある方を睨み付け歯を食いしばる雛ちゃん。

「まつて！ 小嶋君だなんて言つてないよ。」

「でもそつなんだろ？ あいつ以外にいねえ。」

「ち、違つよ……」

「違わねえ！」

雛ちゃんが怒つていて。僕なんかの為に怒つていて。嬉しい。
また涙がにじむ。

「痛むのか？。」

僕の両肩を包み込むように掴む。優しい手だった。

「んなの当たり前だる……友達じゃねえか！」

「うん、うん」

僕にも味方がいるんだ。
雛ちゃん少し膝を曲げ、うつむきがちな僕を見上げるような位置
から諭すよつて言つ。

「だからな、私が代わりに仇をついてやる。誰がやったか教えてくれ」

「……それは、お、教えられない……」

「なんでだよ。お前はそれでいいのか」

「よ、よくないけど、その、離ちゃんに迷惑かかるから」

両肩を持つ手にぐっと力が入る。

「迷惑なもんか！　お前の為ならなんだってするー。」

「でも、それで離ちゃんが傷ついたりしたら、僕、その、嫌だから……」

「……」

離ちゃんが呆れたように曲げていた膝を伸ばし僕から手を離した。

「……はあ……」

大きくため息をつく離ちゃん。僕は慌てて言い訳をする。

「それに、その、これは僕が自分で解決しなきゃいけないことだし、離ちゃんに手間かけさせられないよ」

「……そつか……」

とっても悔しかつて落ち込む離りちゃん。

「……お前は本当に優しいな」

その姿のまま。僕のことを褒めてくれた。

「そんなこと、ないよ……」

「優しいよ。でも、どうするんだ。どうして解決するんだ?」

犯人を聞きだすことは諦められてくれたみたいだ。

「……そ、それは……」

「……、どうしよう……。」

「田は田を、歯は歯を。殴られたら殴り返せ

「や、そんな。僕、勝てないよ……」

「鍛えればいい」

「鍛える……」

「私が喧嘩を教えてやるー」

格好よくポーズを決めた離りちゃん。

「や、それは……。離りちゃんの子だし、危ないよ」

「優大になんか負けねえよ。舐めんじゃねえ」

「う。そ、そうだけど……。でも……」

喧嘩……。それしかないのかな……。

でも、確かにこのままじやあ話し合いにならないし。
せめて一方的にならないくらいにならないと。

でも、離ちゃんにケンカを教えてもらうつて、離ちゃんと殴り合
うつてことなのかな……。それはかなり抵抗があるよ……。万が一、
万が一！ 僕のパンチが当たつたりなんかしたら……。

離ちゃんは女の子だもん。僕と離ちゃんの間に圧倒的な力の差な
んてないばず。……多分。

離ちゃんの可愛い顔を傷つけたりなんかしたら……！ それはも
う死んでも死にきれないよ！

ど、どうしよう。喧嘩以外の解決方法を……。

何も、思いつかない……。

多分小嶋君の暴力をいなすようなことも必要だし……。僕の弟に
頼もうかな？ ……でも、小学六年生だし……。じゃあ、お姉ちゃ
んは？ 高校三年生だけど、女の子だし……。どうすればいいんだ
ろ？ ……僕に、お兄ちゃんがいれば……。

……。

「……あー！」

閃いたよ！

「あん？ どうした？」

突然声を上げた僕に離ちゃんが怪訝な顔を向ける。

僕とつてもいいアイデアを思いついてしまったよー。

「離ちゃん！ 僕國人君に頼むことにするよー。國人君なら喧嘩慣れしていると思うし、僕なんかひとたまりもないよね！ 喧嘩を教えてもらひつけは一番だよ！」

「え……」

離ちゃんの顔が渋くなつた。

「え？ どうしたの？」

何か都合の悪い事があるのかな。

「……あ、そう言えば……、國人君、何か問題抱えてるんだつたよね……」

「……あ、ああ？ まあ、そう、なんだけど……」

しまつた。忘れていた。バカなことを言つた。

「う、ごめんね、無神経なこと言つて……」

「いや、全然そんなことはねえよ……」

でも離ちゃんの顔はすぐれない。…………もしかして、國人君

「……そうだな。いい機会だし兄貴に会わせるよ」

君

何か覚悟を決めたような面持ちで僕と向かい合っている。

「う、うん。その、大丈夫?」

「……ああ。大丈夫だぜ。むしろそのセリフは私が言つセリフだ。
優大、覚悟はできるか?」

「う、うん……」

正直、あんまり……。

一体何が起きているのか分からぬけれど、いい事ではなさそう
だよね。

「どんな状態でも、泣かないって約束できるか。どんな状態でも、
兄貴だって、言ってくれるか」

「うん。それは、もちろんだよ。國人君がどうなつていても、僕は
國人君の幼馴染だよ」

「……そつか。なら、会わせてやる……。ショック、受けない
でくれよ……」

とても悲しそうに、離ちゃんが俯いた。

國人のケンカ指南（予定）

有野國人君。

有野さんと同じ金髪で、ツンツンとした髪型。背も高くつて、顔もかっこいい。ピアスとかもたくさん開けていて、どこからどう見てもヤンキー。細い体つきからは想像できないくらい力が強くって驚くほど運動神経がよかつた。

僕の幼馴染……で、年は三つ上。今は、大学生、なのかな。ここ二年くらい國人君の噂を聞かないからどうなったのか分からぬ。二年前までは凄かつた。

とにかく喧嘩が強くつて無法者で。町中で知らない人はいないくらいの有名人。遠くの方から喧嘩を売りに来る人がいるくらい有名だった。

『新月の災厄』

そう言つ通り名がつくほど恐れられていた。

その理由。

新月の暗い夜が、一番國人君が襲われる回数が多かつたから。そして、それを返り討ちにしまくつていたから。しかも、新月の夜を狙つて襲つてくることが分かつっていた國人君も、それを知つていて敢えて新月の夜に出歩いていたらしい。

だから、新月の夜は怪我人が大勢出る。新月の夜は巻き込まれるかもしけなら外へ出ではいけない。そう言つた理由で『新月の災厄』と言われていた。

恐ろしい。

髪を染めてから、僕は遠目から眺める事しかできなくなつていた。でも、今日僕は國人君に会つ。

喧嘩を教えてもらうんだ。

……正直に言つと、とつても怖い。

殴られるんじゃなかつて。

とつても怖い。

それと、もう一つ。

離ちゃんの様子がおかしい。

もしかしたら、國人君は大変な状態なんじゃないかなって。
その不安が当たった時は、多分僕の想像を超える状況なんだと思う。

一つの意味で怖かつた。

会いたい。

けど、会うのが怖い。

でも知つておかなきや。

國人君が、どうなつているのか。

「……最後にもう一回聞くぞ。後悔、しないか？」

有野家の扉の前で離ちゃんが振り返つて僕を見る。

「うん」

怖いけど、もう迷いはない。國人君と対面するんだ。

「……じゃあ、開けるぞ」

離ちゃんが、自分の家の扉に手をかけた。

う……。なんだかお腹が痛くなつてきた……。

「……よし、行くぞ」

離ちゃんがゆっくり扉を開けた。

久しぶりに訪れる離ちゃんの家は何一つその装いをえていなかつた。玄関に入つてまず見えてくる大きなジグソーパズル。僕たち

が完成させた奴だ。大変だつた。

黄土色の塗立ても、焦げ茶色の靴箱も、家の匂いも。あの日から何も変わっていなかつた。

ただ、静かだつた。

「入るか」

僕を後ろに従え、離ちゃんが家に上がる。

「お邪魔し

」「

「じつ...」

お邪魔しますと、声をかけようと細ついた僕の口に舌を這ひ上める。

「え？」

「ちよつと、待つてうよ。居間に行ってくれ

居間の方を指さし僕を促した。

「う、うん」

「私は兄貴の様子を見てくる。お前は物音を立てず居間にいてくれ

「うん……」

「じゃあ、少し待つてう」

雛ちゃんが階段を上つて行つた。

僕は首をかしげながら居間へ。様子を見なればならない状況つて、どんな状況だらう……。

何となく有野家の状況が怖いと思つた僕は、居間の扉を少しだけ開け、中の様子を耳を澄ましてをうかがう。……何か、物音がする……。雛ちゃんのお父さんかお母さんかな。

ゆつくりと扉を開け、僕は居間の中へ足を踏み入れた。

「…………！」

僕はその瞬間戦慄する。

「…………ちつ、何もない…………！」

誰か、見たことも無い巨漢の男が部屋をあさつていたのだ。

ぼさぼさの黒髪、グレーのスウェット上下。とても大きな体がリビングと繋がつていてるダイニングを物色している。
ど、泥棒だ！ 早く警察に！…………でも、違うかもしれない
し……。お客様だつたら申し訳ないから……。

「あ、あの…………」

僕は一応、声をかけて確認することにした。

「…………？」

その大きな人は、僕を確認した瞬間、ものすごい勢いで僕に襲い掛かってきた。

突然のことに思考がついていかない。

「え、
え？！」

田キロはついに超えていたんだうとこいつの体に見合わぬにものすごいスピードで、僕との距離を一気に縮めた。僕は驚き一步も動くことができなかつた。

叫び声を上げる事しかできない。まずい、殺される！
まさか、久しぶりに来た友達の家で泥棒の犯行現場に出くわすな
んて。非日常すぎて頭が混乱する。

泥棒にやられたの泥棒にやられました。泥棒立ち状態の僕に泥棒が飛びついてきた。押し倒されるように居間から追い出された僕は、そのまま大きな体に押しつぶされてしまった。

גָּדוֹלָה ...

泥棒は鼻息荒く僕の顔を見ていた。

た
助けて
……

窒息させるためなのか、一向に僕の上から離れない。
苦しい。息がじづらい。

「このまま殺されちゃうのか……」

嫌だよ
まだ死にたくない

助けて、國人君

「何してんだてめえ！」

僕の祈りが届いたのか雛ちゃんが駆けつけてくれた。

「兄貴！」

雛ちゃんの声が玄関に響く。

え？！ 國人君が助けに来てくれたの！？

お肉の下で首を回しきょろきょろと國人君を探すがどこにもない。

あれ？ と状況がよく分からずにはいると雛ちゃんが僕の上にいる泥棒に蹴りをお見舞いして僕を解放してくれた。
ごろごろと玄関まで転がっていく泥棒。

「大丈夫か？！ 優大！」

雛ちゃんが僕の体を起こし胸に手を当ててくれる。それだけで少し楽になつたような気がした。

「ほほほほほ。う、うん、ありがとう……。そ、そんなことより、そ、その人……！」

睨み付ける僕と雛ちゃん。

「……」

泥棒がのつそりと起き上つた。

また襲つてくる！

「ビビビビビビ！ 早く警察に！」

「この人巨漢なのにすげく素早いからこのくらいの距離すぐには詰められちゃうよ！」

「……いや、さすがに警察は」

とても余裕のある雛ちゃん。襲い掛かられても大丈夫なくらい、喧嘩に自信があるのだろう。でも、この人は泥棒で、体が大きい。武器をつていないとも限らない。絶対に雛ちゃんには勝てないよ！

「ひ、雛ちゃん！ 危ないよ！ 早く警察にー！」

「……えーっと、あー、いやまあ……」

「ひ、雛ちゃん……？」

気まずそうな雛ちゃん。

あ、もしかして、知り合い、なのかな……。

まさか、雛ちゃんの彼氏とか？

いやいや！ その、人を見た目で判断してはいけないけど、その、ねえ！ いきなり襲つてくるし、れ、礼儀が、なつてないよ！

ダメだよ！ 僕は認めないよ！

と、混乱している僕の肩に手を置き、もう一方の手で太った人を指さし言つた。

「あれ兄貴」

「……。」

「……は？」

……………は？

「いててて……。ひ、酷いだろつ！ 雛タン！」

……………雛タン？

「雛タン言つたな！ 殺すぞデブ！」

「ひう！ そ、そんな目で睨むのはやめるのです！ いや、そんなことより、その隣の美少女は誰！？ ま、まさか、俺の為に……。ありがと雛タン！」

「死ねデブ！ これは優大だ！ 昔一緒に遊んだだろつ！ 男だよ！」

「優大……？ ……ああ！ 佐藤優大君！ 久しぶりだな！」

「……………」

「優大！ しつかりしろ！」

「はつ」

……………雛ちゃんに搖すられ現実に戻された。

「まさか優大君、いや、優大タンがこんな俺好みのショタに成長するなんて……！ 僕感激！」

と言つて、また飛び込んできたが雛ちゃんの足の裏がそれを阻ん

でくれた。

「優大に近づくんじゃねえこのへそデブ！」

倒れている國人君を何度も何度も踏みつける。
まるで放課後の僕みたい。

「ああ！ もうと、もうとお願ひします離タン！ はあはあ」

訂正します。させてくださいお願ひします。放課後の僕とは似ても似つかないですごめんなさい。

……あの、……その。

……。

ものすごくショックだ！

誰これ！ 國人君じやないよ？！

「おいデブ。てめえさつき優大に抱き付きやがつただろう！ 殺してやるから死に方選べ！」

「うーん。俺は萌え死がいいなつ！」

「よしわかった。望み通り外側からその脂肪を燃焼させて役に立たねえ醜い体を消し炭にしてやるー！」

「離タン。萌えを分かつてないよ」

「分かりたくもねえよ！ 役に立たねえデブは一階に上がつてろー！」

「役に立たないデブか……。でもね、離タン。俺は一人で眠れるんだよ」

「だからなんだよ！ んなもん普通じゃねえか、自慢げに言つなー。」

「何を言つておるのか！ 僕以外の人間はみんな嫁と一人で寝てるんだぞ！ その点一人でも眠ることもできる俺は偉いではないか！」

「なにが嫁だくそ野郎！ んなもん妄想の中だけにしろクズー！」

「妄想じゃないもん！ ちゃんと部屋にいつぱいいるもんね！ 今日はタイガーチャンと寝よづつと」

「もしかして嫁つてあれの事か？！ あの気色悪い枕カバーの事か？！」

「枕カバーなんかじゃない！ あれは魂の宿つた正真正銘俺の嫁だ！ 昨日だつて四人で楽しくおしゃべりしたんだぞ！」

「枕カバーを人で数えるんじゃねえよ！ お前さあ、あの気持ち悪いのをベランダに干すの止めてくれよ！ 恥ずかしすぎるだろうが！」

「何を言つておるのか！ 僕の嫁を馬鹿にするなんていくら離タンでも許さないぞ！ 謝罪を要求するー。」

「てめえはまず親に謝れ！ 次に世間に謝れ！ 最後に地球に謝つて死ねー！」

「ぬぬぬ……。仕方がない、戦争じゃつー。」

「かかつてこいよー。」

גַּעֲמִים

「死ね！」

「ごぶ！
ま、負けた……」

「すぐ」やられるなら挑んでくるんじゃねえ！」

「くつ……。こんな時に俺の幻想世界に潜む暗黒竜が現生化するなんて！ 命拾いしたな！ ヒナ！」

「黙れデブ！ つて、優大！ しつかりしろ！ いろいろな機能が停止してるぞ！ 現実から逃げるな！ おい兄貴！ お前のせいで優大が呆然としちまつてるじゃねえか！」

何？！それはいかん！人工呼吸だ！」

ふわふわしていたけれど、体に衝撃を感じて、意識を正面に集中させると、大きな顔が、目の前にあって、僕の、唇が、奪われてあああああああ！」

さつさくまで悪い夢を見ていた気がする……。どんな夢だったかわからぬけど、なんだか、そのまま忘れていてくれた方がいいような……。

「うーん？」

まあ、いいや。

今見てる夢はとっても幸せだからね。

なんといえбаいのかわからないけれど、とっても幸せな気持ちになる。甘くて、あたたかい夢。僕にもよくわからないけれど、とっても穏やかな気持ちで満たされていた。

なんだか、柔らかい感触を感じるね……。

でも、柔らかい感触つて、悪い夢の時にも感じていたような……。

「ううう。これは、それとは違う……。もつと、優しい。」

ずっと感じていきたい。このまま寝続けていたい……。

ああ、でも寝ている場合じやない気がする……。この幸せを手放したくないけれど、起きなきや。僕は眠りに来たわけじやないんだから。

夢から覚醒し田を開けると一瞬に離ちゃんの顔が飛び込んできた。離ちゃんが間近で僕の様子を見ていてくれたらしい。

「あわっ」

突然のことに驚き胸の鼓動が激しくなる。「こんな近くに離ちゃんの可愛い顔があるだなんて驚くに決まっているよ。

恥ずかしかったのか、真っ赤な顔の難しきやんが慌てて僕から離れた。

「わ、わらいー！」

「え、う、ううう！」

ドキドキする胸を押さえながら上半身を起します。

「お、おおお前、こ、こいつから、起きた？！」

「え？ 今起きたばかりだよ

「嘘じやねえだひつなー！」

真っ赤な顔で僕を睨み付ける。

「う、嘘じやないよ？ えっと、その、なんで？」

「別になんでもねえよバカ！ ビビりせんなよー。」

赤い顔のままそっぽを向いてしまった。怒らせてしまったのかな

……。

「あの、僕何か悪い事したの……？」

「別に何もしてない！」

機嫌が悪いよ。

無言のままでもうつむき居心地が悪いので、なにか話題を見つけ

る。

「えっと、あ、そう言えば僕なんで寝てるの？」

「え？！　……忘れてんのか？」

驚いたように僕を見る難ちゃん。

記憶が曖昧だけれども、思い出してみよう。

「えーっと 離ちゃんの家に来て、居間に向かって、おつきな人に会つて、それが國人君で、そのあと……そ、そのあと、僕は……國人君に、く、く、唇を……！」

思い出した瞬間強烈なめまいに襲われた。

「……………、夢……………かな……………。うん。きっと、夢、だよね。」
「わやん？」僕、國人君と、き、キスなんて、してないよね！

1

言い辛そうに視線を外した。

「壊れるな！ まあ、まあ、安心しろー。その……、上書きや、されたからー！」

また顔が赤くなる雛ちゃん。

「？ 上書きつて？」

よく分からなによ？

「う、上書きは上書きだー 細かいことは気にすんなよー。」

何故だか詳しく聞くと怒られそうな勢いなのでとりあえず事実だけを確認することにした。

「あの、僕は、國人君に、唇を奪われたんだよね？」

「…………まあ、有野に唇を奪われてた」

「？ 國人君に？」

「あ、有野」

「？？？『有野』じゃあ、雛ちゃんも容疑者に入っちゃうよ？」

「…………う、うるせえな！ いいからさつさと兄貴のところに行くぞー！ あのデブ、普段出てこねえくせにこう時に限ってタイミング悪く部屋を出てやがる。優大がびっくりするだらつー、なあー。」

「うん。あの、僕、國人君とキス

「よーしー。そつぞと行くか！」

「え、あの

「いいから行くぞ優大！」

腕を掴まれ引きずられるよう二階へ向かった。事実を確認したかったのに……。

「二郎が兄貴の部屋だ」

一階のとある一室。その部屋の前で掴まれていた腕が解放された。

「二郎に、やせた國人君がいるんだね」

「おい。お前現実を見ろよ」

「つうん。まだ、あれは夢かもしれないから」

「現実から田をそらしたらまたショック受けるぞ」

「大丈夫。二郎にいるのはやせた國人君だから」

「……お前がそう思いたいのなら何も言わねえけど……」

それ以外に考えられないよ！

だ、だって、僕が憧れていたのは金髪で沢山ピアスをつけていて眼光が鋭くて一目見ただけで只者じゃないと分かってしまう國人君だったんだよ！？

それなのに、夢で見た人は黒く長いぼさぼさの髪でピアスなんてつけていなくつて眼光は鋭くなくて雪だるまみたいで一目見ただけでお腹いっぱいになっちゃう様な人だった！
ギャップがすごいよ……。

「落ち込むなよ……」

「あ、うん……」

「……ドア開けても泣かないよな？」

「う、うん。大丈夫だよ」

ドアの前で話す僕らの耳に、部屋の中から飛んでくる國人君の声が聞こえてきた。

「遅えんだよこの野郎！ もうさとしろよボケ！ 殺すぞ！」

「これだよ。これ……。これが國人君だよ！」

この恐ろしい声と暴言！ 遠目に見るだけしかできなくて、近寄れなくて、でも、それでも憧れを抱いていた國人君だよ！ やっぱりこの中には國人君がいるんだ！

「開けるぞ優大」

「うんー。」

雛ちゃんがゆっくりと開ける。それと連動して聞こえてくる國人君の怒声の音も大きくなつていった。

ああ、國人君は誰に向かつてこの罵声を浴びせているのだね！

電話かな？ 知り合いが部屋にいるのかな？

ああ！ 怖いなあ！

そして開いた扉の先で、

「早くしろよこの野郎！ デイスプレイ叩き割るぞ！」

大きな人がパソコンに向かって怒鳴り声を上げていた。

「おい優大。何かしらの感情を見せてくれ。無表情は怖い」

「……。ね、ねえ雛ちゃん。國人君はどうしちゃったの？」

現実を認めよう。これは國人君だ。二年前までの國人君は死んでしまった。

「私が聞きてえよ……」

「ふうー……ふうー……！ ……ん？ おお、優大タン。もう調子はいいのかね」

ディスプレイを睨み付けていた國人君が椅子を回し僕の方を見て言った。

ちらりと覗くディスプレイには、ぜ、ぜ、全裸の女の子の、絵が映し出されていた……。

「あ、はい大丈夫です」

「いきなり倒れるんだもんな。びっくりしたよ」

「『迷惑をおかけして大変申し訳ございません。以後気をつけます』

「なになに！　俺と優大タンの仲なんだからさあ、敬語なんてやめよつよー！」

「うん、わ、わかった……。そ、その、部屋に入つて大丈夫？」

「大丈夫大丈夫。むしろ早く入つて欲しい！　さあ、早く、早く…」

國人君の鼻息が荒くなる。

僕は情けないことに離ちゃんの後ろに隠れてしまった。

「大丈夫か、優大」

そんな僕に優しく声をかけてくれる離ちゃん。

「ちょっと、ふわふわしてる……。で、でも、大丈夫です」

「無理、するなよ……」

「うん」

ちゃんと、幼馴染と接する態度を取らなきやね。

「あ、あの、國人君？」

僕は離ちゃんの後ろから顔を出して尋ねてみた。

「なんだいマイハイーー」

ぞわぞわつと、背筋に強烈なものを感じた。

「……國人君、その、じりしゃつたの？」

「まあこれを聞かなきゃ僕はもつ駄目だ。

「じりしゃつたって、何のこと？　ああ、もしかして、髪の色？
面倒くさいから染めるの止めたのにや」

「…………。ひ、ひつと。その、あの、全体的に、じりしゃつたのかなーって……」

「全体的に？　ああ、そう言えば少し体重が増えちゃったかな。ま、
これくらい運動すればすぐやせるし」

絶対に無理です！　昔何故だか流行った某ブームキヤンプを二万
回やりなきゃ痩せられないよ！

「その、体もだけど、あの、生活、と言えばいいのか、趣味と言え
ばいいのか……」

「生活？　何かおかしい？」

本当に分からないと書いた顔でそばにあったポテトチップスを食
べる國人君。

「一年前から考えたら、百八十度違う生活を送ってるよね……」

「ああ、まあそりだけど、いつの生活が人として正しい生活だか
らね。いやあ、DQN時代が恥ずかしいよ。ぶひひひひ」

「ドキュンとか！　ぶひひとか！」

「ひ、離ちゃん？！　その、原因は？！　僕頑張つて元の國人君に戻してみるよ！」

「いや、私も聞いたんだけど、訳が分かんねえんだよ」

「よし、僕も聞いてみよう！」

「國人君！　國人君がこの道に引きずり込まれた理由は何？！」

「引きずり込まれたんじゃなくて導かれたと言つて欲しい！」

「うん！　分かった！　面倒くさいからとりあえず話を合わせる！　國人君は何によつて導かれたの？！」

「ふ……。俺は、運命の人にお会いちまたのを……」

そう言つて、遠い目をして壁にかかつたポスター眺め出した。

「運命の人？」

首を傾げる僕に離ちゃんが小声で教えてくれる。

「なんだかこいつよ、どつかの女のせいでこうなつちまつたみたいなんだ。でも名前だけでどこの誰だか分からねえし、その女の姿見したことねえし……。私にはお手上げなんだよ」

「そりなんだ……。運命の人って、何だろうね」

「せつぱり分かんねえよ

一応、聞いてみよ。

「あの、國人君。その運命の人って、どこで出会ったの？」

「ふ……。彼女とのなれそめを聞きたいか。いいだろ？ 教えてあげよう」

偉そうに椅子にふんぞり返り窮屈そうに足を組んで話し始めた。

「あれは、学校へ続く坂の下だったかな……。桜並木の坂の下。僕は彼女に出会ったんだ……」

あ、もうこの時点でアウトだ。國人君アウト。

「彼女はいつもぶやいていた……『あんまん』と……」

國人君は惚けた表情で壁のポスター眺めていた。ポスターには一人の女の子の絵が描かれていた。アウト。

國人君の言葉を聞いて離ちゃんが憎々しげに言った。

「学校の近くの桜並木ってのもどこか分かんねえし、あんまんつてのも訳わかんねえし……！ 畜生……どこの誰だか知らねえが、兄貴をこひんなんにしやがって……！ 許せねえよー！」

「……」

「もし見つけたらただじやおかねえ。ブツ飛ばして罪を償わせてやるー！」

「離ちゃん。戦えないよ。離ちゃんとその人では、次元が違いすぎるもん。詳しく言つと、相手の人に一次元ほど足りないかな。

「ね、ねえ、離ちゃん。僕、國人君と二人で話がしたいんだけど、いいかな？」

「え？！ お前襲われるぞ！」

「大丈夫だよ！ きっと」

「自分も信じてねえじゃねえか！ やめとけよ！」

「だ、大丈夫だよ。うん。國人君はやさしいもん」

僕の言葉を聞いて國人君が笑った。

「ぐふふ……優しくするよ……ぐふふ……」

……。うん。

にこにこと笑う國人君を指さして離ちゃん。

「あんなキモいデブと二人きりだなんて耐えられるのか？！」

「体重とか、容姿は関係ないよ。ここにいるのは國人君だもん。多分」

「確信持ててねえけど？！ 本当にいいのか？！」

「大丈夫。一人で話せれば、もしかしたら國人君をあの頃に戻すヒ

ントが得られるかもしねなによ

「……それは、確かに欲しいけど……」

「でしょ。だから、僕に任せと

「でも、優大が危ない目に遭うのは我慢できねえ」

「安心して、雛ちゃん。僕なら大丈夫。だから任せて

気持ちを伝える為に雛ちゃんをまっすぐに見つめる。雛ちゃんも真っ直ぐに見つめ返してくれる。
しばらく悩んだ結果、

「…………心配は呑きねえけど、分かったよ……。私は居間にいるからな、話が終わったら居間におりてきてくれ。危ないと思つたら叫び声を上げるよ。それ出来ない状況だつたら、近くにあるあいつのお気に入りの人形をねじ切れ。ショックで一時間は動かなくなるから」

「えげつなっ」と國人君が驚いていた。

「うんわかった。ありがと」

「ああ。……じゃあ、出来るだけ早く話し合ひを終わらせるよ」

雛ちゃんが開け放たれていたドアをくぐって廊下に出た。

「うん」

ゆつくつと扉を閉めて行く雛ちゃん。

最後に閉じかけのドアから顔を出して言った。

「…………じゃあな。叫んだら、すぐ駆けつけてやるからな

「うんありがと」

「…………うう、またな……」

最後に悲しそうな顔を見せて、國人君の部屋のドアを完全に閉めた。

「…………ぐふふ…………。優大タン、やつと二人きりになれたね…………」

椅子から立ち上がる音が聞こえる。

「うん」

僕は扉に向けていた体を國人君に向けた。

「って、もうすでに俺の大切なフイギュアを握りしめている？！
いつの間に！ しかも一番のお気に入りのフイギュア！」

「大丈夫。僕國人君のこと信じてるから」

「信じているのならそれを置いてほしい！」

「一応、その、保険として持つとくね」

「ぐ、ぐぶぶ……」

悔しそうに一歩後ずさつた。

「あの、その、久しぶりだね」

「んー。そうでござるねえ。俺が中一になつてからまともに会つてないから、えーっと、六年ぶり?」

「それくらい、かな?」

「いやあ、優大タン。可愛く育つてまあ! なんで早く俺に会いに来なかつたのつ。運命の出会いがこんなに近くで待つてゐるなんてお兄ちゃん衝撃!」

……。うん。

「あの、その、聞いてもいいかな

「いいよー。なんでも聞いて! やあんとお風呂入つてるし!」

意味が分からぬいけれど、まずこの状況について改めて聞いてみた。

「國人君、本当にビックリやつたの……? 昔は、アニメとか漫画とか、嫌い、だつたよね……?」

椅子に座り直し國人君が笑つた。

「あつはつは。いやあ、毛嫌いはよくないね。こんなに楽しいものに触れずに生きてただなんて、人生損しちやつてたわ! ひゃひ

やひや！」

楽しそうにお腹を叩く。うう……。國人君に見えない……。

「その、運命の人に導かれたって言つたけど、それって、あの、ゲームの……」

「そうそう！ 何？！ 優大タンも人生やつたの！？ いやあ！ いいよねあれ！ アニメも神懸つて涙腺崩壊しまくりだったね！ 優大タンはどの子が」

「ちよ、ちよっと待つて！ 落ち着いて！」

「ん？ なんだい？ 他の話がしたいのかい？ しょうがないなあ。じゃあ優大タンの嫁は」

「待つて待つて待つて！ 一旦、ストップ！」

「…………。はい、一旦ストップした。それで、優大タンの嫁は」

「うん僕の嫁の話は置いとこつー。それで、聞きたいことがあるんだけどー！」

「聞きたいこと？ もー。しづがないなあ。なんでも聞いてくれたまへ」

やつと落ち着いてくれた……。

「あの、ゲームが入口だったのは分かったけど、なんで、その、そ

れに手を出しちゃったの?」

「むふふ。運命って奴さ……」

「あ、あの、もつひょっと、詳しへ……」

「詳しへ? しょうがないなあ、優大タンの頼みだからダゾー!」

.....うん。

「いやあ、それがさあ。本当に運命の人に出会ってしまったんだぜ」

きこきこと椅子を鳴らしながらぐるぐる回る。

「.....ゲームの中の?」

僕の問いかけに椅子をピタッと止めた。

「違う違う。リアルの世界の、普通の男」

「男の、人?」

「うん」

その人が原因で.....。一体どうやってあのアウトローの代表國人君に美少女ゲームをやらせたんだろう。國人君がその時の状況を話出した。

「俺が新月になつたら襲われまくつたのは知ってるよね?」

「う、うん」

『新月の災厄』だ。

「今から一年とちょっと前、荒れまくっていた俺は新月の夜に街をぶらついて襲われるのを待っていたんだ。でもその日は一向に闇討ちの奴らが現れなくて、俺はイラついていたんだー」

「闇討ちの人気が来ないからイラつくって、すごいね……」

その頃はこうなるって思つてなかつたんだろうね……。

「当時は喧嘩が楽しくてしょうがなかつたからさあ。だから一向に始まらないファイトにかなりイラついていた。ただ無意味に街をぶらついてたんだ。……そんなときに、前方から背の高い男が何か袋を持ってこつちに歩いてきたんだ。ニヤニヤしながらな。それを見つけて、その時の状況と合わせさせてムカついた俺はそいつにケンカを売つたんだ」

「無茶苦茶だよ……」

でもそれが國人君だった。だから恐れられ、噂された。

「凄んで、胸ぐらをつかんで、腕を振りかぶつて、そしていつの間にか負けていた」

「え?...」

あの國人君が?! 負け知らずで有名だったあの國人君がいつの

間にか負けていた？！

「ああ、びっくりした。驚くほどあっさり負けてしまったんだ。驚いた。無敗だった俺が、こんな優男相手に完敗するなんて……。シヨックだった。ショック過ぎて泣いてしまったよ」

「えっと、もしかしてそれのせいでこの道に？」

「違う。そんなに脆くない。俺はリベンジするために毎日やいつも出合つた道で待ち伏せした。襲つてくるDQNどもを適当に潰しながらそいつを待つた」

……もひだキュンって言わないでほしー。

「時間を潰すみたいに人に怪我を負わせてるんだね……」

挑むのが悪いんだとは思ひナビ……。

「そして何日目かに、またそいつが現れた。また袋を持ってこむにやっていた。ムカついたね。俺をあんな目に遭わせておいて、にやにや笑つているだなんて。俺はそいつの前に出て、また喧嘩を売つた」

その人は全く悪くないけど……。

「……その結果は……？」

「またあっさり負けちまつた……。俺は悔しくて何度も何度もそいつに挑んだ。でも何度も何度も負けた……。悔しかった。負けるわけねえと思つてた俺が連敗するだなんて……」

「……」

考えられない。あの國人君が負けるだなんて……。そしてそこからひつなつてしまつだなんて考えられない……。

「負けて、負けて、負けて……。いい加減、俺にも分かってきた。こいつには勝てねえなつて。諦めようとしたんだ。上には上がいる。負けを認めようつて。そう思つて、最後にじょと黙つて挑んだ日……。」とは起きた

「……」

「よこよ、理由が聞ける。

「喧嘩を始める前に、そいつが変なことを言つだしたんだ」

「変な」と?

「ああ。なんか、『君には愛が足りない。それじゃあ俺には勝てない。これで愛を勉強すればいい。そして恋するといい』って言われて、袋から取り出された一本のゲームを手渡されたんだ……。普通なら、受け取らないか目の前で叩き割るところなんだけど、俺たちの間には変な友情が芽生えていて……。まあ、一応やつてみるかつて思つたんだ……。どうかしていた」

「……」

「それが、間違いだつたのかもしない——ヤー」

「うん。間違いだね」

一ヤー言ひな。

「でも俺は後悔していない。むしろ感謝している。あの人は、俺の師だ！ 先生だ！ もう一度あの人に会いたい！ でも、どこの誰かも知らないし……」

「でも会える場所なら、知っているんでしょ？」

「何度もひびきを交えているのなら、そこへ行けば会えるはず。でも会えないのは……。もしかしたら何か理由があるのかも……。」

「…………だつて、そこまで行くの、疲れるし……」

「うん分かったありがとうフィギュアおいておくれたようなりまたいつか」「…………」

「怒涛のように一気に詰め込んだね！？ 優大タンもう帰るの？ もっとゆっくりしてこきなよ！ 明日学校休んじゃおつ！」

「明日はもともと休みだよ……」

曜日感覚が無くなってる……。

「なり」の部屋に泊まつてこいつだー。ねえ、ねえ。いいよね、いいよね

「うーじめんね。僕家に帰つて」飯作らないといけないから……」

「わあ！ 花嫁修業中ですか！？ 僕の為に花嫁修業中なんですね？！ ありがとう！ いつでも嫁いでおいで！」

「そ、それなら…」

「え？！ ちょっと待って！ こんな面白くない話だけで帰るの？！ ねえもつとオタトークで盛り上がりつけよー ねえ、ねえ！」

迫つてくる國人くん。

僕は慌てて國人君の部屋を出て居間へ向かった。

うう……。実は結構怖かつた……。殴られるとかじやなくて、貞操の危機の意味で……。

居間の扉を開ける。居間では離ちゃんがうろついた落ち着きなく歩き回っていた。僕が入ってきたのを見てホッと息をつき安心の表情を見せて近づいてきた。

「何もされてないよな……。よかつた

ぽんぽんと僕の体を触つて異変がないかを調べてくれる。

「國人君は優しいから、何もしてこないよ

多分。一晩一緒に過ごしたらどうなるか分からぬけど。

「優しくねえよあんなデブ。それで、何か分かったのか？」

一步離れて聞いてきた。

「うん。外に出たくないらしいところ」ことが分かったよ

「…………あのデブ……」

雛ちゃんが呆れたように怒っていた。

「雛ちゃん。國人君に会わせて貰てありがとう」

僕は頭を下げる。

「いや、あんなデブ何の役にも立たなかつたら。悪かつたな……」

「ううん。とつても、参考になつた」

「参考つて、あんな奴のどこが

「……人つて、変われるんだなあつて！　だからきっと、僕も変わ
れるよね！　自信がついたよ！」

「……なんともまあ前向きな受け取り方だな。でも役に立つたのな
ら私も救われる。あんなクソ兄貴でも人のためになれるんだな」

雛ちゃんが笑つた。

かと思えば、突然困惑したような顔になつた。

「……私は、お前に変わつて欲しくねえけど……」

「え？　でも、こんな情けない性格じやあ、雛ちゃんも友達として
嫌でしょ？」

「んなことねえよ。優大が優大だから、その、好きなんだよ……。
……い、今的好きつてのは、その、なんだ。別に、深い意味がある

わけじやあ、ねえぜ」

「うん。分かつてるよ。勘違いできる身分じゃないもん。あ、で、でも、僕も、雛ちゃん、す、好きだよ」

「ううう。……そ、そつか。うん。そつかそつか」

お互い顔を真っ赤にする。この二つことを顔と向かって叫ぶのが、恥ずかしいよね。

「あ、やつ言えば」

恥ずかしいといえば。

「ん？ なんだ？」

「あの、僕、國人君とキス 」

僕が言い切る前にまた顔を赤くした雛ちゃんが大きな声で叫ぶ。

「そのことはもういいんじゃねえかなあ？！ なあー、夢つてことでいいんじゃねえかな？！」

「う、うん。そう、なのかな？」

「やつやつー 気にすんなよー」

「うん。なら、気にしないこととするね」

「やつやつー！ 別に嫌じやねえだろ？！」

「え、い、いや、その、僕、男の人と、その、やつ言いりとあるのは、あまり、好きじゃないけど……」

「ま、まあ、そうだよな。でも安心しや。あれは帳消しなつたはずだから」

「帳消し? どうこいつこと?」

「……」

赤面して怒った顔をする。

「わ、私にかかれば、あんなの……、帳消しにする」とくらいたやすいんだよ。それで納得しうつ」

「う、うん」

なんだか、これ以上聞いたら離ちゃんの顔から火が出しつだ。
だからもう聞くのはやめよう。

倒れる前に感じた國人君の唇の柔らかさと、夢の中で繰り返し感じた柔らかさの違いに妙な違和感を覚えながら、僕は追い出されるように離ちゃんの家を後にした。

生徒手帳に何を書けばいいのかわからない

雛ちゃんの家から帰ってきた僕は居間に入り姉と弟に帰りの挨拶をする。二人とも笑顔で返してくれた。

ソファに腰を下ろしていいる弟の隣に座りテレビに目を向けた。何故かお姉ちゃんがダイニングのテーブルから僕の隣に移動してきたが気にしないようにしよう。

テレビから流れてくる夕方のニュース。

隣町で交通事故があつたらしい。危ないね。

次のニュースはまた隣町。よく分からなければ、爆発があつたらしい。

そのほか色々なニュースが垂れ流されてくる。

僕はぼうっとそれを聞いていた。

そしてふと思い出す。

そうだ。今日は金曜日なので制服を洗濯しなければならない。まとわりついてくるお姉ちゃんを引きはがして制服を洗濯器の中に入れる為に洗面所に入った。

きちんとスラックスのポケットの中身を確認しなくては洗濯物が大変になる。

僕はポケットの中に手を突っ込み裏返した。

裏返してみて僕は首をかしげた。

おかしい。いつもポケットに入っていた生徒手帳が無い。どこかで落としてしまったのか。

いつ落としたか全くわからない。今日あつたかどうかも分からない。

念のため自室に戻つてカバンの中身をひっくり返してみるが生徒手帳は見つからない。

もしかして……、昨日山を登つた時に落としたのかな。
きっとそうだ。

僕は日が落ちる前に見つけようと、大急ぎで山へ向かった。

「ここの辺りかなあ」

いつも登る山道を、ゆっくり辺りを見渡しながら歩いて行く。夕日に照らされ、赤く燃える炎のように生い茂っている草木。

今日はもう駄目かもしね。すぐに暗くなる。

通り慣れた道でも暗くなれば別だ。光があるのと無いのでは別世界なのだ。

学生証は生徒手帳とは別に用意されているので、生徒手帳なんて使ったことないし使い方わからないし、別にすぐに見つけなければいけないものでもないはず。生徒手帳って、名前以外なにか人に見られてはまずいもの書かれていたっけ？

まあ、とにかく。必要のないものだろうし今日はやめようかな。

そうしよう。もう暗いしね。

そろはいつも落とし物が見つからないのは気持ち悪いのでとりあえず秘密基地までの道のりは歩いてみるのだけれども。

結局秘密基地まで行つても見つからなかつた。

そもそもここで落としたわけではないのかもしね。
あとあり得るとすれば、校舎裏か、雛ちゃんの家か。

「でも、多分ここだと思うんだけどなあ……」

見つかからなかつたらどうしよう。再発行してくれるのだろうか。再発行の手続きは？ どこですればいいのだろうか。担任の先生に言わなければいけないのかな。やだな。また何か言われる。代わ

りに学年主任の先生に聞いてみようか。

……」こんなことじゃなくとも、驚かれるよな。歸れ。もし牆へなつてしまひ。

でも、その前に。

靴を脱ぎ、狭い秘密基地に入る。僕の身長でも屈まなければ入ることはできない。中は僕が四人集まればそれでもう満室になる狭さ。そこで寝転がつてみる。

秘密基地の真ん中に突き刺した棒が天井のビニールシートを支えている。これのおかげでシートがたわまない。雨が降つても水が溜まらない。あの頃の僕らにしてみれば劇的な発明だった。

色に光る。

もうすぐ陽が落ちる。そうなれば青も赤も関係ない。すべてが暗闇に包まれる。この山の中では、月明かりだけが味方だ。しかしそれだけでは心もとない。懐中電灯でも持つて来ればよかつた。天高く僕らを照らす月よりも、僕の手に握られて足元だけを照らす懐中電灯の方が心強い。今日はその心強い味方を持つてきていない。だから暗くなる前に帰ろう。

僕は体を起こし、秘密テントの中から這い出た。
靴を履こうとしゃがみ込んでいたところに、

「！」

突然横かけられた大きな声に驚き腰を抜かしてしまった。

「ななななに？！」

破裂しそうな勢いで収縮を繰り返す胸に手を当てながら、僕は声

の正体を確かめた。

「偶然」

楠さんだった。楠さんが後ろで手を組み立っていた。

制服ではないのでいつたん家に帰つて着替えてきたのだろう。デニムのホットパンツに黒のストッキング。上はTシャツ一枚。足はハイカットのスニーカー。初めてここで目撃したときよりは山を登りやすい格好だと思う。

「きなり声をかけられた驚きと楠さんの非日常レベルの容姿にぼうとしている僕を楠さんが無表情で見下ろしている。

「こんなところで何してるの？」

「な、なんでもないよ」

驚いてみつともなく片手とお尻をついていた僕は、楠さんの前でこんな格好は見せられないと膝を抱えて座った。

「ふーん。でも何か探してたでしょ」

「え？ 見てたの？」

僕より先に来ていたということか。

「見てたよ。また私を追つてきたのかなと思つて、木の陰に隠れて見ていたんだけど、何か落とし物を探しに来たみたいだね」

「うん。生徒手帳を落としちゃって。ここかなつて思つてきたんだけど、見つからなかつたんだ」

「ふーん。手伝つてあげようか」

「え、いこよ。もつ暗くなるし、ここに落としたんじゃないかもしないし」

「一人じゃ見つからないでしょ。手伝つてあげるつて言つてるの」

「そんな。悪いよ」

「悪くない。代わりに、私が見つけたら一つ言つひとを聞いてもらいうから。それでいいでしょ？」

それが狙いだつたのかな。

しかし、そんな裏があろうがなかろうが、手伝つてくれる」とはとても助かる。ここで断る理由がない。

「あの、つづくん。楠さん」「迷惑かけられないから、大丈夫だよ？」「一人で探せるよ？」

けれど、僕は断つていた。

一向に物探しの手伝いを認めない僕に楠さんが苛ついた表情を見せた。

「……なんで手伝つて言つてあげてることその好意を受け取らないの？」

「え、あの、ごめん……」

「謝るんじゃなくて、理由を聞いてるの」

怖い……。でも、楠さんの話通りだ。

「その、楠さん」、迷惑がかかると黙つて

「私がからぬに出したのに迷惑もあるわけないでしょ」

「は、は……」

「まあ、手伝つてほしくなこのなら断ればいいんだ」

「そんなことは、無いけど……。手伝つて欲しくない」とは無いのです

「手伝つてほしくのこ、頼は断つたんだ。迷惑がかかるからつけて

「うん……」

楠さんが大きなため息を吐いた。

「君さ、それよくなじよ

「あれとは、断つたことだよね。

「へ、ひん

「なんだと想ひへ」

「え。えっと、せつかく手伝つて言つてくれてこるのこ、その好意を受け取らなかつたことが、失礼にあたるから、かな……」

「違うよ」

「え？」

違つらしい。

「佐藤君はさ、それが優しいと思つてゐるんでしょ？ 他人に迷惑をかけないことが、人に優しいって思つてゐるんでしょ？」

僕は何も言えない。何故だかは分からぬ。とにかく楠さんの言葉を聞く。

「それは優しさなんかじゃないよ。いや、優しさかもしれないけど、少なくとも君の行動の裏にある物は優しさなんかじゃないよ」

楠さんが体育座りをする僕と視線を合わせた。

「君のそれはね、どこからどう見てもただの臆病」

「……臆病……？」

臆病。確かに、僕は臆病だけど……。この場面でそれを言われるとは思つてもみなかつた。

「君は臆病。人に手伝つて貰つて借りを作るのが怖い。人と支え合つていくのが怖い。それじゃあ、友達なんかできるわけないよ。距離を縮めようとしないんだから」

「…………そう、なのかな……」

「そりなんだよね、残念ながら。君は傍観者で満足していいの？せっかく副委員長になれたんだからもっと人生楽しんでみてもいいんじゃない？」

「うん……」

僕は……。

「……あまり積極的に楽しみたいとは思っていないみたいだね。どうして？ 主体的に過ごした方が楽しいでしょ？」

「うん……。それは、そつかもしれないけど……」

楠さんが僕の肩に手を置き、力を込めた。

「言いたいことがあるなら、はつきり言ってね

「は、はー」

怒られるといひだつた。

「僕なんかが、自発的に行動したって、誰も楽しくないから……。だから僕は、受動的に、みんなが楽しんでいるものに巻き込まれて生きた方が、楽しいし、その、迷惑をかけないですむし……」

「迷惑ね。人を困らせたくないから自分が困る。バカみたい

「う、うん……。自分でも、そつ思つ」

「自発的に生きられないから受動的に生きるね……」

楠さんが立ち上がった。

「それが楽なんですよ。恥もかかないで済むし、傷つくなことも無い。迷惑をかけたくないとか言つてるけど、結局は楽だからですよ」

「…………そう、かもしれない…………」

「もうなんだよ、きっと。巻き込まれる人生はそもそも楽だらうね。流れにのるだけ。自分は一步も動かないんだから。でもそれ、疲れないけど乐しくないですよ」

今までそやつて生きてきた僕の人生。樂しくないか、樂しかったかと聞かれたら、迷わず僕は答える。

「楽しいよ。だって、今まで悲しい出来事が無かつたから」

「楽しいと悲しくないは別物でしょ」

「…………そうかもしれない。」

「それと」と、楠さんが言つ。

「君は、自発的の反対が受動的だと思つてゐるやうにけれど、自発的の反対は強制的なんだよ。君は今まで強制的な人生を歩まされてきたんだよ。強制的な人生が楽しいだなんて思わない。強制的に楽しまされるだなんて、考えただけでも腹が立つ」

強制的に、樂しませてくれるのならそれでいいんじや……。

「自発的な人生を送つてこなかつた人は、無理やり人生を選ばされる。どう? こう聞いたらちょっとは自分で人生を作る気になるんじゃない?」

楠さんが前かがみになり僕に少しだけ顔を近づけた。ちょっと緊張してしまう。

少し考えてみる。

強制的に送らされる人生。

確かに、楽しそうではない。

今まで僕は『自主的』に『受動的』に生きてきたと思っていた。でもそれは違うらしい。

僕は『強制的』に『受動的』だったみたいだ。

……よくわからなくなってきた。

でもよくないことだけはわかる。

これじゃあ、よくないんだ。

「うん。 少しは、うん。 積極的になろうと思つた

「そつか

体を起こしほんの僅かだけ笑う。

「それならよかつた。だつたらまず、その臆病を治さなきやね。その臆病のせいで傷つくるを恐れるし、他人の目を気にして恥ずかしがる。言いたいことは言つてやりたいことはやる。勇気を出して、自分で人生を選ぶ。勇気を出せば人生変わるよ、漢氣見せてよね」

「うん

人生が変わる、か……。

……國人君もあれだけ変われたんだ。僕だって、変われるはず。うん。

僕は心の中で頷いた。頑張ってみよう。

小さく決心をした僕の前でしゃがみ込み、また僕と視線を合わせて楠さんが言つ。

「で、生徒手帳の話だけど。手伝つから、私が見つけたら一つ言つこと聞いてね」

「そ、それは、大丈夫です」

「……でた臆病……」

「え、いや

「一つ言つこと聞いて、と言つフレーズが怖いのは仕方がないと思うんだ。

「あーもういいよ。一人で探せばいいよ

立ち上がり、そのまま歩いて行く。

そして立ち止まらず、思い出したように

「あーそうそう。今アドバイスしたことでの前の草むしりの一件はチャラね」

背を向けながら手を振りそう言う楠さん。

少し距離を開いたので僕は手でメガホンを作り大きな声で言つた。

「草むしりの事つて、僕全然気にしてないよー？」

「君が気にしてなからうが関係ない。私が気にしていたんだから」「大きな声ではないけれど、とてもよく響いてくる。やつぱり楠さんは凄いと思った。

しばらく歩き、立ち止まる。

何事かな？と思つていると、楠さんが振り返り僕を指さして言った。

「じゃあね、佐藤君。人生楽しみなよ」

楠さんが笑つた。

無邪気とか、屈託がないとか、嫌味が無いとか、まだ色々と褒めたいけれど、これだけじゃあ足りないけれど、それよりなにより、一番に言いたいことは、楠さんの笑顔は、とにかくにもけた違いに綺麗だった。

楠さんが去つた後しばらく何も考えられなかつた僕を誰も責めようがないはず。

その後、楠さんからのメールで正氣に戻つた僕。

そのままメールを開封し、『郵便受け』と書かれたメールに首をかしげたが、家に帰つて郵便受けを見てみると僕の生徒手帳が入れられていた。

どうやら、楠さんが見つけて入れてくれていたらしい。

『見つけたらひとつ言つこと聞いて』というのは、勝ちが見えているから持ちかけられたことだつたようだ。……承諾しなくてよかつた。

デジタル・バーサタイル・ディスク

いろいろと忙しかった土日はあつとこいつ間に過ぎて行き、月曜日。

土日に色々と考えて、僕は一つ作戦を思いついた。

これがうまく行けば、小嶋君も暴力をやめてくれるはずだ。

その為に必要なのは根気と誠意と、そして勇氣だ。

「小嶋君っ」

「……」

朝一番に声をかけて、不機嫌そうな顔で睨み付けられる。でもひるんではダメだ。

「あ、あのっ」

「うるせえ……。うめえ、うるせえんだよ……ー。」

勢いよく立ち上がり、僕の胸ぐらをつかんできた。またトイレに連行されてしまうのだろう。でも、その前に。

「これー。これを、小嶋君にー。」

「あん?」

僕は一枚のDVDで自分の顔を隠した。

「その、これを是非小嶋君にー。」

「……」

胸ぐらをつかんでいた手を離し、僕の手からDVDを奪い取る。そしてそのままDVDをへし折った。

う……。予想していたけれど、かなりショックだ……。

そのあと僕の顔めがけてそれを投げつけ、満足したのか僕をトレに連行することなく腰を下ろした。

う……。また次の休み時間に挑戦しよう。

うう言つわけで、僕の作戦はDVDを見てもうひとつ。

朝も合わせて、各休み時間と放課後に合計七回DVDを渡そうとしたけれど見事全部へし折られました。おまけに放課後、いつもとは違う場所、屋上で殴られました。いえ、過去形ではありません。現在進行形で殴られています。

「なんなんだよてめえは。気持ち悪いんだよ

「うう……」

胸ぐらをつかまれ睨み付けられる。

「嫌がらせか？ あ？」

「ち、違つよ

「な、ひなんだよ。お、ひ。『ひてみうよ』

何度も何度もびんたされる。

「い、いたつ、その、僕、小嶋君に見てもうこいたいものがあつて」

「てめえから受け取つたも誰が見るかー！」

思いつきり顔を殴られた。

地面に倒れ込む僕を小嶋君が睨み付けている。

「てめえ、明日も今日みたいなことじやがつたらただじゃおかねえからな」

「……」

「……ちつ

舌打ちをして早足で校舎内に戻つて行つた。

「ひひ……。踏んだり蹴つたりだよ……」

DVDは割られるし、殴られるし……。

「先行きが暗いよ……」

痛いよ……。顔とか、精神とか……。でもあきらめられない。僕がなよなよとコンクリートの上にへたり込んでいくところ、

「……楽しそうなことしているね」

誰かが屋上の影から出でてきた。

「え、あれ、楠さん？ もしかして、みてたの……？」

「うん。佐藤君が小嶋君に連れていかれたのが気になつてね。後を追つてあちやつたんだ」

恥ずかしいや。情けないとこ見られてしまつたね。

「『めんね。怖くつて助けに行けなかつたよ。痛そつだね』

苦笑いを浮かべながら近づいてきた。

「ひつん。痛いけど、僕が悪いから」

僕の傍にしゃがみ込む楠さん。

「へえ、君が悪いんだ。なんだか朝から小嶋君にまともわらついていたけれど、何をしていたの？」

「あれは、僕が小嶋君に見せたいものがあつて、一生懸命勧めていたの。進め過ぎたみたいで怒られたというわけです」

「ふーん。それは佐藤君が悪いね。無理やりはよくなつて

「ひ、うん。そうだね。僕も無理やりはよくなつと思つ。でも僕は無理やりじやないよ。一生懸命勧め過ぎただけ」

「それは無理やり。無理やりはよくなつによくないよ。でも

楠さんの顔が険しいものになつた。

「 暴力はもつとよくな「よ」

小嶋君を責めているのかもしない。でもそれは違う。

「暴力はよくないかもしないけれど、小嶋君のは教育だから」

あまり勧め過ぎるなよと教えてくれているんだ。
しかし、楠さんとしては認められないらしい。

「それでもダメなものはダメ。教育だらうがなんだらうが手を出す
のは罪なんだよ」

「え、でも、教育なら……」

悪い事をしたら、叩かれても文句は言えないと思つけれど。

「駄目なものはダメ。自分の身を守るために、責任が持てない
暴力は絶対によくない」

責任。よく分からぬいや。

「責任つて、なに?」

「責任は責任。振るつた暴力には絶対に責任が伴つ。罪を償つと言えば分りやすい?」

「罪を償つ?……」

教育的指導も、罪なのかな。

「子供が悪い事をした。先生は殴るつか躊躇つていてます。もうこの時点でその先生はダメ。ダメダメ。戸惑つ時点でダメ。戸惑つていうことは、PTAとか親の反応が怖いってこと。親たちの反応が怖いってことは、自分の保身を考えているってこと。自分の保身を考えているってことは、子供の為に振るう暴力ではないってこと。つまり?」

「つまり?」

「つまり、先生が振るおつとしていたのは自分の為の暴力なんだよ。悪い事をした子供を叱る為じゃない。言つことを聞かせる為に振るおつとしている暴力ってこと。罪を背負つのを恐れているから戸惑うんだよ」

「やつなのかな……」

「そうなの。本当に子どもの為を想つて、子供を正しく教育するためなら自分の事なんか考えずに殴るべきなんだよ。責任を持つて、殴るべきなんだよ」

「責任つけて、どう責任をとればいいの?」

「PTAに怒られればいいよ。最悪、怒られて辞めればいいんじやない」

「子供の為に叩いたのに、それほど重い責任を背負わなきゃいけないのかな……」

先生がかわいそだよそれじゃあ。先生だって人生があるんだし、

職を失うのはこきすきだよ。

「それが責任つて奴だよ。暴力はそれほど重い」

暴力はいけないことだと思つけど……。やじまでなのかな。

「暴力をふるう人はその罪を知つておかなければならぬんだよ」

罪。

確かに暴力は罪だ。

それを知つたうえで行使しなければならないものだと楠さんは言いたいらしい。

「えつと、でも責任が取れれば殴つてもいいの？」

「いいと思つよ」

「そうなんだ……」

それは、なんだかおかしな氣もする。

「理不尽な物でもいいの？」

理不尽な暴力はどんな状況でも認められないはず。責任が取れるからって認めていいものではないよね。
しかし、楠さんは言つ。

「いいよ。殴つた後相手を納得せしめる責任の取り方ができるなら

「……でも、理由がないのなら……ダメだと思つ」

「まあね。だからそんなものこなとんでもない責任が伴うんじゃないかな。死刑とか」

「そ、それは、重いね……」

確かに、自分の命を懸けて理不尽な暴力をふるひのなら、まあ、よくはないけれど、その覚悟はすばらしいと思つ。

「重いよ。暴力は重い。私は小嶋君にそんな責任が取れるとは思わないね」

「小嶋君は、責任取る必要ないよ」

だつて、僕が悪いんだから。

「…………はあ…………、君がそれでいいのなら、別にいいと御づけだ。責任なんて言つてもあくまで被害者が納得できればいいことだし」

楠さんが立ち上がり、どうでもよくなつて手を振つて屋上から出て言つた。

「…………何が伝えたかったんだろう?」

よく分からないや。

でも、もしかしたら僕は悪くないって言つてくれたのかもしねないね。

違うかもしれないけど……。

結局作戦初日は小嶋君に話も聞かれずに終わってしまった。
でも、僕は諦めない。

しかしDVDはあと一枚しかないのでもう明日からまたで説得して見せよう。

ブッシュュブッシュ

一日目。

朝一で、小嶋君の元へ向かう。向かっている途中ですでに睨み付けられているが僕はひるんでいられない。

「小嶋君。おはよう。僕小嶋君に見てもらいたいものがあるんだ」

と、言つた瞬間。小嶋君が立ち上がり、僕を掴んで投げ飛ばした。派手に机をなき倒しながら転がる僕。いきなりのことで驚いた。

「いたた……」

痛いで済んでよかつた。

「てめえいい加減にしやがれ！ 何なんだよ一体！ ぶつ殺されてえのか！？」

小嶋君がとても怒つている。

「う、ゴメン。でも、僕小嶋君に見てもらいたいものが……」

「うん、すんすんと近づいてくる。う、怖い……。

小嶋君が近づいて、上半身を起こしていた僕の肩に足を置き勢いよく押す。

「俺に何を見せてえんだよ。何の嫌がらせだよオラ。言つてみろよ

そのあと何度も何度も僕のふくらみを蹴つてくる。痛い。

「嫌がらせなんかじゃ、ないよ。あの、僕、小嶋君に見てもらいたいアニメがあつて……」

「アニメ? 誰がそんなクソみたいなもん見るんだよ! いい年こいでアニメアニメ気持ち悪いんだよこのオタク野郎! セリヤと死ね!」

そう吐き捨て、自分の席へ戻つて行った。

「う、うめんなさい……」

つぶやいてみても、多分聞こえてない。
ダメだ。もう話を聞いてくれそうにない。また時間をおいて話そ
う。

一時間目、体育。

今日の体育はバスケ。

僕は小嶋君にマンツーマークする。

「ねえ、小嶋君」

「……イライラ」

「僕小嶋君に見てもらいたいものが、」

「イライライラー!」

う！ 押された！
審判が笛を吹く。

「ファール」

一ちらボールになった。

四時間目、美術。

今日の美術は校内スケッチ。
校舎内を自由に歩いていいので僕は小嶋君に着いて行った。

「ねえ、小嶋君」

「..... イライラ！」

「僕小嶋君に見てもらいたいものが、」

「イライライラ！」

「うわ！ 跳つ飛ばされた！」

「これはフレグラントファウルだよ！？」

「..... 美術だけど.....」

「小嶋君」
昼休み。
食堂にて。

「うるせえー、ンだよこつけなー、キモいんだよー。」

僕のしつこい勧誘に耐えかねて小嶋君が怒鳴り声を上げる。食堂中の視線が一気に集まり僕は少し恥ずかしい。

「てめえ、まだ殴られてえのか?ー。」

「な、殴られたくはないけど、その、僕、見てもらいたいものが…」

「お前はそれしか言えねえのか? 昨日からそろばっかりじゃねえか! んなもん見えねえからせつと失せるボケ!」

「ダメーー。じゃあ、また次の休み時間に」

「くそなよー、うつとおこいんだよお前! 諦めりやー。」

「それは、できなー。」

「なんで俺に見せようとするんだよ気持ちわついなあー、お前はホカ?ー。」

「ち、違つよ。僕はホモなんかじゃないよ。」

「うるせえホカマ野郎ー、ひとつと視界から消えろー。」

お腹を殴られた。

「これ以上説得してもダメなよつなので引き下がることにした。うつ……。なかなか強敵だよ……。」

放課後。

ホームルームが終わり真っ先に向かつたのは当然小嶋君のところ。

「 いじる、」

「 うるやこもうくんな

それだけ言つて、僕の方をちらりとも見ずに教室から出で立つた。

……今日もダメだったね……。

落ち込んじゃうなあ……。

「 お前何してんだ?」

離ちやんだ。

離ちやんが不思議そつに僕を見ている。

「 休み時間の度に小嶋に話しかけに言つてたけど、どうしたんだお前。今まで散々殴られてきたんじゃねえの?」

そうです。しかも今朝は投げ飛ばされました。でも離ちやんはまだ学校に来ていなかつたから見ていないね。

しかしここで殴られないと認めてしまつてはいけない。離ちやんと小嶋君が喧嘩になつてしまつといけないから。

「 僕はただ小嶋君と仲良くなつと想つていいのだけだよ」

「仲良くなつて、今すぐ一拒绝されてたぞ。無理だろ。そもそもビツつやつて仲良くなるつてんだよ」

「うん。僕は、小嶋君の趣味とか好きな物とか分からないうから、とりあえず僕の好きなものを見てもうつて小嶋君にこそれを好きになつてもらおうと思つてるんだ」

「相手の好きなものを作ろううつてか。そりゃまあ、好きになつてくれりやあ話題は作れるよな。でも優大の好きな物つてなんだ?」

「僕の好きなものは、アニメだよ」

「……アニメ、ねえ……。アニメとか漫画とか、あのくそデブの事しか思い浮かばねえわ。気持ち悪い」

離ちゃんの顔が渋くなつた。

「え、もしかして、離ちゃんもアニメとか漫画が好きな人つて嫌いなの? 楠さんも、小嶋君も言つてたけど、オタクつて気持ち悪いつて思つてる……?」

「うだとしたら、もしかしたら僕もそう思われているのかもしねない……。」

でも離ちゃんはカラッとした顔で言つ。

「別に個人の趣味に口出しするつもりはねえよ。お前が好きなならそれでいいじゃねえか」

「でも、今國人君の事思い浮かべて、その、気持ち悪いって……」

「それはあのテブだからだ」

「え、容姿が嫌いなの？ それは、その……あまつこいじやないと思つ、ケド……」

「容姿じやねえよ。私だって他人の容姿をとやかく言える顔じやねえし」

「雛ちゃんは可愛いよ？ 言わないけど。

「あいつ、気持ちわりいじやん。行動とか。発言とか

「……」

言葉に困ります。

「やつこつといふのが気持ち悪いって言つてんの。だから別に優大の」とは気持ち悪いとか思つてねえぜ。だから安心しり

「うん」

突然小声で話し出す雛ちゃん。

「……でさあ、その、兄貴の事、出来れば周りの奴にしゃべらないで欲しいんだよな。優大なら言つふらしたりしないだろ? けど、一応な

「うん。分かつた。内緒にしておくね」

「悪いな」

離ちゃんの気持ちがわかる僕は良い人間ではないね……。

「それで、なんで小嶋と仲良くなりたいんだ?」

「え、べ、別に、理由は……」

「あー、なるほどな。殴られるから、仲良くなつてそれを防ぐ」
「か」

「殴られてなんかいないよ?」

「なんだよ。何とかしてほしかつたら私に言えぱいのこ。即日解
決して見せるぜ」

「な、殴られてなんかないっぽー。」

「はいはい。にしても、仲良くなりたいからアーメを勧めるねえ
…」

「え、まづいかな」

「別にそういうことが言いたいんじゃない。まあなんだ。
お前が頑張ってるのを邪魔できねえし。しつかりやれよ」

「うん。……?」

何か、気になることでもあるのかな……。
まあ、いいや。離ちゃんに応援してもらつたし頑張りつ。
作戦開始一回目はうつとうしがられて終わった。

二〇三。

朝。

「小嶋君」

「…………はな……」

毎。

「小嶋君」

「…………はああ……」

放課後。

「小嶋君」

「…………。お前、よく諦めねえな…………。しつこりやがる…………」

あきれたような顔で僕を見る。

「どうしても、見てもうこたいから」

「見ねえから」

「面白」とよ?」

「見ねえから

「でも、」

「見ねえから」

カバンを持つてそそくさと教室を出て行つた。
あーあ……。今日も失敗か……。

今日の結果。

三回戦にして、僕はどつしそうもなく呆れられたみたいだ。

四日目。

朝。

「小嶋君」

「……はつ……」

いきなり笑われた。

「ど、どつしたの? 僕何かおかしいかな」

「いや、お前色んな意味ですげえな。見ねえっての」

「でも、面白によ

「どうでもこいわ。見ねえよ」

小嶋君が机に突つ伏した。
これ以上話を聞いてくれそいつにもないし、仕方がない。引き下が
るつ。

昼。

「小嶋君」

「ぶはつ。またお前かよ」

前より大きく笑われた。

「お前マジなんなんだよ」

苦笑を浮かべながら小嶋君が言つ。

「見なこつづーの」

「それでも見てもらいたいんです」

「俺じゃないやつに見てもらえよ。こへり来ても無駄だつて

「で、でも……」

「 もつくんなよ」

ひらひらと手を振つて、男子達の輪に混ざつて行つた。
さすがにそこには「む勇氣はないね……」。
僕はすくすくと自分の席へ戻つた。

放課後。

「 小嶋君」

「 ははは。またきやがつた……」

あきれ返つて笑いしか出ないみたいだ。

「 あの」

「 みないみない。じゃあ俺部活が忙しいから。もう来るなよ。時間
の無駄だぞ」

僕の話を全く聞かずに去つて行つた。
「うう……。ダメなのかな……」。

今日の結果。

作戦開始から四日目、僕は小嶋君の笑顔が見れた。これは小嶋君
との仲が進んだと言つてもいいのかもしれない。

そして、五日目。

朝。

「小嶋君」

「もう本当に勘弁してくださいー。」

五日田は、泣かれた。

僕は小嶋君に泣いてお願いされた。
まさか、泣き顔まで見れるなんて。これはもう友達と言つても過
言ではないね。

「もうマジでなんなお前？！ 嫌がらせだとしたらすげえよこれ
！ すげえ参る！ もう謝るからこれ以上付きまとうのはやめてく
れ！ 悪かった！ 色々と悪かった！」

机に手をついて何度も頭を下げる。

「そんな。僕謝つて欲しいわけじゃなくて、僕のおすすめアニメを、

「

「アニメなんか興味ないつづーの！ 佐藤の情熱は十分伝わってき
た！ うん、すごいなお前は。これからもがんばれ。いい趣味だと
思うぜ。でも俺には勧めてくるな。分かったか？」

「…………。僕のお勧めはね、」

「やめてくれえええええ！」

と叫んだあと、椅子の上でぐつたりしてしまった小嶋君。
え？！ なんでこんなに精神が衰弱してしまっているの？！ 僕

精神攻撃してたっけ？！

「悪かった……俺が悪かった……」

「ぶつぶつと口から何かが漏れているけどよく聞こえない。」

「あの、これ。僕のおすすめアニメ」

「PPマーク最後の一枚。これが割られたらまたPPマークする作業で土日を潰さなければならぬ。」

小嶋君が僕の持っているDVDを一瞬見て首を振った。

「俺、見ええって……。見ないから、やいつをしまつてくれ……」

「でも、とっても面白いんだよ。きっと小嶋君も気に入るよ」

「…………やめてくれー…………かんべんしてくれー…………」

死にそうだった。

ど、どじみつ。こんな姿を見せられたら僕困つてしまつ。もうこれじゃあ勧められない。まるで僕がいじめてくるみたいだ。みじょつかと、おうおろしてくるといふに誰かが声をかけてくる。

「オハヨウ優大。ン、ドウシタンダ?」

離ちちゃんが何故か棒読みでやつってきた。

「あ、おはよおはよ離ちちゃん」

「優大、イマハ、ドウイウ状況ナンダ?」

そんなことより離ちゃんの状況の方が気になるよ。

「えっと、僕が、小嶋君にアニメを勧めているんだけど、小嶋君が遠慮しているつていう状況」

「へへ、……ダッたらあ、私が見てやるよ! な!? 優大のおすすめアニメ見てみたいなあ! いいだろ? 私に貸してくれ! 優大のおすすめアニメを私に貸して仲良くなろうぜ!」

小嶋君に貸そうと思つて焼いてきたけど……、まあ、仕方がないよね。小嶋君が見たくないっていうんだもん……。わざわざコピーしたもののが誰にも見てもらえないなんて悲しいし、見たがっている離ちゃんと貸そつ。うひ……、作戦失敗だよ……。

「うん。小嶋君が見ないのなら、離ちゃんに」

僕が離ちゃんとDVDを渡そつと差し出したとき、それを横から奪われた。

僕の近くにいるのは離ちゃんと小嶋君の一人しかないので、奪つたのは当然小嶋君だ。

「ちよつと待てよ」

DVDを持つて離ちゃんを睨み付けている。

「んだよ。それは今から私が借りんだよ。てめえは寝てろカス」

「うぬせえ。」のロロロは佐藤が俺に貸すために持つてきたものな

んだよ。誰が有野に渡すか

し、しまった。雛ちゃんと小嶋君は仲が悪いんだつた！ 喧嘩が始まつちやつたよ！

「小嶋、てめえいらねえいらねえ言つてたじやねえか！」

あれ？ なんで知つているんだう～～ 今来たんじやないのかな？

「はあ？ 知らねえよ。これは俺が借りるんだよ。有野はどつかいつてる！」

「んだとてめえ！ もうかとローローせー！」

「つるせえ！ てめえは俺の次だ！」

バチバチと火花を散らす一人。

「小嶋の次なんて嫌に決まつてんだうが！ ブツ飛ばされたくなかつたらそれよこせ！」

「ザアヤーザアヤー喚くな！ 佐藤に決めさせればいいだうが！」

「ああ、いいぜ。やうじよ！」

おりおりと間近で見守っていた僕に一人の視線が集まる。

「佐藤。これは俺に貸してくれるためを持って来てくれたんだよな

? なら、俺だろ

「優大。」こいつ見ねえぞ。嫌がつてたじやねえか。でも私は見る。ちゃんと見る。お前から勧められたから全部見る。一回見ちゅうもんね」

「俺だつてちゃんと見るに決まつてんだりつ。適当言つてんじゃねえよ有野」

「うるせえ黙れタ」。なあ? 優大。私に貸してくれるとなつ?.

離ちやんの笑顔。

「怖い。何故だか怖い。

「これは俺に貸してくれる予定だつたんだ。なら俺に貸すべきだ」

「予定は未定なんだよ。いいからそれよ!せ

「渡さねえよ。俺が見た後に見ればいいじゃねえか」

「それが嫌だつて言つてんのが聞こえねえのか?」

「あーはーはー。じゃあ、俺が先に」

「勝手に決めてんじゃねえ!」

「つづ! 怖い! 逃げていいかな!」

「佐藤、俺に貸してくれるよなあ

「優大、私だろ？ 私に貸してくれるよな！」

「う、うう……」

どうすればいいんだろ？……。
って、考えるまでも無いよ。

「その、小嶋君に、見てもらいいたいな」

「よっしゃ！」

小嶋君が嬉しそうにガツッポーズを見せた。
それとは対照的に離ちゃんがとても悲しそうな顔で僕の肩を揺さぶってきた。

「ええー！ なんでだよ優大！ 私には見せたくねえってのか？！」

「ち、違つよ。その、あの、ここでは言えないけど……」

國人君の家にBDボックスがあつたよって言いたい。けどお兄ちゃんのことを隠したがつているみたいだし言えないよ。あとで説明しておこう。

「とにかく、それは、小嶋君に貸すね」

「ああ、サンキュウ。月曜返すわ」

「…………ちくしょう……」

離ちゃんが悔しそうに僕らの元から離れて行つた。

「くつ。『まみあみやがれ』

離ちゃんの後ろ姿を見て、小嶋君がとても嬉しそうに笑っていた。
……ちょっと聞いてみよう。

「あの、小嶋君、離ちゃんのことが嫌いなの？」

「……嫌いだな。大っ嫌いだ」

「な、仲良くすれば、いいと思つけど……」

「……まあ、そりや仲良い」とは「ことだ」と思つけど。
お前は有野と仲良いな。どうこう関係だ

「僕？ 僕はただの幼馴染だよ？」

「……それだけか？」

「うん。それだけだよ。ずっと話していなかつたし、幼馴染未満かも」

「……そうか」

どこか安心している様子の小嶋君。

「どうしたの？」

「なんでもねえよ。これ借りるからな」

「うん。是非楽しんでね！」

「…………おひ…………」

何故かげつそりした表情でDVDを眺めていた。

作戦五日目、金曜日にしてやつと小嶋君に渡すことができた。

よし、これで小嶋君がこのアニメを気に入ってくれたら、そこから話ができるね。

元気のなくなつた小嶋君を残して、作戦成功に満足した僕は自分の席に戻つて行つた。

きっと今日から楽しい人生になるに違ひないね。

優しい勘違い

「席につけー」

いつものセリフを言いながら先生が朝の教室に入ってきた。みんなが席に着いたのを確認して先生が今日の連絡事項を伝える。いつも通りだね。

「えーっと、今日から七月に入ったわけだが」

え、もう七月？ 気づかなかつた。

「来週からテスト週間に入つて、部活は全面禁止に

テスト週間か。

期末テストが七月十一日、十二日、十三日の三日間で行われて、その一週間ほど前の七月四日から十日までの七日間がテスト週間になる。先生も言っていたけれど、この間は部活動禁止。放課後がとても静かになる一週間だ。部活のせいでの勉強に時間が割けない人はこの一週間に全てをかけている。頑張つてもらいたいね。

僕は部活なんかしていないのに普段勉強していない急け者なので、僕もこの一週間に全てをかけている。頭が良くなりたいよ……。

「テストが終われば夏休みに入るわけだが、そこでだ。楠と有野と佐藤には、文化祭で何をするのか考えていて欲しいんだ。夏休みに文化祭の準備をするのが通例になっているからな。準備をはじめないところもあるが、年に一度の文化祭、われらが一年六組は気合を入れて行こう」

文化祭。

文化祭は確か十月の第一週の土・日だったかな。
八月から準備をするなんて、気合が入っているね。

「テスト勉強も大切だが、出来れば夏休みに入る前に何をするのか
を決めておきたい。勉強の合間でいいから、こっちの方もよろしく
頼むぞ。楠、有野」

僕は華麗にスルー。確かにいいアイデアなんか出せないけど…

…。

と、言つわけで。

放課後、楠さんの呼びかけにより、急遽委員長会議が開催される
ことになった。

誰もいない教室で四人固まって座る。

え？ 三人じゃないのか？ 一人多い？

うん、何故だか前橋さんがこの場にいるんだ。委員長っぽい見た
目だからいいよね。僕の方が場違いだし。

「三人は何かやりたいことがある？」

楠さんが机に置かれたルーズリーフをシャーペンでコシコシと叩
く。

「私は別に」

「有野さんが別に無いのなら私も無いです」

「なるほどなるほど。佐藤君は？」

僕も特にこれがやりたいって言ひのほほは無いけれど。

「僕は、なんでもいいよ」

「そつか。なら、メイド喫茶と……」

何故か楠さんが分からぬけれどメイド喫茶と書いていく。

「ちょっと待て！ メイド喫茶なんて嫌に決まってるだろ！」

雛ちゃんが猛然と抗議する。恥ずかしいよね。

「有野さんが嫌がつているんですから私も嫌です！」

「え、別にやりたい」とが無いって言つてたから何でもいいのかと思つて」

「やりたいことはねえけど、やりたくないことはある。それはその筆頭だ。誰がメイド服なんて気持ちわりいもん着るか！」

「私だけじめんです！ 着るのなら楠さん一人で着てください！」

「当然私だって嫌だよ。だから、みんなで一緒に考えよ？」

楠さんがつっこりと雛ちゃんに微笑みかける。

雛ちゃんは大きくため息をついて「分かったよ」と言つた。

……楠さんと離ちやん、それほど仲が悪いよつて見えないね。

「佐藤君もなんでもいいとかふざけた」と言わないでじやんと考えてね

「ね

「あ、はい。分かりました」

笑顔が怖い。

「じゃあ何かいいアイデアはあるかな？ みんながやりたがっている」とつてなんだろうね？」

「やつぱりサテインとか飲食系の店じゅねーの。私は嫌だけど」

「当然私も嫌です！」

「え？ 一人はだつして嫌なの？」

「面倒くさそうじゅん。別に対して稼げるわけでもねえだろうし、それなら同じことしたくなえ」

「私もやつですー。」

「なるほどね。佐藤君は飲食系だつゆつ？」

「え、うん。僕は、別に、飲食系でもいいよ。みんなもやりたがるだらうし」

「君の意見を聞いているのに他の人のことを考えてどうするの

「あ、そうだね……」「メン」

「別に怒つてないからいいよ。とつあえず、どんなものがあるのか出してこい。他に何かあるつけ?」

「んーオーネンドックスなどいろいろ行くとお化け屋敷とか劇とかか?でもどうも面白倒くせえなあ……」

「そうですね! 私もそう思っています!」

前橋さんはやっぱり離ちゃんと仲がいいなあ。

「あとは展示とか、発表とかかな……。佐藤君は何か思いつく?」

「えーっと……、僕は特に思いつかない、です」

「あつそ。やっぱりの中から何か選ばなきゃいけないのかな。飲食系、演劇系、展示系、研究発表系。一回の中からクラスのみんなに選んでもらおうか」

「そうだな。それがいいな」

「いえ、私は有野さんがすべて決めるのがいいと思うんですが……」

「そうなつたらこのクラスは文化祭不参加になっちゃうからダメだな」

「では不参加で行きましょう!」

「駄目に決まっているでしょう」

楠さんが苦笑いを見せた。

「不参加は冗談としても、やつぱり私は楽なもんがいいなあ。優大も楽なもんがいいよな?」

「せつ、かな? セつかくの文化祭だし、忙しくっても、僕はいけど……」

「有野さんの言つことを否定するんですか? ! 佐藤君ふざけています! 」

「ひつ! 前橋さんに怒鳴られた! 正直前橋さんに怒鳴られるのが一番怖いよ! 」

「まあまあ落ち着いて。確かに、セつかくの文化祭なんだから一生懸命やろつよ、ね? 有野さん? 」

「あー。まあそうだな。私一人の文化祭じゃねえし、楽なのがいいとかはもう言わねえわ」

「さすが有野さん……。心が広すぎます……。好きです有野さん! 」

「はいはい」

……もしかして、百合?

とか考えたらダメだ! 友達をそんな田で見たらダメだよー。

「では、とりあえず時間が取れた時に私がクラスのみんなに何系が

いいのか聞いてみるから。次の話し合いはその系統の中でどんなものがあるのかを考えてみよう。大体何があるのかを私達で決めておけばクラスでの話し合いがスムーズに行くと思つ」

「そうだな」

「じゃあ早いけど今日はこれで終りうか。これ以上話が進むわけもないし。次はクラスのみんなでどんなものをするのかを決めてからでいいよね」

「んー。分かった」

楠さんが僕をちらりと見る。僕も何も文句が無いので頷いた。

「よし。それではまた次の機会に。でも、佐藤君」

「？」

楠さんが無の感情を見せた。

「佐藤君もつと積極的に話し合に参加してよ。促されてからじやなきや発言しないとか、面倒くさいからやめとよな」

「あ、」「」「めん……」

「自分のわがままも出してこいつ」

そういって少しだけ笑った。

「うん」

そうだった。そっちの方が楽しい人生になるつてこの前楠さんに教えてもらつたんだ。少しは自分の意見を通す努力をしよう。

「今日は突然集まつてもらつてごめんね。でも多分次の開催も突然になると思うから許してね」

「……。ああ、分かった」

「さすが有野さん……。物わかりが良すぎです……！ 好きです有野さん！」

「はいはい」

次は、積極的に行かなきやね。

「優大」

解散した後、一人下駄箱へ向かつて廊下を歩いていたところを雛ちゃんに引き留められた。

「どうしたの？」

振り向き雛ちゃんの顔を見る。その顔はすぐれない。

「え、な、何かあったの？」

もしかして、また僕が何か粗相を……？！

「いや……」

離ちちゃんが一度辺りを確認して僕に聞いてくる。

「お前、若菜と何があつたのか？」

「え？」

「何かつて、何だろ」「へ.

「特に何もないナビ……」

最近はまともに顔かけてもらっていないしね。お弁当も一緒に食べないし、僕は小嶋君にロボロを貸そつと躍起になっていたし。

「どうして？」

「……なんかや、やつきの話じ合に中若菜がお前に対して刺々しかつたから……」

「え？ やうだつた？」

「いつも楠さんより優しかったけど……。つて、やうだ。

「ほほほ僕は何も知りません?...」

「やつぱり何があつたんだな?...」

「何もないですよ?」

「嘘つけ!」

もう慣れてしまつていただけれど、僕は楠さんに脅されているんだ
つた。忘れてた。

それのせいで楠さんは僕と二人きりの時ストレートな感情で接し
てくるのだけれど、その態度が今日少し漏れ出してしまつたみたい
だ。離ちゃんはその違和感を感じ取つてしまつたようだ。うう、ば
れたらまずいよ。僕が楠さんに酷いことをしたつてばらされてしま
う……。……してないのに……。

「なんか若菜の奴、お前のことを見下していたみたいだつたよな
……」

「そ、そりがな? 普通だと想つけど。それに、見下されても仕方
がないし」

僕だしね。

「……もしかして、小嶋がお前を殴ることと関係してんのか?」

「え、それは関係ないよ?」

「……。……やつぱりお前を殴つてたのは小嶋だつたんだな

あ、しまつた。ぱりじつしまつた。誘導尋問にひつかつてしま
つた……。

「で、でも、小嶋君は、多分もう殴つてこないと思つから、大丈夫だよ」

「……朝なんか貸してたもんな……。私も借りたかったのに……」

落ち込んでいる雛ちゃん。そう言えば何も説明していなかつた。

「大丈夫だよ雛ちゃん。あのDVDより画質のいいものが國人君の部屋にあつたから。それを貸してもらえば見れるよ」

「誰があんなデブから借りるか。私はお前から借りたかつたんだよ。お前から借りなきや意味ねえよ」

え……。僕から借りたかつたって……、それって……もしかして……もしかしなくても……。

……それほど國人君のことを嫌つているつてことだよね……。悲しいよね……。

落ち込みうつむいていた雛ちゃんが引き締めた顔を上げた。

「そんなことよつ今は若菜のことだ」

う。

「だ、大丈夫だよ？ 何も、何もないよ？」

「嘘つくな。私とお前の関係だろ、遠慮せずに何でも相談しろよ」

「う、うん。でも、本当に何もない、から……」

適当に笑つて」まかせつとしたけれど。

「優大」

雛ちゃんが僕の両肩を持つて真剣な表情で見つめてくる。

「お前が悲しい思いをすると私も悲しいんだ。お前が嫌なことされると私も嫌なんだ。言えないようなことされているのかもしれねえけど、私たちは……親友、だ。何も隠さないで相談してくれ。若菜に何をされているのか想像もつかねえけど、大丈夫。私なら何でも受け止める。どんな理由でいじめられているのか分からねえけど、我ならなんとかできる」

「い、いじめは、なによ……？」

多分。

「こじめ『は』ないよつて」とせ、他に向かされてるんだろ」

う。失敗した。

「他にも、何もないよ。僕なんかが楠さんと関われるはずないよ」

「嘘つけ。一緒に飯食つてたじやねえか。それも何か関係してるんだな……。……もしかして、若菜に自分の弁当を食われていたとか……？」

「それはないよ。お昼を食べるときは何もされてないよ」

「お昼を食べるとき『は』何もされてない……。他の時に何かされ

てんだな……」

僕のバカ！

「い、嫌だなあ、他の時も、何も酷いことされてないよ？」

「酷い事か……」

「え？！ 僕また失敗した？！」

「優大。なんでも言ってくれ。若菜に口止めされているんだろうけど、私なら大丈夫だ。うまくやる。絶対にお前を困らせない」

「えっと……」

「私はお前のことの大切に思っている。お前のためなら何でもできる。私はお前を困らせたりしない、もうお前を悲しませたりしない。だから、私はお前を悲しませている原因を取り除く。お前のためにしてやりたい。大丈夫、私なら、やれる」

真剣な離ちゃんの顔。僕は内緒にし続けなければいけないのかな……。これだけ僕のことを想ってくれている人を心配させたまま、何も言わないでいなければいけないのかな。

「優大、お前は若菜に、何かをされているな？」

「……」

「優大」

僕の肩が優しく揺すられる。

そのせいか、口から言葉が漏れ出した。

「…………う、うん……」

「…………。何をされているんだ?」

「…………そ、その…………、僕…………」

言つてもいいのか。

脅されていると、言つてもいいのか。

僕は、何故だか言いたくない。

楠さんが持っている僕の脅す材料。

それがばれるのが怖いから、何だらうけれど……。

何か胸につつかえる。

何か、言いたくない別の要因がある気がする。

…………。

それでも。

離ちゃんに心配をかけるのはよくない。

僕を心配してくれている離ちゃんに向も言わないのはよくない。

多分、言つた方がいいのだろう。

言えば、きっと何かが変わるものだろう。

「…………あの、僕…………、楠さん…………」

「ふうー…………ふうー…………ー」

どこからか聞こえてくる荒い息遣い。離ちゃんの後方に伸びる廊下から聞こえる。離ちゃんは僕から話を聞き出すことに一生懸命でそれに気づいていなにようだ。

僕は気になりその息遣いのする方をじつと見てみた。
柱の影からゆっくりと、前橋さんが顔を出した。

「あざわらば」

怖いです。

「どうした優大？！」

突然怯えだした僕を雛ちゃんが揺する。
僕が一点を見ていることに気づいた雛ちゃん。

「誰かいるのか？！」

勢いよく振り向くが前橋さんすでに顔を引つ込めていた。

「誰もいねえな」

おやんかゆうぐりと僕可也直に置いてくれ

「…………なるほど。…………真実を言うことがそれほど恐ろしいって
ことか…………」

「え？！ち、違うよ？！」

「分かった、分かったよ優大。何も聞かない。口にするのが恐ろし

「いつていうんなら何も聞かない。優大が若菜に対して恐怖を抱いているって事実だけで十分だ」

「え、いえ、それは本当に違くてですね！」

「壮絶に勘違いをなさっていますよ？！早く誤解を解かなければ！」

「大丈夫だ優大。私に任せろ。何も聞かねえけど、何かヤバいことが起きてているのは分かった。私に任せろ……！」

「ひひひ雛ちゃん？！本当に、本当に違うんだよ？！その、僕が怯えているのは……」

「ちよっさん……ちよっさん……ちよっさん……」

前橋さんがまた顔を出していった。

僕に恨みのこもった視線を送りながら、左手で自分の綺麗な長い銀色の髪の毛を少し掴み、右手に握られたハサミで毛先を少しづつ切っていた。

「うなななななななな」

「優大。大丈夫だ、優大」

僕は勘違いしている雛ちゃんに優しく抱きしめられた。

前橋さんが毛先を切るのをやめ、左手に持っている髪の毛を剪断する勢いで噛みしめ泣きだした。当然、僕を呪い殺さんとばかりに睨みつけながら。

女の子に対してもうなんて失礼極まりないのだろうけれど、正直に言います。

「ごめんなさい、とても恐ろしいです。関わりたくないです。

怖すぎます。

目から涙がこぼれてくるくらい怖い。

「大丈夫だ、泣くな優大。安心しin」

頬で僕の涙を感じ取ったのか、離ちゃんが僕を抱きしめながらやすように後頭部をポンポンと叩いてくれた。

違うんです、違うんです。

僕は目の前で繰り広げられているホラーショーに恐怖して涙を流しているんです。でも声がうまく出ない情けない僕。

「私が、何とかしてやるからな……！」

ぐっと、僕を抱きしめる腕に力を込めた。

今更ながら、この状況に気づき僕はドキドキしてしまった。

前橋さんに対する恐怖と抱きしめてもらっている緊張で、僕の心臓が過労死してしまうのではないかと言つくり胸の中で跳ね回っていた。

そのあと一緒に帰ることになった僕ら。

道中「勘違いだよ」と言つことを伝えると、離ちゃんも「分かった。大丈夫だ。私を信じろ」と答えてくれたので多分誤解は解けたと思う。

多分……。

大丈夫だよね？

夜の郵便配達

まりも：へえ。なるほど。色々あつた金曜日だつたね。

ユウ・うん。でも、なんだかこれから楽しい毎日が続きそつな予感がするよ。

まりも：いい予感だね。それが当たることを願つていいよ

ユウ・僕もそつたらいいと思つよ

まりも：…といひで、最近お姉ちゃんの話を聞かないね。何かあったのかい？

日常のじとばかり話していたまりもさんとのスカイペ。

以前の僕には、遊び相手と言える人がお姉ちゃんと弟しかいなかつたので日常のことを話すとなれば自然とお姉ちゃんとや弟のことが話題になつてしまつ。でもここ最近はお姉ちゃんと遊ぶことも少なくなつていたのでもりもさんはお姉ちゃん話をすることがほとんどなかつた。

今まで毎日のようにしていた家族の話。突然それが無くなつてしまつたので、もしかしたら僕とお姉ちゃんの間に何かがあつたのかもしれないけど、まりもさんは心配してくれているのだつ。

ユウ・大丈夫だよ。何もないよ

まりも：本当にかい？ 每日遊んでくれていたユウ君が構わなくなつ

てしまつてお姉ちゃんは悲しんでいるんじゃないかな

ユウ・お姉ちゃんには友達いっぱいいるし、それはないよ。むしろ僕にかまわなくなつた分自分の時間が取れるようになつたから喜んでいるんじゃないかな

まりも・やうだといいんだけどね。なんだか後々厄介なことになりそうだ心配だよ

「厄介なことって、何だらう?」
僕がお姉ちゃんと遊ばないことにひよりて何かおもわしくない事が起きたのだろうか。
想像もつかないや。

とりあえず、まりもさんの不安を取り除かねば。

ユウ・大丈夫だよ。お姉ちゃんと僕はずつと仲良しだから

まりも・それは嬉しいことだね。まあ、そもそも。私なんかが口を出していいことではないのだろうけどね

うん。

無事に不安も取り除けたみたいだね。
何も心配することは無いよ。

家族内の関係も、僕の人生も。

僕はパソコンを切つて伸びをした。少しちまいがして机に手をついた。うづ、伸びをした時のこの意識が遠く感じつてなんなんだろう。もしかして僕の伸びの仕方が間違っているのかも知れないね。

深呼吸をして、窓の上にかかった時計に目をやる。

十一時前。

明日は休み。まだ寝るには早い。

時計の下から覗く星空を見たら、なんだか少し散歩がしたくなつた。

……うん。

少し散歩しよう。

心配をかけないために家族に一声かける。

そのときに、弟が「隣町で殺人があつて、犯人は捕まつているけど物騒な世の中だから気を付けて」と言ってくれた。

……散歩、やめようかな。

結局僕は散歩に出かける。

こんなにきれいな星空が見えるんだ。散歩しない手はない。

なんの偶然か今日は新月。

新月と言えば真っ先に國人君を思い出すけれど、もう新月の災厄は起きないはずだから何も心配することは無いよね。

新月の夜は星がよく見える。

でも、月が見えた方が夜空は素敵だよね。

暗い夜道。もう人通りも車通りも少ない。明りが消えている家もある。

とつても静かな街並みだ。

虫の声が季節を感じさせる。

もう夏だね。

七月一日。

あと三週間もしないうちに夏休みになる。待ち遠しい。

この夏休みは何をしよう。宿題は早く終わらせよう。お姉ちゃんたちと海へ行こう。弟と山へ行こう。何か目標を立ててそれを達成しよう。文化祭の準備もある。一生懸命頑張ろう。できる事なら、

今年の夏は、友達と沢山遊びたい。僕は人を誘うこと今までしてこなかつたけれど、今年は僕から誘つてみよう。断られることを恐れずに、僕から声をかけよう。きっと、そのほうが、いつもの夏より楽しくなるから。

そんなことを考えながら、暗い夜道をひたすら歩く。

マンホール。

何となくその上で立ち止まってみる。

いつもは聞こえない水の音が、底の方から響いてきた。

音まで昼夜とは違う。

夜の散歩も悪くない。

楽しいな。

……弟から話を聞かなければ……。

正直怖いです。

何も気配を感じていないので無意味に何度も後ろを振り返つたりして風景を楽しめていなかつたりする。

……、もう、帰ろう。

何もないのだろうけれど、こんな気持ちじゃあ楽しめないよ……。

夜の散歩は十分ほどで折り返し。僕は来た道を引き返して家に向かつた。

・ · ·

……大変だ……。

家の前に、怪しい人がいる……。

夏なのに一ツト帽をかぶり、顔を隠している。背は僕と同じくらいで高くない。多分、女の子……。

泥棒……？

怖い……。

襲われちゃうかもしれない。

殺されちゃうかもしない。

でも。

でも、あそこには僕の家族がいる……。お父さんお母さんお姉ちゃん弟……。

そうだ……。僕の人生に必要なのは勇気だつて教えてもらつたじゃないか。それに、今は僕だけしか気づいていないんだ……。

僕がやらなきゃ誰がやる！ 強気に行けば相手だつてびっくりして逃げるはずだ！ ガツンと言つてやる！

「あ、あのー……、す、すみません……」

僕は近づいて声をかけた。

「？！」

一ヶ月帽子の人は、僕の存在に気づき慌てて逃げて行つた。

……。

……とりあえず、追い返すことができたね。僕の勇気の勝利だ。でも本当に泥棒だつたのかな？

郵便受けの中に手を突っ込んでいたから、もしかしたら夜の郵便配達だったのかな。だつたら悪い事しちゃつたなあ。びっくりさせちやつて申し訳ないよ……。

僕は郵便受けの中を確認してみた。

「あ、何か入つてゐる

やつぱり夜の郵便配達だつたんだ。

「いめんね」

僕は郵便受けに入っている手紙を取り出した。

ピンク色の封筒にハートのシール。これはどう見てもラブレターだね。きっと女のお子が僕の弟にラブレターを持ってくれたんだね。ならやつぱり悪い事しちゃったなあ……。責任を持つてこのラブレターを弟に渡そう。罪滅ぼしではないけれど、せめてそれくらいはやらなければ。

僕は家に入つて弟の姿を探した。

あれ、いない。

お風呂かな。

なら、弟の部屋に置いておこうかな。

僕は一階への階段を上がりながら向気なくラブレターを眺めてみる。

……。

「あれ僕の名前が書いてある」

404

……。
……。
あ、これ僕への手紙だ。

「ええええええええええええ！」

僕の驚きの声にお姉ちゃんが部屋から飛び出して抱き付いてきたけれどなんとか引きはがして僕は自室へと逃げ込んだ。

「はあ、はあ、はあ……

僕は部屋に入つてすぐに扉に寄り掛かる。

「なんてことだ……！」

「ほんのあり得ないよ！ 僕なんかがラブレターをもらひなんて

……！」

「い、いや、まだラブレターと決まつたわけじゃないよね……！
漫画とか、アニメとかなら、こういう手紙は大抵果たし状とか、
脅迫状とか、ラブレター以外の内容なんだよ……！」

僕はゆっくりと開封した。

きっと、この手紙の中身は、果たし状か、脅迫状だよ。
どっちかなんだよ！

思い切って手紙を取り出し読んでみた！

『呪われる呪われる呪われる呪われる呪われる呪われる呪
われる呪われる呪われる呪われる呪われる呪われる呪
る呪われる呪われる呪われる』

呪詛だった！

「ひいいいいい！」

なんだこれ！

さつきまでのドキドキとは別のドキドキが胸を襲う。

実はちょっとラブレターかな？ って期待していたのに！ がつ
かりだし怖いし、どうすればいいの僕は！ このもやもやをどう発
散すればいいの？！

つてそんなこと考へている場合ぢゃない！ これはいつたい何？
！ 怖いよ？！

「いい一体誰が?!

がたがた震える僕の手から、とじつよつ手紙の間から何か白っぽい糸のよつなものが落ちた。なんだかうかと思い、しゃがんで拾い上げてみた。

「……」

ぐわー。

これは銀色の髪の毛だー。

「…………前橋さん…………」

びいかりびいつ見てもクラスメイトからの呪詛ですね。

「なんで…………」

手紙の本文は『呪われろ』だけではなかつた。
続きを読む。

「えーっと…………」

ここのこと難ちゃんへの思いが書かれていたが読み飛ばす。
…………ぞつと読んだといふ、重要だと思うといふのはこの一行だけ。

『有野さんの邪魔になる人間は排除します。排除します。排除します』

す

三回言わないで。怖いよ。

やつぱつ、びつにも、僕は、前橋さんに嫌われまくつていふよう

だ。

わざわざ僕の家まで来てこんな手紙を入れていくなんて……。

……やっぱり、今日離ちゃんと抱きしめてもうつたことが原因だよね……。

……なんとか前橋さんと仲直りしたいよ……。こんな身近なホラ

ー嫌すぎるよ……。

僕は手紙を封筒の中に戻し机の中にしまった。

……。うん。

とりあえず、今日のといひは寝よう。

何もかも忘れよう……。

僕は眠った。

逃げるために、忘れるために、夢だと錯覚するために、眠った。

でもそれは間違っていた。僕はこの時点で前橋さんからの手紙の意味をよく考えてみるべきだった。

この手紙は、僕だけに宛てられたものではなかつたのだ。

委員長会議にて

七月四日。

今日からテスト週間だ。

部活が禁止になる一週間。勉強に打ち込むための一週間。
僕もこの一週間のうちに詰め込まなければ大変なことになってしまふ。頑張らねば。

とりあえず、前橋さんの恐怖は忘れ去る。勉強の邪魔だからね。
頭の悪い僕は朝から勉強。これくらいしなくちゃ赤点取っちゃうよ。

僕はカリカリ勉強する。
カリカリカリカリ。

「……おい、佐藤」

僕のような人間に声をかけてくれる人間が。
誰だろうかと顔を上げる。

「え？ あ、小嶋君。おは、よう……」

え、殴られるの？

身構えたけれど、殴るモーションも連れ去るモーションも見せない。

どうやらなにもされないみたい。

「…………その、なんだ。……佐藤から借りたＤＶＤ。……見た

「え！ 本当？！ どうだつた？！」

と、聞いてみたけれど、何やら表情が冴えませんね。これは、面白くなかったみたいだね……。

「あの、『めんね……。面白くないもの貸してしまって……』

殴られちゃうのかな……。

「……なんだ、その、まあ、あれだ。なあおい……」

「面白くなかったよね……。小嶋君にアニメとかは似合わないよね。『めんね……』」「めんね……」

「まあ、俺には、アニメなんか似合わないけど? ……でも、まあ、勧められたら見るのが義理だし?」

「ありがと! ……。僕の為に時間を割いてくれて……」

「これくらい、大した手間じゃねえから、こいつでも、いいぜ

「あ、ありがと! ……」

酷いことされたけれど、小嶋君もいい人だなあ。

「それで、このロボを有野に貸せばいいんだよね

「あ、うん」

國人君からは借りたくないと言っていたから、これを貸した方がいいんだよね?

「うん。雛ちゃんに貸してあげて」

「……分かつた……」

小嶋君がDVDを持って雛ちゃんの方へ向かつていった。でも、残念だな……。小嶋君的には面白くなかったか。気に入つてくれればその話で盛り上がり仲良くなれると思ったのに。でも見てくれただけで嬉しいね。小嶋君が優しいってことが分かつたし、作戦は成功したって言つてもいいよね。何となくだけど、もう殴られることも無い気がする。

田で小嶋君を追う。

雛ちゃんに話しかけている小嶋君。あ、言い合いが始まった。小嶋君がDVDを押し付けて、雛ちゃんがそれを突き返した。小嶋君がもう一度押し付けて雛ちゃんがまた突き返す。……前橋さんが教室の隅で小嶋君を睨み付けている……。早く……！　早く逃げて小嶋君！　切り刻まれちゃうよ！

あ、帰ってきた。

「なんだよあいつ！　何が『てめえから受け取るわけねえだろクズ！』だ！　俺から受け取ろうが佐藤から受け取ろうが何も変わらねえだろうが！」

「ま、ま、ま。きっと、見る気が無くなっちゃったんだよ」

「だとしても言い方つてもんがあるだろー。畜生ー。あいつふざけやがつてー」

「お、怒つてるね……。

どうすれば仲良くしてくれるのかな。

「……これ、とつあえずお前に返す」

「あ、うん」

小嶋君からDVDをもらつた。

「……佐藤？ 別に他の奴を借りてもいいけど？」

「へ？」

何を言つているのか分からぬ。

「お前のおすすめのDVDがあればまだ見てやるうかなって言つて
んだ」

「え？！ ほんとう…？」

もう一回チャンスが貰えるんだ！ ありがたいね！

「今度はきっと面白いものを持つてくるから…」

「え？ あ、そうだな。次はもつと面白いものを見せるよ」

「うん！」

小嶋君が難しい顔をして離れて行つた。

その表情の意味は分からなかつたけれど、次は笑顔を作れるよう
に頑張ろう。

今度は失敗しないぞ。

「席につけー」

先生が教室に入ってきた。
みんなが座る。

「えーっと、今日からテスト週間だな。部活も無くなるし、放課後
ダラダラ残つてないで勉強頑張れよ」

今日はあっさり終わった。次の授業まで少し勉強できるね。
と思ったのだけれども。

「先生」

楠さんが手を挙げて教室中の注目を集めめる。

「どうした、楠」

「文化祭のことですか？」

「ああ。なんだ？」

「放課後までに、みんなにどういった系統の催しをするのかを考えて
いてほしいんですね」

「系統？」

「はい。飲食系、演劇系、展示系、研究発表系。とりあえず大まか
にやりたいことを決めようと思うんです。もちろんこの四つ意外に
何かやりたいことがあればどんどん行ってもらつて構いません。放
課後にもう一度聞こうと思うので」

結果、クラスの大多数は飲食系がやりたいとのことだった。
結果が出たので放課後、早速委員長会議が開かれた。

今日も前橋さんがいるので四人。

「やっぱり飲食系か……」

アンケート結果を眺める楠さん。

「文化祭と言えば飲食系だもんね。他のクラスも喫茶店とか焼きそばとかやりたいだろうし他のクラスと差別化を図らなきゃね」

「……。やっぱりな……」

「どいか元気のない雛ちゃん。どうしたんだろう?」

「飲食系で他のクラスがやらないうようなものって、何があるかな?」

僕に視線をくれる楠さん。

「え、えーっと……。アイス屋とか……」

「十月なんだから寒くて客いないでしょ。そつやビのクラスもやらないよ」

「じゃあ、焼肉屋とか……」

「衛生管理されていない」この教室で保存された肉誰も食べたくない
よ

「なら……綿菓子、とか」

「露天じゃないんだから」

「そ、そうだね……」

困った……。どうしよう……。
無い脳みそを絞つて考えてみるけれど、くだらないものしか出で
こない。

「えーっと……。離ちゃんなら」「

と、僕が隣に座る離ちゃんにへらへら笑いながら声をかけようと
したら、その隣にいる前橋さんにものすごい目で睨まれた。

「ひつ」

勝手に体が畏縮する。この前もらった手紙が効いているよ……。

「優大？！」

突然怯えだした僕に離ちゃんが声をかけてくれる。
僕の肩に手を置き僕の目を見ててくれる離ちゃん。

「大丈夫だ。私がいるだろ」

「え、うん

離ちゃんがいれば前橋さんに襲われる」とは無いことかな。

「……」

何故だか分からぬけれど離ちゃんはものすごい勢いで楠さんを睨み付けていた。

楠さんは僕の正面で「有野さんビーツの？」と言った笑顔で首をかしげている。

ちなみに前橋さんは離ちゃんの横で「佐藤ビーツやね？」「と言つた笑顔で首を不自然に曲げている。怖い。

離ちゃん声は掛けられないみたいだし、僕が考えなくちや……。

「えっと、その、漫画喫茶とか、どうかな

「入り浸る人が出て回転が悪くなっちゃうよ」

「なら、ダーツ喫茶とか……」

「ダーツバーみたいな？ どうかなそれ……」

「うーん……」

「どうしよう。

他のクラスがやりとりになくて、教室でできそうなもの……。

「飲食店じゃないでしょ。ふざけてるの？」

「コンビニ……とか……」

「『』、『』めんなさい……」

確かに、今のはちょっとふざけた解答かも……。申し訳ないね……。

僕は落ち込み顔を伏せようとしたが、突然鳴った大きな音にびっくりして目を見張った。

離ちゃんだ。離ちゃんが机を思いっきり叩いた音だつた。

「おー若菜……。てめえ自分から優大に聞いたくせになんだよその態度。ふざけてんのはお前じゃねえか」

僕と同じように驚いていた楠さん。

離ちゃんの言葉に悲しそうな笑顔を作つた。

「…………ごめんね…………。確かにちょっと言葉がきつかったかも。『ごめんね佐藤君』

「え、う、うん……その、僕が悪いから、楠さんは悪くないし、あの、一人とも、喧嘩は……」

「そーです！ 悪いのは佐藤君です！ 即刻謝罪を要求します！」

何故前橋さんがここで話に入つてくるのかが分からぬけど、謝るわ。

「ふたりとも、『ごめんね』……

「だから、悪いのは私だつて。謝らないで」

「えーっと無理な笑顔を作っている楠さん。顔が引きつっている。

「そーです！悪いのは楠さんです！即刻委員長の座を有野さんに明け渡してください！」

「えーっと、それは、ちょっと……。みんなが選んでくれたんだし、そう簡単に私の意志で明け渡すわけには……」

苦笑いで返す楠さん。

前橋さんは以前ぶりぶりしている。

「しかし有野さんを怒らせた楠さんは委員長にふさわしくないと思うんですが！明日署名を集めようつけて今日の夜決心しますよー！」

「……なんで今日の夜？今じゃダメなの？」

「まあ、クラスの総意なら仕方ないけど……」

「な？！……今、私を馬鹿にしましたね？！どうせ署名は集まらないからやつても無駄だつて、そう思いましたねー？」

「……全然そんなこと思ってないよ？」

「くううう……！これが勝者の余裕と言つ奴ですか……！分かりました！そこまで言つのであれば」

「未穂」

と、離ちゃんが前橋さんを睨み付ける。

「…………めんなしゃー。静かにしましゅ…………」

「……」

鋭い眼光のまま楠さんの方を向いた。

「…………えつと、『めんね？ 有野さん』

「……」

ふん、と一度鼻を鳴らし面白げなせりつけ腕を組んで口を開じた。

……。

……。

……。

重たい沈黙。僕は耐えきれません。

「あの、何するのか、考えては、みませんか…………？」

「…………そつだね。せつかく集まつたんだし、考えよつか

極力明るい調子で言う楠さん。

「えーっと、有野さんは、何かいいアイデア、あるかな？」

「別に無いですよー。もちろん私もありませんー！」

「…………別に」

「や、そっか……」

一人の答えと困った笑顔の楠さん。

また沈黙が流れる。

……。なんですかと雛ちゃんは機嫌が悪いのだろう。
聞きたいけど、怒られそうだし……。

みんなが黙り込んでいた。

どこに地雷があるのか分からぬこの空間。

うかつに歩く人間誰もいなかつた。

楠さんが、足元を確かめるようにゆっくりと声をだす。

「じゃあ、今日はもう、解散……しようか。また明日の放課後集ま
うう、それでいいかな、みんな」

あつという間に終わってしまった。何も話し合っていない。これ
じゃあ集まつた意味ないよ。

でも、もう続けられる気配でもないし……。

やめた方が、いいのかな……。

あまりよくない気がするけど……。

「……ああ……。分かった。優大もそれでいいよな?」

「え?! う、うん」

突然問い合わせられて思わずうなずいてしまった! 僕のバカ!

「ならもう帰らひせ」

雛ちゃんがカバンを持つて立ち上がり僕らを促す。

「もうテスト週間だ。早く帰らねえと勉強する時間が無くなっちま
うぞ」

じつと僕を見たままやつ言った。

「…………うう。僕バカだから早く帰らなきゃ大変なことになるよね。

「…………なら、明日までに、どんなものがあるのか考えてきてね、みんな」

「…………」

また楠さんを睨み付ける離ちゃん。

それに対しても、楠さんも少し強い視線で返す。

「…………あのーなんで怒らせたのかを聞いてもいいかな

「別に」

機嫌悪そうにそっぽを向いた。

「別になんでもありませんよー。もともと敵同士なんですから、慣れ合いつもりは皆無ですー！」

イーッー と前橋さんが楠さんを威嚇した。

「…………うう。分かった。私が気に入らないんだね。それはまあ、しようがないことだよね、うん。それに関しては何も言わない。でも、文化祭の話し合にはちゃんとじょりゅーね？ みんな楽しみにしているんだから」

「…………」

楠さんに攻撃的な目を向ける難^にちやん。

「…………ああ……」

不機嫌な顔のままだつたけれど頷いた。

「優大、帰るぞ」

さう言って、僕を待たずしに先に教室を出た難^にちやん。前橋さんもそれに続く。

「えつと……。やの、やつひなら……？」

恐る恐る声をかけてみる。

「…………やまつなら。やつれと帰れば」

予想通り、楠さんの機嫌は最高に悪かった。

「あの、きつと、何かあったんだよ」

「うわわわー」

「う……。」「めん……」

「これ以上機嫌を悪くしないために早く有野さんの元へ行つてよ」

「うそ……」

楠さんは一度も僕を見ることは無かつた。

前橋さんと校門で別れ、離ちゃんと一緒に帰つている途中、色々聞いたのだけれども、何一つ教えてくれることは無かつた。ただ「大丈夫だ」と、その言葉を繰り返していた。

なんだか、金曜日のことをまだ勘違いされているような気がする

……。

僕の部屋のスタンドが机の上の教科書とノートを夜の暗い部屋に浮かび上がらせている。

うーん。困ったなあ。

机に向かうけど勉強がはからないよ。

なんだか色々と考えることが多いなあ。

シャーペンを放り投げて伸びをしてリラックス。

うーん……。小嶋君に何を貸せばいいんだろう……。多分ハーレムとかラブコメとかは苦手だと思うんだ。だからそういうのものを貸さなきゃなんだけど……なにがいいのかなあ。

椅子から立ち部屋の電気をつける。そして本棚と向かい合つた。なにか、いいものは……。

スライド式の本棚を動かし本を探す。

上から下へ、眺めてる。

そしてある本へと惹きつけられた。

そうだ。これにしよう。

僕は本棚から一冊の本を抜き出した。黒い表紙に赤い文字。

「プラクララグーン」

ブラックラグーンとはアリワザクラッシュシャーとは何一つ関係なく
タイのとある町でのアウトローなお話。

きつとこれなら小嶋君も見てくれるよね。

さすがに学校にDVDボックスを持っていくのは恥ずかしいし小
嶋君も嫌がると思うので録画したやつを持って行こう。

よし、問題が一つ片付いた。

次は前橋さんからもらった手紙。

僕は手紙をしまった引き出しをあけ、ゆっくりとじめた。
うん。どうしようもないや。

次に行こう。

次は文化祭の催し物。

うーん。僕なんかじゃあいいアイデア思い浮かばないよ。

……。うーん。

……。うーん。

……。うーん。

……。あ、そうだ。

……。

多分却下されるだろ? けど、思いついたのでメモしておこう。

……。

よし。

一つ考えれば十分だよね
さて。

最後の問題だ。

楠さんと離ちやんの喧嘩……。

きつと離ちやんは僕の為に怒っているんだ。僕と楠さんの間にある問題を大げさにとりえてしまっているんだ。誤解は解いたと思つたのに、まだ解けていなかつたみたいだ。

うん。明日また誤解を解こう。

とりあえず、手紙以外の問題は片付いたし、勉強しよう。

僕は椅子に腰を下ろした。

頑張る。

とっても勘違い

火曜日。

今日も一日頑張ろうと、気合を入れて校舎内に入った僕だつたけれど、下駄箱でその気合がへし折られた。

「手紙が……入ってる……」

この前もらつた手紙と同じ封筒だ！

手紙を持って慌ててトイレへ。

うつうつ。ラブレターじゃないのが悲しい……。

個室に入り手紙を開封。

まあ、当然呪詛でござります。

えつと、

『警告したはずです。有野さんには近づくな』

そんなの、自分勝手だよ。

封筒の中身は手紙だけではなかつた。

「……！」

粉々に切り裂かれた僕のライトノベルだ。その破片が封筒の中に入れられていた。

やつぱり前橋さんが切り裂いていたんだ……！

「……。どうしよう……」

どうすれば前橋さんに許してもらえるんだろう。

離ちゃんに近づかなければ怒られないんだろうけれど、そんなのは嫌だ。離ちゃんは高校初めての親友だもん。理不尽なお別れは絶

対にしたくない。

でも、どうしよう……。

なんだかこのままでは命が危ない気がするよ……。

いい考えが浮かばない僕は、とりあえず手紙をしまって教室へ行つた。

教室にたどり着き、扉に手をかけたところ僕は引き止められた。

「佐藤、佐藤っ」

小声で僕を呼んでいる。誰だろう?
辺りを見渡してみると、柱の影から誰かが僕に手招きをしているのが見えた。

柱の影から覗いているところのはこの前の前橋さんを連想してしまうけれど、今度は男子みたいだから安心していいよね。
近づいてみる。

「あ、小嶋君。おはよっ」

「お、おひ」

「どうしたの?」

何か、秘密の話かな……。
え。もしかして僕殴られるの?

「その、DVDは……」

「あ、うん。僕小嶋君が気に入りそうなアニメ

「じーずかにしおる……」

「え？　うる……？」

アニメってこののが恥ずかしいのかな。

「よし、今渡せ」

あたりをきょろきょろと見渡していく小嶋君。セレブまで警戒しながらことと思ひながら。

「うさ。はい」

僕はカバンの中からDVDを出して渡した。

「しょ、しょうがないから、見てやるんだからな。別に佐藤の為じやねえんだからな」

「え、あ、うさ」

シンデレだ。

「明日返す」

「え、明日？」

「あ？ 明日は都合悪いことでもこののか？」

「へ、うう。そんなことは無こなで……」

結構長いから明日は無理だと思ひたが……。まあ、ここや。

「うふ。分かった。もしそれければ、他のも持つてくるから」「ん、ん？ そうだなあ？ まあ、佐藤がどうしても持ってこいうんなら、見てやる」

「うふ。どうしても」

「じょうがねえな。見てやる。見てやるから、持つてこいよ」

「うふ」

やつた。またチャンスをくれるんだ。いい人だなあ。

「じゃ、じゃあ、そういうことじで」

そそくせと教室に入つて行つた小嶋君。

なんだか様子がおかしいけれど、見てくれるのはいいことだから問題はないよね。

僕はいい気分で教室に入つた。

が、前橋さんと目が合つて背筋に冷汗が流れる。
目が合つだけで怖い……。

「よつ、優大」

ドアの前に突つ立つていると、「ひ、後ろから肩を叩かれた。

「あ、離さやんおまよ！」

「おまよ！ ベリしたんだ！」なんといひで突つ立つて

「え、あ、なにも無いよ」

「……また何かに怯えてんな……。若菜か……」

ほじちゃんとした目を恐ろしい目に変えて教室を見渡す。

「あの、雑ちゃん」

「なに」

「、そのままの目で僕を見ないで……。ちょっと、怖いです。

「その、僕が楠さんに何かをされてるっていって、勘違いだからね？」

「ああ、分かつてる。私には全部分かつてるから。そうだな、お前は何もされていない

「本当だよ？ 僕何もされてないよ？」

「何もされてないな。うん。そつだな」

「……本当に、分かつてくれた？」

「もちろんだ。何もかも分かつてる。お前が心配するような」とほじちゃん

「う、うん。なら、いいんだけど……」

……本当かな？

「有野さん！ おはよっ！」やこちゃん。

突然僕を押しのけ前橋さんが離れて立つた。

「おはよう未穂。今日も楽しそうだな」

「はい！ ひとつでも楽しいです！ ……ある人間がいなければ……」

きらりと光を反射しているレンズ。きっとその下では僕を睨み付けているんだろう。

「ぼ、僕、自分の席に戻るね」

「え、ああ、私も行くわ」

「……佐藤……優大……」

名前を呼ばれるだけで怖い！

「ななななんだか今日は眠たいからちょっと僕寝ようと思つんだ！？ その、前橋さんも離ちゃんと一緒にいたいみたいだし今日のところは僕一人にしてくれないかな？！」

「なんだ？ 夜遅くまで勉強してたのか？」

「うん！ そうなんだ！ 僕バカだから、毎日たくさん勉強しないと大変なことになるからね！」

「ならしうがねえな」

離ちゃんが前橋さんを引きつれて自分の席へ。

「……佐藤……優大……」

もうやめてください……。

なんだか最近学校で落ち着けないなあ……。
僕の平和な日々はどこへ行つたのだろう……。

あつという間に時間が過ぎて、放課後になつた。

今日も委員長会議が開かれる。

当然、前橋さんもいらっしゃる。

「……」

「……」

空気が重い。

離ちゃんは怒つているし楠さんはムツとしているし前橋さんは離
ちゃんを見てうつとりしているし……。

……よし、ここは、僕が一つ、ガチンと気合を入れよー。委員
長会議はクラス皆の為に開かれているものなんだから、僕らの個人
的な事情は置いておかなきやね！ それに勇気が必要だつて教えて
もらつたんだし、ここでそれを実践しなくちゃ僕はダメになる！
ビシッと言つて、みんなを引き締めよう！

「あ、あ、あの……、みんな、その……話しあって、しよう」

「……」

「……」

「はあ、はあ」

「う……、誰も答えてくれない……。

強引にでも進めた方がいい気がする。

「昨日、楠さんが言っていたこと、その、僕、考えてきたよ」

「……ふーん。そう」

「ふーんそうって……。お前せつかく優大が考えてきたんだから、褒めるなりなんなりしろよー！」

「それはじめんなさい。代わりに有野さんが褒めてあげて

「はあ、はあ、あ、鼻血……」

前橋さん、自重して……。

楠さんと雛ちゃんの関係、明らかに昨日よりもギスギスしている。

はあ……。

実は、放課後にいたるまでに、この二人は何度も衝突しているのです……。

雛ちゃんはずっと楠さんことを睨んでいたし、楠さんも最初は我慢していたようだけど、さすがに限界が来たみたいで本当の楠さんは

んがちらちらと顔を覗かせている。

一触即発だよ。

「優大、よく考えてきたな」

楠さんに言われたのでかどつかは分からぬにつけり笑顔で僕を褒めてくれた。

「考えることは小学生にもできるけどね。その内容が重要なのにそれが聞かずには褒めるなんて……」

「うひめせえな。考えてきたことは偉いだろ？」「

「そひですね。偉い偉い」

「てめえ……」「

「そんなに怖い顔で睨まないでよ。私は女の子なんだから」

「私は」つてなんだよ……。まるで私が女じやねえみたいな言い方だな

「わう捉えるとこう」とは自覚があるんじゃない？」

「あはは。若菜は面白い奴だなあ……！」

雛ちゃんのこめかみに青筋が浮かんだ。

「、こここれはたた大変だああああ……！」

一人で会話をさせていたらとんでもないことになる……間違いないよ！

前橋さんは離ちやんを眺める」とで精いっぱいだし、僕が何とかせねば……。

「あの、みんなは、何か、考えてきた、かな?」

とりあえず会議を進めれば……!

「私は何も考へてないかな。ちょっとイライラしててね」

「奇遇だな。私もイライラして何も考えられなかつたんだ」

「へえ、そう。でも一緒にしないでほしいな。私は理由があるけど有野さんには理由がないでしょ?」

「あるいは決まつてんだろ。大切な友達に酷い事している人間がいるんだ。ムカつくだろう?」

「それが私だつて言いたいの? 言いがかりはやめてもらいたいね。私が何したつていうの?」

「……それは、何も聞いてねえけど……」

「へー。もしかして、私がその人に何かをしてこりつていつのも、有野さんの妄想なんじゃないの?」

「く……! でも、確かに若菜を見て怯えているんだ! 何もしてないつていうんなら、その理由はなんなんだよ!」

「さあ? 怯えているのも氣のせいじゃない? 妄想力豊かだねホント。全然羨ましくないけど」

「ぐぐぐ……！　で、てんめえ……！」

「やしちうだ！　大変だよ！　机をひっくり返しそうな勢いで握りしめているよ！」

「あ、あの、今は、会議だし、その、ね。喧嘩は、やめよ！」

「僕が止めなきや……」。

だって、前橋さん離ちゃんの横でトリップしているんだもの……。

僕以外にいないよ……。

「……優大？　お前、若菜に何かされてるよな？　何されてる？」

離ちゃんの優しい笑顔。

でも内心穏やかじゃないね……。

「僕、何もされてないよ？」

楠さんの田の前でぼちせないよ。

「優大。安心しろ。お前は私が守る……！」

「離ちゃん……」

「佐藤佐藤佐藤……！」

前橋さんが離ちゃんの後ろで修羅つっていた。
前橋さんが離ちゃんの後ろで修羅つっていた。

「ひつ」

怯えた僕を見て離むやんが叫ぶ。

「あー、ほり見ろー、優大が怯えてるじゃねえか！」

「それは有野さんに対する怯えているんでしょ。怖いもの」

「怖くねーよ！ なあ？ 優大……？」

とても怖い顔で同意を求められた。

「は、はー……怖くないです……」

「せり見ひつ、怖くなつてよー！」

「いやどう見ても脅してましたでしょ」

「うう……」めん離むやん。少し怯えてしまいました……。

今度は楠さんがこり笑顔で僕に聞いてきた。
当然内心穏やかではない。

「私何もしてないよね、佐藤君？…………レイプ…………」

「ななな何もされていませんよー？！ まつたく、何もされていませんよー！」

「じつ見ても怯えてるじやねえか！ あと若菜最後になんて言つた
？ レイク？ 湖？」

「え？ ううん？ プツて言つたの。レイ！」

「そんなことよりもおー！ 会議をおー・じょひよー・」

無駄にがたがた机を鳴らす僕。

「うひょーと佐藤君。暴れないでよ。うひゅー」

「うるさいもなじますよー。その、ねー。僕考えてきたんだー！」

「それは凄い。ほり、褒めてあげてよ有野さん」

「褒めるよー。偉いなー優大」

「ぐるるるるるるる……」

前橋さんー。お願ひだから僕を威嚇しないで！
とにかく、発表しないことは始まらない！

「僕が考えてきたのは、和菓子喫茶？ と言えばいいのかな……。
喫茶店じゃなくて、茶店ちゃみせ、って言つた方がいい気がする」

「茶店？ 和菓子出すのか？」

雛ちゃんが話に食い付いてくれた。

「うん。普通文化祭の喫茶店つて言つたらケーキとか、ドーナツとか、洋菓子を振舞つと思つんだ。でも和菓子ならうひょーと珍しいかもって思つて」

「へえ……。結構いいんじゃねえか？ 未穂もそう思つよな？」

「え?...」

突然振られて驚く前橋さん。

ものすじく葛藤している。

離ちゃんと仲のいい僕を褒める」とは死んでも嫌だけれど離ちゃんを批判する」とも死んでも嫌だ、と。その結果。

「い、いいんじゃあ、ない、でしょ?、か……と、思い、ます……」

苦悶の表情で離ちゃんに同意した。地獄の苦しみを味わいつゝになつたみたいだ。

「ふーん。佐藤君の割にはまともな意見だね」

「てめえ優大の割にってのはどうこう意味だ! 優大は凄いだろ! が!」

「具体的にどんなところが?」

「……やつや、優しことこいろとか……」

「他に?」

「……可愛いところとか……」

「他に?」

「……」

「え？ 他には？」

「……」

「なになに？ 他には？」

「……」

「まやか、もう打ち止め？ 有野さんの言ひ優大（笑）のすりこと
いひつてそれだけなんだ。それは凄いねー」

ちよつと待つて？ なんで今僕の名前に（笑）がついたの？

「へ、ひぬわい！ 優大は言葉じや言こ表せないへうこゆういんだ
！」

とつても恥ずかしいけど、嬉しいね。でも、嬉しいんだけど、前
橋さんのいないうちで褒めてほしかったかな！ 多分僕無事に家
に帰れないんじゃないかな！？

「まあ、[冗談は置いとい]、（笑）君の意見のこと思ひよ」

（笑）をとるんじやなくて僕の名前をとるんだ。

「あ、ありがとう。でも、これを感じたのは楠さんのおかげな
んだ」

「私のおかげ？」

「……なんだよ優大……。てめえ、ビツコいことだよ……。」

なななんでこなに睨まれてこりの?!

「はあ、はあ……。あ……貧血気味……」

前橋さん……。お願いだから、床の掃除は自分でしてね……。

「あのとき口食べさせてもうつたおませがとつてもおいしかったから、みんなも食べたいうこのになーつて思つて」

「ああ、あの時の手作りおはせ……。なるほどね……」

納得の表情の楠さんと驚きがあふれている表情の離りちゃん。

「ゆ、ゆうた?… なんで、若菜の手作りおはせなんて食べたんだ?… いつ?…」「

「え? エーッと、この前楠さんが僕の部屋に来た時こ……」

あれ? これって言つてもいいのかな? 僕が連れ込んだってここになつてたんだっけ?

「な、なな、な……!」

愕然としている離りちゃん。まあ、確かに僕の部屋なんかに楠さんが来るなんて考えられないよね。衝撃受けても仕方ないよ。

「ビーしてわかなかがゆーたのへやこいつての?..」

「え、えっと、その……」

窓の外に立っていたからなんて言えないよ……。信じてくれないし……。

「ひで楠さんの助け舟。

「わざ言つ仲だから、ね？ 佐藤君？」

「え？」

そう言つ関係って、主従関係の事かな？ それなら僕の部屋に来ておかしくないよね。頷いても問題ないよね？

「う、うん。そなんだ

頷いてみた。

失敗だったのかもしれない。

「…………あ、ががががががががが…………」

雛ちゃんが壊れた。

「「めんね、有野さん。黙つてようと思つてたんだけど……。ばれたら仕方ないね。私たち、そういう関係なの。くふ」

なんで最後に笑ったの？

「…………う、う…………」

「え？！ ひ、雛ちゃん？！ なんで泣くの？！」

「ぐす……」

「間違いなく絶対に百パーセント離ちやん勘違にしてこると御つよ
?—」

「か、勘違い……。そ、そり……。……私、勘違いしてたみたいだ
……。優大も私の事気になつてるとと思つてた……」

「え?— 離ちやんのことは好きだよ?—」

「う、嘘じやなこよ!—」

「ど」からどう見ても勘違いされてるよなこれ!— ビツコツ勘違
いかわからぬいけど!—

「うるせえ!—」

突然怒られた!— 泣いてる離ちやんに怒られた!—

「しめえら……!— 覚えてやがれ!—?」

カバンを掴んで涙を散らしながら教室を飛び出した。

「ま、待ってください……有野さん……私、貧血で……」

前橋さんもよろよろとその後を追つて教室を出て言った。
残された僕と楠さん。

今日も、楽しくない会議の終わり方だった……。
後で謝りつつ……。

「……。怒りせちゃつたね佐藤君」

「へ、うん。でもなんで怒ったのか僕には分からない…………」

「……ふつ」

「わ、笑わないで…………」

「これは、面白い。有野さん、いい気味だね」

「そんな……。なんで雛ちゃんをそんなに田の敵にするの」

「それは有野さんに言つてあげて。私は敵対心なんて持つてなかつたんだから」

「…………そつこえは、雛ちゃんは前から楠さんに突つかかってた、ね

……」

僕の言葉に楠さんが微妙な顔をする。

「……なんだかその勘違いは有野さんが可哀そうだから訂正しておいてあげよう」

「え?」

「有野さんが私に文句を言いに来ていたのは、周りの人がある野さんにそれを期待するからなんだよ。しうがなく、有野さんは私に文

句を言つていたんだよ

「え? どうこいつ」と?」

「有野さんは、私に嫉妬している人のガス抜きの役割を担つてくれていたの。嫉妬している人の代わりに有野さんが私に言つことで、その人のストレスを定期的に発散させていたつていうこと。溜まつて溜まつて大変なことにならないように、私の為を想つてやつてくれていたことなの。それを知つていたから私は別に有野さんのことを探つていなかつたし、うるさいとか思つていなかつた。昨日まではね」

「せうだつたんだ……」

「でも昨日からなんだか普通に突つかつてぐるよつになつてね。しかもどうやらそれは君が私のことをばらしたからみたいだね……。どうこいつつもり?」

「え、ほ、僕ばらしてないよ?」

まだ。

「……まあ、さつき有野さんもそう言つていたし、そつなんだろ? けど。でもだとしたらなんでばれたの? 私は完璧だつたはず……。君もいつも通りに見えた。原因は何?」

「えつと、その、多分勘違い……」

「勘違い?」

昨日あつたことを話す。

離ちやんが楠さんと僕の関係がおかしいと違和感を持つたこと。そしてその時にたまたまいた前橋さんを見て僕が怯えたこと。それを離ちやんが、僕が楠さんに対して怯えているだと勘違いしたこと。僕が言こやつになつたこともちやんと言つたよ。

「……ふーん。なるほどね……。でもそれが間違いじゃないっていのが勘違いだと一概に言えないところだね……。まあ、もはやどうでもいいけど。また明日から睨み付けられる生活が始まる。いや、もつとすこじになりそうだけど」

「勘違いだよって、教えてあげれば解決するよね」

「無理だね。私たちの脅し脅されの関係を言わない限り納得しないと思つよ。思い込み強いでしょ、有野さん」

「え、う、うーん? そつこいつひも、あるかな……?」

あるね。

「そつこいつひもで、有野さんそつこいつに勘違いしてしまつてこの出した

した

「そつこいつひもで、いつたいどつこいつ勘違い?」

「本当に鈍いね。でもどつしおひもないからそのまままで生きていいくしかないと思うけど。じゃあ私は帰る。あ、明日君の和菓子喫茶、みんなの前で発表するから。佐藤君が考えましたって。いいでしょ?」

「え、う、ん。もちろんだよ」

却下されなかつた。よかつた。

「それじゃあね。ばいばい。優大（笑）くん」

「それやめてよ……」

今までの人生にお別れを

七月六日。

水曜日。

刻一刻とテストの日が近づいてくるけれど、勉強は一向にはかどらない。

来週の水曜日はテスト最終日だ。あと一週間ですべてが終わるなどと言つたら世界の終わりが近いような錯覚に陥ることができるので、実際のところは僕自身が終わるだけで世界は何ら変わらない。電車が遅れることも無いだろうし、バスが早く来ることも無いだろう。

僕の人生が終わろうが誰も気にしない。

何人かは悲しんでくれるのかもしれないが、その程度だ。こんなことだって多くの人が考えていることだ。

その他大勢が考えるようなことで悩む。そう、僕は普通なのだ。平凡。凡人。どこにでもいる、いや、平均を大きく下回っている。勉強もできない、運動もできない。いつも周りの人を怒らせている。大勢の人に褒められたことなんて一度も無い。賞賛とは無縁の生き物だ。

何か一つでも得意なものがあれば自信がつくのに、何も見つからない。

姉や弟と比べても僕だけ異常に劣っている。

可愛い姉と、可愛い弟。

姉は勉強できるし、弟はなんだってできる。

それに比べて僕は

と、こんなことを考えながら通学路を歩く。

順調にいかない勉強のことを頭から追い出そうとしていた僕。

結果、失敗。

負の連鎖に巻き込まれてしまった……。

朝から憂鬱だ……。

どす黒いオーラを放出したまま学校へ到着。僕は手紙が入っていないことを祈りながら下駄箱を開けた。今日は何も入っていない。一安心だ。

「……佐藤……！」

安心して突っ立っていた僕を誰かが呼ぶ。昨日と同じならば、小

嶋君だ。

手招きをしてくるのはやはり小嶋君だ。

「小嶋君、おはよう」

「そんなことよつ、これ

DVDを差し出してきた小嶋君。

昨日貸した2クールのアニメが今日返つてくるとこ、「う」とは面白くなかったところ「う」とだ。お気に入りでなかつたようだ。

「面白かつたわ」

「え？」

「面白かつた？　それはつまり見たといふこと？」

「あ。いや別に普通だった。勉強しながら流してたから内容はよく覚えてねえ。とつあえず一通り再生したから返す」

「うん……」

テスト週間でなければちやんと見ててくれたはずなの……。

「……で、次のを貰したいとかあれば借りるが」

「あ、うん。今度のはさみとまつと面白こよ。はい、これ」

「おひ。明日返すわ」

「え」

「これも2クールあるから一回で見るのは大変だと思ひナビ……。

「明日も、何か持ってきてくれよ」

「う、うん」

小嶋君が笑顔で去って行つた。

……?

なんだか、楽しんでくれているような気がする……。

……。

氣のせいだよね。

朝の教室に入つて一番にちやんの元へ向かつ。

当然昨日のこと感謝なのだ。

金色の髪の人が机に伏せていた。僕はその人に近づく。

「ちやん……昨日は、『めんね……』

「……」

顔を伏せたまま無言で僕に中指を立ててきた。

「その、楠さんが僕の部屋に来たのは事実だけ、変なことはしてないから」

中指を立てていた左腕が力なく机に垂れる。

「離ちゃんが心配するようなことは何もないからね」

「……心配なんてしてねえよ……」

「もつた声が聞こえてきた。

「失せろー」

「『』めんね。何か、僕が嫌な思いをさせひやつたんだよね」

「失せろー」

「僕、なんでもするから、許してくれないかな……」

「なら失せろー。別れろー」

「ひ、うん。離ちゃんがそれを望むのなら失せる……。でも、別れるのは嫌だよ」

別れるつひ、離ちゃんとだよね？ 親友やめひことだよね？
そんなの嫌だよ。

「……優大。五秒以内にそこから逃げないとブツ飛ばす」

「え?」

「「」「よん、さん、に」「」

「「」「めんねー」

殴られたくなかったので僕は慌てて逃げた。情けない……。
離ちゃん、許してくれそうになじよ……。

今日の四時間田はLHR。

先週は副委員長を決めたね。なんだか、密な一週間だった気がする。

本日の議題は当然文化祭について。

出し物を決めるみたいだ。

先生が教室の隅で見守る中、楠さんが教壇の上に立ちみんなを見渡す。

「先日、離さんには『飲食系』がやりたいと意見をいただきましたが、今日はその内容を決めたいと思います」

「つづいて。僕の言った和菓子喫茶が発表されるんだね。どきどきするよ。」

「一応、いちからでも考えまして、佐藤君からとてもいい案が出たので候補の一いつとして上げさせてもらいます。あくまで、佐藤君の意

見は第一候補です。まだ決定ではありませんので、他にやつたいことがあればどんどん言つてくださいね」

みんなが僕の方をちらちら見てくる。とっても恥ずかしいね……。でも、楠さんも雑ちゃんもいって言つてくれたから、少し自信がついたよ。早く発表してほしい位だ。

楠さんが一瞬僕に視線を送る。発表するみたいだ！ わー！ 恥ずかしい！

「佐藤君が昨日提案してきたのは『女子高生が握るおはぎ喫茶』と言つものでした」

…………え？！

教室中がざわめく。

「当然だよ！ 僕の心だってざわめいているもの！」

「こんないかがわしい匂いのする喫茶店僕提案してないよー？」

「とても素晴らしいアイデアですね。私たちが握っているの姿を開しながら、完成したものを法外な値段で販売する。これは繁盛しますね」

教室のあちこちから「サイテー」とか「きもちわるい」とか聞こえてくる。

「ちよ、ちよっと僕これは嫌だ！」

「あ、あの、楠さん？！ 僕そんなこと言つてないけど？…」

僕は立ち上がりて抗議した。

「え？ どうしたの佐藤君。昨日あんなに楽しそうに語っていたじゃない（笑）」

「昨日から楠さん（笑）を公用してくるね！？ それよくなじよー・メールじゃないんだから！」

「僕が言つたのは和菓子喫茶だよ！？ なんで『女子高生が握る』つていうのがつっこてるの！？」

「昨日佐藤君が言つたからだよ？ もー、なに？ 恥ずかしがつていいアイデアだと思うよ？ 私は

全然そんなことないよ？！ クラス中の女の子が僕を冷たい目で見ているもの！」

「や、そうだ！ 離ちゃん！ 僕そんな」と言つてないよね？！」

「…………」

ぐつたりと机に顔をつけた状態の離ちゃん。

「離ちゃん？！ む願いだから僕を助けて！」

「「つむせえ」

「あの、その、離ちゃん！ 僕の無実を証明して！」

「離ちゃんが勢いよく立ち上がった！ 助けてくれるのかな？！」

「「つむせえって言つてんだよこの野郎！ てめえブツ飛ばすぞ！」

「え！ こめん！」

怒られてしまった。やつぱり、許してくれてないよね……。

「お前と若菜は私の敵だ！ 誰が敵を助けるか！ 死ね！」

そう言つて椅子に座つて僕から顔をそらした。

「ブランボー！ ブランボオオオ！」

前橋さんが一人で拍手して一人で喝采を送っていた。
雛ちゃんの大きな声に静かになつた教室。

「話し合いは済んだ？」

「すみません……」

涙目でうなずく僕。

僕は彼ちゃんの敵みたいだ。
悲しい。

「では、そう言うわけで私たちのクラスは『女子高生が握るおはぎ喫茶』に決定しました」

.....\K.....?」」」」」」」

気づいたときには、もつ手遅れでした。

僕らのクラスの出し物は、「ＺＺ（女子高生が握るおさげ）喫茶

になってしまった。

離ちゃんの怒鳴り声を聞いたクラスメイト達は意見する飯を全部押し殺されてしまつたようで、誰も楠さんに反対しようとはしなかつた。

僕は離ちゃんに敵だと言われたことにショックを受けそのあとのＬＨＲは一切覚えていない。それどころか午後の授業丸々覚えていない。テストが近いというのに……なにをしているんだろう……。もうすでに帰りのホームルームが始まっている。

これが終わつても今日の放課後は委員長会議が無いと言つていた。都合がいい。

離ちゃんにちゃんと説明して許してもりおつ。

でもなんて説明すればいいんだおつ。

そもそも何を怒つてているのだろう……。

僕と楠さんの関係を勘違いしているから怒つたんだよね……。でも、一体どういう勘違いをすればそこまで怒るような事態に陥るのだろう。ちょっと想像がつかないよ。

……。

本当のことをおつ。

離ちゃんは親友になつてくれた。

本当は思つていなくとも、僕のことを親友だと言つてくれた優しい離ちゃんとの関係が終わるのは嫌だ。

楠さんのことは言わないで、僕が脅されているんだということを言つだけならば誰にも迷惑がかからないはず。楠さんの印象が少し悪くなるけれど、「めんなさい」。今回は、自分の事情を優先させてもらおう。

考え事をしているうちに帰りのホームルームが終わつた。

僕は立ち上がり教室を見渡した。

離ちゃんが前橋さんと一緒に教室を出ようとしていた。

僕は慌てて追いかける。

教室の前の廊下ですぐに追いついた。

「ひ、離ちやん」

「ああ？」

怒った顔で振り返った。とても怒りついちゃる。

「なんなんですか佐藤君！ 有野さんはこれから離られる
んですから邪魔をしないでください！」

「あ、引き止めて、ゴメン……。でも、その、許してほしくって…
…」

「許してほしいだあ？ 別に怒ってねえけど？ 優大なんか親友で
もなんでもないんだから話しかけてくんな！」

「え……。や、やっぱり、そただつたんだ……」「！」

親友にならうって言つてくれたのは僕を気遣つてだつたんだね…
…。でも、ものすごいヘンコックだ……。ちよつと泣きそう。

「やっぱりってなんだよー。お前私のことを信じてなかつたのか？
！」

「失礼ですよ佐藤君！ ……早くビットを行つてください

僕の言葉が悪かつたみたいだ。

「離ちゃんは優しいなって聞いたかったんだ。『ごめんね、変な言い方して。ごめんね……』

僕の謝罪を聞いて少し表情を緩める。

「…………ならいいけど。で？ 友達でもなんでもない優大が何の用だ
？」

「あの、昨日の事なんだけど……」

「なんだよ。皿廻しに来たのか。ほこほこおめでとうすいこね。これで満足だ。じゃあな」

僕の肩を軽く押して離ちゃんが帰ろうとする。
僕はそれを慌てて引き止める。

「離ちゃんつ」

離ちゃんの右手を掴んだ。
とつても暖かかった。

「なんだよ」

振りほどく」ともせず正面倒へむけつに振り向いてくれた。

「あの、その、僕、話したいことがあるんだ

「なに。何だよ。話してみるよ」

「ううじゅあ、言えなくて、えっと、人のいなことひりで、話した

いんだけど……」「

「なり私のこないところで一人でしゃべつての」

「離ちやんに聞いてもらいたいんだ」

「……。知るかよ」

離ちやんが手を振りまじいつかかる。でも僕はしつかん
で離れない。

「お願いだから、僕の話を聞いてほし」

「……それを聞いて私はどう迷惑。その話を聞いた結果、私はビックリする」

「……えっと……、わあ……」

「……ふん」

「佐藤君?ー 有野さんの手を握りながらへだてー 有野さんの
手が汚れてしまいまー」

僕の腕にチヨップをして手を離れさせようとする。でも僕は離れない

い。

「い、痛こよ、前橋さん……」

「なり離してくださーー ハサミを持ち出さうとカバンに手を入れ
ますよ?ー」

それは怖い！
でも、離さない。

「……こつなつたら……。カバンに手を入れます！」

うわっ、カバンに手を入れた！ ハサミが出てくるのかな？！
それでも僕は離さないぞ！

「……未穂、いいから」

離ちゃんが優しい声で前橋さんに言った。
それを聞いて前橋さんが見るからに落ち込む。

「は、はい……。有野さんが、そつぱつのであれば……」

悲しそうにカバンから手を出した。でもしつかりとハサミが握ら
れていた。いや、しまおつよそれ。離そつよ。

「……私にだけしか、話せない話なのか？ 他の奴に聞かれたらま
ずいのか？」

「う、うん。離ちゃんにだけ、話したい……」

「……そつか。なら、秘密基地で待ってる」

「え……。あ、ありがとう！ 离ちゃん！」

「別に。いいからそろそろ手を離してくれねえかな」

「あ、」めぐ

僕はすぐに手を離した。

離ちゃんは僕の手から解放された右手を眺め握つたり開いたりしていった。

三回それを繰り返し、僕を見る。

「やっぽり私、耐えられないかも

「え？」

「じひの話。じゃあまたあとで」

振り返り真っ直ぐに廊下を進んでいく。前橋さんが一度僕を睨み付け慌てて離ちゃんを追つた。

離ちゃんは振り返らない。真っ直ぐに真っ直ぐに歩いた。

……。

ふう。

よかつた。とりあえず話の場を設けることができた。僕は脅されてこますと、言いつてしまおう。

「佐藤君？」

後ろから綺麗で恐ろしい声が聞こえてきたー。僕はそれに戦慄を感じた。

「佐藤くーん。一体、有野わざと何の話をしようとしているのかな

ー？」

誰かが、僕の肩に手を置いた。

その手を見てみる。

心が不安定になるくらい綺麗な手だった。
間違いない楠さんの手だ。

「佐藤君、ちよつと来て」

楠さんが僕と位置を交換するような形で肩を持った手を引き勢いよく前にでた。体勢を崩す僕を放つて、楠さんが空き教室へと向かつた。

楠さんが先に入った空き教室に僕も入る。

「佐藤君。まさか君、全部ばらす気? 有野さんに許されたいから
つて、全部ばらす気?」

僕が入つてすぐに聞かれた。

楠さんは椅子に座つて僕を睨み付けている。怒つてこらつしゃる
……。

「君、有野さんに嫌われたからどうでもこいやつて思つてるので
止めてよ。私まで巻き込むなんてとっても迷惑」

「や、やつ言つわけじゃなくて、その、あの、僕が齎されてこ
てこいつだけを言おうと思つて……」

「齎されている理由今まで話は飛ぶでしょ? なんて説明するの」

「えつと、黙秘……?」

「黙秘、ねえ……。君にそんな高度な」じが使えるとは思わないけど……」「

「高度なんだ……。

「もしそれができるとして、私が君を脅してこいつこいつことを教えてしまえばそれだけで大変なことになるでしょう。私の嫌な噂が一気に広まっちゃうよ」

「それはきっと大丈夫。難ちゃんは言いふらしたりしないから

「でもよつ一層私を見る目が厳しくなるだろ? そんなの」めんだけど」

確かに、それは嫌だよね。

人に嫌われるのなんて、誰だって嫌だもん。

「……でも、僕は言'うよ」

「……へえ。私が嫌がることをしようつてこいつんだ。いこ度胸だね」

「さう言って、携帯を取り出した。

「君は私に命を握らせていくことを忘れていたみたいだね」

「忘れてなんかいないよ」

「なのになんでそんな行動をとるの?」

僕は、まっすぐ楠さんを見据える。

「……僕、今回自分勝手に生きてみよつて思つんだ」

「……自分勝手に? 何言つてんの?」

「え。えつと……。」

「その、楠さんが前言つてくれたことを、実践してみよつて思つて

……」

「私そんなこと言つたつけ? 覚えてない」

僕の心には深刻に刻み込まれたのに楠さんとしてはやつたこしたものではないみたい。

少し衝撃だ。

「えつと、その、勇気を出せとか、自主的に生きるとか」

「……ああ。それね」

「うん。だから、僕は勇気をもつて我儘を言つてみる」

「……私が嫌がつても?」

「うん」

「う、うん」

「う、うん」

なんでものをつけたんだが。

「君は可愛い私を傷つけてもいこっていづの？」

「うん。本当は嫌だけど、離ちゃんととの関係が終わるのはもっと嫌だから」

「……うん」

楠さんが俯いた。

「これで僕の悪行がばらされたらどうしよう。離ちゃんには本当のことと言おう。きっと信じてくれる。でもみんなは僕を責めるはず。悲しいけれど、離ちゃん一人が信じてくれるのなら僕はそれでいい。」

「……私が脅していることだけを教えるんでしょう？」

「え？ あ、うん」

「その理由は言わないんでしょ？ 私の性格が腐っていることは内緒にしておいてくれるんでしょ？」

「うん。言つ必要ないもん。それに、楠さんの性格が悪いだなんて僕思つてないよ」

「はいはいフォローフォロー」

「なら、こりよ。仲直りしてこりよ」

「本当ですかと思つてゐるの……。」

「え、あ、うん」

「きつと私が君を脅していると知つたら有野さんは私のことを今まで以上に敵対視してくるだろ? けどいいよ」

「う、うん」

「それを見た私を嫌つている人間達がそれを見て有野さんの味方になつて私の居場所がなくなつていぐだろ? けどいいよ」

「……う、うん……」

「それで居場所がなくなつた私は学校に来なくなつて一人部屋の隅で丸まつて飲み終えたジュースのストローを噛みながら出会い系で男を探して」

「もう勘弁してください…」

「聞きたくないよそんな話!」

「これからが面白くなかったよ」

「何一つ面白くなかったよ!」

「あの、やつぱりやめた方がいいよね……?」

「どう見ても嫌がつているよね、楠さん……。でも、嫌がつているはずの楠さんの顔は晴れやかだつた。

「うひー

楠さんが立ち上がり、笑顔まで見せてくれる。

「本当に、いい傾向だと思ひ。相手もいつまでもいたい生きていくのがいいと思ひよ」

「う、うん……。本当にこのへんの？」

「ここにけば、わたくしとわがままど、わたくしと自分の話で、たこじを語れさせないと楽しこと思ひよ」

「やべ、なのかな……」

「やつだよ。間違いない。昨日の委員会議で良い案を出してくれたし、たまには君のやりたいことをやらせてあげないとね。自棄になられて全部ばらわれたら困るからね」

「やんな」とはしないけど……」

「先の事なんて誰も分からなことじよ」

「うだか……。

「嫌な田で見られるのくらい、もう慣れっこだし。それが一人増えたところで問題ないよ」

「……あの、『めんね……』

「悪いない。君の人生が明るくなるのならそれは嬉しいことだし」

「……」

優しいなあ……。なんでだろう……。

「あの、楠さん、聞いても……その、なんで僕にそんなに優しくしてくれるの? 僕の人生の心配をしてくれるなんて、その、嬉しいけど、申し訳ないというか……」

「なんでだろうね。私も分からな~いよ」

苦笑いを見せる楠さん。

「でも何となくは、分かるかな

「何となく?」

「君は多分私とは正反対の生き物だと思うんだ」

「う、うん……。容姿もよくないし、勉強もできないし、運動もできな~いし……」

「そういう感じじゃなくって、根本的に。私が陰だとしたら君は陽。でも明は私で暗は君。そんな感じ」

「……何となく、分かったかも……。でも、それでなんで人生の助言を……?」

「正反対すぎるから、逆に似ているのかなって。だから似た者同士もつと人生を楽しんでほしいと思っているんじゃないかな。確かに

「じとま言えなこナビ」

「「ハ、ハニ……?」

よく分からぬいや。

「まあ、とつあえず、早く秘密基地に言ひて事情を説明しなよ。怒つて帰つちやうよ」「みう

「あ、そだつた。」めんね、楠さん……。迷惑をかけちやうね……

…

「いこよ。たまこは自分も揃もしなきや。でも、報告は聞くからね

「「ハニ」

「よし。なり……行つてらひしゃー」

笑顔の楠さんに見送られ、僕は教室を出た。
なんだか、失敗する気がしない。

変わつていく日常

僕が待ち合わせ場所にたどり着いたとき、離れてまつまいなうに秘密基地を眺め立っていた。

「お待たせ……」

同じよつとまらなそつな田で僕に視線をくれる。

「待つてねえよ。お前だつてすぐに学校出たんだろ。待つわけねえだろ」

「さうだね……、『めんね……』

「……」

僕の謝罪に答えることなく、離れてまつまいさんが再び秘密基地を見た。
そして、出来る限り感情を殺した声で、まるで僕に心の内が悟られまいともしているかのように呟つ。

「……」

「え？」

「あなりすきて僕は何も言えなかつた。

「……」
僕はまだ前から変わらねえな。汚くつて小さくつて。でも立派だよな。何年も放置したのこちやんとのままの形で立つてゐる。しっかりしてゐるよな

「うふ……」

「壊してくれていた方が良かつたのかもしれねえな」

「え？」

「……あまつにあの頃を留めず、だめ。色々と想いだししてしまつ」

「色々……？」

「ああ。友達の顔とか、強い日差しとか、やまの声とか、あと、初恋とか

「……初恋……」

「田を閉じればあの時の音が聞こえてくるみたいだ」

「僕と同じことを思つていてる。
でも聞こえてこないんだ。
もうあの頃は帰つてこない。

「昔と同じだ。だから、我慢がきかなくなる

「我慢？ 何が、我慢できなくなるの？」

「うるせえ」

怒られてしまった。聞いてはダメなことみたいだ。

「で、いつたい何の話をしようつてこつんだ

改めて僕を見る離ちやん。昔を想い出したせいか、少し悲しそうな顔だった。

「……僕と、楠さんの関係を、離ちやんに知つてもらいたいんだ」

「もう知つてるよ。んなもん改めて突きつけたくないよ

「違うよ。離ちやんは勘違いしてこるよ

「……勘違いか……。それだとどれほどいいか

「勘違いだよ。絶対

「やけに自信たっぷりだな。ならなんだよ。言つてみるよ」

「……うん……。僕と、楠さんは

……。

何故だろ？ 言葉が出てこない。

「……なんで黙るんだよ

「えつと……

僕にもわからない。

ただ、妙な不安を覚える。

誰かに見張られているような不安。

世界が僕を監視しているようだ。

僕が離ちゃんと仲直りするのを嫌がっているような、僕がちゃんと言えるのかを見守つてくれているかのような。

「なんだ。やつぱり言いたくねえのか」

「わづじやなくて……」

物凄い敵意がこもった視線と、それを打ち消してしまはずの安寧な視線。

ひたすらに気持ちが悪い。不安が僕を飲み込む。

矛盾した二つの視線の間で僕は言葉に詰まってしまった。どうすればこの胸騒ぎを取り払うことができるのだろう。

そもそも、一体何が僕を不安定にしてくるのだろう。

原因の分からぬ不協和音。

それを止める手段を僕は知らない。

「優大」

頭の中で鳴り響く噪音を突き抜けて離ちゃんの声が僕の耳に入ってきた。

「お前は、なんで若菜との関係を私に言おうと思つてるんだ?」

「……それは、その、許してもいいたくつて……」

「なら、なんで言いたくねえんだ?」

「……分からぬけれど、よくないことが起きそうで……」

「……やつ言つひとなら、安心しゆ」

離ちゃんが少しだけ笑みを作つて僕との距離を縮めた。

「私はどんなことでも受け止めるから。何を言おうとしているのかは、まあ、分からねえけど、優大が私との関係をまだ続けたって思つてんのなら、どんなにつらうことでも受け入れる。だから何も不安に思うな。私を信じろ」

そう言つて、僕の肩に手を置いてくれた。

その瞬間僕は気付く。

僕は離ちゃんと向かい合つて、離ちゃんに許してもらいたいんだ。
それなのに僕は理解不能な不安に惑わされて目的が見えなくなつていた。

何が不安だ。

そんなことより僕は離ちゃんに許してもらいたいんだ。離ちゃん
と親友を続けたいんだ。

何をためらうことがある。

このために僕は楠さんに申し訳ない事をする決心をしたではないか。楠さんだつてそれがいって言つてくれたではないか。臆病者の自分に嫌気がする。ここで言わなければ、今感じている不安なんかの比ではない最低な人生が待つてゐるに違いない。

僕は離ちゃんの顔をまっすぐに見た。

「言つてくれ、なんでも」

「うん」

僕は不安に蓋をした。蹴散らすことができなかつたので、僕は不安を無視した。

「……実は僕、楠さんに……その、えっと、何と言えばいいのでしょうか……あの……」

ズバツと言えない自分が情けない。

「優大。大丈夫だ」

いつかのようご、元離ちゃんが僕を優しく揺すつてくれた。
だから、言える。

「……僕、少し前から、楠さんのいふことに従わなきゃダメになつたんだ……」

無言。

しばらぐ無言。

その後に。

「……は？」

僕の言つてこいることが理解できていない離ちゃん。

確かに、僕の言つていることは非現実的だ。ありない。

「ほ、本当なんだ！ その、そうなつた理由は言えないけど、僕と楠さんは、主従に近い関係なんだ……」

「ま、まで、まで……。あの若菜が？ 優大を従えていく？
……なんで？」

「その、理由は言えないけど……、僕は脅されているんだ……」

「えいひー……。じゃあ、この前若菜がお前の家を訪れたってことの
はなんだ?」

「えーっと……僕を脅すネタを増やすためこきたみたい……」

愕然としている離ちゃん。

そりやねうだよ。こんな誰も信じられないような話聞かされたら、
相手の頭を疑つちやうよね……。

「脅されていくつて」とせ、お前が悪い事したつて」とかへ。

「え、えっと、多分……」

「多分つて……。いや、やつぱ理由は言えないんだつたつけな

「うん……」あんね、離ちゃん……」

「悪くない」

僕の肩をぎゅっと握りしめる。

「……あーつ……。私の優大を脅すなんて許さねえ……」

離ちゃんの表情が冷たくなる。

「許さねえ」

ほほやんとした目が鋭くなる。いつも以上に、見たことのないく
じこ。

「あの、離ちゃん」

「大丈夫だ。私に全部任せておけ。もつ齧せねえ」

「へ、そりじゃなくて、そのね」

「つまくやる。私なら、つまくやれる……！」

「離
離」

「あいつ……ブツ飛ばす……！」

「離ちゃん！」

僕以外のところに意識を持つていかれていた離ちゃんを、大声を出して無理やりこちらに引き寄せる。

「なんだよ。普通に田の前で話してるんだから大声出さなくっても聞こえる」

「離ちゃん、ダメだよ。ダメ。絶対にダメ」

「なにがだよ。齧しのネタがばれるのが嫌なのか？ 大丈夫。絶対に」

「わづかわづかじやなくて…」

また田の前で出された大声につるむたれつかな顔をした離ちゃん。

「……なりなんだよ

「喧嘩は、ダメだと、思こます」

絶対に、よくない。

「……なりひかねんだよ。どうやつて解決するんだよ」

「……解決……」

そんなこと考えたことも無かった。
でも、それなら簡単だ。

「……解決は、いいよ。何もしない。解決しなくていい」

今まで考えてこなかつたといつゝとせ、解決する必要が無かつた
ところだ。

「良いわけねえだろそれ。このまま脅されて生きていいくのか?」

「うん。脅されていろいろ言つても、よく考えたら僕あまり嫌なこと
とされてなかつたかも」

「『あまつ』嫌なことされてなかつた『かも』。曖昧だぞ」

「う……いや、本当に嫌な」とは、されていなによ?」

「でもな、私に任せてくれれば、ちゅつとも嫌なことわねえんだ
ぞ?」

「だいじょうぶ。だいじょうぶ。きっと、いつか、自分で解決して見せるから」

僕の言葉を聞いて離ちゃんが不満そうな顔を見せた。

「私は嫌だな。優大がそんな目に遭っているのに、何もしないなんて」

「そんな日、つて言うほど大層なものじゃないよ？ 僕は今日、それのことを相談しに来たんじゃないで、離ちゃんに事情を説明して仲直りがしたかったから来たんだ。だから何もしなくて大丈夫だよ」

不満そうな顔は戻らない。

何か考えるためなのか、一度下を向く、すぐに顔を上げた。

「……我慢できるのか？」

「大丈夫」

僕の返答に離ちゃんが目を瞑りしばらく黙りこみ、

「よしわかった。優大がそう言つのなら何もしない。自分で解決しようとするのを邪魔しちゃ悪いからな」

「うん」

解決するつもりなんてないけれど。とこうより、解決できる気がしないけれど。

「でも私は若菜を許さない。やっぱり若菜は私の敵だ。一番の敵だ」

「え、そんな。ダメだよ喧嘩は」

「これは私の問題だ。お前の問題じゃない。私はあいつが優大に謝るまで若菜を仇だと思う。優大に何と言われようともう決めた」

「で、でも……」

「優大が私に手伝わせてくれないよう、私も譲らない。あいつは私の敵だ！」

「そう言われたら、僕には何ともできない……。
でも何とかしたいなあ……。

多分、何もさせてくれないのでうけれど。
何かいい考えは浮かばないものかと無言で考えているところ、雛ちゃんが言つ。

「悪かつたな。なんか、勘違いしちまつてたよ」

謝ってくれた。

「え、いや、ううん。全く問題ないよ？ といひで一體どうこう勘違いをしていたの？」

全然わからないよ。あそこまで怒る勘違いってなんだろう。

「……え、お前、鈍すぎ……」

え？ 驚かれた。なんで？

「まあそれがお前のいいところだからな」

「い、いいところ?」

よく分からぬ。

「分からなくていいよ。それがお前だ。お前は変わるな」

「……」

僕は、変わるな。

楠さんは言つていた。変えた方がいいって。
変わつた方がいいのか、変わらない方がいいのか。どっちがいい
のだろう。

僕としては、変わらないで生きたかつたけれど、勝手に色々と変
わつてしまつた。

僕は変わつていないのかもしね、でも僕の人生は激変してい
る。

波風のない穏やかな人生を送つていきたかつたのだけれども、最
近は人を怒らせたり人に恨まれたりしている。

できる事ならば、何事もなく死んでいきたかった。

しかしもう毎日は変わつた。

穏やかさから離れてしまつてゐる。

でも、何故かそれを残念だとは思わない。
多分、いい機会なのだとと思う。

楠さんは言つていた。勇氣を出せば人生が楽しくなる。
おそらくこれが最後のチャンス。

穏やかな人生を過ごすのか、波のある人生を過ごすのかを選択す
る最後のチャンスだ。

これを逃せばきっとこれから先穏やかで何もない人生を送ること

になるのだろう。

ずっと一人で本を読んで終わる毎日を選ぶのか。脅されたり、怒られたり、殴られたり、恨まれたりする毎日を選ぶのか。

僕は思い出す。

屋上で、楠さんと一緒に食べたお弁当は、とつてもおいしかったな。

僕は。

僕は

「僕も変わりたくないって思っていたけれど、多分、変わった方が楽しくなると思う

「いや、お前は変わらない方がいい。そのままの優しい優大でいてくれよ

「僕は臆病なんだね」

「……は？」

いつか言われた言葉だ。

僕は臆病。

「臆病じゃねえ。優しいんだ」

「ありがとう。でもきっと、僕は臆病者なんだよ。人と距離を縮めるのが怖かったんだね」

「いいじゃねえかそれでも。お前が距離を離そうとするのなら私がお前に走つて行くから。お前は変わらないでいい。お前と距離を縮めたい奴だけ距離を縮めればいい。優大だって私がいれば充分

だろ? 「

「うん。離ちゃんは優しいもんね。離ちゃんといると楽しいし。でも離ちゃんが僕との距離を縮めてくれるなら、僕もそいつする。そっちの方が早く距離を縮められるもんね」

「……まあそうだけど……。優大が大勢と仲良くするなんて、なんかいやだ」

「え、ダメかな……」

「あーいやいや、ダメじゃねえけど。……まあそうだよな。お前の人生だもんな。口出しきなえよ」

納得してくれたみたいだ。

「勇気を出して進んでいった方がいいんだよね

「……」

怪訝そうな顔の離ちゃん。

「でも、お前どうしたんだ? これまでずっと、一人がいいみたいな態度を取っていたじゃねえか。何があつた?」

一人でいたいっていう態度だったんだ、僕……。なんだかちょっとショック……。

「うん。楠さんに言われたんだ。勇気を出せば人生楽しくなるよって

「……若菜に……」

「わ。だから懶氣を出してみよ。」
「わ。だから懶氣を出してみよ。」

「…………そりかよ」

「顔をひそめる離ちゃん。

敵だと言つた楠さんを僕が褒めたからだ。」

「でも、離ちゃんのおかげでもあるよ」

「……私のおかげ？ 私は別に何も言つた覚えねえぞ。変わらなか
て言つてんのに」

「離ちゃんが、國人君に会わせてくれたから。僕も変われるんだつ
て自信がついたんだ」

「……ちつ。あのくせテブ……」

また顔をしかめた。離ちゃんのおかげなのに……。あ、もしかし
てこれは國人君のおかげと叫ぶことになるのかな。だから離ちゃん
は苦い顔をしたのかな。

「変わつてじつなる。変われば何か起きるのか？」

「分からぬけれど、楠さんが樂しくなるつて言つてたから

「……なんでお前は脅してくる相手の顔葉を言つてただよ」

「え、その、いくら脅してくると喧つても、楠さんは凄い人だから。何でもできる人だから、信じよつと……」

「……なんだそりゃ」

あきれ返つていた。

「……そうだよね……。離ちゃん、あれだけ楠さんに対しても怒つてくれていたのに、当事者の僕がこんなこと言つなんてもうどうしようもないよね。呆れもするよ。」

「…………でもま、優しい優大らじこよ」

笑いながら、そう言つてくれた。

「でも私は今の優大が好きだぜ。だから、変わつてもいいけど、頼むから私のことを忘れないでくれよ。そうすれば、文句はねえ」

「うん。僕だつて、離ちゃんとずっと一緒にいたいもん。親友だから」

「……そつか

柔和な笑みを浮かべた。
でも少しだけ悲しそう。
僕にはわからない感情だ。

「じゃあ、そろそろ帰るか。テスト勉強しなくちゃいけねえもんな

忘れてた。今週はテスト週間だつた。

「急いで帰りなきゃ」

「やつだな」

僕らは一緒に山を下った。あの頃のよつ。やつだな。
それなりに荒れた道で、さらに大好きな秘密基地から遠ざかって
いふところに、まったく苦ではなかつた。

大間違い

山を下りた僕はすぐに引き返して山を登ることになってしまった。草木の生い茂る山道からアスファルトで舗装された道路に変わり四歩進んだところで僕の携帯が鳴った。

『一人で秘密基地に集合』

敢えて誰からのメールかは言いません。ただ僕はこれに従わざるを得ないとだけ言っておきましょう。

僕は人には見せられないものを落としてしまったから捨に行つてくると、一緒に探してくれようとする離ちゃんなんとか別れて秘密基地へ向かった。

一度目の登山は大変だった。

「はあはあ……」

やつとのことでたどり着いた。

「はあ……はあ……」

「ちょっと。何興奮してるの。もしかして私を見て興奮しているの？ やめてよ気持ち悪い」

秘密基地の前で暇そうに座り込んでいた。
息の切れている僕に冷たい視線を送っている。

「ち、違うよ……」、「誤解……だよ……」

疲れた……。

「ああいいや。思つたより早かつたし。有野さんと別れるのに苦戦すると思つただけで、なかなかいい切り抜け方をしたんだね」

「……まあ、うん……」

人に見せられないものを落としたと言つたら、「ああ、お前も男だもんな。ゆつくり探せよ」と言つて苦笑いで帰つて行つた。絶対に勘違いされているよ。

「あの、それで、どうしているの……？ その、もしかして……」

「ゼーんぶ聞いてたけど」

「う。それはなんだか、申し訳ないや……。
あの時感じた不安の正体は楠さんだったんだ……。

「その、『めんね。悪口言ひやがって……』

「こいつ君が私の悪口を言つてたのかな。覚えがないけれど」

「その、齎されていくとか、主従関係とか……」

「それ君の中では悪口にカド『ライズされるんだね。そのくらいなら気にならないからいいよ。謝らないで。それより有野さんの田が怖かった』

「それは……。その、やっぱり、離ちやん怒つりやつたみたいで……」

「…

「うん。想像通りだつたよ。だから平気だよ、フォローなんかいら
ないか?」

「…………う、うん……」

なんだか、悲しいな。

「わざわざ秘密基地まで戻つてきてくれてありがとう。もう用事終
わったよ」

「え?…」

「衝撃だよそれなりに!…電話で済ませてくれても……。

「直接伝えた方がいいでしょ。それと、一刻も早く伝えた方がいい
でしょ。その一つを満たすために帰つてきてもうつたといつわけで
す。『いへひうひま』

「う、うん……」

もう、帰るのかな……。寂しいな……。

「それにしても君、勇気を出してたね。偉いよ

う。なんだか楠さんに褒められたらむず痒いような感じが……。

「でも、私が言つたからとか、言わない方が良かつたね」

「え？ どうして？」

「自分の意思じゃないみたいだし、有野さんとしても気分悪いだろ
う」「うう

「やの、楠さんは、有野さんの敵だから……？」

「違う違う。君は本当に鈍いなあ。よくなじよ、それ

「悪かったね、引き返してもらって。じゃあ、帰つていいよ
うう……。僕のこといろいろなか悪いところなんか分からないう
うう……。

「悪かったね、引き返してもらって。じゃあ、帰つていいよ
うう……。僕のこといろいろなか悪いところなんか分からないう
うう……。

「え？ 先に帰つていいの？」

「別にいいよ。なんで私が先に帰るっていうルールができるの？」

「その、いつも先に帰つてたから……」「うう

「ふーん、そつか。でも今日は先に帰つていいよ。私、ここでする
ことがあるから」

「え

「いいですることつて……あ、そつか。

「うん。分かつた。じゃあ、僕先に帰るね

「はいはい。じゃあな

僕に対する興味をもう無くしてしまったみたいで、背を向けて力
バンの中からグローブを取り出していた。ボクシングの。
楠さんは、今からここでストレスを発散するみたいだね。
僕はもう何も言わずに山を下りた。

僕は何もかも間違っていた。

小嶋君とアニメ

七月七日。
七夕だ。

年に一度織姫と彦星が出会える素敵な日。
短冊に願いを書けば僕たちの願いを叶えてくれる素敵な日。
年に一度の恋人との再会なのに、僕たちの願いをかなえてくれようだなんてすごいね。見習いたい。

とりあえず今日学校から帰ってきたら頭が良くなりますようにって短冊を書いておこう。

これでテストはばっちりだね。

おつとつと。卵焼きが焦げちゃう。

四人分のお弁当と朝ご飯を作り終え、家族が勢ぞろいした食卓につく。平日一緒にご飯が食べられるのは朝くらいだ。少しさみしい。夜は大体お姉ちゃんと僕と弟の三人だけだ。忙しいのは分かるけれど、あまり無理はしないでほしい。

でも恥ずかしいから言葉にはできない。

いつかは伝えたいな。

「兄ちゃん。また隣町がニュースになってるよ」

弟が指さす先を見る。

『 小学校のガラスが大量に割られるという事件が、ここ』

「物騒だね」

「うん」

隣の街なのになんでここまで治安の差が出るのだろうか。この前

も誰かの命が奪われていたし、その前も交通事故が……。危ない世の中だ。負の連鎖が続かなければいいのだけれど……。

…お、お姉ちゃん、苦しい、苦しいから。

何故か僕の口にパンを押し込んでくるお姉ちゃんを何とかなだめて再びテレビに視線を戻す。

あ、今日の占い、天秤座が一位だ。きっと幸せな一日になるね。占いのおかげでとても清々しい気持ちで家を出ることができた。

僕の世界はとても狭くって、定員は一人だけだった。

僕はそこで本を読んだり、アニメを見たり、パソコンをしたりして過ごしていた。

それを心の底から、悲しいとか、寂しいとか、つらいだなんて思つたことはない。

だつて、僕はその狭い世界しか知らないのだから。他の世界を見たことが無いから、それが普通だと思つていた。狭い狭い半畳の世界が普通で、たまにそこから出て誰かと過ごし、また半畳の世界に帰つてくるものだと思つていた。

美人とか、勉強ができるとか、運動ができるとか、人気があるとか、人がいくら集まるうと、なんだかんだ言つても、結局は最後に狭い世界に戻つていくのだと思っていた。

最後は結局一人なんじょ?つて。

一人の時は自分のことしか考えていいないんでじょ?つて。でも全然違つた。

楠さんに脅された時は、キスをされてドキドキしてずっとそれが忘れられなくて。

離ちゃんと親友に戻れた日はずつと嬉しくて顔がにやけっぱなしで。

一人になつても一人じゃなかつた。

それを知れたことはきっとこれから的人生の中で重要な意味を持つことになる。

きっと、勇氣を出せばもっと世界が広がるのだろう。
半畳の部屋から抜け出せるのだろう。

勇氣は扉を開ける力なんだね。

「佐藤……」

下駄箱を開け、靴と上履きを交換したところで、いつものよつて元気な小嶋君に声をかけられた。

「おはよう」

へりへり挨拶する僕とは対照的に小嶋君の顔はとても怖いま、まずい気がする。

「ちよつと、ここ」

指をくっくいと動かしここかへ先行していった。

……。

嫌な予感しかしないよ……。

僕が連れてこられたのはいつものように校舎裏。

ここではいい思い出が無い。

痛い思い出だけだ。

校舎裏。

いい思い出のない校舎裏。
そこで早速土下座で謝る。

「すまなかつたあーー！」

小嶋君が。

「ななななんで？！ やめてくださいーー！」

慌てて体を引き起し、僕。当然だよ。こんなのだれも望んでないよ！

いくら引き起しても僕と小嶋君とでは力の差がありすぎてびくともしない。
こんな時に自分の非力さが恨めしい。
訳が分からぬよ！ なにこれ？！

「なんで小嶋君が僕のような下賤な人間に頭を下げてこるのは？！
間違っているよそんなの！」

「後半のセリフ主人公っぽいのに前半情けなさすぎだら

「早く頭を上げて！ お願い！」

こんなところ見られたらみんなに怒られてしまつよー。
でも小嶋君はかたくなだった。

「いや俺は頭を上げられねえ。お前の顔をまともに見れねえ

「なんで……！」

「何でもなにもねえだろ。俺は佐藤に酷い事をした。悪かった

「ゆ、許すから、頭を上げて……！」

そもそももう気がしてないからー。

「……ここのか？ あんなひどいことをした俺を許してくれるのか……？」

「ゆ、許す、許すから、お願ひだから頭なんて下げないで」

「うう……。なんて優しい奴なんだ……」

「うーーー」と皿を口すつながら立ち上がる小嶋君。

「あの、それを気にして、元気ないの……？」

さつきから妙に元気のなかつた小嶋君。僕のために落ち込んでいたくれたのならうれしい。

「え？ あ、いやこれはアニメを一周見たから寝不足」

「一周？！ 2クール一周！？ そりや寝不足にもなるよー。

「アニメも馬鹿にしてたけど、面白いな」

「え、面白いの？」

つまらないと思っているのかと感じていたけれど、そんなこともなかつたんだね。

「面白い。アニメなんて萌えとかそんなの、なんか気持ち悪いと思つてたけど、そんなものばかりじゃねえんだな。昨日借りたやつ、なんだアレ？ 面白すぎだろ……」

「あ、よ、喜んでくれてたんだ……」

よかつた……。作戦成功だね。

「やべえだろあのショイタンズゲートってやつ。もう一周見てえよ。見ていいか？」

「う、うん」

「サンキュー。あ、今日も持つてきてくれたんだろう？ それも貸してくれよ」

「う、うん」

「でもあ、佐藤は俺の為を思つてガキ臭くないアニメを持ってきてくれてるんだと思うけどさあ、次は萌えつていうのを貸してくんねーか？ ちょっと見てみたいんだよなー」

「う、うん」

なんだか、予想以上にはまつていて、國人君がかぶるよ。

「頼んだぜ！ 楽しみにしているからなー！」

若干陰の見える、元気な笑顔を見せて、一度僕の肩をたたき小嶋

君がスキップ氣味に戻つて行つた。

「……。うん。作戦、成功だよね！」

「……いいこと、だよね？」

小嶋君の人生、狂ってきてないよね？

小嶋君に貸したアニメは時間を移動するお話を。もし現実にタイムマシンがあるのでしたら、僕はどう行くかな。

未来を見れば安心する気もするし、過去に戻りたいという気持ちもある。

未来を知つていればどう行動すればいいのか分かるし、過去へ行けば今後の対策を教えてあげることができる。

でも、今は別にどちらも必要が無いと思つ。少し前ならば、変えたいような過去も無いので、おそらく未来に行つてこれから調べていただろう。

静かに暮らし続けた僕は将来どうなるのかずっと気になっていた。相も変わらず波風を立てないで生きているかなと、確認していただろう。

今は。

今は未来になんか行きたくない。

勇気を出そうと決めた矢先に、未来を突きつけられるなんて嫌だから。

何が起こるか分からなければ、勇気を出して未来を変えると決めたのだから、どんな未来が待つていようと僕は後悔しないぞ。校舎裏を離れて教室にたどり着いた。僕は教室の扉に手をかけた。

一日の始まりだ。よし、頑張ろ。

気合を入れ、扉を開こうとしたところ、

「どいてください佐藤君！」

「ひいいいい！」

突然後ろから怒鳴られた！

しかもこの声は前橋さんだ！ 切り裂かれる！
がたがた震えながらすつと横に避ける。

「何を怯えているんですか！ 失礼ですよ！」

う。 そうだね。 何もされていないんだから。
僕は恐る恐る振り返り前橋さんの顔を見た。

「おは、よひ……」

「なんでそんなにびくびくしているんですか！ 千切る必要があり
そうですね！」

「千切らないでくださいー！」

「どこを千切るの？！」

前橋さんが僕の顔を見て重々しくため息をついた。な、なこ……？

「全く……。なんであなたのような情けない男が有野さんに氣に入
られているんですか……」

「お、幼馴染だからじゃないかな……」

「前も聞きましたよそれはー 全くー 情けないは百歩譲つてい
として男だといつのが許せないですー！」

「やつちっー！」

「どうしようもないよー！」

僕が謝つていいものかどうか悩んでいると、前橋さんがメガネをかけ直しにやりと笑った。

「まあ今日は気分がいいので暴力を振るおつかなーとか考えませんよ」

「あ、そ、そうなんだ」

今度はお礼を言つていゝものかどうか悩むところだ。

「ふふん。今日有野さんは佐藤君なんかより私の方が役に立つと気付くはずです！ 残念でしたね佐藤君！ 有野さんの天下統一に必要なのは私なのですよー！」

「やべ、なんだね。うん、僕なんかより前橋さんが、天下統一？の役に立つと思つよ」

「……ぐぐぐ……！ ま、またそんな余裕な態度を見せて……！ ふん！ ここまでそのふざけた態度を取り続けていられますかねー！」

「ふ、ふざけてなんか、いないよ」

「本気だつていうんですか？！ ますます腹立たしいです！ 許しませんからねー！」

一度苛立たしげに銀色の髪を振つて教室に入つて行つた。
ふ、ふう。怖かつた。

前橋さんの後、少し遅れて僕も教室に入る。

廊下で言いあつていた声が聞こえていたのか教室中の女子から冷たい目が注がれている。男子からは好奇の目で見られており、みんなからの注目を集めた僕の顔は真っ赤になつてているだひつ。早く目立たない自分の席へ行こう。

僕は自分の席に座つてカバンに手を突つ込む。

勉強をしなくちゃね。

僕は何をやっても要領が悪い。

勉強はもちろん運動も。でもそれ以上に僕が自分自身の一一番要領が悪いと思うところは人づきあいだ。

誰が相手でも恥ずかしい。

恥ずかしくて遠慮してしまう。

だから距離が縮まらない。

でもこれからは違う。

遠慮せずに行こうと思つ。

楠さんが言つていた、もうちょっと自分勝手に生きればいいといふことを実行してみよつと思つ。

自分のない人間なんて面白くないのは当たり前だ。もっとわがままを、個性を出していけばきっとみんなと仲良くなれるはずだ。

離ちゃんなどだって、もつと仲良くなれるよね。

「おはよう優大」

離ちゃんのことを考えていると、タイミングよく離ちゃんが登校してきた。

ここにこと笑う離ちゃんの顔を見るのは久しぶりだ。昨日までは怒らせてしまつていたから。

「おはよー！」

僕も笑顔で返す。素敵な朝だと思う。

離ちゃんが僕の前の机の椅子を引き僕の机に右ひじを置く。

「勉強してんのか。朝くらいゆつくりしようぜ」

「でも、僕頭よくないからたくさん勉強しなくちゃ大変なことになつちやうづよ」

「んなことねえって。大変なことになんてならねえよ。……ん？
その前に優大この前何番だったんだ？」

「ぼ、僕は、えっと、百番と、ちよつと……」

約三十三人×六クラス。一学年約一百人。

大体普通。結果が張り出される上位三十名の中に名を連ねている
離ちゃんとは雲泥の差がある。

「それだけあれば十分じゃねーか。いいよいよ。楽しく話そうぜ

「え、うん」

「勉強ならさ、私が教えてやるから」

「え、いいの？ 离ちゃんも勉強しなくちゃいけないのに」

「もちろんだ。テストでいい点とるよつ友達と一緒に過ごす方が大切だろ」

「雛ちゃん……」

優しいなあ。

「だから今度の休み勉強しようぜ」

「ありがとうー。」

「いいつてこと。優大の部屋でいいよな?」

「え? 僕が行くよ?」

「優大の部屋でいいよな?」

「え、その、悪いよ。雛ちゃんの家のリビングとかで……」

「優大の部屋でいいよな?」

「あ、はい」

雛ちゃんの家は都合が悪いみたいだ。

「よしよしよしよしよし。これで互角だな

小さな声で呟いていた。

僕にはしつかりと聞こえているよ。
でもなにに対して互角なのかはわからない。
だから聞いてみよう。

「何ど?」

「うるせー。何でもいいだろ」

ふいと顔をそむけた。お、怒らせちゃったのかな?

「離^離ちゃん……？」

怒らせたのなら謝らないと。

「あの、」ぬ

「ちりつー！」

僕から顔を背けていた離ちゃんがものすごい大きな舌打ちをした。

「え? ! ゴメン!」

僕が悪いですよね!

「……ちげえよ

うんざりしたような顔を僕に向けてきた。

「え、ならなんで……」

僕は先ほどまで離ちゃんが視線を向けていた方を見た。

「あ……」

楠さんが教室に入ってきた。

「あいつ……」

雛ちゃんが僕の机に向いている視線には物凄い怒りの感情がこもつていた。

「雛ちゃん……？ その、喧嘩しないでね

「分かつてるよ」

はあとため息をついた。
僕の為に怒ってくれていいのだけれども、僕としては一人が仲良くなってくれるのが一番なんだけれど……。何とかしたいな。

楠ちゃんと僕

お休みになるまで、楠さんと離ちゃんが二度喧嘩していた。何とか離ちゃんをなだめようとしたけれど離ちゃんの機嫌は全く治らなかつた。

僕のせいでも楠さんと離ちゃんが喧嘩するのは申し訳ない。何とか止めたいただけれども……。

「ちめえ、なにガン飛ばしてんだよ！」

また始まつてしまつた！

「飛ばしてないから……」

つんざつした顔で首を振る楠さん。朝からずっとこんな感じだ。

離ちゃんが言いがかりに近いことで楠ちゃんとつかかる。僕の為に怒つてくれてているのだけれども、ちょっと楠さんがかわいそう……。

周りの人たちもずっとびくびくしている。誰も止められない。

「「うちをじぶりと見ていただろうが！」

「見でない」

「……お前……！」

「ひ、離ちゃん…！」

少し離れてみていたけれど堪らず割って入る。

「優大。どうした?」

「その、喧嘩はやめよう

「喧嘩なんかしてねえよ」

「…………はあ…………」

楠さんははとつても疲れた表情をしていた。

「あの、楠さん、ひょっと、話があるんだけど、今からいいです

「あん？」
「あん？！ 優大！ こんな奴に話つてなんだよー。」

「あん？」

「や、その、ちょっと…………」

怖いよ誰かやん…………。

「…………はあ。ちよびっこ。こじこじ。さじさじ。あ落ち着いて、飯食べられなーし、屋上に行いつ。お弁当持つてきて」

楠さんが取り出したばかりのお弁当を持って教室を出て行った。
それを見届けたあと、すぐに離ちやんが僕に詰め寄ってきた。

「優大っ！ 一体何の話をしようつてんだ！」

「あの、あの、色々……と」

「色々ある？ なんだよ、色々つて」

「その、えっと、今後について……」

「今後？ ……ああ、なるほど。ガシンと壁つてやるわけだな。それがいい。一度あいつを困らせてやれ！」

なにか勘違いしてくれた。

「へ、うん。じゃあ、行ってくるね」

そんなんつもりはないけれど、とりあえず楠さんと一緒にきりになることができた。早く屋上へ行こう。

離ちゃんと肩を叩かれ、僕は教室を出た。

屋上では楠さんが疲れた表情で屋上の端に座り込んでいた。

「楠さん……」

「…………。こんなにべこべい来るとは思ってなかつた。ちょっと疲れる」

「あの、ごめんね……。僕のせい……。僕が脅されているって教えてしまつたから……」

「本当にね……と言いたいところだけど、私はそれを許可したわけだし君が悪いと責めるつもりはないよ。謝らないで」

「ううん。僕が悪いよ……」

「悪くない。で、私をここへ連れてきた理由は?」

「ついさっきの僕が面倒くさかったのかわざと話を進めようとする。しかし僕の用事はすでに始まっている。

「えっと、謝れりと思って」

「……必要ない」

「必要あるよ」

「無い。それ以上謝つたら怒るよ」

「う」

大きな田で僕を睨み付けてくる。若干ひるんでしまったが、後ろへは引けない。

「なんて? 謝れって? 言つてない

「……その、前に、楠さんが言つてたよね……?」

「そうじやなくて、その、もつと、自分を出して行けって

「言つたね。で、今その話がなんで出でてくるの?」

「え、あの、だから謝りつかなって……」

楠さんが眉を寄せて意味が分からないと呟いた表情を僕に見せる。「わがままに生きて行けばって言ったのに、それが何で今謝っていることにつながるの?」

「その……僕が、謝りたいから、謝りつかな……って……」

僕のわがままを聞いて楠さんが驚きあきれた。

「何言つてゐる君? それわがままでもなんでもないでしょ。今までの佐藤君と何ら変わりないじゃない。謝つて済ませようつていうしょも無いスタンス。勇気出して行った方がいいって言つてるのに」

「あの、だから、その結果が、これ……なんだけど……ダメかな……?」

「なんで謝ることがわがままになるの。おかしいでしょ。それ。納得できる説明をしてよ」

「う、うん。あの、無意味に謝るなって言われたけど、今回は僕が悪いと思つし、謝らないと気が済まないから、楠さんが何と云おつと、謝ひづと思つて……」

楠さんがはあ? と言ひ出でて手を当てた。そして首を緩く振りながらため息をついた。

「その、ダメかな……？」

「……」

「あー」

つめき声のよつな声を上げながら楠さんが空を見上げた。つられて僕も空を見る。快晴だった。暑いね今日は。

「もういいええば、前も回じよつなことがあつたっけ」

「え？」

何のことだれつ？ 分からなかつた僕は楠さんに視線を戻した。楠さんはまだ空を見上げたままだつた。

「回じよつな」とつて、何？』

僕は聞いてみる。でも楠さんは僕の言葉に反応しないでじつと天を仰いでいる。

「あ、あの、楠さん……？」

首が疲れてしましますよ？

しばりり無言が続く。何と声をかけていいものか……。

……。

先に声を出したのは楠さんだつた。

「佐藤君」

視線を急降下せし僕に焦点を合わせてくれた。

「はい……？」

同じよつなことがあつたつていうのが、何のことについていたのか教えてくれるのかな？

「佐藤君、とりあえず、『飯でも食べよつか』

自分のすぐ右のコンクリートを叩いて僕に座るよつ促す。
そう言えればまだご飯を食べていなかつた。お腹が空きすぎて死んでしまうので素直に楠さんの横でご飯を食べよつか。
僕は楠さんと三人分スペースを開けて座つた。

「ちよつと遠いね。もつと近くでもいいよ」

「え、いや、僕はいいで……」

「ふーん」

どうでもこいやといつよつこお弁当箱を開ける楠さん。それなら僕もお弁当のふたを開けた。

昔はお弁当の中に何が入つているのか楽しみだつたけれど、今は自分で作つているのでその楽しみは無い。少しあみしい。

「それも自分で作ったんだしょ？」

楠さんが僕のお弁当を覗き込み言つた。

「うん

「おこしやうだね

「やうかな？ ありがと」

「なにかちゅうだい

「え？」

「あ、卵焼きちゅうだい」

楠さんが立ち上がりつて僕のそばに寄ってきた。

「え！」

そのまま僕の隣に座り僕の手に収められたお弁当箱の中から卵焼きを奪つて口に運ぶ。

「甘いね

今僕と楠さんの間に二三十センチ程度の隙間しかない。折り畳み式の携帯電話を開いた長さと同じくらいだ。

「ひ、ひ、ん。その、あの、お、お姉ちゃんが、甘いのが、す、す
き、で……」

僕としてまじの距離近すぎだよー。近すぎたりキドキドキしてしまつ
よー。何も考えられないよー。

「へえー。自分の分だけじゃないんだね

「は、はい。自分の分と、あと、三つ、両親と、姉の分を、作らせ
てもらっています」

「すうじね

「すうぐ、無いですよ？」

「す」この。じゃあ、はい」

楠さんが自分のお弁当箱の中身を僕に見せてきた。

「……？　えつと？」

おいしそうだね、とか、綺麗だね、とか褒めればいいのかな……？

「卵焼き食べちゃったから、私の一つあげる」

「え？　だ、大丈夫、だよ？」

「大丈夫とかそういう問題じゃないの。交換だよ交換

「えつと……」

いいのかな……。あとでお金請求されたりしないよね……。
人の好意を疑つてかかる僕最低だ……。

「もー」

一向に取らうとしない僕に耐え切れなくなつたよつで楠さんが自分の弁当の中から卵焼きをつまんで僕の弁当箱の中に投下していった。

「え、あ、ありがと」

「お礼を言つ必要はないでしょ。交換なんだから」

「へ、うん……」

僕はお弁当箱の中を眺める。

僕の作つた卵焼きとは明らかに色の違う卵焼きが一切れ。
なんだか、どのタイミングで食べればいいのか分からぬ……。

「ねえ佐藤君」

「はい？」

変なこと考へていてと思われたのかな？！ 楠さんの方に顔を向けてみたけれど、距離が近すぎる所以恥ずかしくてすぐに弁当箱に視線を戻した。

「なんでそんなに固くなつてゐる。いつも通りでいいよ」

「へ、うん……」

無理だよ……。何とか距離離せないかな。

座り直すふりをして少し距離を離してみると、ちよつぱり遠くなつた。

「あのや」

え！ 今の行動怒られちゃうのかな？！ 確かに距離をあけるの
つて失礼かも！

「君音楽とか聞く？」

「へ？ あ、うん。少し」

関係なかつた。よかつた。

「「」の前でたミチスルのじロ買つた？」

なんと、偶然にもそれは「」の前始まつたアニメの主題歌ではない
か。

「うん。買つた」

「聞いた感想は？」

「とつてもかしこよかつたよ」

「ふーん、そりなんだ。やっぱり聞くおつかな」

「あ、それなら、貸そつか？ 一回聞いてみてから決めたらいいん
じゃないかな」

「そうだね。なら借りようつかな。借りていい？」

「うん。明日もひてくるね」

「ありがとう。でも実はこんな話がしたいわけじゃなかつたんだよ
ね」

「え？」

「どうこう」とだらり。

「君のことだから感想を聞いたら『僕は好きだけど』みたいな答え
が返つてくると思ったんだけどね。でもよく考えたら君は褒めるよ
ね。そう言つ人間だつた」

「う、うん？ その、僕は好きだよつて行つた方が良かつたの？」

「その逆。『自分は好きだけどなあ』みたいなことを言つたりどう
してやるつかと思つた」

「え、どうして？」

「『私は好き』とか、『俺は嫌い』とか、そんなの感想でもなんで
もないでしよう。よかつたか悪かつたかを聞いてるの。別にあなた
の好き嫌いは聞いてない。そんなの言われても参考にならない」

「そつ、だね……？」

「うかぬ……？」

「あの、でもそれなら、『私はよかつたと思つ』とか、『俺は悪か
つたと思つ』つていふのも、あまり、参考にならないよね……？」

「よかつたか悪かつたかの判断がされている分そっちの方がまだましだよ。でも頭に『私は』とか『俺は』がついているのが気に入らない。逃げ道を作っているみたいでウザい」

「逃げ道?」

「そ。逃げ道。私はいいと思うけど他の人はどうかな? みたいな。はつきり言つてよね。全然ダメとか、サイコーとか。『自分は云々』つていうのは一人の意見が食い違つたときだけにしてよ。私と佐藤君の意見が違つたときに佐藤君が『僕は好きだけどなあ』つていうのは許される。でも貸す時に『僕は好きだけど』つていうのをつけるのはよくないとと思う。参考にならないにもほどがある。私は知るかそんなことつて思つ」

「何となく分かるような、全然分からないような……。」

「『自分は好きだ』つていうのは感想を伝える際には最低の答えだと思う。そんなことはどうでもいいからどこが良かつたとかどこが悪かつたとか言つてよね。お互いの感想が違つたときにだけそれを使ってよ。分かった? 佐藤君」

「う、うん。注意する」

「僕言つてないけど。

話が一段落したようなので僕は先ほど貰つた卵焼きを食べてみることにした。

「あ、おいしい」

普通の卵焼きなのに、なんでこんなにおいしいのだらう?

「おこしいね、楠さんの卵焼き」

「あつやつ。ありがと」

「ひ……。ひとつでもそっけない。僕に褒められても嬉しいよな
……。

「ねえ佐藤君」

「あ、はー。なんでじゅう

落ち込む僕に楠さん。

「聞こえていいのに聞き返す人間つてどうゆうの？」

「え？！ もしかして僕の事？！」

何か聞き返しちゃってたのかな！？

「違う違う。君はそんなことしないでしょ。世の中じゃそういう
人間がいるでしょ？」

「あ、うん。そうだね。いるね。でも聞こえてないんじゃないかな
？」

「毎回最初の言葉だけが聞き返されるんだけどね。最初の言葉だけ
聞こえないとか不便な耳してるね」

「もう、だね。集中していないから、最初だけ聞き逃しちゃうじや

ないかな？」

「へえ。集中してなきゃ聞こえないんだ。大変な人生だねそれ」

「大変、だね」

「でもさ、絶対に聞こえるよね、そういう人って。だつて、あまりにも何度も同じことが起こるからその人に話しかけるときは大きな声でゆっくりと話すようにしてるもん。でもそれでも聞き返してくれるあいつって、なに？ 何が目的なの？」

「えっと……たしか、何かで聞いたような…………。あ、そうだ！ たしか、聞き返す人はプライドが高いみたいな話を聞いた気がするよ」

「プライドが高い？ どうしてそうなるの？」

「えっと、たしか、あなたのことは気にしてないですよ、だから気づいていないんですね、っていう感じだったような気がする」

「……へえ……。なんだか、むかつくねそれは。わざわざ人に同じ話をさせるなんてどれだけお前は偉いんだって思うね」

「う、うん」

「四回に二回は聞き返してくるんだよね。そう言われてみればプライドが高い人にそういうのが多い気がする。今後注意するんだね、聞き返しちゃダメだよ佐藤君」

「う、うん。注意する」

あまり聞き返していないと思つたが、

話がひと段落したので、「飯を食べる。

……なんだか僕の卵焼きは甘すぎる気がする……。

「佐藤君」

「うん?」

楠さんはやっぱりおしゃべり好きだね。会話が止まりなつてよ。

「佐藤君は友達いる?」

なんだか急に心をえぐり取るような質問が飛んできたね。
少しだけ胸の痛みを感じながら答える。

「僕……あまり友達いない、みたい」

「ふーん。有野さんくらい?」

「うん。誰ちゃんは、僕のこと親友って言ってくれる。僕もそう思つてるから、親友だよ」

「へー。小嶋君は? 最近仲良いみたいだけど」

今朝謝つてくれたけど、友達と言えるのかな……。

「僕としては、何とも……。友達つて、どこから友達なのかな

……」

僕にはわからない。

アニメを貸すのは友達なのかな。小嶋君は僕のことを友達と思つてくれているのかな。

どうすれば友達と思つてくれるのか、分からないや。

「お互いのことによく知つていれば友達なんじゃない?」

なるほど。

「……お互いのことをよく知らなきや、友達になれないのなら、僕は多分小嶋君と友達じゃないね……。僕小嶋君の事あまり知らない……」

「ふーん。でもお互いのことをよく知つていてるから友達つていうのもおかしな気がするね。友達になつて徐々に知つていくことだってあるだろ?」
「うーん。分からないや。

「そうだね……」

「でもや、何となくだけど
「うーん。分からないや。

「うーん。」

「一緒ににお弁当を食べたらもう友達なんじゃないかな

楠さんがそう言った。

「……え？」

僕、今楠さんとお弁当を一緒にしているよ？

「あの、その、だったら、楠さんは、僕の、友達？」

「君はどひつゆくひ~。」

「……その、僕なんかが、楠さんの友達になるのは、申し訳ないと
いうか……」

「悪い癖がここに出たね。自分を卑下する。やめた方がいいんじゃ
ない？」

「え、う、うる」

「お互いのことを解く知つていれば友達って言つたけど、それなら
やっぱり私たちは友達なんぢゃないかな。私の本性を知つていての
は君だけだし、私もそれなりに君のことを理解しているつもり。関
係はおかしいけれど、友達と言えば友達なんぢゃないかな」

「や、そつかな？」

「なに？ 嬉しくないの？」

楠さんがジト目で僕を見てきた。

「あ、もうひん嬉しいです」

当然だよ。だって、学校一の美少女だもん。

「なら、私たちは友達ね」

「うん……」

……でも。

「その、本当に僕のような人間が友達でいいの？ 僕なんかと友達
だって言つたら、楠さんの評価が下がっちゃうよ……。僕みたいな
底辺の人間楠さんと釣り合わないよ……？」

「……全く佐藤君は……。『僕のような人間』とか『僕なんか』と
か『僕みたいな底辺の人間』とか、卑下しすぎだよ」

「で、でも、本当のことだから……」

「関係ない。君は本当に鈍いね。相変わらずイライラさせてくれる
よ」

「う。『めんなさい』

でも、鈍いつて何に対してもう。

「はつきり言わないとダメみたいだね」

楠さんが隣に座る僕をまっすぐ見てくる。僕は視線を逸らしたか
つたけれど、真っ直ぐ見てくる相手にそんなこと失礼だよね。恥ず
かしいけれど我慢しよう。

視線が合つたところで言つ楠さん。

「私、佐藤君の友達になりたいなつて

「えつなんで?！」

素で聞いてしまつた。当然だよ。僕と楠さんは正反対の人間だもん。

主従関係がお似合いだったのに。

「君は本当の私を知つても嫌がつたりしないから」

「嫌がるなんて、僕じゃなくとも……誰も嫌がつたりしないと思つけど……」

「そんなことはありえない。私は知つてゐる。知つてゐるから、君が珍しい。君は普通の人とは違うよ」

「よ、よく、分からぬいけど……」

なんだか恥ずかしい。

僕を脅していた楠さんからこんなことを言われるだなんて。

「私達、友達かな」

「え、その……」

「佐藤君が嫌ならいいよ。普通に君の悪行をばらすから

「僕たちは友達ですよねつ！ 粉うこと事なき友達で、『ざじこまますー』」

「そつか。そうだよね」

脅されて友達になるのはなんだか違うような気がするけれども、今後友情がはぐくまれる気がしないけれども、友達と喧嘩したりやつぱり主従関係無きがするけれども

「やつか。うん」

楠さんの素敵な柔らかい笑顔を見ていたらそんなことビックリもよくなってしまう。

この笑顔を間近で見られた僕は、きっととつても幸せな人間なのだろう。

「『』飯食べなよ

「え、あ

『』と窺っていた僕に楠さんが怒ったように言つ。

楠さんのお弁当箱を見てみると空っぽだった。いつの間に僕は慌てて『』飯を食べる。

「ゆくへつでいいよ

いつもは急かす楠さんだけれども、今日はゆくへつでいいと笑いながら言つてくれた。

なんだかとっても幸せだつた。

ここに離ちゃんとがいれば最高だと想つ。

一人が仲良くなってくれれば、僕は言つことなしだ。何とかしたいな。

「」飯を食べ終え、一人で教室に戻る。毎回先に帰っていた楠さん
だつたけれども、今日は僕と一緒に帰つてくれるみたいだ。
なんだか教室に入るのが恥ずかしいや。でも一緒に帰つてくれる
のだから、最後まで一緒に帰ろう。
そう言つわけで一緒に廊下を歩く。

「佐藤君、明日も一緒に食べよつよ」

「え、いいの？」

「いいよ。なんなら、有野さんも誘つてみよつか

「え？！　いいの？！」

「いいよ。私だってずっと睨まれるのは嫌だもん。ちょっとは仲良
くしたいよ」

「……でも、それだと、楠さんが山でしていることを言わなきゃい
けなくなるんじゃないかな……」

「それは最終手段。できる事をやつてからそれをする

「……うん。それがいいね」

「佐藤君も協力してね。協力しないことばらすから」

「うん」

当然だよ。喜んで協力するよ。

なんだか、人生がうまく行きすぎている気がする。
突然、学校一の美人が友達になつてくれるなんて、すごいことだ
よこれは。

今ならどんなことが起きて乗り越えられるね。

「何笑つてるの？」

僕らの教室の前。楠さんが僕のへらへら顔に気づいた。

「え、あ、ううん。別に」

何もないよと白を切る。

やつぱり、勇気を出すことによつて人生が変わったんだね。すご
いや、勇気。

「変なの」

と、楠さんが首をかしげながら僕らの教室の扉を開けた。
楠さんが先に入り、僕もすぐに続く。

僕が一步教室に足を踏み入れた時、教室のおかしな空気が僕の胸
を締め付けた。

突然不安に襲われる。

なんだろう。

楠さんもそれを感じ取つたようで足が止まつていた。

僕らは一人、ドアのすぐそばに立ち尽くす。

「……優大……」

難ちりやんが僕に気づいた。先ほどまでの怒りは治まっているようだ。

「……一体、何が起きてこるの？」

楠さんが教室全体に問う。

誰一人として返さない。

それどころか、全員が僕らを、いや、楠さんを冷たい目で見ていた。

「……一体、なにが……」

楠さんがもう一度問う。

それに、やっと答えが返ってきた。

- 銀色。

「楠さん。みんなはあなたに失望しているのですよ」

銀色の髪を持つメガネをかけた女子、前橋さんが教卓の前に立ち冷たい冷たい笑顔で楠さんを見下ろしていた。

「もう、あなたは終わりです」

そう言つて、携帯を操作して、たぶん、動画を、流し始めた。

映像は見えないけれど、小さな音が聞こえてくる。はつきりと聞こえてくる。

『くそつ、このやうひつーー 全員ムカつく！ みんな、ウザい！
べたべたしてくんな男子どもー 姿を売るな女子どもー みんなう

「おお、…」

携帯から聞こえてくるのは、楠さんの声だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8722x/>

キョーハク少女

2011年12月2日02時51分発行